



True Image™ 2013 by Acronis®

ユーザーズ ガイド

著作権について

Copyright © Acronis International GmbH, 2002-2012. All rights reserved.

"Acronis"、"Acronis Compute with Confidence"、"Acronis Recovery Manager"、"Acronis セキュアゾーン"、Acronis True Image、Acronis Try&Decide、および Acronis ロゴは、Acronis International GmbH の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、VMware, Inc. の米国ならびにその他の地域における商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

ここに記載されているその他すべての商標および著作権は、それぞれの権利所有者に帰属します。

著作権所有者の明示的な許可なく本ドキュメントの実質的な修正版を配布することは禁止されています。

著作権所有者からの事前の許可がない限り、いかなる形態（紙媒体など）であっても商業目的で本ドキュメントまたはその派生物を配布することは禁止されています。

ドキュメントは、「現状のまま」で提供され、商品性に対する黙示的保証、特定の目的に対する適合性、権利を侵害していないことなどを含む明示的または黙示的な条件、言明、および保証に関する責任を負いません（免責条項の範囲が法的に無効と見なす場合を除く）。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある license.txt ファイルをご参照ください。本ソフトウェアまたはサービスと共に使用するサードパーティ コードおよび関連するライセンス条項の最新の一覧については、<http://kb.acronis.com/content/7696> をご参照ください。

Acronis の特許取得済み技術

本製品で使用されている技術は、次の米国特許によって保護されています。米国 米国特許 #7,047,380、米国 米国特許 #7,275,139、米国特許 #7318135、米国特許 #7,366,859、米国特許 #7,462,11、米国特許 #7,603,533、米国特許 #7,650,473、米国特許 #7,831,789、米国特許 #7,895,403、米国特許 #7,934,064、米国特許 #7,953,948、米国特許 #8,005,797、米国特許 #8,069,320、米国特許 #8,074,035

目次

1	はじめに.....	8
1.1	はじめに.....	8
1.1.1	True Image™ 2013 by Acronis® とは.....	8
1.1.2	True Image 2013 Plus Pack by Acronis とは.....	9
1.1.3	True Image 2013 の基本概念.....	9
1.1.4	True Image 2013 by Acronis の新機能.....	12
1.1.5	バックアップ、リカバリ、およびクローン作成に関する FAQ.....	12
1.1.6	システム要件とサポートされるメディア.....	14
1.1.7	True Image 2013 のインストール.....	17
1.1.8	True Image 2013 のアクティブ化.....	19
1.1.9	プログラムのワークスペース.....	20
2	さまざまな処理.....	42
3	データのバックアップ.....	43
3.1	ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い.....	43
3.2	完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ.....	44
3.3	バックアップ ファイルの名付け.....	45
3.4	パーティションとディスクのバックアップ.....	47
3.5	ファイルやフォルダのバックアップ.....	49
3.5.1	データ カテゴリ.....	50
3.5.2	zip 形式のサポート.....	51
3.6	電子メールのバックアップ.....	53
3.7	Acronis ノンストップ バックアップの使用.....	54
3.7.1	データの継続的な保護.....	56
3.7.2	システムの継続的な保護.....	57
3.7.3	Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージ.....	59
3.7.4	ノンストップ バックアップ - FAQ.....	60
3.8	バックアップの予備コピーの作成.....	62
3.9	バックアップを含むブータブル リムーバブル メディアの作成方法.....	63
3.10	バックアップの保存先の分散.....	64
3.11	既存のバックアップをリストに追加する.....	65
3.12	バックアップとバックアップ バージョンの削除.....	66
3.13	バックアップ オプション.....	66
3.13.1	バックアップ スキーム.....	68
3.13.2	単一バージョン スキーム.....	69
3.13.3	バージョン チェーン スキーム.....	69
3.13.4	カスタム スキーム.....	70
3.13.5	イメージ作成モード.....	74
3.13.6	バックアップの保護.....	74
3.13.7	バックアップ処理前後に実行するコマンド.....	75
3.13.8	バックアップの分割.....	76
3.13.9	バックアップのベリファイ オプション.....	76
3.13.10	バックアップの予備コピー.....	77
3.13.11	リムーバブル メディアの設定.....	77

3.13.12	バックアップのコメント	78
3.13.13	スクリーンショットの設定	79
3.13.14	エラー処理	79
3.13.15	コンピュータのシャットダウン	80
3.13.16	バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定	80
3.13.17	Windows アカウント	81
3.13.18	バックアップ処理のパフォーマンス	81
3.13.19	バックアップ処理の通知	82
3.13.20	バックアップからの項目の除外	83
3.14	バックアップのベリファイ	85
3.15	バックアップ バージョンの統合	85
3.15.1	アーカイブの統合保護	86
3.15.2	バックアップの選択	86
3.15.3	保存先	86
3.15.4	統合の概要	87
3.16	バックアップ設定のクローンの作成	87
4	データのリカバリ	88
4.1	クラッシュ後のシステムのリカバリ	88
4.1.1	異常停止の原因を特定する	88
4.1.2	リカバリの準備	89
4.1.3	システムのリカバリ	89
4.2	パーティションとディスクのリカバリ	92
4.3	Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ	94
4.4	複数のパーティションを一度にリカバリする方法	95
4.5	レスキュー メディアを使ってディスク バックアップを異なるディスクへリカバリする	99
4.5.1	隠しパーティションを含むディスクのリカバリ	99
4.6	ファイル レベルのバックアップからデータをリカバリする	105
4.7	ファイル バージョンのリカバリ	107
4.8	異なるハードウェアへのリカバリ	108
4.8.1	Acronis Universal Restore を使用したシステムのリカバリ	109
4.8.2	レスキュー メディアで Acronis Universal Restore を使用したシステムのリカバリ	110
4.9	Acronis Universal Restore	112
4.9.1	Acronis Universal Restore の目的	112
4.9.2	Acronis Universal Restore の一般的な原理	113
4.10	Acronis スタートアップ リカバリ マネージャの使用方法	113
4.11	ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて	115
4.12	[バックアップ保護] ダイアログボックス	116
4.13	BIOS での起動順の並び替え	116
4.14	リカバリ オプション	117
4.14.1	ディスク リカバリ モード	117
4.14.2	リカバリ処理前後に実行するコマンド	118
4.14.3	ベリファイ オプション	118
4.14.4	コンピュータの再起動	119
4.14.5	ファイル リカバリ オプション	119
4.14.6	ファイル上書きオプション	119
4.14.7	リカバリ処理のパフォーマンス	120

4.14.8	リカバリ処理の通知	120
4.15	コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには	122
5	データの同期.....	124
5.1	同期機能について	124
5.2	データのセキュリティを確保する方法	124
5.3	Acronis サーバーへのログイン	125
5.4	同期可能な対象と不可能な対象	125
5.5	同期アイコン	126
5.6	デフォルトの同期	127
5.7	同期の作成	128
5.7.1	自身のコンピュータ間でデータを同期する方法	128
5.7.2	ローカル フォルダと同期する方法	128
5.7.3	他の人のコンピュータとデータを同期する方法	129
5.8	モバイル デバイスの同期.....	132
5.8.1	True Image アプリケーションをモバイル デバイスにインストールする方法	132
5.9	同期されるファイルのバージョン	133
5.9.1	以前のファイル バージョンへの復帰	133
5.10	Acronis Cloud で領域をクリーンアップする方法	133
5.11	削除されたファイルをリカバリする方法	135
5.12	フォルダの共有方法.....	136
5.13	ファイルやフォルダへの公開リンクの作成方法	137
5.14	アカウントからデバイスをリンク解除する方法	137
5.15	同期共有の招待を取り消す方法	138
5.16	同期を解除する方法	139
6	オンライン バックアップの使用.....	141
6.1	Acronis Cloud とは.....	141
6.2	サブスクリプション情報.....	141
6.3	Acronis Cloud へのバックアップ	142
6.4	オンライン バックアップの管理	144
6.5	オンライン バックアップのオプション	145
6.5.1	Acronis Cloud の接続試行回数	145
6.5.2	Acronis Cloud のクリーンアップ	145
6.5.3	暗号化キー	146
6.5.4	オンライン バックアップ用の Windows アカウント.....	146
6.5.5	処理の優先順位	146
6.5.6	ネットワーク接続速度の上限.....	147
6.5.7	通知	148
6.5.8	除外	149
6.6	Acronis Cloud からのリカバリ.....	150
6.6.1	オンライン バックアップからデータをリカバリ.....	150
6.6.2	リカバリするバージョンの選択.....	150
6.7	Acronis Cloud からのデータの削除	151

7	役立つ情報	152
7.1	システムの保護	152
7.2	バックアップの保存場所の決定	154
7.2.1	FTP 接続	155
7.2.2	認証設定	156
7.3	必要なときにレスキュー メディアを確実に使用できるようにする	156
7.3.1	レスキュー メディアからの起動時におけるビデオ モードの選択	160
7.4	バックアップのリカバリ テスト	161
7.5	HDD から SSD へのシステムの移行	162
7.5.1	移行の準備	162
7.5.2	True Image 2013 が SSD を認識しない場合の処理	163
7.5.3	SSD パーティション アラインメントの確認	165
7.5.4	SSD パーティション アラインメントの修正	165
7.5.5	バックアップとリカバリを使用した SSD への移行	166
7.5.6	SSD に HDD の内容のための十分な領域がない場合の処理	167
7.6	安全なシステム変更の試行	168
7.6.1	Try&Decide とは	168
7.6.2	Try モードの開始	171
7.6.3	Try モードの停止	171
7.6.4	Try&Decide のオプションと通知	172
7.6.5	Try&Decide: 典型的な使用例	173
7.7	スケジュール設定	175
7.7.1	日単位の実行パラメータ	176
7.7.2	週単位の実行パラメータ	177
7.7.3	月単位の実行パラメータ	177
7.7.4	イベント発生時の実行パラメータ	177
7.8	バックアップとその内容の検索	178
7.8.1	検索	178
7.8.2	Windows サーチと True Image 2013 の組み合わせ	179
7.9	ウィザードに表示する項目の選択	182
7.10	バックアップ情報	183
7.11	タイムアウトの設定	183
8	ツールとユーティリティ	184
8.1	Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ	185
8.1.1	動作	185
8.1.2	使用方法	186
8.2	ブータブル レスキュー メディアの作成	186
8.2.1	Acronis メディア ビルダ	186
8.2.2	True Image 2013 での BartPE ディスクの作成	191
8.2.3	WinPE ベースのレスキュー メディアの作成	194
8.2.4	Acronis メディア ビルダ用に USB フラッシュ ドライブを準備する方法	199
8.3	工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成	199
8.4	Acronis セキュア ゾーンの使用法	200
8.4.1	Acronis セキュア ゾーン	201
8.4.2	Acronis セキュア ゾーンのロケーション	202
8.4.3	パーティションの選択	203

8.4.4	Acronis セキュア ゾーンのサイズ	203
8.4.5	Acronis セキュア ゾーンの管理	204
8.4.6	Acronis セキュア ゾーンの概要	206
8.5	ハードディスクのクローン作成	206
8.5.1	一般情報	207
8.5.2	セキュリティ	207
8.5.3	クローン作成モードの選択	208
8.5.4	ソース ディスクの選択	209
8.5.5	ターゲット ディスクの選択	210
8.5.6	移行方法	210
8.5.7	データ マイグレーション	211
8.5.8	手動パーティション操作	211
8.5.9	クローン作成の概要	213
8.6	新しいハードディスクの追加	214
8.6.1	ハードディスクの選択	214
8.6.2	初期化方法の選択	215
8.6.3	新しいパーティションの作成	216
8.6.4	新しいディスクの追加の概要	219
8.7	Acronis 容量拡張マネージャ	219
8.7.1	Acronis 容量拡張マネージャが起動しない場合	221
8.8	セキュリティとプライバシーのツール	221
8.8.1	Acronis DriveCleanser	222
8.8.2	ファイル シュレッダー	229
8.8.3	システムのクリーンアップ	231
8.8.4	ハードディスクの消去方法	237
8.9	イメージのマウント	239
8.10	イメージのアンマウント	242
8.11	vhd ファイルの使用方法	242
8.11.1	tib イメージと vhd 仮想ディスクの相互変換	243
8.11.2	Windows バックアップにより作成された vhd ファイルを使用したリカバリ	245
8.11.3	Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する	246
8.11.4	Acronis ブート シーケンス マネージャ	247
8.12	バックアップ設定のインポートとエクスポート	247
9	トラブルシューティング	249
9.1	Acronis システム レポート	249
9.2	Acronis スマート エラー レポート	250
9.3	クラッシュ ダンプの収集方法	252
9.4	一般的な推奨事項	252
9.5	カスタム レスキュー CD の作成	253
9.6	ログの表示	254
9.7	Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム	255
10	用語集	257

1 はじめに

1.1 はじめに

セクションの内容

True Image™ 2013 by Acronis® とは.....	8
True Image 2013 Plus Pack by Acronis とは	9
True Image 2013 の基本概念	9
True Image 2013 by Acronis の新機能.....	12
バックアップ、リカバリ、およびクローン作成に関する FAQ.....	12
システム要件とサポートされるメディア	14
True Image 2013 のインストール.....	17
True Image 2013 のアクティブ化	19
プログラムのワークスペース	20

1.1.1 True Image™ 2013 by Acronis® とは

True Image 2013 by Acronis は、コンピュータに保存されているすべての情報を安全に守るための統合ソフトウェア スイートです。オペレーティング システム、アプリケーション、設定、およびすべてのデータのバックアップや、不要になったあらゆる機密データを完全に消去することができます。このソフトウェアを使用すると、指定したファイルとフォルダ、Microsoft 電子メール クライアントの設定とメッセージ、さらにはハードディスク ドライブ全体や選択したパーティションをバックアップすることができます。オンライン バックアップでは、特に重要なファイルをリモート ストレージに保存できます。ご使用のコンピュータが紛失したり、盗難にあったり、または破壊されたりしても、データは保護されます。Acronis ノンストップ バックアップはシステムとファイルの変更を最短 5 分ごとに継続して保存できるため、必要に応じて任意の時点まで容易にロールバックできます。

True Image 2013 には、データの損失、重要なファイルまたはフォルダの誤削除、ハード ディスク全体の異常終了などの障害や災害が発生した場合にコンピュータ システムをリカバリするのに必要なツールがすべて含まれています。

Acronis True Image 2013 はアクロニス独自のテクノロジーによって、ディスクを、セクタ単位で正確にバックアップすることができます。バックアップには、すべてのオペレーティング システム、アプリケーション、構成ファイル、個人設定、およびデータが含まれます。

True Image 2013 は、ユーザーの個人情報保護にも役立ちます。通常、不要なデータを削除しても、コンピュータ上にその情報は残っています。True Image 2013 には、完全にファイルを破棄し、パーティションやディスク全体から個人情報を抹消する Acronis DriveCleanser、また Windows システムの使用履歴をすべて消去するシステム クリーンアップ ツールが統合されています。

スケジュールされたバックアップが実行される際、True Image 2013 ではユーザーが設定したバックアップ スキームに従って、バックアップの種類(完全、増分、差分)が自動的に選択されます。

ほとんどの PC ストレージ デバイスにバックアップを保存できます。

Windows スタイルのインターフェイスおよびウィザードであるため、操作が簡単です。簡単なステップをいくつか実行するだけで、あとはすべて True Image 2013 によって処理されます。システムに

障害や災害が発生した場合は、ソフトウェアによりすぐにコンピュータを稼働できる状態に戻せます。

1.1.2 True Image 2013 Plus Pack by Acronis とは

True Image 2013 Plus Pack は、True Image 2013 のアドオンです。ライセンスは別となっており、独自のセットアップ ファイルからインストールします。コンピュータに True Image 2013 をインストールしないと、True Image 2013 Plus Pack をインストールすることはできません。True Image 2013 Plus Pack をインストールすると、リカバリ中に使用される Acronis Universal Restore が追加されます。True Image 2013 Plus Pack では、Acronis WinPE ISO ビルダもインストールされ、ダイナミック ディスクがサポートされます。

True Image 2013 Plus Pack の機能の詳細を次に示します。

- **ダイナミック ディスクのサポート:** ダイナミック ディスクの処理が可能になり、True Image 2013 でサポートされるハード ドライブ構成の範囲がいちだと広がりました。ダイナミック ディスクでは、ボリューム管理がより柔軟になり、複数のハードディスクを備えたコンピュータを使用する際に便利です。
- True Image 2013 Plus Pack のユーザーは、Universal Restore 機能を使用できます。Acronis Universal Restore によって Windows オペレーティング システムのイメージを異なるハードウェア環境に復元できます。使用されているハードウェアを問わず独立したコンピュータ上に情報を復元できます。たとえば、壊れたマザーボードを交換した後や、システムをデスクトップからラップトップに移行するときなどに役に立ちます。詳細については、「Acronis Universal Restore (112ページ)」を参照してください。
- Acronis WinPE ISO ビルダ: WinPE 1.5、2.x、または 3.0 のいずれかのカーネルに基づいて、True Image 2013 プラグインが WinPE (Windows Preinstallation Environment) ディストリビューションに追加されます。PE 2.x および 3.0 イメージを作成または変更できるようにするには、Windows 自動インストール キット(AIK)がインストールされている必要があります。プレインストール環境では Windows ドライバが使用されているので、プレインストール環境で True Image 2013 を実行すると、コンピュータのハードウェアとの互換性が向上する場合があります。詳細については、「WinPE ベースのレスキュー メディアの作成」を参照してください。

1.1.3 True Image 2013 の基本概念

ここでは、プログラムの動作のしくみを理解するうえで役立つと思われる、基本的な概念について説明します。

バックアップとリカバリ

バックアップとは、元のデータが失われてもそのコピーからリカバリできるように、データのコピーを作成しておくことを指します。

バックアップの主な目的は 2 つあります。1 つは、障害または災害発生後に状態を復旧することで(「災害復旧」という)、もう 1 つは、誤って削除されたか破損した少数のファイルをリカバリすることです。

True Image 2013 は、この最初の目的を達成するために、ディスク(またはパーティション)イメージの作成機能を備え、第 2 の目的のために、ファイル レベル バックアップ作成機能を備えています。

バックアップ バージョン

バックアップ バージョンは、それぞれのバックアップ処理中に作成された単独または複数のファイルです。統合機能を使用しない場合、作成されるバージョンの数は、バックアップが実行された回数、または保存が実行された時点の数と常に同じになります。

つまり、バージョンはそれぞれ特定の時点を表しており、その時点の状態にシステムやデータを復元することができます。言い換えれば、バックアップ バージョンは、完全バックアップ、増分バックアップ、および差分バックアップを表しています。「完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ (44ページ)」を参照してください。

バックアップ バージョンは、ファイル バージョンと似ています。ファイル バージョンという考えは、「以前のバージョンのファイル」と呼ばれている Windows Vista や Windows 7 の機能を使用しているユーザーにはよく知られています。この機能を使用すると、ファイルを特定の日時における状態に復元できます。バックアップ バージョンを使用すると、同様の方法でデータをリカバリできます。

バックアップ バージョンは、破損したり削除されたりしたファイルを見つけようとする場合に便利です。目的のファイルが格納されたバックアップ バージョンが見つかるまで Acronis Backup Explorer 内の各バックアップ バージョンを参照するだけです。さらに、発見されたファイルの異なる保存済みバージョンをリカバリすることもできます。

増分バックアップ バージョンには、もう 1 種類あります。パーティションを書き込み可能モードでマウントすると、プログラムはマウントされたイメージが変更されるものとみなし、変更内容を取り込む増分バージョンを作成します。この種類の増分バージョンのプロパティは多少異なっています。たとえば、統合することはできません。

ディスクのクローン作成

これは、1 つのディスク ドライブの内容全体を別のハードディスク ドライブに移行/コピーする処理です。たとえば、大容量のディスクを取り付ける場合などに、この機能が必要となる場合があります。この機能を使用すると、同じファイル構造を持つ 2 つのまったく同じドライブが作成されます。「ディスクのクローン作成」ツールを実行すると、1 つのハードディスク ドライブのすべての内容が別のハードディスク ドライブにコピーされます。この処理を利用すると、ハードディスク ドライブの内容が、オペレーティング システムやインストール済みプログラムも含めてすべて別のドライブに転送されるので、すべてのソフトウェアを再インストールして再設定する必要はなくなります。

True Image 2013 では、特定のパーティションのみのクローン作成はできません。クローンを作成できるのは、ドライブ全体のみです。

ハードディスク ドライブの情報をすべて別のドライブに転送するには、他にも、古いハードディスク全体をバックアップしてから、そのバックアップを新しいディスクにリカバリするという方法があります。

バックアップ ファイルの形式

True Image 2013 では、通常、バックアップ データは独自の TIB 形式で圧縮して保存されます。その結果、必要な保存領域を減らすことができます。

TIB ファイルの作成時に、データ ブロックのチェックサム値が計算されて、バックアップ対象のデータに追加されます。このチェックサムの値を使用すると、データの整合性を検証できます。

True Image 2013 プログラムだけを使用して、tib ファイルのバックアップのデータをリカバリできます。このリカバリは、Windows またはリカバリ環境で実行できます。

ただし、True Image 2013 では、よく知られた zip 形式でデータを保存することも可能です。zip 形式を使用すると、True Image 2013 を使用しなくても、任意のロケーションにあるバックアップからファイルを取り出すことができます。

最も広範に利用されているオペレーティング システムである Microsoft Windows と Mac OS X には、zip ファイル形式のサポートが組み込まれているためです。

Acronis ノンストップ バックアップでは、データおよびメタデータ用に特殊な隠しストレージが使用されています。バックアップ データは圧縮され、約 1 GB の複数のファイルに分割されます。また、ファイルには独自の形式が採用されており、保存されたデータは、True Image 2013 のみを使用してリカバリできます。

バックアップのベリファイ

バックアップのベリファイ機能を使用すれば、データをリカバリできるかどうかを確認できます。前述のように、バックアップされるデータにはチェックサム値が追加されます。バックアップ ベリファイの実行時に、True Image 2013 はバックアップ ファイルを開いてチェックサム値を再計算し、保存されているチェックサム値と比較します。比較した値がすべて一致していれば、そのバックアップ ファイルは破損していないので、バックアップからのデータ リカバリはかなり高い確率で成功します。

統合

統合を行うと、バックアップ チェーンから不要になったバックアップを削除することができます。

統合するチェーンは、完全バックアップ、および、1 つまたは複数の増分バックアップという構成にできます。

必要に応じて、バックアップ チェーンからベースの完全バックアップを削除できます。プログラムによって、残っている最も古いバックアップの代わりに新しい完全バックアップが作成されます。統合では、選択されたバックアップが保持され、選択されなかったバックアップは削除されます。

統合には長い時間と、大量のシステム リソース(ディスク領域を含む)が必要になる可能性があるため、統合する場合は慎重に検討することをお勧めします。多くの場合、新しいバックアップ チェーンを開始してから古いバックアップ チェーンを削除するほうがよいでしょう。

Acronis ノンストップ バックアップでは、異なる統合メカニズムが使用されています。Acronis ノンストップ バックアップでは、バックアップ データを管理するために使用されるメタデータが統合されます。メタデータの情報量はバックアップ データ量よりもはるかに少ないので、統合で必要になる時間とシステム リソースも大幅に少なくなります。

災害復旧

障害からのリカバリには、通常レスキュー メディアおよびシステム パーティションのバックアップが必要になります。

True Image 2013 は、システム データの破損、ウィルス、マルウェアなどを原因とする障害からの復旧を行います。

オペレーティング システムが起動できなかった場合、True Image 2013 によって、システム パーティションがリカバリされます。パッケージ版の製品には、レスキュー CD が同梱されています。それ以外の方法で購入された場合は、メディア ビルダ ツールを使用することによって、レスキュー メディアを作成できます。

スケジュール設定

作成したバックアップを実際に役立てるには、可能な限り「最新」のバックアップを作成しておく必要があります。つまり、バックアップは定期的に、たとえば 1 日に 1 回実行してください。True Image 2013 バックアップは簡単に作成できますが、バックアップを実行し忘れてしまうこともあります。

そのような作業はスケジューラに任せることができます。スケジューラを使用すれば、自動バックアップのスケジュールをあらかじめ設定できます。十分なストレージ領域が存在する限り、データはバックアップされます。

このプログラムの機能を使用する場合、これらの用語と概念を理解しておく役立ちます。

1.1.4 True Image 2013 by Acronis の新機能

- **Windows 8 のサポート** - True Image 2013 は、Microsoft によってリリースされる次のバージョンのオペレーティング システムである Windows 8 をサポートします。Windows 8 を購入してインストールしても安全です。必要になったときにシステムを復元できるかどうかを心配する必要はありません。
- **新しいバックアップ命名規則** - 新しい自動バックアップ命名機能がより柔軟で、便利になりました。デフォルトでは、True Image 2013 は、各バックアップ タスク用にバックアップ タスク名が付いたフォルダを作成し、すべての関連バックアップをこのフォルダに保持します。バックアップ ファイル名には常に、タスク名、バックアップの種類、バックアップ番号、およびシーケンシャル ファイル番号が含まれています(バックアップが複数のファイルに分割されている場合は、末尾に v1、v2 などが追加されます)。オプションで、適切なマクロを追加することによって日付、時刻などを名前に追加できます。
- **モバイル デバイスとの同期** - PC 間だけでなく、モバイル デバイスともデータを同期できるようになりました。対象になるデバイスには、iOS や Android プラットフォームの携帯電話、タブレット PC などが含まれます。App Store または Google Play にアクセスし、無料の Acronis アプリケーションをインストールするだけで、いつでもどこでも Acronis Cloud 上のデータにアクセスできます。
- **ファイルとフォルダの簡単な共有** - Acronis Cloud サービスを申し込めば、ワンクリックでファイルやフォルダを共有できます。目的のファイルやフォルダを右クリックして、ショートカット メニューで **[公開リンクの作成]** を選択するだけです。プログラムによって公開リンクが作成され、クリップボードに置かれます。誰とでもリンクを共有することができます。さらに、同期やオンラインバックアップに保存されたファイルやフォルダだけでなく任意のファイルやフォルダへの公開リンクを作成できます。

1.1.5 バックアップ、リカバリ、およびクローン作成に関する FAQ

- **150 GB のシステム パーティションがありますが、そのパーティションで使用されている領域は 80 GB のみです。True Image 2013 のバックアップには何が含まれますか？** - デフォルトでは、True Image 2013 はデータが含まれるハード ディスク セクタのみをコピーするので、バックアップは 80 GB のみになります。セクタ単位モードを選択することもできます。このようなバックアップ モードが必要なのは特殊な場合のみです。詳細については、「イメージ作成モード (74ページ)」を参照してください。セクタ単位モードのバックアップの作成中には、プログラムによって使用済みと未使用の両方のハード ディスク セクタがコピーされるので、通常バックアップ ファイルが非常に大きくなります。

- **システム ディスクのバックアップにドライバ、ドキュメント、画像などが含まれますか？** - はい、システム ディスクのバックアップには、ドライバが含まれ、さらにマイ ドキュメント フォルダのデフォルトのロケーションを変えていなければマイ ドキュメント フォルダとそのサブフォルダの内容も含まれます。PC に搭載されたハード ディスクが 1 台のみの場合は、このバックアップに、オペレーティング システム、アプリケーション、およびデータのすべてが含まれます。
- **ノートブックに搭載されている古いハード ディスク ドライブがほとんどいっぱいになりました。容量の大きい HDD を新しく購入しました。Windows、プログラム、およびデータを新しいディスクに転送するにはどうすればよいですか？** - 古いハード ディスクのクローンを新しいハード ディスク上に作成するか、古いハード ディスクをバックアップして、そのバックアップを新しいハード ディスクにリカバリします。通常は、古いハード ディスクのパーティション レイアウトに応じて最適な方法が決まります。
- **壊れたマザーボードを交換したら Windows が起動しなくなりました。システム ディスクのバックアップは保管しています。それらのバックアップを使用して、コンピュータを再び稼働させることはできますか？** - はい、可能です。ただし、Acronis Universal Restore (True Image 2013 Plus Pack によって提供) を使用する必要があります。リカバリの構成中に **[Acronis Universal Restore を使用]** チェックボックスを選択する必要があります。詳細については、「異なるハードウェアへのリカバリ (108ページ)」を参照してください。場合によっては、マザーボードの製造元のウェブサイトからチップセットとハード ディスク コントローラのドライバをダウンロードして、リカバリ中にそれらを追加する必要があります。
- **古いデスクトップ PC からノートブックに切り替えたいと思います。True Image 2013 で Windows、プログラム、およびデータをノートブックに移動することはできますか？** - はい、可能です。まず、古い PC をバックアップし、そのバックアップを Acronis Universal Restore (True Image 2013 Plus Pack に含まれます) を使用してノートブックにリカバリします。リカバリの構成中に **[Acronis Universal Restore を使用]** チェックボックスをオンにする必要があります。場合によっては、Universal Restore でのリカバリ中に、新しいコンピュータのチップセット、ハード ディスク コントローラなどのドライバを指定する必要があります。詳細については、「異なるハードウェアへのリカバリ (108ページ)」を参照してください。
- **古いシステムのハード ディスクを SSD に移行したいと思います。True Image 2013 を使用してこの操作を実行できますか？** - はい、True Image 2013 にはその機能があります。詳細については、「HDD から SSD へのシステムの移行 (162ページ)」を参照してください。
- **システムを新しいディスクに移行するにはクローン作成とバックアップとリカバリのどちらが最善の方法か教えてください。** - バックアップとリカバリによる方法には柔軟性があります。クローン作成を使用する場合でも、古いハード ディスクのバックアップを作成することを強くお勧めします。それによって、クローン作成中に元のハードディスクに問題が発生した場合でも、データは安全に守られます。たとえば、ユーザーが間違ったディスクをターゲットとして選択し、そのためにシステム ディスクが消去されることがあります。また、複数のバックアップを作成することで冗長性を持たせたりセキュリティを強化したりすることができます。
- **パーティションとディスク全体のどちらをバックアップすればよいですか？** - ほとんどの場合、ディスク全体をバックアップの方が効果的です。ただし、場合によってはパーティションのバックアップが推奨されることがあります。たとえば、1 つのハード ディスクに、システム (ドライブ文字 C) とデータ (ドライブ文字 D) という 2 つのパーティションがあるとします。システム パーティションのマイ ドキュメント フォルダとサブフォルダには仕事用のドキュメントが保存されています。データ パーティションにはビデオ、画像、音楽のファイルが保存されています。これらのファイルはすでに圧縮されており、True Image 2013 を使用してバックアップしても、バックアップファイルのサイズが大幅に減少することはありません。この場合、データ パーティションのファイルにはローカルの同期を使用し、システム パーティションには別のバックアップを使用するの

が有効なことがあります。ただし、バックアップ ストレージに十分な領域がある場合は、ディスク全体のバックアップを少なくとも 1 つ作成することもお勧めします。

- **Windows 上またはレスキュー メディアから起動した後にクローンを作成する方法を教えてください。** Windows でクローン作成を開始したときでも、コンピュータはレスキュー メディアから起動するときと同じように Linux 環境で再起動されます。このため、レスキュー メディアでクローンを作成の方が効果的です。たとえば、ハード ディスク ドライブが Windows で検出されても Linux では検出されないことがあります。この場合、クローン作成処理は再起動後に失敗します。レスキュー メディアから起動したときに、クローン作成処理を開始する前に True Image 2013 でソース ディスクとターゲット ディスクの両方が検出されていることを確認できます。
- **デュアル ブート コンピュータのクローン作成またはバックアップとリカバリを行うことはできますか？** はい、ほとんどの場合は可能です。同じ物理ハード ディスク ドライブの異なるパーティションに各システムがインストールされている場合、通常はクローン作成またはリカバリを問題なく行うことができます。異なる物理ハード ディスク ドライブ上にシステムがある場合は、リカバリ後の起動に問題が生じることがあります。Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを Linux ロードーを使用するデュアル ブート(マルチブート)システムでアクティブ化するには、特別な準備が必要です。詳細については、「Acronis スタートアップ リカバリ マネージャの使用方法(113ページ)」を参照してください。また、デュアル ブート コンピュータのバックアップを異なるハードウェアにリカバリするには、Acronis Universal Restore を使用する必要があります。
- **True Image 2013 は RAID をサポートしますか？** - True Image 2013 は、一般的なハードウェア RAID アレイをすべてサポートします。ダイナミック ディスクでのソフトウェア RAID 構成は、True Image 2013 Plus Pack でのみサポートされます。Plus Pack を使用する場合でも、プログラムはソフトウェア RAID 1(ミラー)および RAID 5 はサポートしません。Acronis ブータブル レスキュー メディアは、一般的なハードウェア RAID コントローラをほとんどサポートします。標準の Acronis レスキュー メディアで RAID が 1 つのボリュームとして「検出」されない場合は、メディアの適切なドライバがありません。True Image 2013 Plus Pack のユーザーは、WinPE ベースのレスキュー メディアの作成を試すことができます。このメディアに、必要なドライバがある場合があります。
- **True Image 2013 を使用して 1 つのディスクから RAID に移行することはできますか？** 多くの場合は、これは可能です。ただし、クローン作成よりもバックアップとリカバリを使用の方が効果的です。1 つのバックアップを RAID にリカバリする場合、通常は Universal Restore 機能を使用して、リカバリ中に RAID ドライバを追加する必要があります。ドライバのファイル名拡張子は .inf になっている必要があります。

1.1.6 システム要件とサポートされるメディア

最小システム要件

True Image 2013 のハードウェアの最小要件は、True Image 2013 を実行するコンピュータにインストールされているオペレーティング システムの要件に対応しています。さらに、True Image 2013 を実行するには次のハードウェアが必要です。

- ブータブル メディア作成用の CD-RW/DVD-RW ドライブ
- マウスまたはその他のポインティング デバイス(推奨)

1 GB 以上の RAM(Acronis ノンストップ バックアップ用)

True Image 2013 レスキュー メディアを作成するには、次のハードウェアが必要です。

- 512 MB の RAM
- 1 GHz 以上の Pentium プロセッサ
- ハード ディスク上に 1.5 GB の空き領域

1280 x 1024 の画面解像度(推奨)

1024 x 768 以上の画面解像度

サポートされるオペレーティング システム

True Image 2013 は、次のオペレーティング システムでテスト済みです。

- Windows XP SP3
- Windows XP Professional x64 Edition SP2
- Windows Vista SP2(全エディション)
- Windows 7 SP1(全エディション)
- Windows 8(全エディション)
- Windows Home Server 2011

True Image 2013 では、Intel または AMD ベースの PC オペレーティング システム(Linux®を含む)を実行するコンピュータ上のディスク/パーティションをバックアップしてリカバリするためのブータブル CD-R/DVD-R を作成することもできます。(インテル ベースの Apple Macintosh はサポートされていません。)

サポートされるファイル システム

- FAT16/32
- NTFS
- Ext2/Ext3/Ext4 *
- ReiserFS *
- Linux SWAP *

ファイル システムがサポート対象外または破損している場合も、True Image 2013 ではデータをセクタ単位でコピーできます。

* Ext2/Ext3/Ext4、ReiserFS、および Linux SWAP のファイル システムの場合は、ディスクまたはパーティションのバックアップ/リカバリ処理のみがサポートされます。True Image 2013 では、これらのファイル システムに対してはファイル レベルの処理(ファイルのバックアップ、リカバリ、検索だけでなく、イメージをマウントして、そのイメージからファイルをリカバリ)は実行できません。これらのファイル システムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うこともできません。

サポートされるストレージ メディア

- ハードディスク ドライブ*
- ソリッド ステート ドライブ(SSD)
- ネットワーク上のストレージ デバイス
- FTP サーバー**
- CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R(2 層ディスクの DVD+R を含む)、DVD+RW、DVD-RAM、BD-R、BD-RE***
- USB 1.1/2.0/3.0、FireWire(IEEE-1394)および PC カード ストレージ デバイス

* True Image 2013 では、ダイナミック ボリュームのタイプのうち、ミラーおよび RAID-5 はサポートされません。ダイナミック ディスクおよび GPT ディスクの処理に関しては、他にも次のような制限があります。

- ダイナミック ディスクに対して処理を実行するには、True Image 2013 Plus Pack が必要です。
- ダイナミック ディスクでは、Acronis セキュア ゾーンの作成はサポートされていません。
- ダイナミック ボリュームをダイナミック ボリュームとしてリカバリするときに、手動でサイズを変更することはできません。
- Try&Decide® を使用してダイナミック/GPT ディスクを保護することはできません。
- 「ディスクのクローン作成」処理は、ダイナミック ディスクではサポートされていません。

True Image 2013 では、2 TB を超える大容量ハード ディスク ドライブもサポートされます。オペレーティング システムがこのようなハードウェアをサポートしていない場合でも、このサポートは実現されます。詳細については、「Acronis 容量拡張マネージャ (219ページ)」を参照してください。

** FTP サーバー側がパッシブ モードのファイル転送を許可している必要があります。FTP サーバーから直接リカバリするデータの場合、バックアップはそれぞれが 2 GB 以下のファイルで構成される必要があります。

バックアップ元のコンピュータのファイアウォール設定では、ポート 20 および 21 が TCP プロトコルと UDP プロトコル用に開いており、機能するようになっておく必要があります。Windows のルーティングとリモート アクセス サービスは無効にする必要があります。

*** 作成された書き換え可能ディスクを Linux で読み込むには、カーネル パッチが必要です。

SSD のサポート

ソリッド ステート ドライブ (SSD) で推奨されるオフセットは 64 KB の倍数 (一般的には 1024 KB または 2048 セクタ) です。

True Image 2013 は SSD を完全にサポートします。イメージのリカバリやクローン作成などの操作中に SSD の適切なオフセットを維持します。完全なサポートとは、具体的に次を意味します。

- ディスク イメージを SSD にリカバリしたりディスクのクローンを SSD に作成したりする場合、オフセットは自動的にデフォルトの 1024 KB (2048 セクタ) に設定されます。
- パーティション バックアップをターゲットの空のパーティションが設定されたディスク (SSD) にリカバリする場合、ターゲットの SSD は元のオフセットを維持します。

テクニカル サポート

保守サポート プログラム

に関するサポートが必要な場合には、<http://www.acronis.co.jp/support/> にアクセスしてください。

製品アップデート

マイ アカウント (<https://www.acronis.co.jp/my>) にログインし、製品を登録していただきますと、お客様がお使いのすべての ソフトウェアの最新アップデートを弊社ウェブサイトよりダウンロードすることができます。Acronis 製品をウェブサイトで登録するには (英語) (<http://kb.acronis.com/content/4834>) およびアクロニス Web サイトのユーザーガイド (日本語) (<http://kb.acronis.com/ja/content/8128>) をご参照ください。

試用版情報

試用版の True Image 2013 は、30 日間の試用期間のみ機能します。以下の制約があります。

- ディスクのクローン作成は利用できません。
- ご利用いただける機能には制限があります。
- Acronis ブータブル メディアから起動する場合は、リカバリのみのみ可能です。

データの同期は制限なく使用できますが、試用期間が切れると次のようになります。

- お使いのコンピュータは、すべての同期から除外されます。製品版の True Image 2013 をインストールすると、同期に再び接続できるようになります。
- 全バージョンの同期ファイルは、Acronis Cloud から完全に削除されます。

製品版を購入する場合は、<http://www.acronis.co.jp/homecomputing/> にアクセスしてください。

[**メイン画面へ移動する**] をクリックすると True Image 2013 の試用版が起動します。

[**今すぐ購入**] をクリックすると、アクロニスの公式オンライン ストアに移動します。

既に完全版を購入済みで、有効なプロダクト キーをお持ちの場合は、[**アクティブ化**] をクリックしてください。

1.1.7 True Image 2013 のインストール

True Image 2013 のインストール

True Image 2013 をインストールする手順は、次のとおりです。

1. セットアップ ファイルを実行します。True Image 2013 は、セットアップ処理を開始する前に新しいバージョンがないかウェブサイトをチェックします。新しいバージョンがある場合は、インストール用に表示されます。
2. インストール メニューで [**インストール**] をクリックし、インストール手順を開始します。
3. [**使用許諾契約**] ウィンドウでライセンス契約を読み、利用規約に同意します。
4. Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラムの参加条件を読み、プログラムに参加するかどうかを決定してください。
5. [**プロダクト キー**] ウィンドウに製品版または試用版のプロダクト キーを入力します。テキストボックスにプロダクト キーを入力するか、コピーして貼り付けます。

Acronis のウェブサイトから無料試用版のプロダクト キーを入手するには、[**試用版のプロダクト キーの取得**] をクリックしてください。指定した電子メール アドレスにプロダクト キーが送られます。試用版の True Image 2013 は 30 日間ご使用いただけます。

その他のパラメータ:

- **追加オプションの設定** - このチェックボックスが選択されている場合は、[**セットアップ オプション**] の手順が利用できます。
 - **製品を自動でアクティブ化する**: このチェック ボックスを選択すると、インストール時にインターネットに接続して製品をアクティブ化します。このチェックボックスは、オフにすることができます。この場合、インストール後に製品をアクティブ化する必要があります。詳細については、「True Image 2013 のアクティブ化」を参照してください。
6. この手順は [**追加オプションの設定**] チェックボックスが [**プロダクト キー**] ウィンドウで、選択されている場合のみ使用できます。

[**セットアップ オプション**] ウィンドウで、インストール オプションを選択します。

- 必要に応じて、インストール フォルダを変更します。

7. [**実行**] をクリックしてインストールを開始します。設定を変更するには、[戻る] ボタンと [次へ] ボタンを使用します。

注意

- パッケージ版の製品を購入した場合、インストール用 CD には、BartPE ユーティリティ用の True Image 2013 プラグインをインストールするためのインストール ファイルが含まれています。BartPE (Bart Preinstalled Environment) とは、Windows XP または Windows Server 2003 のオリジナル インストール/セットアップ CD から作成された、ブータブルな Windows CD/DVD です。BartPE にインストールされるアプリケーションはプラグインの形でインストールされます。True Image 2013 プラグインを BartPE プラグイン タブで追加することができます。BartPE の CD/DVD に True Image 2013 プラグインを追加して、このディスクからコンピュータを起動すると、障害や災害が発生したときも、通常と同様の Windows 環境で True Image 2013 のほぼすべての機能を使用してシステムをリカバリすることができます。BartPE の詳細については、BartPE のホーム ページ (<http://www.nu2.nu/pebuilder/>) を参照してください。
- 前述のインストール ファイルは、Acronis のウェブサイトからダウンロードできます。

True Image 2013 に問題がある場合のリカバリ

True Image 2013 が動作しなくなったりエラーが発生した場合は、ファイルが破損している可能性があります。このような問題に対処するには、まずプログラムを復旧する必要があります。そのためには、True Image 2013 インストーラを再度実行します。インストーラによりコンピュータ上の True Image 2013 が検出され、修復か削除の確認を求められます。

True Image 2013 の削除

[スタート] → [設定] → [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] → [True Image 2013] → [削除] の順に選択します。画面の指示に従って操作します。

Windows Vista をご利用の場合は、[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムと機能] → [True Image 2013] → [削除] の順に選択します。画面の指示に従って操作します。削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

Windows 7 をご利用の場合は、[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムのアンインストール] → [True Image 2013] → [アンインストール] の順に選択します。画面の指示に従って操作します。削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

Windows 8 をご利用の場合は、設定アイコンをクリックし、[コントロール パネル] → [プログラムのアンインストール] → [True Image 2013] → [アンインストール] の順に選択します。

Acronis セキュア ゾーン、Acronis ノンストップ バックアップ、または Acronis 容量拡張マネージャを使用した場合は、表示されるウィンドウで、セキュア ゾーン、ノンストップ バックアップのストレージ、容量拡張ディスクについての処理も選択します。次に [次へ] をクリックしてアンインストールを続行します。

古いバージョンの Acronis True Image Home からのアップグレード

Acronis True Image Home が既にインストールされている場合、古いバージョンがそのまま新しいバージョンにアップデートされます。古いバージョンをアンインストールして新しいバージョンを再インストールする必要はありません。

新しいバージョンのプログラムで作成されたバックアップは、前のバージョンのプログラムとは互換性がない可能性があることに注意してください。True Image 2013 を古いバージョンに戻した場合は、その古いバージョンでバックアップを再度作成する必要があります。同じ理由により、製品をアップグレードするたびに、新たにブータブル メディアを作成することを強くお勧めします。

1.1.8 True Image 2013 のアクティブ化

True Image 2013 を使用するには、インターネット経由でアクティブ化する必要があります。アクティブ化しない場合、製品の全機能の利用有効期間は 30 日です。この期間にアクティブ化しないと、リカバリ以外のすべての機能が利用できなくなります。

True Image 2013 のアクティブ化は、お使いのコンピュータ上で、またはお使いのコンピュータがインターネットに接続されていない場合は他のコンピュータから実行できます。

インターネットに接続されているコンピュータ上でのアクティブ化

お使いのコンピュータがインターネットに接続されている場合は、製品を自動的にアクティブ化するか、プログラムからアクティブ化することができます。

製品を自動的にアクティブ化する手順は、次のとおりです。

1. インストール手順を開始します。詳細については、「True Image 2013 のインストール」を参照してください。
2. **[プロダクト キー]** で、**[True Image 2013 を自動的にアクティブ化]** チェックボックスを選択します。選択した場合、True Image 2013 インストール後の最初の起動時にアクティブ化が実行されます。

メイン画面で製品をアクティブ化する手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 を起動します。
2. プログラムのメイン画面で、情報バーの **[今すぐアクティブ化する]** をクリックします。

True Image 2013 をインストールするコンピュータがインターネットに接続されていない場合、またはプログラムが Acronis アクティブ化サーバーに接続できない場合は、次のいずれかの操作を選択できます。

- **もう一度試す** - Acronis アクティブ化サーバーに再度接続する場合は、このオプションを選択します。
- **後で自動的に再試行する** - ユーザーが操作しなくても、Acronis アクティブ化サーバーへの接続が 1 時間ごとに自動的に試行されます。
- **別のコンピュータからアクティブ化する** - インターネットに接続されている他のコンピュータから手動でアクティブ化できます(以下を参照)。

他のコンピュータからのアクティブ化

お使いのコンピュータがインターネットに接続されていない場合は、インターネットに接続されている他のコンピュータを使用して True Image 2013 をアクティブ化できます。

他のコンピュータから製品をアクティブ化する手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 をインストールし、起動します。
2. プログラムのメイン画面で、情報バーの **[今すぐアクティブ化する]** をクリックします。
3. 開いたウィンドウで、**[他のコンピュータからアクティブ化]** を選択します。

4. [True Image 2013 のアクティブ化] ウィンドウで、次の簡単な 3 つの手順を実行します。
 1. **[ファイルに保存]** ボタンをクリックして、インストール コードをファイルに保存し、ファイルの保存先としてリムーバブル メディア (USB フラッシュ ドライブなど) を指定します。このコードを紙に書き留めておいてもかまいません。
 2. インターネットに接続されている他のコンピュータで、<http://www.acronis.co.jp/activation/> を開きます。画面上の指示に従って、インストール コードを使用してアクティブ化コードを取得します。取得したアクティブ化コードをリムーバブル メディアのファイルに保存するか、紙に書き留めます。
 3. お使いのコンピュータで、**[ファイルから読み込む]** ボタンをクリックし、アクティブ化コードを含むファイルへのパスを指定するか、紙に書き留めた情報をボックスに入力します。
5. **[アクティブ化する]** をクリックします。

コンピュータ間でのライセンスの移動

1 つのプロダクト キーで、True Image 2013 をインストールできるコンピュータの数には限りがあります。製品の Standard Edition のアクティブ化は、1 つのコンピュータに限定されます。ファミリー パック エディションでは、この制限は 3 つのコンピュータまでです。アクティブ化中に制限を超過することが検出された場合は、該当するエラー メッセージが表示されます。このような場合は、新しいプロダクト キーを購入するか、製品が既にアクティブ化されているコンピュータから新しいコンピュータにライセンスを移動することができます。ライセンスを移動する場合は、次の手順を実行します。

他のコンピュータからライセンスを移行する手順は、次のとおりです。

1. エラー メッセージを表示しているウィンドウで、**[他のコンピュータからライセンスを移動]** をクリックします。
2. 開かれたウェブ ページで、画面の指示に従って操作します。
この手順を実行するには、Acronis のアカウントが必要です。アカウントを所有していない場合は、まず作成してください。また、プロダクト キーを登録していない場合は、登録する必要があります。次に、ライセンスの移動元のコンピュータをリストから選択します。選択されたコンピュータでは、製品のアクティブ化は解除されますので注意してください。

1.1.9 プログラムのワークスペース

セクションの内容

[スタート] タブ	21
[バックアップとリカバリ] タブ	21
[同期] タブ	26
[ツールとユーティリティ] タブ	29
ウィザードとタスク トレイのアイコン	29
Acronis Backup Explorer	30
Windows との統合	37
ログイン メニュー	40
[設定] メニュー	40
[ヘルプ] メニュー	40
Acronis 修正プログラムのインストール	41

[スタート] タブ

True Image 2013 を初めて起動すると、[スタート] タブが選択された状態で [ホーム] 画面が表示されます。



[スタート] タブでは、True Image 2013 の主な機能、すなわちバックアップ、リカバリ、および同期の使用を始めるために役立つ情報が得られます。これらの操作を実行するために必要なアクションが、順に説明されます。

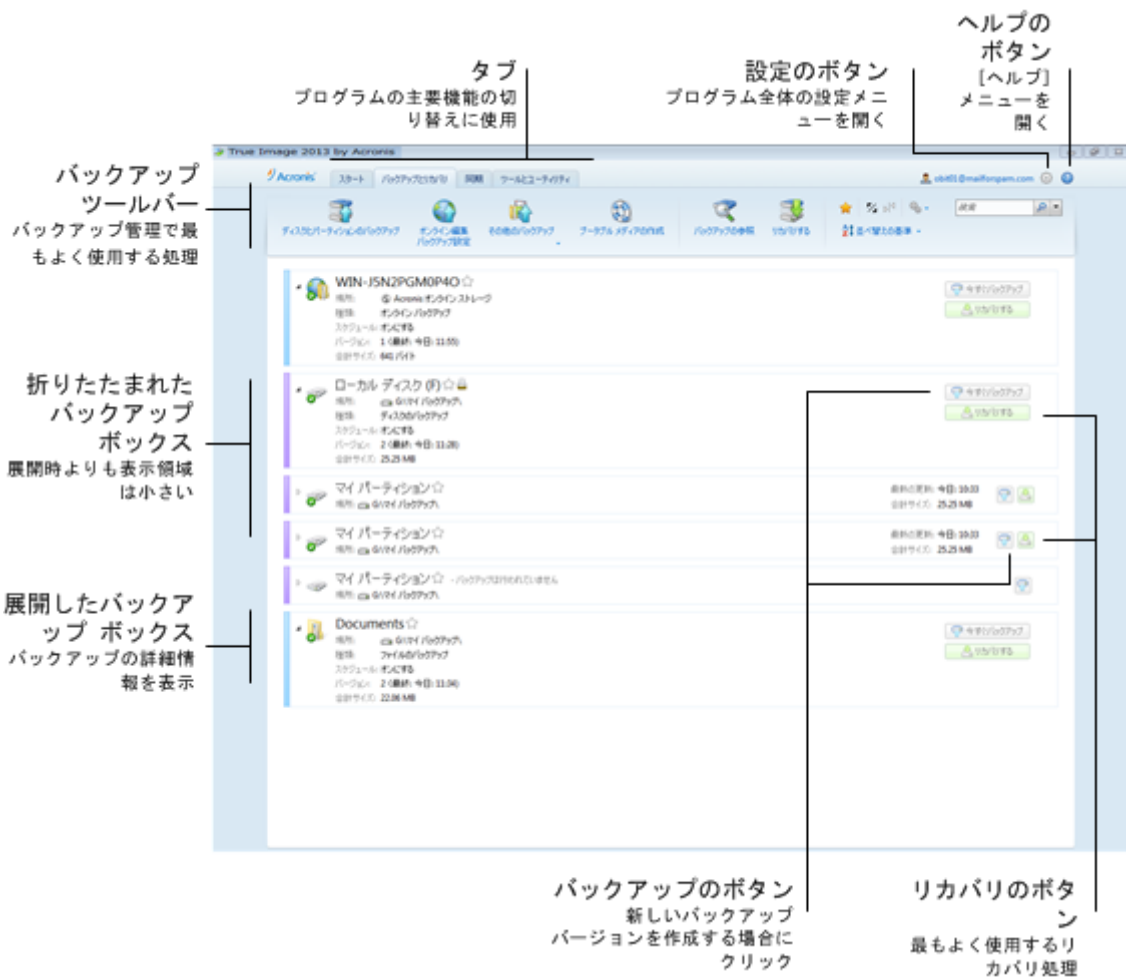
Acronis True Image Home の以前のバージョンを使用したことがない場合は、バックアップ、リカバリ、および同期の実行に必要なステップについての説明を参照して、これらの機能に慣れておくことをお勧めします。

True Image 2013 を使い始めた後は、プログラムを終了したときに選択されていたタブが起動時に表示されるようになります。

[バックアップとリカバリ] タブ

[バックアップとリカバリ] タブでは、データのバックアップとリカバリに関連する、プログラムのすべての機能にすばやくアクセスできます。

バックアップをまだ作成していない場合、新しいバックアップを作成するか、既存のバックアップを追加することができます。1 つでもバックアップが存在していれば、画面にバックアップのリストが表示されます。



ツールバー

「バックアップとリカバリ ツールバー (24ページ)」のツールバー コマンドの説明を参照してください。

バックアップ領域

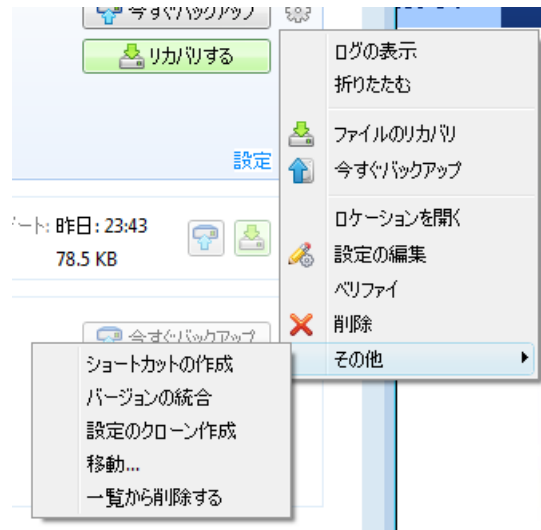
この領域には、既存のバックアップが表示されます。既存のバックアップに対するすべての処理を実行でき、データのリカバリを開始することができます。

- **[今すぐバックアップ]** - 新しいバックアップ バージョンを既存のバックアップに追加するか、既存のバックアップ バージョンを置き換えます(使用されているバックアップ スキームによって異なります)。
- **[開始]**(ノンストップ バックアップの場合のみ使用可能)- ノンストップ バックアップ プロテクションを開始します。
- **[停止]**(ノンストップ バックアップの場合のみ使用可能): ノンストップ バックアップ プロテクションを中止します。
- **[リカバリする]:** データをリカバリします。

バックアップのボックスを折りたたみ、該当するアイコンをクリックして、バックアップとリカバリの処理を開始できます。これらのアイコンは、[処理] メニューのアイコン(歯車)とともに、ボックス領域にポインタをかざすと表示されます。

バックアップ名の近くの三角形をクリックして、バックアップ ボックスの折りたたみと展開を行うことができます。

[処理] メニュー



選択したバックアップのボックスにある歯車アイコンをクリックするか、ボックスの空白の領域を右クリックすると、[処理] メニューが開きます。このメニューには次の項目が含まれます。

- **[ログの表示]:** 現在のバックアップのログを開きます。
- **[展開]:** 選択したバックアップ ボックスを展開します(折りたたんだボックスの場合に使用可能)。
- **[折りたたむ]:** 選択したバックアップ ボックスを折りたたんで細いストライプ状にします(展開したボックスの場合に使用可能)。
- **[ファイルのリカバリ](ディスク バックアップにのみ使用可能):** **[バックアップの参照]** ウィンドウを開いて、目的のバージョンのバックアップを選択できます。
- **[今すぐバックアップ]** - 新しいバックアップ バージョンを既存のバックアップに追加するか、既存のバックアップ バージョンを置き換えます(使用されているバックアップ スキームによって異なります)。
- **[ロケーションを開く]** - バックアップ ファイルが格納されているフォルダを開きます。
- **[設定の編集]** - 現在のバックアップ設定を編集できます。
- **[バックアップ設定の再作成](バックアップ リストに手動で追加したバックアップでのみ使用可能)** - 以前のバージョンの Acronis True Image Home で作成した、イメージ、ファイル、電子メールのバックアップの設定を構成できます。この項目は、別のコンピュータで作成し、設定をインポートせずにバックアップ リストに追加したバックアップでも表示されます。

バックアップを設定しない場合は、特定の処理を実行できません。具体的には、**[今すぐバックアップ]** をクリックしてバックアップを更新することはできません。また、バックアップの設定およびスケジュールを編集したり、それらのクローンを作成することもできません。

- **[ベリファイ]** - バックアップのベリファイを開始します。

- **[削除]** - 現在のバックアップのすべてのバックアップ バージョンをそれらが保存されているディレクトリから削除します。削除すると元に戻せないのをご注意ください。
- **[その他]** - 以下の追加項目が表示されます。
 - **[ショートカットの作成]** - デスクトップのショートカットを作成します。このショートカットによって、True Image 2013 を起動することなくバックアップを実行できます。
 - **[バージョンの統合]** - バックアップの一貫性を維持しながら不要になったバックアップ バージョンを削除できます。
 - **[設定のクローン作成]** - 類似のバックアップを複数作成する必要がある場合に現在のバックアップ設定のクローンを作成します。バックアップ設定のクローンを作成してから、必要な変更を行います。
 - **[移動...]** - すべてのバックアップ ファイルを他の保存先に移動します。後続のバックアップ バージョンは新しいロケーションに保存されます。

バックアップ設定を編集してバックアップの保存先を変更した場合は、新しいバックアップ バージョンのみが新しいロケーションに保存されます。以前のバックアップ バージョンは、元のロケーションに残ります。

- **[一覧から削除する]** - [マイ バックアップ] 領域に表示されているバックアップ リストから現在のバックアップを削除します。この操作によって、削除されたバックアップのスケジュール設定が無効になります(スケジュールが設定されていた場合)が、バックアップ ファイルは削除されません。
- **[クリーンアップ...]**(ノンストップ バックアップの場合にのみ使用可能) - **[クリーンアップ]** ダイアログ ボックスを開きます。このダイアログ ボックスで、不要になったバックアップ バージョンを削除できます。バックアップ チェーンが破損することはありません。
- **[ウェブ アプリケーションを開く]**(オンライン バックアップでのみ使用できます) - Acronis Cloud アプリケーションを開きます。


ノンストップ バックアップとオンライン バックアップの場合、[処理] メニューに表示される項目は少なくなります。また、別のコンピュータ上で作成し、バックアップ設定をインポートせずにバックアップ リストに追加したバックアップの [処理] メニューに表示される項目も少なくなります。

バックアップとリカバリ ツールバー

[バックアップとリカバリ] タブの上部にあるツールバーには、新しいバックアップの作成、バックアップ リストの管理、バックアップのベリファイなどを目的とした、頻繁に使用するコマンドが含まれます。

コマンド	説明
ディスクとパーティションのバックアップ	パーティション(システム パーティションを含む)およびディスク全体のバックアップを作成して、コンピュータを保護することができます。
Online Backup	インターネット経由でアクセスできる安全な Acronis Cloud にデータを保存することができます。バックアップ リストにオンライン バックアップが既に含まれている場合、この項目は [オンライン編集バックアップ設定] と表示されます。オンライン バックアップは一度に 1 つだけしか実行することができないためです。
ファイルのバックアップ	ファイルおよびフォルダをバックアップすることができます。

その他のバックアップ	電子メールのバックアップ	電子メール メッセージおよびその設定をバックアップすることができます。
	ノンストップ バックアップ	パーティションとファイルが継続的に保護されます。
ブータブル メディアの作成		コンピュータが起動できない場合に、ブータブル レスキュー メディアを使用して、スタンドアロン バージョンの True Image 2013 を実行し、以前作成したシステム パーティションのバックアップからシステムをリカバリできます。
バックアップの参照		コンピュータ上のバックアップを参照し、そのバックアップをバックアップ リストに追加する場合には、この項目をクリックします。この項目は、バックアップリストには表示されない、旧バージョンの Acronis True Image Home で作成したバックアップが存在する場合に便利です。
リカバリする		この項目をクリックして、バックアップからデータをリカバリします。その後で必要なデータを含むバックアップを選択します。
お気に入りのバックアップのみを表示★		お気に入りとしてマークしたバックアップのみを表示します。
すべてのバックアップボックスを展開する		すべての折りたたまれたバックアップ ボックスを展開します。
すべてのバックアップボックスを折りたたむ		すべての展開されたバックアップ ボックスを狭い領域に折りたたみます。
並べ替えの基準	種類	すべてのバックアップを種類ごとに並べ替えます。ディスクのバックアップ、ファイルのバックアップ、電子メールのバックアップ、ノンストップバックアップ、Windows バックアップ、ZIP アーカイブの順序になります。
	名前	すべてのバックアップをアルファベット順に並べ替えます。
	作成日	すべてのバックアップを新しいものから古いものに並べ替えます。
	アップデート日	すべてのバックアップを最新の日付順に並べ替えます。バックアップバージョンが新しいほど、リストの上位に配置されます。
	合計サイズ	すべてのバックアップをサイズごとに大きいものから小さいものの順に並べ替えます。
	スケジュールの種類	すべてのバックアップを、スケジュール設定されたバックアップとスケジュール設定されていないバックアップの 2 つのグループに並べ替えます。後者は手動でのみ開始できます。

その他の機能 	すべてのバックアップを参照	タイムラインを使用して、Acronis Backup Explorer ですべてのバックアップを参照できます。
	すべてのバックアップをベリファイ	すべてのバックアップの整合性を確認します。
	バックアップ リストのアップデート	見つからなくなったバックアップを検索します。
	一覧から削除する すべてのバックアップ	バックアップ リストからすべてのバックアップ ボックスを削除します。削除したバックアップは、[バックアップの参照] ツールを使用して、リストに戻すことができます。
	バックアップされていないボックス	バックアップ リストからすべての「空の」バックアップ ボックスを削除します。この場合は注意が必要です。削除した後にバックアップ ボックスをリストに戻すことはできません。

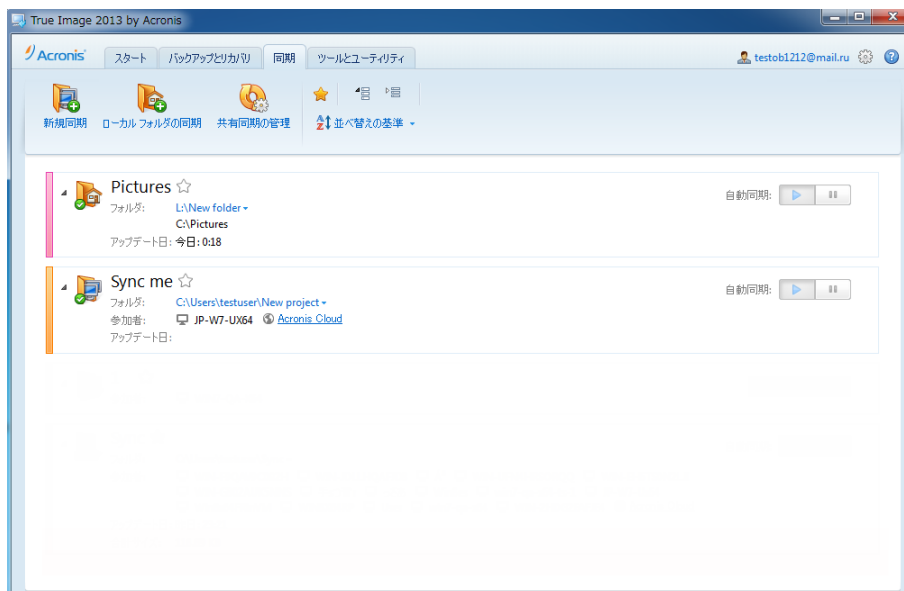
検索

リカバリする必要があるバックアップ ファイルを検索するには、メイン メニュー バーの [検索] フィールドで、ファイル名またはファイル名の一部を入力します。検索が終了すると Acronis Backup Explorer が開き、見つかったファイルと、そのファイルが格納されているバックアップが表示されます。

[同期] タブ

[同期] タブでは、新しい同期の作成、既存の同期のオン/オフ、設定の変更、不要な同期の削除など、データ同期処理のあらゆる項目を管理できます。

作成されるすべての同期は、バックアップ ボックスと同様にボックスで表現されます。同期ボックスでは、該当する同期処理の概要が表示され、その処理を管理することができます。



同期ツールバー

この領域には、次の項目が表示されます。

- **[新規同期]:** 同期するフォルダを選択して、データを同期するコンピュータに招待状を送信できます。
- **[ローカル フォルダの同期]** - 同期する 2 つのローカル フォルダを選択できます。
- **[共有同期の管理]:** 共有した同期を管理するウェブ ページが開きます。
- お気に入りの同期のみを表示(アイコン): フィルタリングで、お気に入りとしてマークした同期のみを表示します。
- すべての同期ボックスを展開する(アイコン): すべての折りたたまれた同期ボックスを展開します。
- すべての同期ボックスを折りたたむ(アイコン): すべての展開された同期ボックスを狭い領域に折りたたみます。
- **並べ替えの基準**
 - **[名前]:** すべての同期をアルファベット順に並べ替えます。
 - **[種類]:** すべての同期を種類別に並べ替えます。

同期リスト領域

この領域には、既存の同期ボックスが表示されます。ここでは、既存の同期で利用可能なあらゆる処理にアクセスできます。

[処理] メニュー

選択した同期のボックスで歯車アイコンをクリックすると、次の項目が含まれる [処理] メニューが開きます。

- **[今すぐ同期]:** データの同期処理を強制的に実行します。同期処理が何らかの理由により中断された場合(たとえば、インターネット接続が失敗した場合)、またはエラーで終了した場合、同

同期処理を手動で再開することができます。再開するには、最初に問題の解決を試みて、次に **[今すぐ同期]** をクリックします。

- **[一時停止]:** 同期処理を一時停止したり再開したりできます。この処理によって同期自体が削除されることはなく、データも失われないことに注意してください。
- **[共有する...]:** ウィンドウが表示され、選択した同期の共有に招待するユーザーの電子メールアドレスを指定できます。
- **[同期先]:**
 - **Acronis Cloud:** 同期したファイルのバージョンを Acronis Cloud に保存できます。
 - **[ローカル フォルダ...]** - たとえば外付けハード ドライブ上のフォルダなどのローカル フォルダと同期することができます。
 - **[他のコンピュータ...]** - 別のコンピュータと同期することができます。この項目は、ローカルフォルダ間の同期専用です。
- **[クリーンアップ オプション]:** 同期したファイルのバージョンの自動クリーンアップ ルールを設定します。
- **[ログの表示]:** True Image 2013 で実行した処理のログを開きます。
- **[削除]** - 同期を削除します。同期を削除しても同期されているフォルダとその内容は削除されません。ただし、Acronis Cloud 上に同期されるファイルのバージョンが保持されている場合、この操作によって最新バージョンを含むすべてのバージョンが削除されます。

選択した同期フォルダを削除したり名前を変更したりすると、True Image 2013 により、同期からそのコンピュータが除外されます。同期に指定したフォルダ内でサブフォルダを削除すると、このサブフォルダは他のすべてのコンピュータでも同様に削除されます。

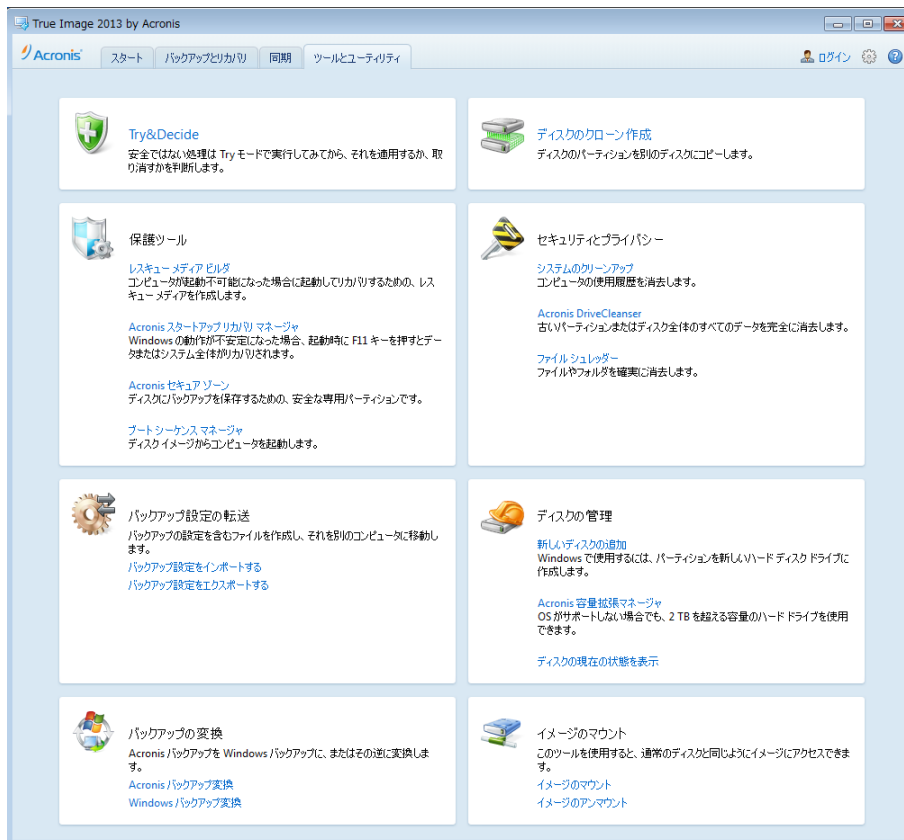
タスク トレイのアイコン

少なくとも 1 つの同期がアクティブである場合、該当するアイコンが Windows のタスク トレイに表示されます。アイコンを右クリックすると、次の項目を含むショートカット メニューが表示されます。

- **[True Image を開く]:** [同期] タブが選択された状態でプログラムのメイン ウィンドウを開きます。
- **[同期フォルダを開く]:** 同期が 1 つのときにこの項目を選択すると、同期フォルダが開きます。複数の同期がある場合にこれを選択すると、目的の同期フォルダを選択できるサブメニューが開きます。
- **[すべての同期を一時停止]:** すべての同期処理を一時停止します。
- **[すべての同期を再開]:** 一時停止されていた場合、すべての同期処理を再開します。
- **[通知を表示]** - タスクバーの通知の表示を切り替えます。
- **[アクロニスのウェブ サイト]:** デフォルトのブラウザで Acronis ウェブサイトの同期情報ページを表示します。
- **[ヘルプ]:** True Image 2013 のヘルプを開きます。
- **[終了]** - [同期] アイコンをタスクバーから削除し、すべての同期を一時停止します。

[ツールとユーティリティ] タブ

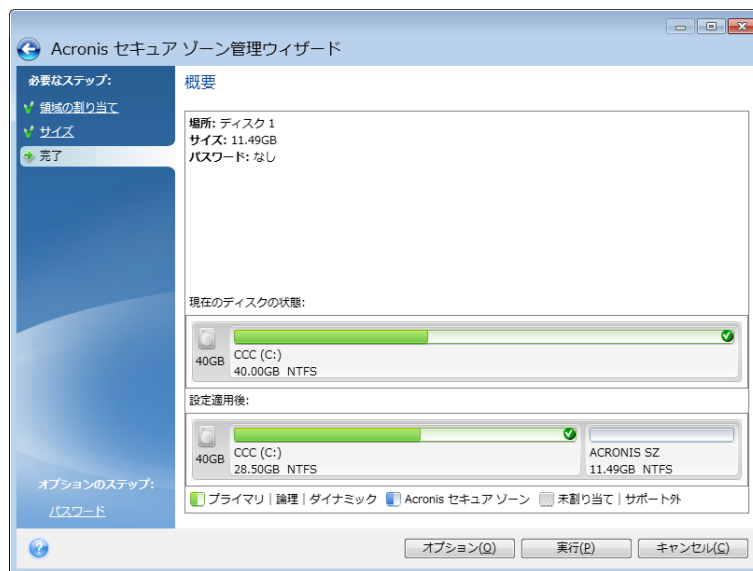
このタブでは、True Image 2013 のツールとユーティリティを選択できます。適切なリンクをクリックして、目的のツールまたはユーティリティを起動します。詳細については、「ツールとユーティリティ (184ページ)」を参照してください。



ウィザードとタスク トレイのアイコン

利用可能な True Image 2013 ツールおよびユーティリティを使用する際、ほとんどの場合ウィザードが表示されるので、指示に従って処理を進めることが可能です。

ウィザードのサイドバーには、処理を完了するうえで必要なすべての手順（必須および任意の両方）が一覧表示されます。たとえば、Acronis セキュア ゾーンの管理ウィザードのスクリーンショットは次のように表示されます。



完了したステップには緑のチェックマークが付きます。緑の矢印は現在処理中の手順を示します。必要な手順をすべて完了した後の **[完了]** では、**[概要]** 画面が表示されます。実行される処理の概要を確認してから、**[実行]** をクリックして処理を開始します。

タスク トレイのアイコン

ほとんどの処理の実行中には、特別なインジケータ アイコンが Windows のタスク トレイ（ステータス バーの右側にある時計が配置されている箇所）に表示されます。アイコンの上にマウスを置くと、処理の進行状況または状態を示すツールのヒントが表示されます。アイコンを右クリックすると、ショートカット メニューが開き、処理の状態を変更したり必要に応じて処理をキャンセルしたりすることができます。このアイコンは、メイン プログラム ウィンドウが開いていなくても表示されます。スケジュールされたバックアップがバックグラウンドで実行されているときにも表示されます。

Acronis Backup Explorer

Acronis Backup Explorer を使用すれば、バックアップの種類、バックアップ バージョン番号、日付、内容、バックアップの結果など、バックアップに関するさまざまな情報を取得できます。さらに、Backup Explorer によって、バックアップされたデータ（パーティションと個々のファイルの両方、およびファイル バージョン）を参照してリカバリできます。バックアップに対する各種処理も実行できます。たとえば、バックアップのベリファイ、Windows バックアップへの変換（ディスク バックアップのみ）、イメージのディスクとしてのマウント、および不要になったバックアップ バージョンの削除などです。

Acronis Backup Explorer について、詳しく見てみましょう。バックアップの表示用に 2 つのタブ **[ディスクとパーティション]**（ディスク バックアップの場合にのみ使用可能）と **[ファイルおよびフォルダ]** があります。

[ディスクとパーティション] タブ

[ディスクとパーティション] タブには、選択したバックアップ バージョンに含まれるバックアップされたディスクおよびパーティションが表示されます。

このタブには、最新のバックアップ バージョンが作成されたときのディスクおよびパーティションの状態も表示されます。

画面の下部にあるタイム ラインを使用することによって、各バックアップ バージョン間を切り替えることができます。詳細については、「タイム ライン (34ページ)」を参照してください。

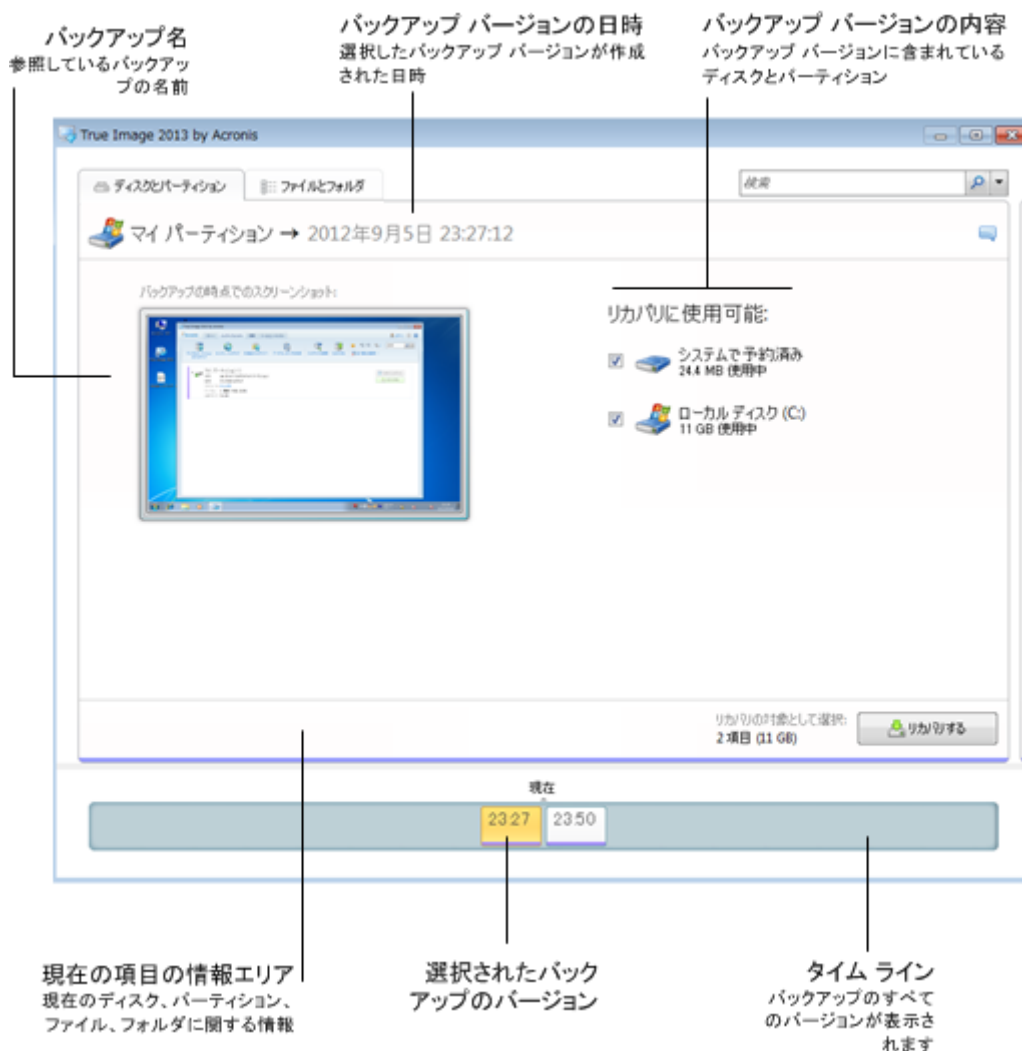
ディスクやパーティションをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. タイム ライン上で、ディスクやパーティションをリカバリするバックアップ バージョンを選択します。
バックアップ名の近くにバージョンの正確な日時が表示されます。データは、その時点における状態にリカバリされます。
2. リカバリするディスクまたはパーティションに対応するチェックボックスを選択します。
3. **[リカバリする]** ボタンをクリックします。

ディスクやパーティションのバックアップから特定のファイルおよびフォルダをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. **[ファイルとフォルダ]** タブをクリックします。
2. リカバリするファイルとフォルダを選択します。
3. **[リカバリする]** ボタンをクリックします。

ファイルとフォルダのリカバリの詳細については、「**[ファイルとフォルダ]** タブ (33ページ)」を参照してください。



バックアップ バージョンを右クリックすると、ショートカット メニューが開き、実行できるその他の処理が表示されます。

- **[リカバリする]** - 現在のバックアップ バージョンをリカバリするときに選択します。
- **[ベリファイ]** - バックアップ バージョン データの整合性を確認するときに選択します。
- **[Windows バックアップに変換...]**(イメージ バックアップ用) - バックアップ バージョンの TIB ファイルを VHD ファイルに変換するとき選択します。
- **[マウント...]**(イメージ バックアップ用) - バックアップ バージョンをディスクとしてマウントするとき選択します。
- **[バージョンの削除]** - バックアップ バージョンを削除するとき選択します(バックアップ チェーンは破損しません)。
- **[表示]** - タイム ラインに追加情報を表示させるときに選択します。

リカバリする必要があるファイルまたはフォルダを検索するには、[検索] フィールドにファイルまたはフォルダの名前を入力します。

両方のタブにはバックアップのコメントも表示され、選択したバックアップ バージョンに対するコメントを追加、編集、および削除することができます。バックアップ バージョンにコメントがない場合、**[このバージョンにコメントを追加する]** アイコンをクリックしてからコメント領域にコメントを入力して、**[保**

存] アイコンをクリックします。コメントがある場合、**[現在のバージョンのコメントを編集する]** アイコンをクリックすると、そのコメントを編集できます。編集が終了したら、**[保存]** アイコンをクリックして変更したコメントを保存するか、**[キャンセル]** アイコンをクリックして変更をキャンセルします。コメントを削除するには、**[削除]** アイコンをクリックします。

[ファイルとフォルダ] タブ

[ファイルとフォルダ] タブには、選択したバックアップ バージョンに格納されているバックアップ ファイルおよびフォルダが表示されます。このタブの左側の領域にはディレクトリ ツリー、右側の領域には選択したディレクトリ ツリー項目の内容が表示されます。

このタブには、現在のバックアップ バージョンが作成された時点でのファイルおよびフォルダの状態が表示されます。各バックアップ バージョン間を切り替えるには、画面下部のタイム ラインを使用します。タイム ラインの使用の詳細については、「タイム ライン」を参照してください。

ファイルやフォルダをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. タイム ラインで、ファイルやフォルダをリカバリするバックアップ バージョンを選択します。
バックアップ名の近くにバージョンの正確な日時が表示されます。データは、この時点の状態にリカバリされます。
2. リカバリするファイルおよびフォルダに対応するチェックボックスをオンにします(以下の選択ルールを参照してください)。**[リカバリする]** ボタンの近くに、選択した項目に関する簡単な説明(項目の数と合計サイズ)が表示されます。
3. **[リカバリする]** ボタンをクリックします。

ファイルおよびフォルダのリカバリは、ファイルやフォルダをデスクトップにドラッグするか、Windows エクスプローラ内の選択したフォルダにドラッグすることによっても行うことができます。

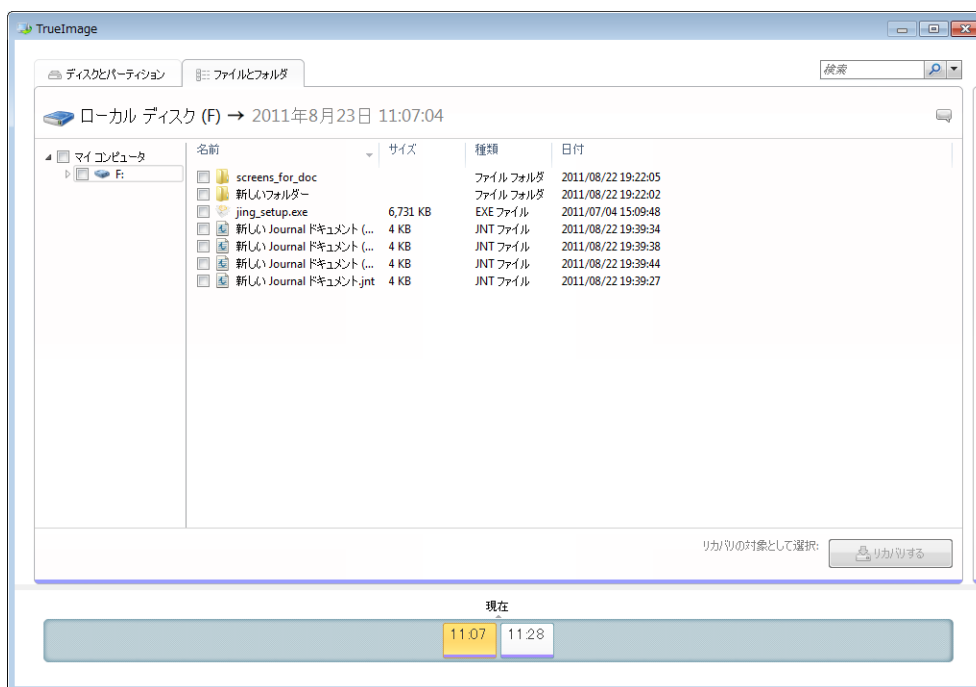
ファイルを FTP、書き込み可能な CD/DVD などの光学メディア、およびマウント済みの ISO ファイルにドラッグしてファイルをリカバリすることはできません。

選択ルール

各項目に対応するチェックボックスは、次のいずれかの状態で表示されています。

- **オン**(四角にチェック マークが付きます)- この状態は、その項目がリカバリ対象として選択されていることを示します。フォルダが選択されている場合は、そのフォルダ内のすべての項目が選択されていることを意味します。
- **オフ**(四角には何も表示されません)- この状態は、その項目が選択されていないことを示します。
- **混在**(四角が塗りつぶされます)- これはフォルダ内に選択された項目と選択されていない項目があることを示します。チェックボックスをクリックしてこの状態に設定することはできませんが、オフまたはオンの状態に変更することは可能です。

リスト内でディスク、パーティション、ファイル、またはフォルダを選択しただけでは、リカバリ対象とはならないのでご注意ください。



このタブにあるユーザー インターフェイス要素の大部分は、「[ディスクとパーティション] タブ」セクションで説明されています。次に、このタブ固有の項目について説明します。

項目をクリックすると、この項目に関する簡単な説明がブラウザ領域の下に表示されます。表示されるパラメータの組み合わせは、項目の種類によって異なります。[バージョンの表示] リンクをクリックすると、[バージョンの表示] ウィンドウが開き、バックアップ内のファイル バージョンすべての一覧が表示されます。目的のバージョンを、そのバックアップ時間に基づいてリカバリできます。

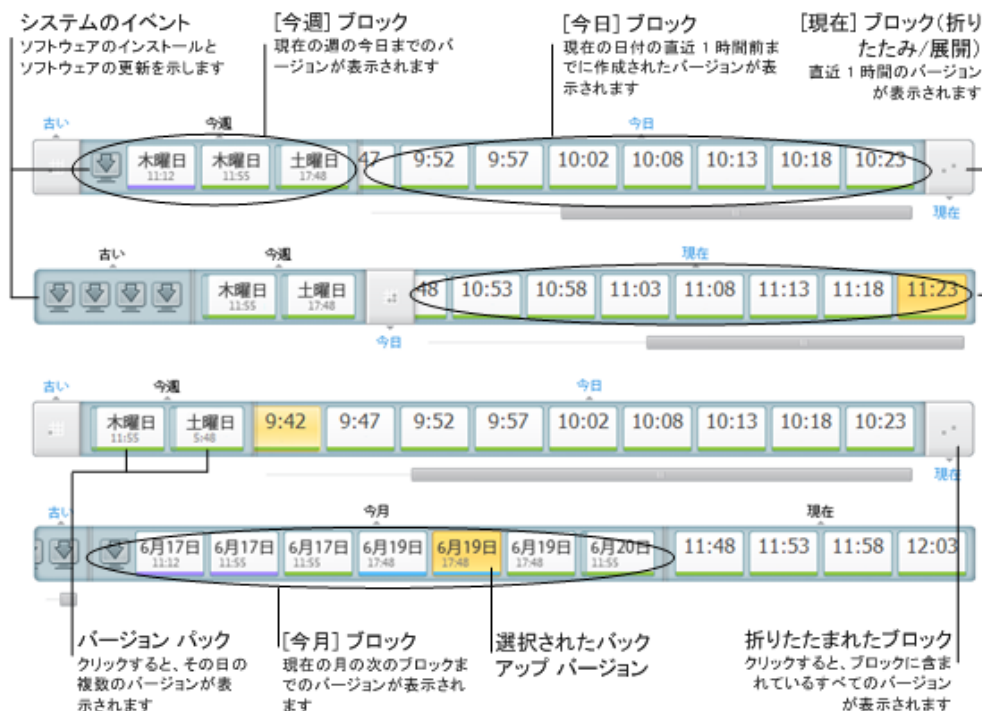
右側の領域にあるファイルをダブルクリックすると、そのファイルが一時フォルダにリカバリされます。リカバリされたファイルは、Windows エクスプローラなど、関連付けられたアプリケーションを使用して開くことができます。

タイム ライン

通常、Acronis Backup Explorer の画面下部にあるタイム ラインには、選択したバックアップに保存されているバックアップ バージョンに関する情報が表示されます。タイム ラインを利用すれば、各バックアップ バージョンを簡単に参照でき、データを特定の日時における状態にリカバリできます。

バックアップ バージョンを示す四角形の下部には、色付きのストライプが表示されます。ストライプの色は、バックアップの種類によって異なります(ディスクのバックアップ: 紫色、ファイルのバックアップ: 青緑色、ノンストップ バックアップ: 緑色、その他のバックアップ(以前のバージョンの Acronis True Image Home で作成したバックアップなど): 茶色)。

次の図には、タイム ラインの各状態が示されています。タイム ラインの状態は、バックアップの数と、参照する時間間隔によって変化します。



時間間隔 [現在] には、直近 1 時間の間に作成されたバックアップ バージョンが表示されます。ノンストップ バックアップを使用している場合は、バックアップ バージョンが 5 分間隔で作成されることがあります。

時間間隔 [今日] には、現在の日付の開始から直近 1 時間までに作成されたバックアップ バージョンが表示されます。

時間間隔「週」の表示は [1 週間前] または [今週] のどちらかになります。

現在の日付が月曜日、火曜日、または水曜日の場合、時間間隔「週」の表示は、[1 週間前] となります。その場合、タイム ラインには、前の週に作成されたバックアップ バージョンと、現在の週の頭から今日の始まりまでに作成されたバックアップ バージョンが表示されます。

現在の日付が木曜日、金曜日、土曜日、または日曜日の場合、時間間隔「週」の表示は、[今週] となります。その場合、タイム ラインには、現在の週の頭から今日の始まりまでに作成されたバックアップ バージョンが表示されます。

時間間隔「月」の表示は、[1 カ月前] または [今月] のどちらかになります。

現在の日付がその月の 1~15 日までの場合、時間間隔「月」の表示名は、[1 カ月前] となります。その場合、タイム ラインには、前の月に作成されたバックアップ バージョンと、現在の月の頭から時間間隔「週」までの間に作成されたバックアップ バージョンが表示されます。

現在の日付が月の 16~31 日までの場合、時間間隔「月」の表示は、[今月] となります。その場合、タイム ラインには、現在の月の頭から時間間隔「週」までの間に作成されたバックアップ バージョンが表示されます。

時間間隔 [今年] には、現在の年の頭から時間間隔「月」までの間に作成されたバックアップ バージョンが表示されます。

時間間隔 [古い] では、現在の年の頭より前に作成されたバックアップ バージョンが表示されません。

時間間隔とバックアップ バージョンの操作

時間間隔は、展開されている(バックアップ バージョンの数がタイム ラインに収まる場合)場合と、四角いブロックに折りたたまれている場合があります。時間間隔が展開されている場合、バックアップ バージョンを表す各四角の中に、警告アイコンまたはエラー アイコンが表示されていることがあります。このアイコンは、バージョンの作成中に警告またはエラーがログに書き込まれたことを示しています。

時間間隔「週」、「月」、「年」、または「過去」の間の、ある 1 日に、複数のバックアップ バージョンが作成された場合、そのような日付はバージョン パック アイコンによってタイム ライン上に表示されます。

折りたたまれたブロックにマウスを 0.5 秒以上のせると、時間間隔の開始点、終了点、およびその時間間隔の中に含まれるバックアップの数に関する情報が、バルーンに表示されます。

展開されたバックアップ バージョンにマウスを 0.5 以上のせると、バックアップ バージョンの詳細がバルーンに表示されます。

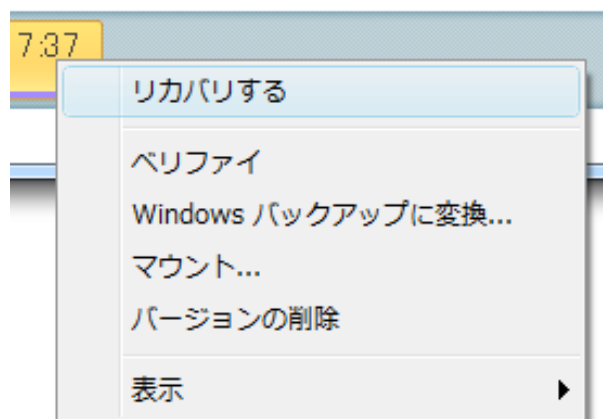
折りたたまれたブロック、またはタイム ラインの上または下に表示されているブロックの名前をクリックすると、対応する時間間隔が展開されます。時間間隔内のバックアップ バージョンの数が多すぎてタイム ラインに収まらない場合、水平スクロール行を使用して、その時間間隔内のバックアップ バージョンを参照できます。

別の折りたたまれたブロックを選択し、新たに展開したブロックの全バックアップ バージョンを表示する領域が足りない場合は、現在展開されているブロックが折りたたまれます。

バックアップ エクスプローラで、バックアップ バージョンをクリックして選択します。

ショートカット メニュー

タイム ラインを右クリックすると、ショートカット メニューが開きます。メニューの内容は、選択した項目によって変わります。



ディスク バックアップ バージョン

- リカバリする
- ベリファイ

- Windows バックアップに変換...
- マウント...
- バージョンの削除

ファイル バックアップ バージョン

- ベリファイ
- バージョンの削除

ノンストップ バックアップ バージョン:

- 参照とリカバリ
- バージョンの削除

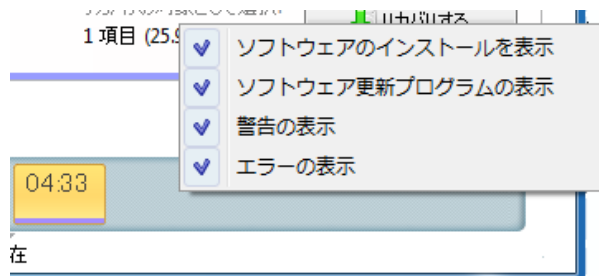
バックアップ バージョン パックとタイム ブロック

折りたたまれたバージョン パックまたは時間間隔内のブロックを右クリックすると、次の項目を 1 つ含んだショートカット メニューが開きます。

- 展開

タイム ラインに関する追加情報の表示

タイム ラインを設定して、追加情報を表示することも可能です。対応するコマンドは、**[表示]** サブメニューから実行できます。**[表示]** サブメニューを開くには、バックアップ バージョンを右クリックするか、タイム ラインの空き領域を右クリックします。



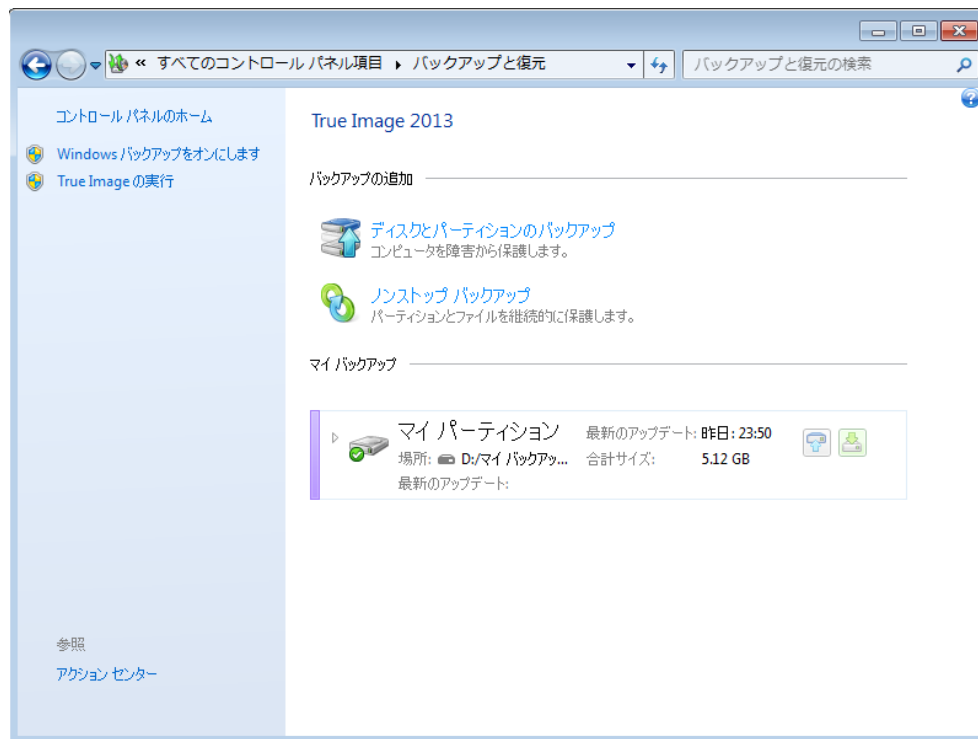
- **[ソフトウェアのインストールを表示]**- この項目を選択すると、タイム ライン上に、コンピュータに新しいプログラムがインストールされた時期を示すアイコンが表示されます。
- **[ソフトウェア更新プログラムの表示]** - この項目を選択すると、タイム ライン上に、Windows およびコンピュータにインストールされているプログラムのアップデート プログラムを示すアイコンが表示されます。
- **[警告の表示]** - この項目を選択すると、タイム ライン上に、停止したバックアップ バージョン、または警告メッセージを表示して完了したバックアップ バージョン(デフォルトで選択されています)がすべて表示されます。
- **[エラーの表示]** - この項目を選択すると、タイム ライン上に、失敗したバックアップ バージョンと、エラーが発生して終了したバックアップ バージョンが表示されます。

Windows との統合

True Image 2013 は、インストール時に Windows と緊密に統合できます。この統合により、コンピュータの能力を最大限に引き出すことができます。使いやすい新開発のインターフェイスにより、バックアップとリカバリを迅速に開始することができます。

統合により、True Image 2013 の項目が Windows の [スタート] メニューに追加され、タスクバー上の True Image 2013 ボタンのプロパティが変更され、Windows 7 の [コントロール パネル] を使用して True Image 2013 の操作を設定および実行できるようになります(デフォルトでは無効)。

特筆すべき点として、Windows 7 の [コントロール パネル] の [システムとセキュリティ] カテゴリの、[バックアップとリカバリ] 項目の [Windows バックアップ] が True Image 2013 によって置き換えられることが挙げられます。バックアップを実行せずに True Image 2013 をインストールすると、[バックアップと復元] ウィンドウでシステム パーティションのバックアップを作成することができます。

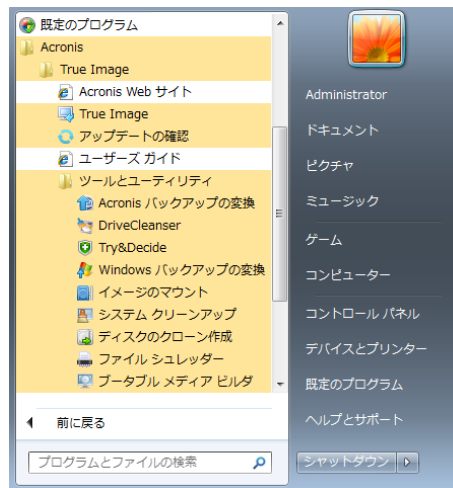


バックアップを作成すると、[バックアップと復元] ウィンドウに、ノンストップ バックアップのボックスと、最も古いディスクまたはパーティションのバックアップのボックスが表示されます。[コントロール パネル] から直接バックアップしたデータをリカバリしたり、バックアップをアップデートしたり、ノンストップ バックアップを一時停止/開始することができます。

Windows バックアップを使用するように設定を戻す場合は、左ペインの **[Windows バックアップをオンにします]** をクリックします。これにより、[コントロール パネル] の True Image 2013 が [Windows バックアップ] に置き換えられます。

後で、True Image 2013 を再び Windows 7 に統合すると決めた場合は、歯車アイコンをクリックして、**[True Image を Windows に統合する]** を選択します。

さらに、[スタート] メニューに以下の True Image 2013 の項目が追加されます。



これらのメニュー項目により、True Image 2013 を起動することなく、メイン プログラム機能、ツール、およびユーティリティを使用することができます。

Windows タスクバー上の True Image 2013 ボタンの操作性と機能も向上します。ショートカットメニューには項目が追加されます。

ショートカット メニューを使用して ノンストップ バックアップとオンライン バックアップを開始できます。

また、このボタンには、True Image 2013 の処理の進行状況と結果も表示されます。

統合の設定

Windows に統合する必要がある Acronis コンポーネントを選択できます。

- **[Windows コントロール パネル内の Acronis コンソール]**(Windows 7 ユーザーのみ利用可能)

Windows バックアップを Windows コントロール パネル内の Acronis コンソールに置き換えるには、この項目を選択します。この場合、True Image 2013 を実行せずにバックアップを管理できます。

- **[プロパティ] ウィンドウの [Acronis リカバリ] タブ**

[Acronis リカバリ] タブを **[プロパティ] ウィンドウ**に追加するには、この項目を選択します。ウィンドウを開くには、Windows エクスプローラで、必要なファイルまたはフォルダを右クリックし、**[プロパティ]** をクリックします。**[Acronis リカバリ] タブ**では、選択したファイルやフォルダのバージョンを表示しリカバリできます。

Acronis ノンストップ バックアップで保護されている、または標準バックアップに含まれているファイルまたはフォルダの名前を変更すると、名前を変更されたファイルやフォルダのバージョンは、**[Acronis リカバリ] タブ**に表示されなくなります。ある程度時間が経過すると、それらのバージョンが再び表示されるようになります。

- **ショートカット メニュー コマンド**

Windows エクスプローラで、ファイル、フォルダ、パーティションまたはディスクを右クリックすると、ショートカット メニューが開きます。このメニューには、Windows コマンドと共に、**[バックアップ]**、**[Acronis リカバリ]** など Acronis のコマンドが表示される場合があります。

ログイン メニュー

[ログイン] をクリックすると、Acronis のマイ アカウントにログインするためのウィンドウが表示されます。ログイン後には、[ログイン] 項目は、アカウントの電子メール アドレスに変わります。

マイ アカウントの電子メール アドレスをクリックすると、次の項目を含むメニューが表示されます。

- **[マイ アカウント]** - クリックすると、アカウント情報を表示および変更できる画面に移動します。
- **[Acronis Cloud]** - クリックすると、アクロニス ウェブサイトのマイ アカウント ページに移動します。
下の行に、Acronis Cloud の領域の使用率が表示されます。
- **[アカウントをアップグレード]** - クリックすると、有料サブスクリプションのアップグレード手順が開始されます。
- **[ログアウト]** - クリックすると、現在のアカウントからログアウトします。これは、複数のアカウントがあるときに便利です。

[設定] メニュー

[設定] メニューでは、True Image 2013 の設定を行ったり変更したりできます。メニューを開くには、プログラム画面の右上にある歯車アイコンをクリックします。[設定] メニューには次の項目があります。

- **[ログの表示]**: True Image 2013 で実行した処理のログを開きます。
- **[True Image を Windows に統合する...]**: Windows と統合する Acronis コンポーネントを選択できます。
- **[カスタム エクスペリエンス プログラム]**: Acronis カスタム エクスペリエンス プログラムに参加したり退会したりできます。プログラムの詳細については、開いたウィンドウで **[詳細]** リンクをクリックします。
- **[タイムアウトの設定]**: プログラムがユーザーの応答を待機する間隔を指定できます。詳細については、「タイムアウトの設定 (183ページ)」を参照してください。

[ヘルプ] メニュー

[ヘルプ] メニューを使用すると、ヘルプを開く、一定の操作を実行する、製品のビルド番号を参照する、などの操作を実行できます。このメニューを開くには、画面の右上隅の疑問符のアイコンをクリックします。[ヘルプ] メニューには、次の項目が表示されます。

- **[ヘルプ]** - ヘルプを開きます。
- **[システム レポートを生成する]** - クリックすると、Acronis システム レポートが生成されて Acronis のカスタム サポートに送信されます。
- **[カスタム サポート]** - Acronis のカスタム サポートのウェブ ページに移動します。
- **[アップデートの確認]** - クリックすると、True Image 2013 のアップデート ファイルがあるかどうかをチェックします (また、**[起動時にアップデートを自動確認]** チェック ボックスをオン/オフにすると、自動チェックを有効/無効にできます)。
- **[アクティブ化する]** - 製品をアクティブ化します。
- **[プロダクト キーを変更する]** - 製品のプロダクト キーを変更するときにクリックします。
- **[製品版にアップグレードする]**: 試用版の使用中に、製品版を購入するときにクリックします。
- **[Acronis のウェブサイト]** - Acronis のウェブサイトに移動します。
- **[True Image のバージョン情報]** - True Image 2013 に関する情報 (製品のプロダクト キーやビルド番号など) を表示します。

Acronis 修正プログラムのインストール

Acronis 修正プログラムとは

Acronis 修正プログラムとは、Acronis 製品の小規模なアップデートのことです。アプリケーションファイルやレジストリ キーはいくつか変更されますが、アプリケーションのバージョンは変化しません。修正プログラムは、True Image 2013 の特定のビルドにだけ適用され、それ以外のビルドには適用されません。

Acronis 修正プログラムは、Acronis ナレッジ ベースの記事(修正すべき問題を詳述したもの)を通じて配信されます。各記事へは SER からアクセスできます。Acronis ナレッジ ベースを検索して直接アクセスすることも可能です。

Acronis 修正プログラムをインストールする利点:

- 修正プログラムのインストールは、時間もリソースもそれほど多くは必要としません。製品の次回アップデートを待たずに、特定の問題が修正できます。
- 修正プログラムのパッケージは、製品のインストール パッケージに比べて相当小さいですが、一貫性を維持する手段として以前の修正プログラムも含んでいることがあります。
- 修正プログラムが複数ある場合は、必要なものだけをインストールできます。

前回のアップデートから次回アップデートまでの間にリリースされる修正プログラムによる変更はすべて、製品の新バージョン(アップデートまたはアップグレード)に反映されます。

Acronis 修正プログラムのインストール方法

新しい Acronis 修正プログラムの有無を確認するには、[ヘルプ] メニューの **[アップデートの確認]** をクリックします。現在のビルドに適用できる修正プログラムのリストが表に表示されますので、インストールする修正プログラムを選択します。Acronis 修正プログラムを選択すると、そのリリース ノート(製品に適用される変更および機能強化)が下に表示されます。

新しくリリースされるアップデートには、それ以前にリリースされた修正プログラムがすべて含まれています。そのため、True Image 2013 の新しいアップデートがある場合は、Acronis 修正プログラムは表示されません。

インストールする Acronis 修正プログラムを選択し、**[ダウンロードとインストール]** ボタンをクリックします。また、**[今後、選択していない修正プログラムについて通知しない]** オプションを選択した場合は、新しい修正プログラムが利用できるようになるまで、製品の起動時に修正プログラム ウィンドウは表示されなくなります。ただし、このオプションを選択した場合でも、**[ヘルプ] -> [アップデートの確認]** の順に選択して手動でアップデートの有無を確認すると、修正プログラム ウィンドウが表示されます。

選択した Acronis 修正プログラムがすべてインストールされてから **[閉じて True Image を実行]** ボタンをクリックすると、製品が起動されます。

2 さまざまな処理

本ユーザーズ ガイドの紙面は限られているため、特定のタスクの実行方法を参照することが難しい場合もあるでしょう。

このセクションでは、よく実行されるタスクの一覧と、本ユーザーズ ガイドの関連箇所を示します。

以下の処理についての説明を見る場合は、対応するページ番号(ヘルプを表示している場合はリンク)をクリックしてください。

- 障害からシステム全体を保護する (152ページ)
- コンピュータを起動できないときにシステムをリカバリする (88ページ)
- 写真、財務関連文書、音楽、ホーム ビデオなどをバックアップする (49ページ)
- 写真、財務関連文書、音楽などをリカバリする (105ページ)
- 毎日の作業を継続的に保護する (56ページ)
- 電子メールをバックアップする (53ページ)
- 電子メールをリカバリする (105ページ)
- 関係者や友人のコンピュータのフォルダと自身のフォルダの内容を同期する (129ページ)
- 2 つのローカル フォルダを同期する (128ページ)
- 他のユーザーとフォルダを共有する (136ページ)
- ファイルやフォルダへの公開リンクを作成する (137ページ)
- Acronis Cloud サービスに登録する (141ページ)
- Acronis Cloud にデータをバックアップする (142ページ)
- Acronis Cloud からデータをリカバリする (150ページ)
- ディスク ドライブのクローンを作成する (206ページ)
- バックアップを自動的に更新する([バックアップ スキーム] (68ページ) または [スケジュール設定] (175ページ))
- ブータブル レスキュー メディアを作成する (186ページ)
- ブータブル USB フラッシュ ドライブを作成する (191ページ)
- 必要なときにレスキューメディアを確実に使用する (156ページ)
- リスクを回避しながらシステムに対して変更を行う (168ページ)
- Acronis セキュア ゾーンを作成して使用する (200ページ)
- 古いバックアップを新しいハードウェアにリカバリする、またはシステムをあるコンピュータから別のコンピュータに移行する (108ページ)
- 新しいハードディスクを追加して、パーティションを設定する (214ページ)
- 自分のデータに他のユーザーがアクセスできないことを確認する (74ページ)
- リカバリする必要があるファイルが格納されたバックアップを検索する (178ページ)
- システムを SSD に移行する (162ページ)
- SSD パーティション アラインメントを確認する (165ページ)
- SSD パーティション アラインメントを修正する (165ページ)
- ドライバを含むカスタム WinPE 3.0 ISO を作成する (198ページ)

3 データのバックアップ

True Image 2013 は、IT の専門家をも満足させる洗練されたバックアップ機能を豊富に備えています。それらのバックアップ機能によって、ディスク(パーティション)、ファイル、および電子メールをバックアップできます。最適なバックアップ機能を 1 つ選んで使用することも、すべてのバックアップ機能を使用することも可能です。以降の各セクションでは、これらのバックアップ機能について詳しく説明します。

セクションの内容

ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い.....	43
完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ	44
パーティションとディスクのバックアップ.....	47
ファイルやフォルダのバックアップ	49
電子メールのバックアップ.....	53
Acronis ノンストップ バックアップの使用.....	54
バックアップの予備コピーの作成.....	62
バックアップを含むブータブル リムーバブル メディアの作成方法 ...	63
バックアップの保存先の分散.....	64
既存のバックアップをリストに追加する.....	65
バックアップとバックアップ バージョンの削除.....	66
バックアップ オプション	66
バックアップのベリファイ.....	85
バックアップ バージョンの統合	85
バックアップ設定のクローンの作成.....	87

3.1 ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージの違い

ファイルとフォルダをバックアップする場合、ファイルとフォルダ ツリーのみが圧縮されて保存されます。

ディスク/パーティションのバックアップは、ファイルとフォルダのバックアップとは異なります。True Image 2013 では、ディスクまたはパーティションのスナップショットがセクタ単位で保存されます。このスナップショットには、オペレーティング システム、レジストリ、ドライバ、ソフトウェア アプリケーション、データ ファイル、およびユーザーに対して非表示のシステム領域が含まれます。この処理を「ディスク イメージの作成」といい、作成されたバックアップは「ディスク/パーティション イメージ」といいます。

デフォルトでは、データを含むハード ディスク内のセクタのみが True Image 2013 によって保存されます。

また、True Image 2013 の場合、Windows XP 以降の pagefile.sys や hiberfil.sys(コンピュータが休止状態になる際に RAM の内容を保持するファイル)はバックアップされません。その結果、イメージ ファイルのサイズが小さくなり、イメージ ファイルの作成とリカバリに要する時間が短縮されます。

パーティション イメージには(隠しファイルとシステム ファイルを含む)すべてのファイルとフォルダ、ブート レコード、および FAT(ファイル アロケーション テーブル)が含まれます。また、ルート ディ

レクタリのファイルとマスター ブート レコード (MBR) のあるハードディスクのトラック 0 も含まれます。

ディスク イメージには、すべてのディスク パーティションのイメージと、MBR があるトラック 0 のイメージが含まれます。

3.2 完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ

True Image 2013 には次の 3 つのバックアップ方法が用意されています。

- 1) **完全**: バックアップ作成時点でのすべてのデータが含まれます。完全バックアップは、増分バックアップや差分バックアップの基になるデータとなります。スタンドアロンのバックアップとしても使用できます。
- 2) **増分**: 直前のバックアップの作成以降に変更されたファイルのみが含まれます。
- 3) **差分**: 直前の完全バックアップの作成以降に変更されたファイルのみが含まれます。

バックアップ方法の使用について、次の 3 つの方法のいずれかを選択することをお勧めします。

「**完全**」 - スタンドアロンの完全バックアップは、システムを最初の状態に戻すことが多い場合や、複数のバックアップ ファイルを管理することが望ましくない場合に最適なソリューションです。

「**増分**」 - 頻繁にバックアップする場合や特定の時点に戻したい場合に非常に役立ちます。最初に完全バックアップを作成し、その後は毎日、増分バックアップを作成する場合は、完全バックアップを毎日作成する場合と同じ結果を得ることができます。一般に、増分バックアップは完全バックアップや差分バックアップに比べてかなり小さくなります。

このバックアップ シナリオでは、週単位のシステムの完全バックアップと、直前のバックアップの作成以降に変更されたデータを対象とする日単位のバックアップとで構成されることがあります。

この場合、日単位のバックアップに必要なストレージ領域と時間は減少しますが、システム異常終了後のリカバリに必要なプログラムの作業は多くなります。たとえば、木曜日に異常終了が発生した場合、月曜日、火曜日、および水曜日の増分バックアップと直前の完全バックアップをリカバリする必要があります。

「**差分**」 - 前述の 2 つの方法の中間的な方法です。各差分バックアップには、直前の完全バックアップの作成以降に変更されたすべてのファイルが含まれます。「完全」よりもかかる時間と領域は少ないですが、「増分」よりは多くなります。利点は、「増分」よりもリカバリが簡単(直前の差分バックアップと直前の完全バックアップをリカバリすればよい)であるということです。

目的のバックアップ方法を選択するには、通常、カスタム バックアップ スキームを設定する必要があります。詳細については、「カスタム スキーム (70ページ)」を参照してください。

ディスクを最適化した後に、増分バックアップ、または差分バックアップを作成すると、通常に比べかなり大きなサイズになります。これは、ディスクの最適化プログラムによってディスク上のファイルの位置が変更され、バックアップにこれらの変更が反映されるためです。このため、ディスク最適化後に、完全バックアップを再度作成することをお勧めします。

増分バックアップを失ったり、破損したりすると、それ以降のすべての増分バックアップが使用できなくなります。

3.3 バックアップ ファイルの名付け

デフォルトでは、プログラムによって各タスク用にタスク名が付いた個別フォルダが作成され、そのタスクのすべてのバックアップがそのフォルダに保存されます（たとえば、D:\My Backups\System）。

バックアップ ファイル名には次の属性があります。

- タスクの名前
- バックアップの種類(full、inc、diff: 完全、増分、差分)
- バックアップ番号(該当する場合、b# 形式)
- スライス番号(該当する場合、s# 形式)
- ボリューム番号(該当する場合、v# 形式)
- マクロ(該当する場合。名前の一部(先頭または末尾など)が可能)
名前の一部が使用されない(バックアップに 1 つのボリュームしかない)場合、バックアップにボリュームがない場合など、この部分が追加されない場合は、"v" サフィックスはありません。
"b" および "s" サフィックスは常に存在します。

このように、バックアップ名は次のようになります(次の例の "24.05.2012" はオプションのマクロです)。

```
my_documents_full_b3_s1_v1.24.05.2012.tib  
my_documents_full_b3_s1_v2.24.05.2012.tib  
my_documents_full_b3_s1_v3.24.05.2012.tib  
my_documents_full_b3_s1_v4.24.05.2012.tib  
my_documents_inc_b3_s2_v1.26.05.2012.tib  
my_documents_inc_b3_s2_v2.26.05.2012.tib  
my_documents_inc_b3_s2_v3.26.05.2012.tib
```

バックアップ名に番号を使用することができますが、これは内部計算方式に影響は及ぼしません。バックアップ名に "full_b3_s5" を追加するなど、当社のネーミング方法を使用する場合、プログラムによって、名前の後に属性が追加され、次のようになります。

```
my_documents_full_b3_s1_full_b3_s1.tib
```

新たにバックアップを作成する場合に、すでに同じ名前のファイルが存在する場合、プログラムによって古いファイルは削除されず、新しいファイルに "-number" サフィックスが追加されて、my_documents_full_b3_s4-1.tib のようになります。

統合する場合は、統合されたバックアップをチェーンの最初にして、名前を変更し、その他のすべてのアーカイブの名前を変更するので、チェーンのネーミングが壊れることはありません。

たとえば、次のバックアップ ファイルがあるとします。

```
backup_full_b1_s1.tib  
backup_inc_b1_s2.tib  
backup_inc_b1_s3.tib
```

backup_inc_b1_s4.tib

backup_inc_b1_s5.tib

backup_inc_b1_s6.tib

そして、最初の 3 つのファイルを統合したいとします。生成されるバックアップは、完全バックアップで、チェーンの最初であるため、backup_full_b1_s1.tib という名前が付けられます。他のすべてのバックアップは、backup_inc_b1_s2.tib, backup_inc_b1_s3.tib, backup_inc_b1_s4.tib のように名前が付けられます。

チェーン全体を削除して、統合しないでチェーンをクリーンアップする場合、プログラムによって他のすべてのバックアップの名前は変更されず、バックアップ カウントが続行され、リセットされません。たとえば、以下をバックアップしていたとします。

backup_full_b1_s1.tib

backup_inc_b1_s2.tib

backup_inc_b1_s3.tib

backup_full_b2_s1.tib

backup_inc_b2_s2.tib

backup_inc_b2_s3.tib

最初のチェーン、b1 を削除することに決めました。その場合、以下のファイルが残ります。

backup_full_b2_s1.tib

backup_inc_b2_s2.tib

backup_inc_b2_s3.tib

バックアップを作成し続ける場合は、次のチェーンは以下のように名前が付けられます。

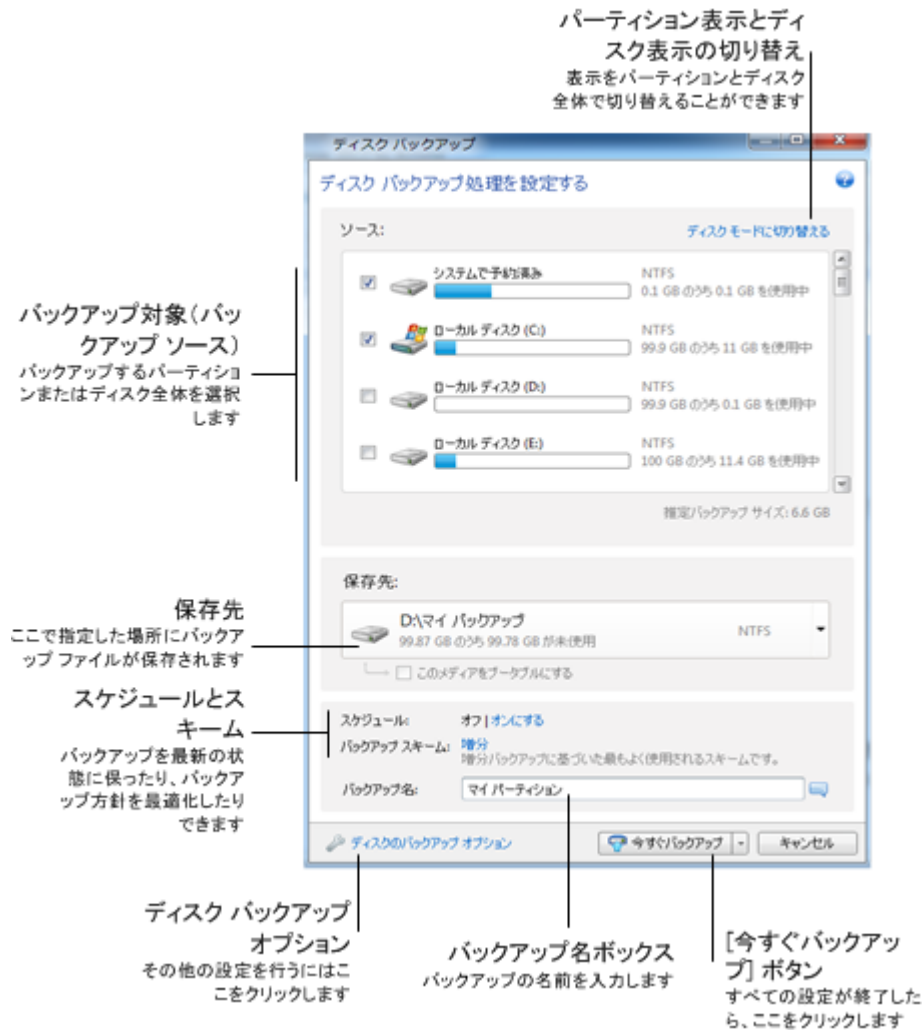
backup_full_b3_s1.tib

backup_inc_b3_s2.tib

backup_inc_b3_s3.tib

3.4 パーティションとディスクのバックアップ

[バックアップとリカバリ] タブの [ディスクとパーティションのバックアップ] をクリックします。これにより、[ディスク バックアップ] ウィンドウが開きます。



以降の各手順では、利用可能なイメージ バックアップ設定値の大部分を使用してバックアップを構成する方法について説明します。

1. バックアップするパーティションのチェックボックスをオンにします。複数のパーティションにバックアップする場合は、リストでバックアップに使用するパーティションすべてのチェックボックスをオンにします。ディスクにパーティションが複数存在しており、そのディスク全体をバックアップしたい場合は、右上隅の [ディスク モードに切り替える] をクリックし、ディスクのチェックボックスをオンにします。パーティション選択表示に戻すには、[パーティション モードに切り替える] をクリックします。
2. バックアップ先を選択します(デフォルトのバックアップ先でよければそのままにするか、現在のバックアップ先の右側にある下矢印をクリックして [参照...] を選択し、任意のバックアップ先を参照することが可能です)。

バックアップ先がリムーバブル メディア (USB スティック、BD、DVD など) である場合、[このメディアをブータブルにする] チェックボックスをオンにできるようになります。このチェックボックスをオンにすると、リムーバブル メディア上に起動可能なリカバリ環境が作成され、True Image

2013 のスタンドアロン版が追加されます。このリムーバブル メディアを使用して、ベアメタルシステムまたは異常終了したコンピュータから True Image 2013 を実行できるようになります。

システム パーティションのバックアップをダイナミック ディスクに保存することは避けるようにしてください。システム パーティションは Linux 環境でリカバリされるからです。Linux と Windows では、ダイナミック ディスクの動作が異なります。その結果、リカバリ中に問題が発生する可能性があります。

3. バックアップをスケジュールに基づいて実行する必要がある場合、**[スケジュール]** の右側にあるリンクをクリックして、スケジュール設定をオンにし、目的のスケジュールを設定します。詳細については、「スケジュール設定 (175ページ)」を参照してください。
4. 該当するリンクをクリックして、デフォルトのバックアップ スキームを変更することもできます。詳細については、「バックアップ スキーム (68ページ)」を参照してください。

DVD や BD などの光学メディアにバックアップする場合、バックアップ スキームを変更できません。この場合、True Image 2013 はデフォルトで完全バックアップのみのカスタム スキームを使用します。これは、プログラムが光学メディアに保存されたバックアップを統合できないためです。

5. 隠しファイルやフォルダ、システム ファイルやフォルダ、ユーザーが指定した条件と一致するファイルをバックアップから除外できます。詳細については、「バックアップからの項目の除外 (83ページ)」を参照してください。
6. バックアップに対して特定の名前を割り当てたい場合は、**[バックアップ名]** フィールドにデフォルト名とは異なる名前を入力します。

役に立つ情報をバックアップ名に追加することもできます。その場合は、保存先の右側にある下矢印をクリックして、**[参照...]** をクリックします。**[ファイル名]** の行の右側のフィールドに追加する項目を選択します。

- 日付を追加 - バックアップ作成日が追加されます。
- 時間を追加 - バックアップ作成時刻が追加されます。
- ユーザー名を追加 - 現在のユーザー名が追加されます。
- コンピュータ名を追加 - コンピュータ名が追加されます。
- タスク名を追加 - バックアップを含むタスクの名前が追加されます。
- タスク実行番号を追加 - タスク実行のシーケンス番号が追加されます。

7. 構成中のバックアップにオプションを設定するには、**[ディスク バックアップ オプション]** をクリックします。たとえば、データ ディスクに機密情報が含まれていて、この情報を暗号化する場合があります。バックアップの作成直後にベリファイすることを選択できますが、ベリファイは後で実行することもできます。詳細については、「バックアップ オプション (66ページ)」を参照してください。
8. 必要に応じてバックアップを設定する場合は、**[今すぐバックアップ]** ボタンをクリックして、即座にバックアップを実行できます。後で、あるいはスケジュールに基づいてバックアップを実行したい場合は、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウンリストで **[後で実行]** を選択すると、設定した内容を保存できます。

3.5 ファイルやフォルダのバックアップ

ファイルやフォルダをバックアップするには、[バックアップとリカバリ] タブで、[その他のバックアップ] をクリックし、[ファイルのバックアップ] を選択します。これにより、[ファイル バックアップ] ウィンドウが開きます。



このバックアップを使用してフォルダをバックアップしてみましょう。

1. **[バックアップの対象]** 領域内のディレクトリ ツリーでそのフォルダを選択します。右側には、フォルダの内容と、選択されたすべてのファイルおよびサブフォルダが表示されます。バックアップ不要のファイルがある場合は、ここでそのファイルの選択を解除します。
2. バックアップ先を選択します (デフォルトのバックアップ先のままにするか、現在のバックアップ先の右側にある下矢印をクリックして **[参照...]** を選択し、任意のバックアップ先を参照することが可能です)。
3. デフォルトでは、バックアップに対して、バックアップ対象のフォルダの名前が割り当てられますが、別の名前を割り当てたい場合は、**[バックアップ名]** フィールドに名前を入力します。

役に立つ情報をバックアップ名に追加することもできます。その場合は、保存先の右側にある下矢印をクリックして、**[参照...]** をクリックします。**[ファイル名]** の行の右側のフィールドに追加する項目を選択します。

- 日付を追加 - バックアップ作成日が追加されます。
- 時間を追加 - バックアップ作成時刻が追加されます。

- ユーザー名を追加 - 現在のユーザー名が追加されます。
 - コンピュータ名を追加 - コンピュータ名が追加されます。
 - タスク名を追加 - バックアップを含むタスクの名前が追加されます。
 - タスク実行番号を追加 - タスク実行のシーケンス番号が追加されます。
4. バックアップを即座に実行したい場合は、**[今すぐバックアップ]** ボタンをクリックします。バックアップの開始を最大 6 時間まで遅らせることも可能です。その場合は、このボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウン リストから遅らせる時間を選択します。

デフォルトのバックアップ オプションを変更する必要がある場合は、**[ファイル バックアップ オプション]** をクリックして、必要なオプションを設定します。

該当するリンクをクリックして、デフォルトのバックアップ スキームを変更することもできます。詳細については、「バックアップ スキーム (68ページ)」を参照してください。

DVD や BD などの光学メディアにバックアップする場合、バックアップ スキームを変更できません。この場合、True Image 2013 はデフォルトで完全バックアップのみのカスタム スキームを使用します。これは、プログラムが光学メディアに保存されたバックアップを統合できないためです。

スケジュールに基づいてバックアップを実行したい場合は、**[オンにする]** リンクをクリックして、スケジュールを設定します(詳細については、「スケジュール設定 (175ページ)」を参照してください)。スケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウン リストで **[後で実行]** を選択します。設定が行われたバックアップは、スケジュールに従って実行されます。後で、**[バックアップとリカバリ]** タブからバックアップを手動で開始することも可能です。

カテゴリごとにファイルをバックアップすることが可能です。詳細については、「データ カテゴリ (50ページ)」を参照してください。

隠しファイルやフォルダ、システム ファイルやフォルダ、ユーザーが指定した条件と一致するファイルをバックアップから除外できます。詳細については、「バックアップからの項目の除外 (83ページ)」を参照してください。

3.5.1 データ カテゴリ

カテゴリごとにファイルをバックアップすることが可能です。ファイル カテゴリ(複数可)を選択すると、コンピュータのハードディスク ドライブ上で発見された、関連する種類のすべてのファイルのバックアップが自動的に選択されます。選択できるデフォルトのカテゴリは、**[ビデオ]**、**[ミュージック]**、**[イメージ]**、**[ファイナンス]**、**[電子書籍]**、および **[ドキュメント]** です。また、ファイルやフォルダが含まれるカスタム カテゴリを追加することもできます。新しいカテゴリが保存され、上記のカテゴリと共に表示されます。カスタムやデフォルトのファイル カテゴリの内容は変更でき(カテゴリの編集)、カテゴリを削除することも可能です。デフォルトのファイル カテゴリは削除できません。

カスタム データ カテゴリを追加するには、**[カテゴリの追加]** をクリックします。カスタム カテゴリのデフォルト名を変更するには、その名前をダブルクリックして、新しい名前を入力します。**[参照...]** ボタンをクリックして、新しいカテゴリのデータ ソース(フォルダなど)を選択します。デフォルトでは、新しいカテゴリには、**[次のファイルの種類のみ]** が含まれますが、フィルタを適用して、バックアップするまたはバックアップしない特定のファイルの種類を選択することができます。



フィルタを設定するには、**[次のファイルの種類のみ]** または **[次のファイルの種類を除くすべてのデータ]** のいずれかを選択します。

選択したフィルタに対してファイルの種類を追加するには、適切なフィールドにその拡張子を 1 つずつ入力してから、**[追加]** をクリックします。

追加したファイルの種類は、ウィンドウの下部に表示されます。

3.5.2 zip 形式のサポート

tib 形式の代わりに zip 形式を使用すると、True Image 2013 を使用しなくても、任意の場所にあるバックアップからファイルを取り出すことができます。

たとえば、仕事場でファイルを USB スティックにバックアップし、True Image 2013 がインストールされていない自宅のノートパソコンで、バックアップされたファイルを取り出すことができます。これ

は、最も広範に利用されているオペレーティング システム (Microsoft Windows と Mac OS X) に zip ファイル形式のサポートが組み込まれているからです。

Windows に組み込まれている zip ファイルのサポートには、マルチボリュームの zip アーカイブの処理、サイズが 4 GB を超える zip バックアップ、4 GB を超えるファイルが含まれる zip バックアップは含まれないことにご注意ください。zip 形式のバックアップ ファイルのサイズが 4 GB を超えた場合、そのバックアップからファイルを取り出すには、True Image 2013 を使用する必要があります。

zip 形式は、ファイルやフォルダをバックアップする場合や、バックアップの予備コピーを作成する場合に使用できます。

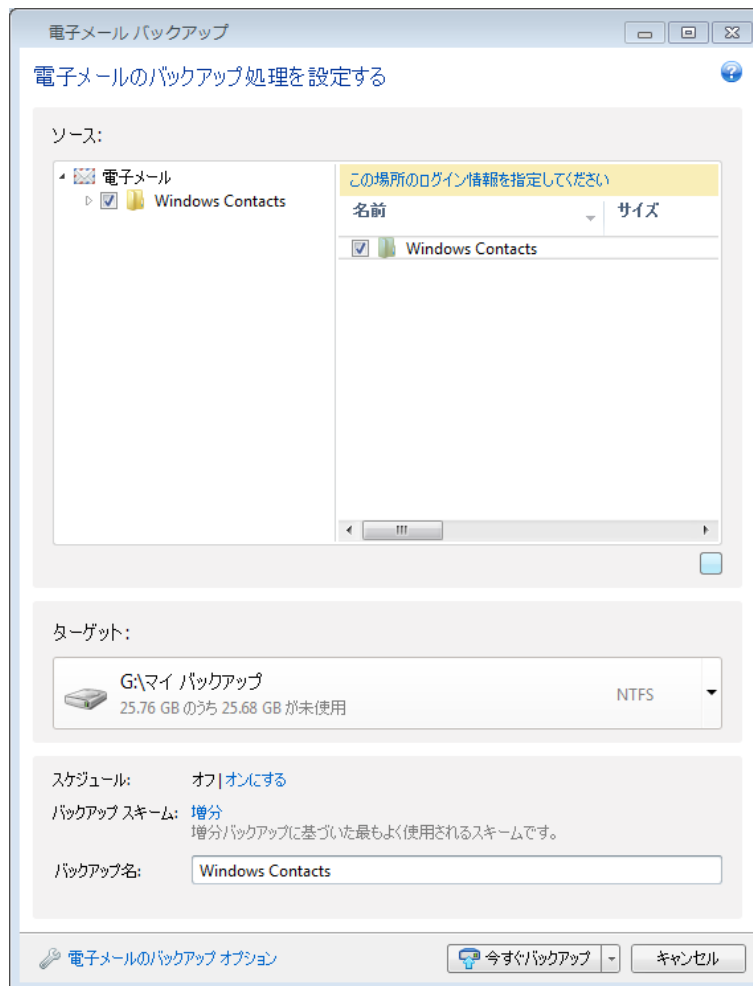
True Image 2013 では、tib 形式で利用可能なほとんどの機能を zip 形式でも利用できます。バックアップのスケジュール設定、zip 形式のバックアップのベリファイ、zip 形式のバックアップからのファイルやフォルダのリカバリ、増分バックアップや差分バックアップの作成などを行うことができます。

ただし、パスワード保護および暗号化は使用できません。

True Image 2013 でリカバリとベリファイを行うことができるのは、本ソフトウェアで作成した zip 形式のバックアップのみです。ファイル アーカイブ作成プログラムで作成された zip アーカイブの場合、True Image 2013 を使用してリカバリと検証を行うことはできません。

3.6 電子メールのバックアップ

True Image 2013 では、Microsoft Outlook 2003、2007、2010、Microsoft Outlook Express、Windows メール、Windows Live のメッセージ、アカウント、設定をバックアップすることができます。電子メール バックアップは、ファイル レベル バックアップの一部であり、バックアップ対象のフォルダがあらかじめ定義されているので、ユーザーによる選択操作は最小限です。ただし、必要であれば、Microsoft Outlook のコンポーネントやフォルダを個別に選択することもできます。



選択できる項目は次のとおりです。

- .PST/.DBX データベース ファイルに格納されているメッセージ
- 電子メール アカウント

Microsoft Office Outlook 2003、2007、2010 の場合

- メール フォルダ
- 予定表
- 連絡先
- 仕事
- メモ
- 署名
- ニュース フォルダ

- ユーザー設定
- アドレス帳

Microsoft Outlook Express の場合

- メール フォルダ
- アドレス帳([Windows アドレス帳] を選択)

True Image 2013 では、Microsoft Outlook の IMAP(インターネット メッセージ アクセス プロトコル)メール フォルダのバックアップも可能です。つまり、メール サーバー上に保存されているフォルダをバックアップすることができます。Microsoft Outlook Express および Windows メールの場合は、ローカルの電子メール フォルダのバックアップのみが可能です。

True Image 2013 では、バックアップの種類として **[電子メールのバックアップ]** を選択したときにバックアップされる項目の中の Unicode 文字はサポートされないことに注意してください。

電子メールをバックアップする手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、**[その他のバックアップ]** をクリックし、**[電子メールのバックアップ]** を選択します。**[電子メール バックアップ]** ウィンドウが開きます。
2. **[バックアップの対象]** 領域で、バックアップしたいメール項目を選択します。右側に、項目の内容と選択されたすべての副項目が表示されます。バックアップ不要の副項目がある場合は、ここでその副項目の選択を解除します。
3. バックアップ先を選択します(デフォルトのバックアップ先のままにするか、現在のバックアップ先の右側にある下矢印をクリックして **[参照...]** を選択し、任意のバックアップ先を参照することが可能です)。
4. バックアップに対してデフォルトの名前が割り当てられますが、別の名前を割り当てたい場合は、**[バックアップ名]** フィールドに名前を入力します。
5. バックアップを即座に実行したい場合は、**[今すぐバックアップ]** ボタンをクリックします。バックアップの開始を最大 6 時間まで遅らせることも可能です。その場合は、このボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウン リストから遅らせる時間を選択します。

Windows のアカウント名とパスワードを指定する必要があります。これは、機密性を確保するためです。詳細については、「Windows アカウント (81ページ)」を参照してください。

デフォルトのバックアップ オプションを変更する必要がある場合は、**[電子メール バックアップ オプション]** をクリックして、必要に応じてオプションを設定します。該当するリンクをクリックして、デフォルトのバックアップ スキームを変更することもできます。詳細については、「バックアップ スキーム (68ページ)」を参照してください。

スケジュールに基づいてバックアップを実行したい場合は、**[オンにする]** リンクをクリックして、スケジュールを設定します(詳細については、「スケジュール設定 (175ページ)」を参照してください)。スケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウン リストで **[後で実行]** を選択します。設定を行ったバックアップは、スケジュールに従って実行されます。後で、**[バックアップとリカバリ]** タブからバックアップを手動で開始することも可能です。

3.7 Acronis ノンストップ バックアップの使用

Acronis ノンストップ バックアップを利用すると、ディスクとファイルを簡単に保護することができます。ディスク全体や個々のファイル、別のバージョンをリカバリすることができます。

Acronis ノンストップ バックアップの主要な目的はデータ(ファイル、フォルダ、連絡先など)の継続的な保護ですが、パーティションの保護に使用することもできます。パーティション全体の保護を選択すると、イメージ リカバリ手順を使用して、パーティション全体をリカバリできるようになります。

外付けハード ドライブに保存されたデータの保護に Acronis ノンストップ バックアップを使用することはできません。

動作

Acronis ノンストップ バックアップを起動すると、保護対象として選択されているデータの、最初の完全バックアップが実行されます。Acronis ノンストップ バックアップは保護対象のファイル(開いているファイルを含む)の変更を 5 分ごとに保存します。そのため、システムを保存された時点とまったく同じ状態にリカバリできます。

通常、保護対象データの各状態は、24 時間 5 分間隔でバックアップされます。

それよりも古いバックアップは日単位で統合され、過去 30 日分が保持されます。また、週単位のバックアップは、ノンストップ バックアップ データの保存先に空きがある限り保持されます。

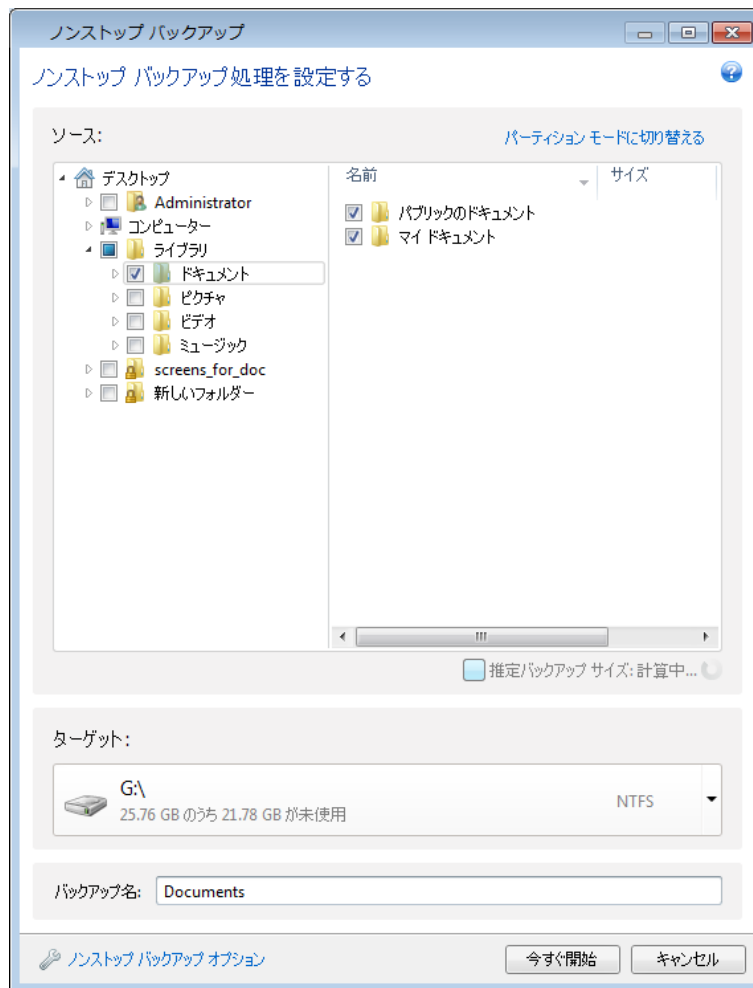
Acronis ノンストップ バックアップでシステム パーティション以外のパーティションを保護していて、前回のバックアップから 5 分間変更が行われなかった場合は、次のスケジュールされたバックアップはスキップされます。Acronis ノンストップ バックアップは、データが大幅に変更されるまで待機し、データが大幅に変更されたことを検出すると新しい増分バックアップを作成します。その場合、実際の間隔は 5 分間より長くなります。また、たとえば、1 時間ずっと「保存」の操作を行わずに Word で作業している場合は、Word ドキュメントの変更は 5 分ごとにはバックアップされません。True Image 2013 はディスク上のファイルの変更のみを確認し、メモリ内は確認しないためです。

統合は、深夜 0 時から午前 1 時の間に毎日実行されます。最初の統合は、ノンストップ バックアップを開始した後、少なくとも 24 時間経ってから実行されます。たとえば、ノンストップ バックアップを 7 月 12 日の午前 10 時にオンにしたと仮定します。この場合、最初の統合は、7 月 14 日の深夜 0 時から午前 1 時の間に実行されます。これ以降、データの統合は、毎日同じ時刻に実行されます。午前 00:00 から 01:00 の間にコンピュータの電源が入っていない場合は、コンピュータを起動したときに統合が開始されます。ノンストップ バックアップを一時的に無効にした場合は、次に有効したときに統合を開始します。

このバックアップ頻度ではストレージはすぐにいっぱいになると思われるかも知れません。しかし、True Image 2013 は「デルタ」と呼ばれるもののみをバックアップするため、その心配はありません。これは、変更があったファイルのファイル全体ではなく、古いバージョンと新しいバージョンの相違点のみがバックアップされることを意味します。たとえば、Microsoft Outlook または Windows メールを使用している場合、pst ファイルのサイズが非常に大きい場合があります。また、電子メールを受信または送信するたびにファイルの内容が変わります。変更があるたびに pst ファイル全体をバックアップすると保存領域を消費しすぎるため、True Image 2013 は最初にバックアップしたファイルに加えて、変更された部分のみをバックアップします。

3.7.1 データの継続的な保護

ノンストップ バックアップを使用してデータを保護する方法をみましょう。



データを継続的に保護する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで **[その他のバックアップ]** をクリックし、**[ノンストップ バックアップ]** を選択します。**[ノンストップ バックアップ]** ウィンドウが開きます。
2. **[バックアップの対象]** 領域内のディレクトリ ツリー上で、ノンストップ バックアップによって保護する項目を選択します。右側には、項目の内容と、選択されたすべてのファイルおよびサブフォルダが表示されます。ディレクトリ ツリーでは、保護する必要がないファイルの選択を解除することもできます。より多くの項目を保護する必要がある場合は、同じ方法でディレクトリ ツリー上の項目をさらに選択します。
3. ノンストップ バックアップの保存先を選択します(デフォルトのバックアップ先のままにするか、現在のバックアップ先をクリックした後で、任意のバックアップ先を参照することが可能です。ドロップダウン リストから、適切なバックアップ先を選択します)。ノンストップ バックアップ ストレージの選択および管理の詳細については、「Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージ (59ページ)」を参照してください。
4. ノンストップ バックアップに対してデフォルトの名前が付けられますが、別の名前を割り当てたい場合は、**[バックアップ名]** フィールドに名前を入力します。
5. 選択したデータの保護を直ちに開始するには、**[今すぐ開始]** ボタンをクリックします。

ノンストップ バックアップと Try&Decide を同時に有効にすることはできません。Try モードがオンの場合に **[今すぐ開始]** ボタンをクリックすると、Try モードでの作業中はノンストップ バックアップを開始できないことを示すメッセージが表示されます。ノンストップ バックアップを開始するには、現在の Try&Decide セッションを終了する必要があります。

ノンストップ バックアップの設定は、いつでも変更が可能です。この手順を実行するには、ノンストップ バックアップのボックスで歯車アイコンをクリックし、[処理] メニューで **[設定の編集]** を選択します。**[保存]** ボタンをクリックして編集済みのノンストップ バックアップの設定を保存すると、直ちにノンストップ バックアップが新しい設定での動作を開始します。ノンストップ バックアップの保存先を変更した場合、新しいノンストップ バックアップ ストレージ上に、保存対象のデータの新しい完全バックアップが作成されます。

また、ファイルやフォルダをノンストップ バックアップの保存対象にするには、Windows エクスプローラで選択し、選択されている項目を右クリックすると表示されるショートカット メニューで **[ノンストップ バックアップに含める]** を選択します。

3.7.2 システムの継続的な保護

Acronis ノンストップ バックアップを使用して、システム パーティション全体を保護することも可能です。保存領域が十分にあれば、Acronis ノンストップ バックアップは複数のパーティションの保護を同時に行うことができます。

システム パーティションを継続的に保護する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで **[その他のバックアップ]** をクリックし、**[ノンストップ バックアップ]** を選択します。**[ノンストップ バックアップ]** ウィンドウが開きます。



2. **[ノンストップ バックアップ]** ウィンドウの右上隅にある **[パーティション モードに切り替える]** をクリックします。ローカル ハード ディスク上に存在するパーティションが、**[バックアップの対象]** 領域に表示されます。該当するチェックボックスをオンにして、システム パーティションを選択します。
3. ノンストップ バックアップの保存先を選択します（デフォルトのバックアップ先のままにするか、現在のバックアップ先をクリックし、ドロップダウン リストから希望するバックアップ先を選択することができます）。
保護対象のパーティションを、ノンストップ バックアップ ストレージの保存先として選択することはできません。
4. ノンストップ バックアップに対してデフォルトの名前が付けられますが、別の名前を割り当てたい場合は、**[バックアップ名]** フィールドに名前を入力します。
5. 選択したパーティションの保護を直ちに開始するには、**[今すぐ開始]** ボタンをクリックします。

ノンストップ バックアップと Try&Decide を同時に有効にすることはできません。Try モードがオンの場合に **[今すぐ開始]** ボタンをクリックすると、Try モードでの作業中はノンストップ バックアップを開始できないことを示すメッセージが表示されます。ノンストップ バックアップを開始するには、Try&Decide セッションを終了する必要があります。

指定した基準と一致するファイルを保護対象から除外することができます。除外条件を追加するには、[**ノンストップ バックアップ オプション**] リンクをクリックします。条件の追加には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。詳細については、「バックアップからの項目の除外 (83ページ)」を参照してください。

3.7.3 Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージ

Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージは、ローカル ハード ディスク ドライブ(内蔵と外付けの両方)に作成できます。

多くの場合、ノンストップ バックアップのデータ ストレージには外付けのハードディスクを使用するのが最も良い方法です。(USB 3.0 を含む)USB、eSATA、FireWire、および SCSI のいずれかのインターフェイスを持つ外付けディスクを使用できます。

NAS をストレージとして使用することもできますが、SMB プロトコルを使用したアクセスが必須になるという制限があります。ストレージに使用する NAS 共有がローカル ディスクとしてマップされるかどうかは問われません。共有にログインが必要な場合は、正確なユーザー名とパスワードを指定する必要があります。詳細については、「認証設定 (156ページ)」を参照してください。True Image 2013 では認証情報が記憶され、共有に対するその後の接続ではログインは必要ありません。

外付けハードディスクまたは NAS を使用できない場合は、ノンストップ バックアップを内蔵ディスク(ダイナミック ディスクを含む)に保存することができます。保護されているパーティションは、ノンストップ バックアップのストレージとして使用することはできないので注意してください。コンピュータにハード ディスク ドライブが 1 つしかなく、その中にパーティションが 1 つしかない環境で Acronis ノンストップ バックアップを使用したい場合は、Acronis セキュア ゾーンを作成してこれをノンストップ バックアップのデータ ストレージとして使用できます。

True Image 2013 は、Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージを作成する前に、選択した保存先に十分な空き容量があるかどうか確認します。保護するデータ量に 1.2 が乗算され、この乗算の計算結果の値と使用可能な容量が比較されます。保存先の空き容量がこの条件を満たした場合に、そのロケーションをノンストップ バックアップ データの保存先として使用します。

Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージの管理

Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージの空き領域は、一定時間が経過すると必然的になくなります。この時間は、選択したノンストップ バックアップの保存先と、Acronis ノンストップ バックアップによって保護されるデータの量や構成により異なります。

ストレージの空き容量が 200 MB 以下になると、アラート メッセージが表示されます。この場合は、別の保存先を選択すれば、それまでにバックアップしたデータが失われることはありません。古いストレージにバックアップしたデータをリカバリできます。新しい保存先を選択すると、True Image 2013 によって、ノンストップ バックアップの保護対象として選択したデータの新しい完全バックアップが作成されるので注意してください。

Acronis ノンストップ バックアップのストレージを管理するもう 1 つの方法は、不要になったバックアップ バージョンを削除することです。ストレージをクリーンアップするには、ノンストップ バックアップ ボックスの歯車アイコンをクリックして [処理] メニューを開き、[クリーンアップ...] を選択します。期間を選択するためのウィンドウが表示されます。ここで指定した期間内に作成されたバックアップ バージョンが削除されます。期間を選択して [OK] をクリックします。

クリーンアップできるのは、アクティブな Acronis ノンストップ バックアップのストレージのみです。

ノンストップ バックアップのボックスの [処理] メニューで **[削除]** を選択し、Acronis ノンストップ バックアップのストレージを完全にクリーンアップすることもできます。アクティブなノンストップ バックアップのボックスを選択すると、削除によって Acronis ノンストップ バックアップの処理が停止します。

3.7.4 ノンストップ バックアップ - FAQ

Acronis ノンストップ バックアップが一時停止する理由は何ですか？ - これは、Acronis ノンストップ バックアップの設計による動作です。システムの負荷が重大レベルに達すると、Acronis ノンストップ バックアップは Windows から過負荷アラームを受信して自動的に一時停止します。これは、他のアプリケーションによる Windows の負荷を軽減する役割を果たします。過負荷は、多くのリソースを必要とするアプリケーションを実行することにより発生する場合があります（ウイルス対策ソフトウェアによるシステム完全スキャンの実行など）。

このような場合、ノンストップ バックアップは自動的に一時停止し、ユーザーが再起動することはできません。一時停止されると、1 時間後にシステムの負荷が軽減されてから再起動が試行されます。

Acronis ノンストップ バックアップの自動再起動は 6 回試行されます。つまり、最初の自動再起動の後、Acronis ノンストップ バックアップは、1 時間ごとに、5 回再起動を試行します。

試行が 6 回失敗したら、Acronis ノンストップ バックアップは次の設定日まで待機します。翌日、自動再起動の回数が自動的にリセットされます。中断されなければ、Acronis ノンストップ バックアップは 1 日に 6 回再起動を試行します。

再起動試行回数は、次のいずれかを実行することでリセットできます。

- Acronis ノンストップ バックアップ サービスの再起動
- コンピュータの再起動

Acronis ノンストップ バックアップ サービスを再起動しても、再起動の試行回数が 0 にリセットされるだけです。システムが依然として過負荷の状態にある場合、ノンストップ バックアップは再び一時停止になります。Acronis ノンストップ バックアップ サービスを再起動する手順については、Acronis サポート ナレッジ ベースの記事 (<http://forum.acronis.com/forum/14958>) で説明しています。

コンピュータを再起動すると、負荷および再起動回数リセットされます。システムが再度過負荷状態になると、Acronis ノンストップ バックアップは一時停止します。

Acronis ノンストップ バックアップを実行するときに CPU の負荷が高くなる場合があります。どうしてですか？ - これは、Acronis ノンストップ バックアップの設計による動作です。Acronis ノンストップ バックアップの一時停止中に、大量の保護対象データが変更された場合、一時停止から再起動するときに発生することがあります。

たとえば、システム パーティションを保護するために使用している Acronis ノンストップ バックアップを手動で一時停止してから新しいアプリケーションをインストールするとします。この場合、Acronis ノンストップ バックアップを再起動したとき、しばらく CPU に負荷がかかります。ただし、処理 (afcdpsrv.exe) は正常に戻ります。

これは、データが継続的に保護されていることを確認するために、Acronis ノンストップ バックアップが、バックアップされたデータを一時停止中に変更されたデータと比較してチェックする必要があります。変更されたデータが大量にある場合、処理にしばらく時間がかかり、CPU の負荷が高くなる場合があります。チェックが終了し、変更されたデータがすべてバックアップされた後、Acronis ノンストップ バックアップは正常に戻ります。

Acronis ノンストップ バックアップ ストレージは、ローカル ハード ディスクの FAT32 パーティションでも利用できますか？ - いいえ、ストレージに使用できるのは NTFS パーティションのみです。この制限は、Acronis ノンストップ バックアップが機能するため（自動統合を実行するためなど）にスパーズ ファイル属性が必要であることによります。スパーズ ファイル属性は、NTFS です。

Acronis ノンストップ バックアップ ストレージは、ネットワーク共有や NAS で設定できますか？ - はい、Acronis ノンストップ バックアップは、ネットワーク共有、マップされたドライブ、NAS、およびその他のネットワーク接続デバイスをサポートします。ただし、制限事項として、これらは SMB プロトコルを使用する必要があります。

Acronis ノンストップ バックアップ ストレージを手動でクリーンアップする方法を教えてください。 - 一定期間のバックアップ データを削除することにより、Acronis ノンストップ バックアップ ストレージをクリーンアップできます。たとえば、システム パーティションの Acronis ノンストップ バックアップを 2011 年 8 月 15 日に開始した場合、パーティションはその日から保護されています。今日が 2011 年 12 月 15 日で、Acronis ノンストップ バックアップ ストレージの容量がほぼいっぱいになっていると仮定します。ストレージ領域をいくらか解放するために不要なデータをクリーンアップします。このストレージをクリーンアップするには、ノンストップ バックアップのボックスで歯車アイコンをクリックして [処理] メニューを開き、[クリーンアップ...] を選択します。期間を選択するためのウィンドウが表示されます。ここで指定した期間内に作成されたバックアップ バージョンが削除されます。9 月 1 日から 12 月 1 日の期間にシステムに重要な変更は加えなかったとします。期間を選択して、[OK] をクリックします。プログラムは、選択された期間中に作成されたバックアップ バージョンをすべて削除し、一貫性を維持するために残りのバックアップ バージョンを統合します。では、どのデータを削除しどのデータを保持するか、いくつかのケースを検討してみます。最初に、システム ファイル、たとえば、notepad.exe などを考えてみましょう。このファイルは、8 月 15 日の最初の完全バックアップでバックアップされ、それ以来変更されていません。この場合、このファイルはクリーンアップ後にノンストップ バックアップに残ります。ここで、9 月 15 日にゲームをインストールしたと仮定します。何度かプレーした後で、10 月 5 日には、そのゲームをアンインストールしました。この場合、ゲームに関連する全ファイルは、ノンストップ バックアップから削除されます。例をもう 1 つ紹介します。11 月 16 日、Microsoft Word を使用して、修士論文を書き始めました。この場合、11 月 16 日から 12 月 1 日までにバックアップされた論文ファイルの全バージョンが削除され、12 月 2 日から当日までのバージョンのみが保持されます。上記をまとめると、選択された期間中に加えられたすべてのデータ変更が失われるということです。8 月 15 日の最初の完全バックアップ以来変更されていないすべてのファイル、および 9 月 1 日以前と 12 月 1 日以後に加えられたデータの変更は保持されます。

Acronis ノンストップ バックアップはどのように一時停止しますか？ - ノンストップ バックアップのボックスで歯車アイコンをクリックし、メニューで [停止] を選択することで、ノンストップ バックアップを停止できます。ノンストップ バックアップを再開するには、歯車アイコンを再びクリックして、メニューで [開始] を選択します。ノンストップ バックアップのボックスが展開されている場合、ボックス内にある該当のボタンをクリックする方法でも、ノンストップ バックアップの一時停止と再開を実行できます。

Acronis ノンストップ バックアップを停止し、削除するにはどうすればいいですか？ - Acronis ノンストップ バックアップを停止して削除するには、[バックアップとリカバリ] タブのノンストップ バッ

クアップ ボックスで歯車アイコンをクリックし、メニューで **[削除]** を選択します。この手順で、すべてのノンストップ バックアップ データが削除されます。

3.8 バックアップの予備コピーの作成

バックアップの予備コピーを作成して、ファイル システム、ネットワーク ドライブ、USB フラッシュドライブなどに保存できます。予備コピーは、メインのバックアップが破損したり、メイン バックアップのストレージに障害が発生したりしたときに、役に立ちます。

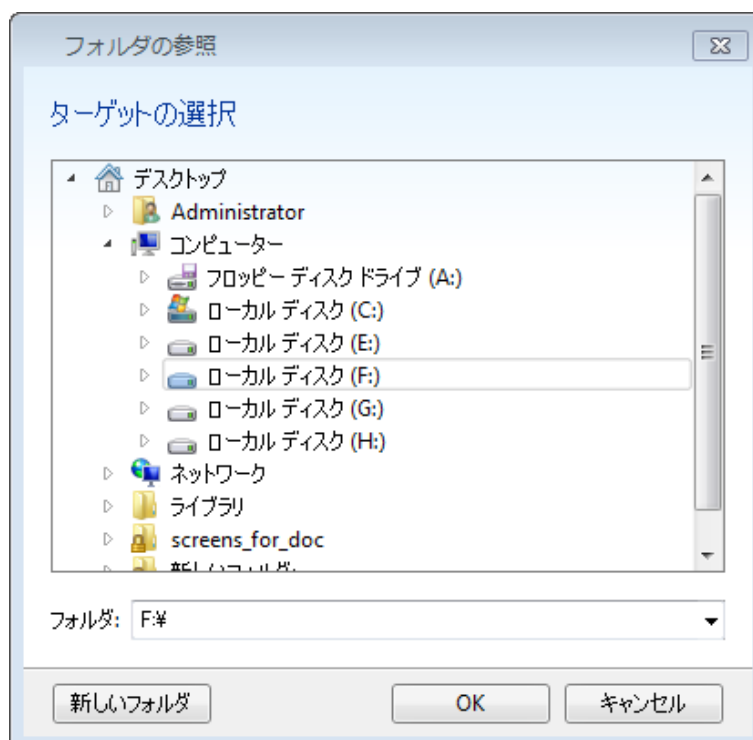
この機能を使用すると、複製することによりバックアップ データの安全が強化されるほか、たとえばドキュメント一式を USB スティックにコピーして自宅で作業したりすることも可能となります。つまり、通常のバックアップを実行して、同じファイルを USB スティックやローカル ハード ドライブにコピーすることができるようになりました。

予備コピーには、バックアップとして選択したすべてのファイルが常に含まれます。つまり、予備コピーを作成する場合は常にソース データの完全バックアップが作成されます。予備コピーは、増分または差分バックアップの形で作成することはできません。

また、通常のバックアップと予備コピーは同時にではなく順次実行されるため、その操作にはさらに時間がかかることとなります。その上、ストレージ領域に多くの容量が必要なため、ストレージ デバイスの追加が必要になる場合があります。

たとえば、いくつかのファイルの予備コピーを USB スティックに作成する手順は、次のようになります。

1. バックアップを設定する間に、**[ファイル バックアップ オプション]** のリンクをクリックし、**[バックアップの予備コピー]** の項目を展開して、**[バックアップの予備コピーを作成する]** ボックスをチェックします。**[フォルダの参照]** ウィンドウが開きます。
2. 目的の場所を選択して **[新しいフォルダ]** ボタンをクリックし、予備コピーのフォルダを作成します。



3. バックアップの設定を通常どおり最後まで実行します。
4. **[今すぐバックアップ]** をクリックします。

予備コピーの作成場所として CD/DVD を使用することはできませんのでご注意ください。

3.9 バックアップを含むブータブル リムーバブル メディアの作成方法

リムーバブル メディア上にディスクまたはパーティションのバックアップを構成するときに、そのメディアをブータブルにすることができます。True Image 2013 では、次のメディアをブータブルにすることができます。

- DVD/BD
- FAT32 でフォーマットされた USB フラッシュ ドライブ

バックアップが大きくない場合は、このオプションが有効なことがあります。たとえば、使用するディスクが 4 枚以上になる場合は DVD にバックアップしないことをお勧めします。バックアップで複数の DVD を使用する場合は、リカバリで多くのディスク入れ替えが必要になります。

メディアを使用する手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 を起動し、**[バックアップとリカバリ]** に移動して、**[ディスクとパーティションのバックアップ]** を選択します。
2. バックアップするパーティションまたはディスク全体を選択します。
3. バックアップ先としてリムーバブル メディア (DVD/BD/フラッシュ ドライブ) を選択します。
4. **[このメディアをブータブルにする]** チェックボックスをオンにします。

ターゲットとして内蔵または外付けのハード ディスクを選択した場合、このオプションは無効になります。



5. [今すぐバックアップ] をクリックします。

バックアップが 1 枚のディスク(DVD など)に収まらない場合、ファイルは複数のボリュームに分割されます。1 枚目のディスクはブータブルなディスクになります。

このバックアップを定期的に行う予定の場合は、[ディスク バックアップ オプション] で適切な設定を行います。「リムーバブル メディアの設定 (77ページ)」を参照してください。

バックアップ ファイルが含まれるブータブル メディアは、Windows で True Image 2013 を実行するときのみ作成できます。ブータブル環境では作成できません。

追加情報

True Image 2013 は、ブータブルにする適切なドライブとして USB フラッシュ ドライブを認識しないことがあります。このような場合、ドライブをブータブルにする準備を行います。「Acronis メディアビルダ用に USB フラッシュ ドライブを準備する方法 (199ページ)」を参照してください。

True Image 2013 で USB ハード ディスクをブータブルにすることはできませんが、サードパーティ ツールを試すことができます。たとえば、Acronis True Image Home フォーラム MVP の MudCrab が推奨する手順(http://www.themudcrab.com/acronis_grub4dos.php)を参照してください(英語)。

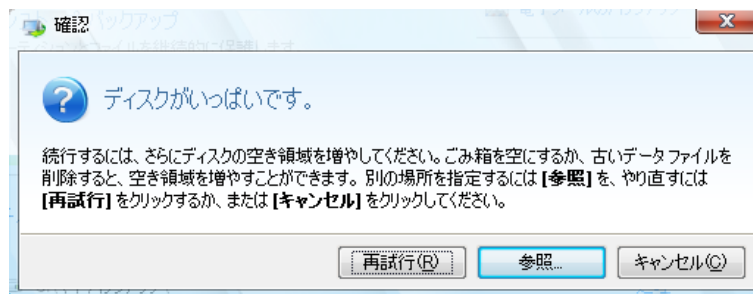
3.10 バックアップの保存先の分散

True Image 2013 では、バックアップの保存先を選択することができます。完全、増分、および差分のバックアップ バージョンをそれぞれ別のロケーション(ネットワーク共有、CD/DVD、USB スティック、ローカルの内蔵ハードディスクまたは外付けのハードディスク ドライブなど)に保存することもできます。

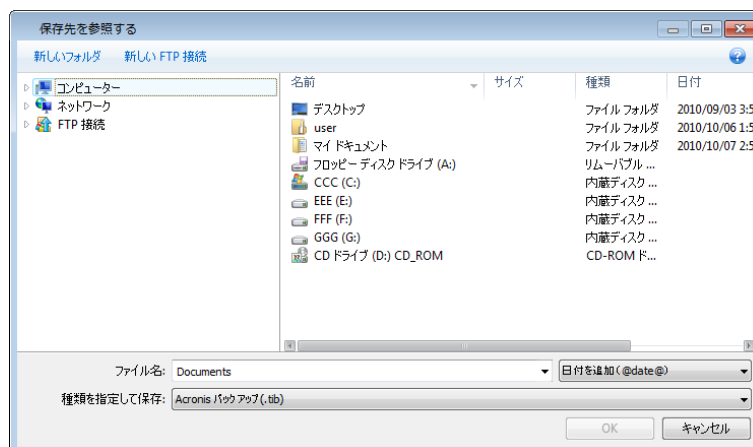
選択したバックアップの設定を編集するときにバックアップの保存先を変更して、バックアップ バージョンをそれぞれ別のロケーションに保存することができます。たとえば、最初の完全バックアップを外付けの USB ハード ドライブに保存した後に、バックアップの設定を編集して、バックアップの保存先を USB スティックに変更することができます。後続の増分または差分バックアップは、USB スティックに書き込まれます。

同じ「バックアップ チェーン」に属するバックアップ バージョンの一部だけを Acronis セキュア ゾーンに保存することはできません。Acronis セキュア ゾーンに保存されたバックアップ バージョンは、バックアップ自動統合時に自動的に削除されてしまう可能性があるためです。その結果、バックアップのつながりが壊れてしまいます。また、この機能は、FTP サーバーでは動作しません。

この機能の便利な点として、バックアップを「その場で」分割できることが挙げられます。たとえば、ハードディスクへのバックアップを実行しているときに、バックアップ先のハードディスクの空き領域が不足しているためバックアップを完了できないことが判明したとします。ディスクがいっぱいであることを警告するメッセージが表示されます。



バックアップを完了させるには、そのディスクの領域の一部を解放してから **【再試行】** をクリックするか、別の記憶装置を選択します。後者の場合は、確認ウィンドウの **【参照...】** をクリックします。**【保存先を参照する】** ウィンドウが表示されます。



左ペインには、このコンピュータから利用可能なストレージのロケーションが表示されます。適切なロケーションを選択した後に、残りのバックアップ対象データを保存するファイルの名前を指定します。名前は手動で入力することも(たとえば「tail_end.tib」など)、行の右にあるボタンをクリックして自動的に生成することもできます。その後で **【OK】** をクリックすると、True Image 2013 によるバックアップが最後まで実行されます。

同一の「バックアップ チェーン」に属するバックアップ バージョンが異なるロケーションに分散して保存されている場合は、データ リカバリ時に、過去のバックアップ バージョンのロケーションを指定するための画面が表示されることがあります。この画面は、選択されたバックアップ バージョンの中にリカバリ対象のファイルが含まれていない(または一部しか含まれていない)場合にのみ表示されます。また、この画面は、分割されたバックアップを即座にリカバリする場合にも表示されます。

3.11 既存のバックアップをリストに追加する

【バックアップとリカバリ】 タブのバックアップ リストに表示されないバックアップがある場合(たとえば、旧バージョンの Acronis True Image Home で作成されたバックアップ)、それらのバックアップをリストに追加できます。**【バックアップとリカバリ】** タブの **【バックアップの参照】** をクリックします。ウィンドウが開き、コンピュータ上に存在するバックアップを参照できます。

既存のバックアップをバックアップ リストに追加するには、バックアップを選択して、**[バックアップ リストに追加]** ボタンをクリックします。

3.12 バックアップとバックアップ バージョンの削除

不要になったバックアップやバックアップ バージョンは削除することができます。True Image 2013 は、バックアップに関する情報をメタデータ情報データベースに保存します。

このため、不要なバックアップ ファイルを Windows エクスプローラで削除しても、そのバックアップに関する情報はデータベースからは削除されず、True Image 2013 からはそれらがまだ存在しているものと見なされます。

その結果、既に存在していないバックアップに対してもプログラムが処理を実行しようとして、エラーが発生します。このため、必要のなくなったバックアップやバックアップ バージョンを削除するときは、必ず True Image 2013 のツールを使用してください。

バックアップ全体を削除する手順は、次のとおりです。

True Image 2013 の **[バックアップとリカバリ]** タブで、対応するバックアップ ボックスを見つけます。歯車アイコンをクリックして **[処理]** メニューを開き、**[削除]** をクリックします。

バックアップ全体を削除すると、すべてのバージョンも削除されます。

特定のバックアップ バージョンを削除する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、該当するバックアップ ボックスを参照して **[リカバリする]** ボタンをクリックするか、歯車アイコンをクリックして **[ファイルのリカバリ]** をクリックします(ディスク バックアップの場合)。
2. バックアップ エクスプローラのタイム ラインで、削除するバージョンを右クリックして、**[バージョンの削除]** をクリックします。

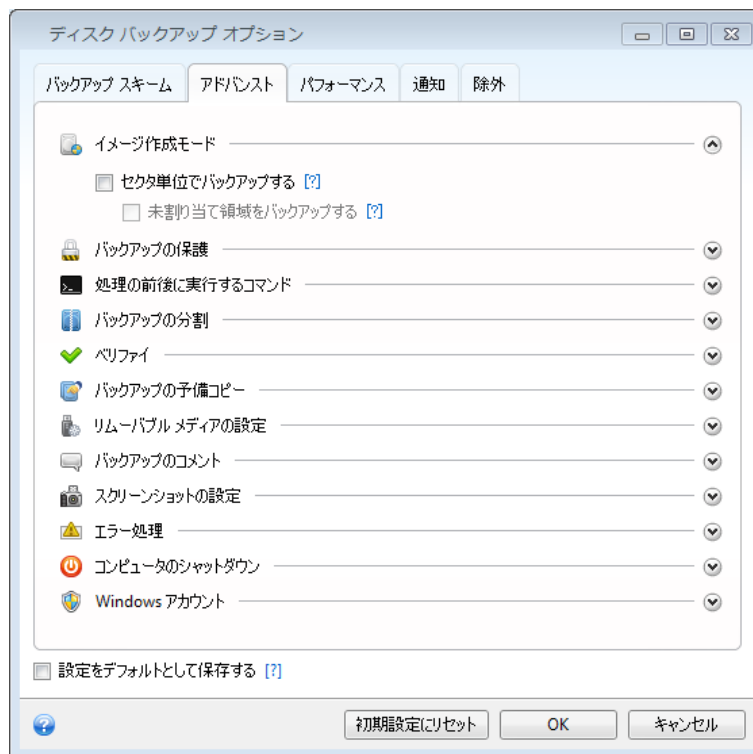
バックアップ バージョンを削除する場合は、削除するバージョンに依存するバージョンが存在する可能性があることに注意してください。この場合、依存するバージョンからのデータ リカバリは不可能になるため、依存するバージョンも削除されます。

- **完全バックアップ バージョンを削除した場合** - 次の完全バージョンまでの、後続のすべての増分バージョンと差分バージョンも削除されます。
- **増分バックアップ バージョンまたは差分バックアップ バージョンを削除した場合** - 次の完全バージョンまたは差分バージョンまでの、後続のすべての増分バージョンも削除されます。

3.13 バックアップ オプション

[ディスク バックアップ オプション]、**[ファイル バックアップ オプション]**、**[電子メールのバックアップ オプション]**、**[ノンストップ バックアップ オプション]**、および **[オンライン バックアップのオプション]** のウィンドウで、それぞれ、ディスクとパーティション、ファイル、電子メール、ノンストップ、およびオンラインのバックアップ処理のオプションを設定できます。オプションのウィンドウを開くには、該当するリンクをクリックします。

アプリケーションをインストールすると、すべてのオプションは初期値に設定されます。これらのオプションは、現在のバックアップ処理のためだけに変更することも、今後のすべてのバックアップ向けに変更することも可能です。**[設定をデフォルトとして保存する]** チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のバックアップ作業すべてにデフォルトで適用されます。



それぞれのバックアップのオプションは完全に独立しているため、これらは個別に設定する必要があります。ご注意ください。

製品の初回インストール後に変更したオプションをすべてリセットする場合は、**[初期設定にリセット]** ボタンをクリックします。

セクションの内容

バックアップ スキーム.....	68
単一バージョン スキーム.....	69
バージョン チェーン スキーム.....	69
カスタム スキーム.....	70
イメージ作成モード.....	74
バックアップの保護.....	74
バックアップ処理前後に実行するコマンド.....	75
バックアップの分割.....	76
バックアップのベリファイ オプション.....	76
バックアップの予備コピー.....	77
リムーバブル メディアの設定.....	77
バックアップのコメント.....	78
スクリーンショットの設定.....	79
エラー処理.....	79
コンピュータのシャットダウン.....	80
バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定.....	80

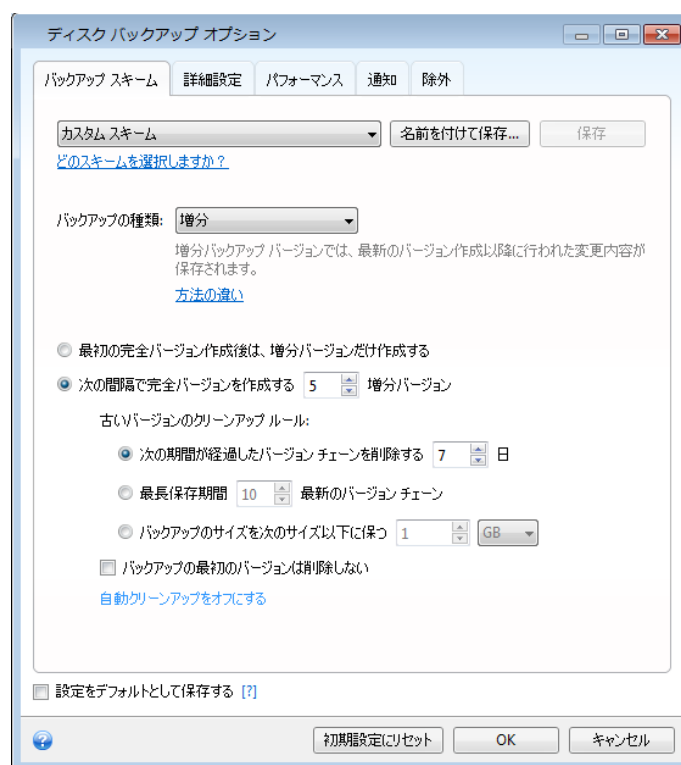
Windows アカウント.....	81
バックアップ処理のパフォーマンス.....	81
バックアップ処理の通知.....	82
バックアップからの項目の除外.....	83

3.13.1 バックアップ スキーム

バックアップ スキームとスケジューラを使用して、バックアップ戦略を設定できます。このスキームを使用することで、バックアップ ストレージ領域の使用を最適化し、データ ストレージの信頼性を向上させ、使用しなくなったバックアップ バージョンを自動的に削除することができます。

バックアップ スキームでは、以下のパラメータを定義します。

- バックアップ バージョン作成の際に使用するバックアップ方法(完全、差分、増分)
- 別の方法で作成したバックアップ バージョンのシーケンス
- バージョンのクリーンアップ ルール



True Image 2013 で選択可能なバックアップ スキームは次のとおりです。

- **単一バージョン (69ページ)** - 最小限のバックアップ ストレージを使用する場合にこのスキームを選択します。
- **バージョン チェーン (69ページ)** - 多くの場合に最適なスキームです。
- **増分** - 最初の完全バックアップの後で増分バックアップのみを作成する場合にこのスキームを選択します(デフォルトのスキームです)。
- **差分** - 最初の完全バックアップの後で差分バックアップのみを作成する場合にこのスキームを選択します。
- **[カスタム] (70ページ)** - バックアップ スキームを手動で設定する場合は、この項目を選択します。

3.13.2 単一バージョン スキーム

このバックアップ スキームは、ディスク バックアップとファイル バックアップで同じです(スケジューラ設定は除く)。

このスキームでは完全なバックアップ バージョンが作成されます。このバージョンは、指定したスケジュール時間や手動バックアップの実行時に上書きされます。

ディスク バックアップのバックアップ スケジューラ設定: 月単位。

ファイル バックアップのバックアップ スケジューラ設定: 日単位。

結果: 単一で最新の完全バックアップ バージョンが作成されます。

必要なストレージ領域: 最小。

3.13.3 バージョン チェーン スキーム

このバックアップ スキームは、ディスク バックアップとファイル バックアップで異なります。

ディスク バックアップのバージョン チェーン

最初に完全バックアップ バージョンが作成されます。このバージョンは、手動で削除されるまで保存されます。これ以降、指定のスケジュールに従って(または手動バックアップの実行時に)、1 つの完全バックアップ バージョンと、5 つの差分バックアップ バージョンが作成されます。続いて、同じく 1 つの完全バックアップ バージョンと、5 つの差分バックアップ バージョンが再作成され、これが繰り返されます。作成したバージョンは 6 カ月間保存されます。この期間が経過すると、(最初の完全バージョン以外の)最も古いバックアップ バージョンを削除してもよいかどうか分析されます。この結果は、バージョンの最小限の数(8)およびバージョン チェーンの一貫性によって変わります。同じバックアップ方法で新しいバージョンが作成されると、最も古いバージョンが 1 つずつ削除されます(たとえば最も古い差分バージョンは、最新の差分バージョンの作成後に削除されず)。まず最も古い差分バージョンが削除され、次に最も古い完全バージョンが削除されます。

バックアップ スケジューラ設定: 月単位。

結果: 直近の 6 カ月間のバックアップ バージョンが月単位で保持されます(最初の完全バックアップ バージョンを含む。このバージョンは、さらに長期間保管可能)。

必要なストレージ領域: バージョン数とそれらのサイズにより異なります。

ファイル バックアップのバージョン チェーン

指定のスケジュールに従って(または手動バックアップの実行時に)、1 つの完全バックアップ バージョンと、6 つの増分バックアップ バージョンが作成されます。続いて、同じく 1 つの完全バックアップ バージョンと、6 つの増分バックアップ バージョンが再作成され、これが繰り返されます。作成したバージョンは 1 カ月間保存されます。この期間が経過すると、最も古いバックアップ バージョンを削除してよいかどうか分析されます。この結果は、バージョン チェーンの一貫性によって変わります。一貫性を維持するために、新しい類似のバージョン チェーンの作成後に、最も古い 1 つの完全バックアップ バージョンと 6 つの増分バックアップ バージョンが、チェーンごとに削除されます。

バックアップ スケジューラ設定: 日単位。

結果: 直近の 1 ヶ月間の、毎日のバックアップ バージョンが保持されます。

必要なストレージ領域: バージョン数とそれらのサイズにより異なります。

3.13.4 カスタム スキーム

True Image 2013 を使用すると、独自のバックアップ スキームを作成できます。事前定義されたバックアップ スキームに基づいてスキームを作成することもできます。事前定義されたスキームを選択して自身の要件に合わせて変更し、その変更後のスキームを新しいものとして保存します。

既存の事前定義されたバックアップ スキームは、上書きできません。

また、完全バックアップ、差分バックアップ、または増分バックアップのバージョンを参考にして、カスタム スキームをゼロから作成することもできます。

したがって、まず該当のボックスでバックアップ方法を 1 つ選択してください。

- 完全 (44ページ)
完全バックアップ バージョンのみを作成する場合は、この方法を選択します。
- 差分 (44ページ)
完全バックアップ バージョンと差分バックアップ バージョンのみを含むバックアップ チェーンを作成する場合は、この方法を選択します。
以下のオプションのうちの 1 つを使用してスキームを設定できます。
 - **[最初の完全バージョン後は、差分バージョンだけ作成する]** - バックアップ バージョン チェーンを 1 つだけ作成する場合は、この項目を選択します。このオプションでは自動クリーンアップを使用できません。
 - **[次の間隔で完全バージョンを作成する:[n] 差分バージョン]** - 複数のバックアップ バージョン チェーンを作成する場合は、この項目を選択します。このバックアップ スキームは信頼性の高いものですが、役立つ情報が多くなります。
- 増分 (44ページ)
完全バックアップ バージョンと差分バックアップ バージョンのみを含むバックアップ チェーンを作成する場合は、この方法を選択します。
以下のオプションのうちの 1 つを使用してスキームを設定できます。
 - **[最初の完全バージョン後は、増分バージョンだけ作成する]** - バックアップ バージョン チェーンを 1 つだけ作成する場合は、この項目を選択します。このオプションでは自動クリーンアップを使用できません。
 - **[次の間隔で完全バージョンを作成する:[n] 増分バージョン]** - 複数のバックアップ バージョン チェーンを作成する場合は、この項目を選択します。このバックアップ スキームは信頼性の高いものですが、役立つ情報が多くなります。

自動クリーンアップのルール

使用しなくなったバックアップ バージョンを自動的に削除するには、以下のクリーンアップ ルールのうちの 1 つを設定します。

- **[次の期間が経過したバージョンを削除する [定義した期間]]**(完全バックアップの場合のみ使用可能)- バックアップ バージョンの保存期間を限定する場合は、このオプションを選択します。指定した期間を超過したバージョンは、すべて自動的に削除されます。

- **[次の期間が経過したバージョン チェーンを削除する [定義した期間]]**(増分バックアップと差分バックアップでのみ使用可能)- バックアップ バージョン チェーンの保存期間を限定する場合は、このオプションを選択します。最も古いバージョン チェーンは、削除後、最も古いバージョンの保存期間が指定した期間を超過した場合にのみ削除されます。
- **[最長保存期間[n]バージョン(新しい順)]**(完全バックアップの場合のみ使用可能) - バックアップ バージョンの最大数を制限する場合は、このオプションを選択します。バージョン数が指定値を超えると、最も古いバックアップ バージョンが自動的に削除されます。
- **[最長保存期間[n]最新のバージョンチェーン]**(増分バックアップと差分バックアップでのみ使用可能) - バックアップ バージョン チェーンの最大数を制限する場合は、このオプションを選択します。バージョン チェーン数が指定値を超えると、最も古いバックアップ バージョン チェーンが自動的に削除されます。
- **[バックアップのサイズを次のサイズ以下に保つ [定義したサイズ]]** - バックアップの最大サイズを制限する場合は、このオプションを選択します。新しいバックアップ バージョンが作成された後に、バックアップの合計サイズが、指定した値を超えているかどうかを確認されます。指定した値を超えている場合は、古いバックアップ バージョンが削除されます。

最初のバックアップ バージョンのオプション

バックアップの最初のバージョンは多くの場合、最も重要なバージョンの 1 つです。このバージョンには、初期のデータ状態(最近インストールした Windows のシステム パーティションなど)や、その他の安定したデータ状態(ウイルス チェック完了後のデータなど)が保存されるためです。

[バックアップの最初のバージョンは削除しない] - 初期のデータ状態を維持する場合は、このチェックボックスをオンにします。最初の完全バックアップ バージョンが 2 つ作成されます。最初のバージョンは自動クリーンアップから除外され、手動で削除するまで保存されます。

増分または差分バックアップを選択した場合、最初のバックアップ チェーンは 2 番目の完全バックアップ バージョンから開始されます。3 番目のバックアップ バージョンのみが増分または差分バックアップになります。

このチェックボックスをオンにすると、**[[n] つの最新バージョンだけ保存する]** チェックボックスが、**[1+[n] つの最新バージョンだけ保存する]** に変わります。

カスタム バックアップ スキームの管理

既存のバックアップ スキームに何らかの変更を加えた場合、変更したスキームを新しいものとして保存できます。その場合、そのバックアップ スキームに新しい名前を指定する必要があります。

- 既存のカスタム スキームを上書きすることもできます。
- 既存の事前定義されたバックアップ スキームは、上書きできません。
- スキーム名には、その OS でファイル名に使用できるすべての文字(記号)を使用できます。バックアップ スキーム名の最大長は、255 文字です。
- カスタム バックアップ スキームは、最高 16 個まで作成できます。

カスタム バックアップ スキームを作成した後は、バックアップを設定するときに他の既存のバックアップ スキームと同様に使用できます。

また、カスタム バックアップ スキームを保存しないで使用することもできます。その場合は、作成したときのバックアップでのみ使用され、他のバックアップには使用できません。

カスタム バックアップ スキームが必要なくなった場合は、削除できます。バックアップ スキームを削除するには、バックアップ スキームのリストで削除するスキームを選択し、**[削除]** をクリックして、確認ウィンドウで再度 **[削除]** をクリックします。

事前定義されたバックアップ スキームは、削除できません。

バージョンの自動統合

バックアップの自動統合は、バックアップ全体に制限を設定することにより有効になります。次のような制限項目があります。

- バックアップ バージョンの最大数
- バックアップ ファイルの最大保存期間
- バックアップの最大サイズ

自動バックアップ バージョン統合は、カスタム バックアップ バージョン スキームの増分バックアップと差分バックアップでのみ使用可能です。

デフォルトでは、制限は設定されておらず、自動統合も実行されません。自動統合を有効にするには、少なくとも 1 つの制限を選択し、制限値をデフォルト値のままにするか、または必要に応じて変更する必要があります。

制限が設定されると、バックアップ バージョン作成後に、あらかじめ設定されているバックアップ バージョンの最大サイズ (GB) を超えていないかなど、制限違反の有無が確認され、制限値を超えている場合は最も古いバックアップ バージョンが統合されます。たとえば、50 GB のバックアップ ファイルを保存するようにバックアップを設定した場合、バックアップ バージョンのデータ量が 55 GB に達したら制限違反となり、システムはユーザーが設定した規則に従って自動的に処理を行います。この処理により一時ファイルが作成されるため、ディスク領域が必要となります。また、制限に違反しなければ、プログラムは違反を検出できないという点に注意が必要です。そのため、バックアップに割り当てられた容量 (クォータ) とは別に多少のディスク領域が必要となります。余分に必要になる領域の大きさは、バックアップに含まれる最大のバックアップ バージョンのサイズと同じです。

バックアップ バージョンの数に制限を設定した場合、実際は、最大バージョン数を 1 つ超過することができます。これにより、プログラムが制限違反を検出し、統合を開始することができます。同様に、バックアップ バージョンの保存期間が 30 日間に設定されている場合、最も古いバックアップ バージョンの保存期間が 31 日になると統合が開始されます。

カスタム スキームの例

1. ファイル バックアップ: 日単位の増分バックアップと週単位の完全バックアップ

ケース: 毎日作業するファイルやフォルダがあります。毎日の作業をバックアップする必要があり、データの状態を過去 3 週間の任意の日にかかりできるようにすることを計画します。カスタム バックアップ スキームを使用して、これを実行する方法について説明します。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、**[その他のバックアップ]** をクリックし、**[ファイル バックアップ]** を選択します。
2. **[ファイル バックアップ]** ウィンドウで、バックアップするファイルまたはフォルダを選択し、バックアップの保存先を指定します。詳細については、「ファイルやフォルダのバックアップ」を参照してください。

3. **[スケジュール]** 項目の **[オンにする]** をクリックします。**[スケジューラ]** ウィンドウで、**[日単位]** をクリックして、バックアップ処理の開始時刻を指定します。たとえば、毎日の作業を午後 8 時に終了する場合、その時刻または少し後(午後 8 時 5 分)を開始時刻に指定します。
4. **[バックアップ スキーム]** 項目の横にある **[増分]**(デフォルトのバックアップ スキーム)をクリックします。
5. **[ファイル バックアップ オプション]** ウィンドウで、**[バックアップ スキーム]** タブが選択されていることを確認します。
6. **[増分スキーム]** ではなく、**[カスタム スキーム]** を選択します。
7. **[バックアップの方法]** ボックスで、ドロップ ダウン リストから **[増分]** を選択します。
8. **[次の間隔で完全バージョンを作成する作成する:[n] 増分バージョン]** をクリックして、「6」を入力するか、または選択します。
この場合、プログラムは最初に初回の完全バックアップ バージョンを作成し(バックアップ処理の設定方法にかかわらず、初回バックアップ バージョンは完全バックアップになります)、6 つの増分バージョンを日ごとに作成します。その後、1 つの完全バージョンと 6 つの増分バージョンを再度作成します。このように新しい完全バージョンはすべてちょうど 1 週間の期間で作成されます。
9. バージョンの保存期間を制限するには、**[自動クリーンアップをオンにする]** をクリックします。
10. **[次の期間が経過したバージョン チェーンを削除する [定義した期間]** をクリックして、「21」を入力するか、または選択して、**[OK]** をクリックします。
11. **[ファイル バックアップ]** ウィンドウで、すべての設定が正しいことを確認し、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。初回バックアップをスケジューラで指定した時刻にのみ実行するには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップ ダウン リストで **[後で実行]** を選択します。

2. ディスク バックアップ: 完全バージョン 2 カ月ごとと差分バックアップ月 2 回

ケース: システム パーティションを月 2 回バックアップし、新しい完全バックアップ バージョンを 2 カ月ごとに作成する必要があります。また、バックアップ バージョンの保存に使用するディスク領域は、100 GB 以下にします。カスタム バックアップ スキームを使用して、これを実行する方法について説明します。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、**[ディスクとパーティションのバックアップ]** をクリックします。
2. **[ディスク バックアップ]** ウィンドウで、システム パーティション(通常、C:)を選択し、バックアップの保存先を指定します。詳細については、「パーティションとディスクのバックアップ」を参照してください。
3. **[スケジュール]** 項目の **[オンにする]** をクリックします。**[スケジューラ]** ウィンドウで、**[月単位]** をクリックして、たとえば、毎月 1 日と 15 日を指定します。これにより、約 2 週間ごとにバックアップ バージョンが作成されます。次に、バックアップ処理の開始時刻を指定します。
4. **[バックアップ スキーム]** 項目の横にある **[増分]**(デフォルトのバックアップ スキーム)をクリックします。
5. **[ディスク バックアップ オプション]** ウィンドウで、**[バックアップ スキーム]** タブが選択されていることを確認します。
6. **[増分スキーム]** ではなく、**[カスタム スキーム]** を選択します。
7. **[バックアップの種類]** ボックスで、ドロップ ダウン リストから **[差分]** を選択します。
8. **[次の間隔で完全バージョンを作成する:[n] 差分バージョン]** をクリックして、「3」を入力するか、または選択します。

この場合、プログラムは最初に初回の完全バックアップ バージョンを作成し(バックアップ処理の設定方法にかかわらず、初回バックアップ バージョンは完全バックアップになります)、3 つの差分バージョンを約 2 週間ごとに作成します。そして再び 1 つの完全バージョンと 3 つの差分バージョンを作成します。このように新しい完全バージョンは 2 ヶ月ごとに作成されます。

9. バージョンの保存領域を制限するには、**[自動クリーンアップをオンにする]** をクリックします。
10. **[バックアップのサイズを次のサイズ以下に保つ [定義したサイズ]]** をクリックして、「100」、「GB」を入力するか、または選択して、**[OK]** をクリックします。

バックアップの合計サイズが 100 GB を超えた場合、True Image 2013 は既存のバックアップ バージョンをクリーンアップして、残りのバージョンがサイズ制限を満たすようにします。プログラムは、1 つの完全バックアップ バージョンと 3 つの差分バックアップ バージョンで構成される、最も古いバックアップ チェーンを削除します。

11. **[ディスク バックアップ]** ウィンドウで、すべての設定が正しいことを確認し、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。初回バックアップをスケジューラで指定した時刻にのみ実行するようになるには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップ ダウン リストで **[後で実行]** を選択します。

3.13.5 イメージ作成モード

これらのパラメータを使用して、データが含まれるセクタと、パーティションまたはハードディスク全体のコピーを作成できます。**[セクタ単位でバックアップする]** チェックボックスがオンになっている場合にのみ、**[未割り当て領域をバックアップする]** チェックボックスを選択できるので注意してください。

- セクタ単位のバックアップを行うには、**[セクタ単位でバックアップする]** パラメータをオンにします。デフォルトでは、データを含むハードディスク内のセクタのみがコピーされます。ただし、完全なセクタ単位のバックアップを作成する方が便利な場合もあります。たとえば、誤ってファイルを削除してしまい、そのファイルを復活させる前にディスク イメージを作成しておく場合などです。これは、削除したファイルを復活させることによって、ファイル システムに問題が発生する可能性があるためです。このモードでは、ハードディスクの使用されているセクタと未使用のセクタをコピーするため、処理時間が長くなり、通常は、作成されるイメージ ファイルが大きくなります。
- **[未割り当て領域をバックアップする]** オプションは、上記の **[セクタ単位でバックアップする]** パラメータをオンにすると、使用可能になります。デフォルトでは、セクタ単位のバックアップを実行する場合、未割り当ての領域はバックアップ ファイルに含められません。このオプションを有効にすると、ディスクのすべての未割り当ての領域がバックアップに含められます。

3.13.6 バックアップの保護

バックアップ ファイルをパスワードで保護することができます。デフォルトでは、バックアップはパスワードで保護されません。

バックアップを保護する手順は、次のとおりです。

- バックアップ用のパスワードを **[パスワードの入力]** フィールドに入力します。パスワードはできる限り想像しにくいものにするため、8 文字以上の、アルファベット(大文字と小文字の両方を使用することが望ましい)と数字を含むものにしてください。
- **[パスワードの確認]** フィールドに、先に入力したパスワードをもう一度入力します。

- 機密データの安全性を高めるため、業界標準の強力な AES (Advanced Encryption Standard) 暗号化アルゴリズムを使用してバックアップを暗号化することもできます。AES には、パフォーマンスと保護強度に応じて、キーの長さが 3 種類あり (128、192、256 ビット)、いずれかを選択できます。

ほとんどの場合は、暗号キーの長さは 128 ビットで十分です。キーが長いほど、データのセキュリティは向上します。ただし、192 ビットや 256 ビットの長さのキーを使用すると、バックアップ処理の速度が大幅に低下します。

AES 暗号を使用する場合は、以下のキーのいずれかを選択します。

- [AES 128]:** 128 ビット暗号キーを使用します。
- [AES 192]:** 192 ビット暗号キーを使用します。
- [AES 256]:** 256 ビット暗号キーを使用します。

バックアップを暗号化せず、パスワードによる保護のみを行う場合は、**[なし]** を選択します。

バックアップの保護設定を指定したら、**[OK]** をクリックします。

パスワード保護されたバックアップのパスワードは、バックアップの作成後に変更できないことに注意してください。

パスワード保護されたバックアップからデータをリカバリする場合は、特別なウィンドウが表示されてパスワードが要求され、権限を持つユーザーしかアクセスができません。

3.13.7 バックアップ処理前後に実行するコマンド

バックアップ処理の前後に自動的に実行するコマンド (またはバッチ ファイル) を指定することができます。

たとえば、バックアップを開始する前に特定の Windows プロセスを開始/停止することや、バックアップ対象のデータを調べることができます。

コマンド (バッチ ファイル) を指定する手順は、次のとおりです。

- バックアップ処理の開始前に実行するコマンドを **[処理前に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。
- バックアップ処理の終了後に実行するコマンドを **[処理後に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド (pause など) は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

バックアップ用ユーザー コマンドの編集

バックアップ処理の前または後に実行するユーザー コマンドを指定することができます。

- コマンドを **[コマンド]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。**[...]** をクリックすると、バッチ ファイルを選択できます。
- [作業ディレクトリ]** フィールドに、コマンド実行のためのパスを入力するか、入力済みのパスの一覧から選択します。

- コマンド実行引数を **[引数]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。

[コマンドの実行が完了するまで処理を行わない] パラメータを無効にすると(デフォルトでは有効)、コマンド実行と並行してバックアップ処理を実行できます。

[ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する] パラメータを有効にした場合は(デフォルトでは有効)、コマンド実行でエラーが発生すると処理が中止されます。

入力したコマンドをテストするには、**[コマンドのテスト]** ボタンをクリックします。

3.13.8 バックアップの分割

True Image 2013 では、既存のバックアップを分割することはできません。バックアップの分割は作成時のみ可能です。

サイズの大きいバックアップを、元のバックアップを構成するいくつかのファイルに分割することができます。また、リムーバブル メディアに書き込めるようにバックアップを分割することもできます。

デフォルトの設定は **[自動]** です。この設定を使用すると、True Image 2013 は次のように動作します。

ハードディスクにバックアップする場合:

- 選択したディスクに十分な空き領域があり、予想ファイル サイズがファイル システムの許容範囲内である場合は、1 つのバックアップ ファイルを作成します。
- ストレージディスクに十分な空き領域があっても、予想ファイル サイズがファイル システムの許容範囲を超える場合、プログラムは自動的にイメージを複数のファイルに分割します。
- ハードディスクに、イメージを保存するだけの十分な空き領域がない場合、プログラムは警告を表示し、問題への対処方法の入力を求めます。空き領域を増やして続行するか、別のディスクを選択することができます。

CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、および BD-R/RE にバックアップする場合:

- 前のディスクがいっぱいになると、True Image 2013 によって新しいディスクを挿入するように指示されます。

また、ドロップダウン リストからファイル サイズを選択することもできます。バックアップは、指定したサイズの複数のファイルに分割されます。後で CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、または BD-R/RE にバックアップを書き込む予定でハードディスクにバックアップする場合には、この機能が役立ちます。

CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、および BD-R/RE に直接イメージを作成すると、ハードディスクに作成するよりも大幅に時間がかかる場合があります。

3.13.9 バックアップのベリファイ オプション

[作成後にバックアップをベリファイする] で、追加の検証設定を指定できます。

このオプションを有効にすると、バックアップの直後に、最近作成または追加したバックアップ バージョンの整合性がチェックされます。重大なデータのバックアップ、またはディスク/パーティションのバックアップを設定するときには、バックアップを使用して消失したデータを確実にリカバリできるよう、このオプションを有効にすることをお勧めします。

標準ベリファイ

バックアップが正常な状態であることを確認するために、バックアップのベリファイをスケジュールすることも可能です。デフォルトでは、標準ベリファイは次の設定でオンになります。

- 間隔: 月 1 回
- 日付: バックアップが開始された日
- 時間: バックアップが開始された時間 + 15 分
- 詳細設定: [コンピュータのアイドル時にのみベリファイを実行] チェックボックスがオン

例: 7 月 15 日の 12:00 にバックアップ処理を開始するとします。バックアップ バージョンは、12:05 に作成されます。コンピュータが「スクリーン セーバー」の状態であれば、ベリファイは 12:15 に実行されます。そうでない場合、ベリファイは実行されません。1 カ月後、8 月 15 日の 12:15 に、ベリファイが再び開始されます。以前と同様、コンピュータは「スクリーン セーバー」の状態である必要があります。同様に、9 月 15 日にも同じことが行われます。

デフォルト設定を変更して、独自のスケジュールを指定することもできます。増分バックアップを使用したカスタム バックアップ スキームを設定してある場合に便利です。たとえば、すべてのバックアップ バージョン(最初の完全バックアップ バージョンおよびその後の増分バックアップ バージョン)の検証スケジュールを、週 1 回に設定する必要があるかもしれません。

詳細については、「スケジュール設定 (175ページ)」を参照してください。

3.13.10 バックアップの予備コピー

バックアップの予備コピーは、通常のバックアップの直後に作成された、独立した完全バックアップ バージョンで、同じデータが含まれています。バックアップの予備コピーは、ファイル システム、ネットワーク ドライブ、USB フラッシュ ドライブなどに保存できます。

予備コピーを作成する手順は、次のとおりです。

1. [バックアップの予備コピーを作成する] チェックボックスをオンにします。
2. バックアップ コピーの保存先を指定します。

予備コピーのすべてのオプション(バックアップの圧縮、バックアップの分割など)はソース バックアップから継承されます。

予備コピーには、バックアップとして選択したすべてのファイルが常に含められます。つまり、予備コピーを作成する場合は常にソース データの完全バックアップが作成されます。予備コピーは、増分または差分バックアップの形で作成することはできません。

また、通常のバックアップと予備コピーは、両方同時ではなくどちらか一方しか実行できないので、利便性とデータ セキュリティが向上するかわりに、バックアップにかかる時間が増えます。

予備コピーの作成場所として CD/DVD を使用することはできませんのでご注意ください。

3.13.11 リムーバブル メディアの設定

リムーバブル メディアにバックアップする際には、追加コンポーネントを書き込むことで、このメディアをブータブルにすることができます。このようにすると、別のブータブル ディスクが不要になります。

次の設定を使用できます。

- **True Image をメディアに配置する**

True Image: USB、PC カード(旧 PCMCIA)、SCSI、およびこれらの各インターフェイスを介して接続されるストレージ デバイスがサポートされます。したがって、このコンポーネントの追加を強くお勧めします。

- **Acronis システム レポートをメディアに配置する**

Acronis システム レポート: システム レポートが生成されます。このレポートは、プログラムの問題が発生したときに、システムに関する情報を集めるのに利用できます。レポート生成は、ブータブル メディアから True Image 2013 を起動する前でも実行可能です。生成されたシステム レポートは、USB フラッシュ ドライブに保存できます。

- **Acronis ワンクリック リストアをメディアに配置する**

Acronis ワンクリック リストアは、ブータブル メディアに追加される最小コンポーネントです。このコンポーネントを追加しておく、このメディアに保存されたイメージ バックアップからワンクリックでデータをリカバリできるようにになります。つまり、このメディアからコンピュータを起動して **[リカバリする]** を選択すると、自動的にすべてのデータが元のロケーションにリカバリされます。ただし、パーティションのサイズ変更などのオプションを選択することはできません。

Acronis ワンクリック リストアをメディアに追加できるのは、ハード ディスク全体の完全バックアップを作成するときだけです。増分または差分バックアップ、およびパーティションのバックアップの作成時には追加できません。これらのバックアップの作成時には、デフォルトのリムーバブル メディアの設定で **[Acronis ワンクリック リストアのメディアへの保存]** がオンになっていたとしても、このチェックボックスは現在のバックアップ オプションの **[一般]** タブには表示されません。

- **リムーバブル メディアにバックアップを作成する際に最初のメディアの挿入を求める**

リムーバブル メディアにバックアップする際に、**[最初のメディアを挿入]** というメッセージを表示するかどうかを選択できます。デフォルトの設定では、メッセージ ボックスの **[OK]** がクリックされるまでプログラムの実行が停止するので、ユーザーがその場にいなければリムーバブル メディアへのバックアップはできません。したがって、リムーバブル メディアへのバックアップをスケジュールする場合は、応答を要求するメッセージ表示を無効にする必要があります。こうしておく、リムーバブル メディアが利用可能(CD-R/RW が挿入されているなど)であれば、バックアップを無人で実行できます。

他の Acronis 製品がコンピュータにインストールされている場合は、それらのプログラムのコンポーネントのブータブル版も同様に利用できます。

フラッシュ ドライブが NTFS でフォーマットされている場合は、True Image 2013 ではブータブル メディアは作成できません。

3.13.12 バックアップのコメント

このオプションを使用すると、バックアップに対してコメントを追加できます。バックアップのコメントは、後で必要なバックアップを見つけるのに役立ちます。

バックアップにコメントがない場合、コメント領域にコメントを入力します。コメントが既に存在している場合は、**[編集]** をクリックするとそのコメントを編集できます。

デフォルトでは、コメントはバックアップのすべてのバージョンに割り当てられます。バックアップ エクスプローラで特定のバックアップ バージョンのコメントを編集できます。

3.13.13 スクリーンショットの設定

バックアップのコメントとともに、スクリーンショットは、リカバリする必要がある以前のデータの状態を認識するために役立ちます。 True Image 2013 では、ディスクまたはパーティションのバックアップ開始時にスクリーンショットを取得できます。 オプションを有効にするには、**[ディスク バックアップの開始時にスクリーンショットを取得する]** チェックボックスをオンにします。 スクリーンショットは、バックアップ エクスプローラの **[ディスクとパーティション]** タブに表示されます。 各スクリーンショットは、それぞれのディスク バックアップ バージョンに対応します。 このため、タイム ライン上でバックアップ バージョンを切り替えると、異なるスクリーンショットが表示され、必要なバックアップ バージョンをすばやく見つけることができます。

3.13.14 エラー処理

バックアップの実行中にエラーが発生した場合は、バックアップ処理が中止されてメッセージが表示され、エラーへの処理に関するユーザーからの応答を待つ状態になります。エラーへの処理方法を設定しておくことで、バックアップ処理は中止されず、エラーに関する警告メッセージが発行され、設定した規則に従ってエラーが対処されて、処理は継続されます。

以下のエラー処理方法を設定することができます。

- **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)]**(デフォルトでは無効): この設定を有効にすると、バックアップ処理中のエラーを無視することができます。この機能は、主に無人バックアップのために用意されたものです。無人バックアップの場合は、ユーザーがバックアップ プロセスを制御することはできません。このモードでは、バックアップ中にエラーが発生しても、通知は一切表示されません。その代わりに、バックアップ プロセスの終了後にすべての処理の詳細ログを表示できます。
- **[不良セクタを無視する]**(デフォルトでは無効): このオプションは、ディスクとパーティションのバックアップのみが対象です。このオプションを有効にすると、ハードディスク上に不良セクタがある場合でもバックアップを実行できます。ほとんどのディスクには不良セクタはありませんが、ハードディスクを使い続けるうちに、不良セクタの発生する可能性は高くなります。ハード ドライブから異音が聞こえる(たとえば、動作中にかなり大きなクリック音や摩擦音が発生する)場合は、ハードディスクが故障しかかっている可能性があります。ハード ドライブが完全に故障してしまうと、重要なデータが失われるおそれがあるため、できる限り早くドライブをバックアップする必要があります。しかし、故障しかかっているハード ドライブには既に不良セクタがあるかもしれません。**[不良セクタを無視する]** チェックボックスがオフの場合は、不良セクタで読み取りまたは書き込みエラーが検出されるとバックアップが中止されます。このチェックボックスをオンにすると、ハードディスク上に不良セクタが存在していてもバックアップは実行できるので、ハード ドライブから可能な限り最大の情報を保存することができます。
- **[Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いバックアップを削除する]**(デフォルトでは有効): この設定が無効になっており、作成するバックアップ ファイルのための十分な空き領域が Acronis セキュア ゾーンにない場合は、ゾーンに空き領域がないことを警告するダイアログが表示され、ユーザーの操作が必要になります。ユーザーが何らかの操作を行うまでバックアップは停止状態になるため、無人バックアップを行うことはできません。このメッセージは、**[処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)]** 設定が有効な場合にも表示されます。したがって、スケジュールに従った Acronis セキュア ゾーンへの無人バックアップを計画する場合は、**[Acronis セキュア ゾーンに十分な空き領域がない場合、最も古いバックアップを削除する]** チェックボックスをオンにしておくことをお勧めします。

- **[バックアップが失敗した場合は試行を繰り返す]:** このオプションを指定すると、何らかの理由でバックアップが失敗したときにバックアップが自動的に再試行されます。このオプションを設定するには、2 つの設定 (試行回数とその間隔) を指定します。この設定に従って、True Image 2013 は、バックアップが正常に作成されるまでデータのバックアップを試行します。ただし、そのバックアップが繰り返しエラーで中断される場合は、作成されません。

3.13.15 コンピュータのシャットダウン

設定するバックアップ処理に時間がかかることが分かっている場合は、**[バックアップの完了後に、コンピュータをシャットダウンする]** チェックボックスを選択することをお勧めします。これにより、処理が完了するまで待つ必要がなくなります。プログラムはバックアップを実行し、自動的にコンピュータの電源を切ります。

このオプションは、バックアップのスケジュールを設定する場合にも便利です。たとえば、すべての作業を保存するには、平日の夕方に毎日バックアップを実行できます。バックアップのスケジュールを設定して、チェックボックスをオンにします。この設定の場合、仕事が完了したら、そのままコンピュータから離れることができます。なぜなら、重要なデータがバックアップされ、コンピュータの電源が切られることがわかっているからです。

3.13.16 バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定

ファイルのバックアップに関するセキュリティ設定を指定することができます (これらの設定が関係するのはファイル/フォルダのバックアップだけです)。

- **[バックアップにファイルのセキュリティ設定を保持する]:** このオプションを選択すると、バックアップ ファイルのすべてのセキュリティ プロパティ (グループまたはユーザーに割り当てられる許可) が、将来のリカバリに備えて保存されます。

デフォルトでは、ファイルとフォルダは元の Windows セキュリティ設定 (ファイルの **[プロパティ]** -> **[セキュリティ]** で設定される、各ユーザーまたはユーザー グループに与えられる書き込み、読み取り、実行などの許可) と共にバックアップに保存されます。セキュリティで保護されたファイルまたはフォルダをコンピュータ上でリカバリしようとしているユーザーに、アクセス許可が与えられていない場合は、そのファイルの読み取りや変更ができなくなる可能性があります。

このような問題を回避するため、バックアップの際にファイルのセキュリティ設定を保存するのを無効にすることができます。このようにすれば、リカバリされたファイル/フォルダのアクセス許可は常に、リカバリ先のフォルダ (親フォルダ、ルートにリカバリされる場合は親ディスク) から継承されます。

または、ファイルのセキュリティ設定をリカバリ時に無効化できます。これは、ファイルのセキュリティ設定がバックアップに保存されている場合でも可能です。結果は同じになります。

- **[暗号化されたファイルを暗号化解除された状態でバックアップに格納する]** (デフォルト設定は **[無効]**): バックアップに暗号化ファイルが含まれており、リカバリ後にそのファイルをすべてのユーザーからアクセス可能にしたい場合は、このオプションをオンにします。オフにすると、ファイル/フォルダを暗号化したユーザーのみがそのファイル/フォルダを読むことができます。暗号化されたファイルを別のコンピュータにリカバリする場合にも、暗号化解除が役立つことがあります。

Windows XP 以降のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用しない場合は、このオプションは無視してください。ファイル/フォルダの暗号化を設定するには、**[プロパティ]** -> **[全般]** -> **[詳細設定]** -> **[内容を暗号化してデータをセキュリティで保護する]** の順に選択します。

これらのオプションは、ファイルやフォルダのバックアップのみに関係します。また、これらは zip バックアップには利用できません。

3.13.17 Windows アカウント

バックアップを作成するとき、そのバックアップを実行する Windows アカウントを指定できます。この機能は、コンピュータを自分だけではなく家族と共有している場合に便利です。通常、家族で共有している場合、各ユーザーは個人的なドキュメント、電子メール アカウント、設定、その他の個人的なデータを持っています。デフォルトの場合、True Image 2013 では現在のユーザーのデータがバックアップされます。現在使用している Windows アカウントが自分自身のアカウントではない場合、この設定を変更することをお勧めします。このプログラムでは、指定されたアカウントのデータのみがバックアップされます。その他のアカウントのデータはバックアップされません。

現在の Windows アカウントを変更する手順は、次のとおりです。

1. **【別の Windows ユーザーとしてバックアップを実行】** チェックボックスをオンにします。
2. アカウント名とパスワードを該当するフィールドに入力します。

3.13.18 バックアップ処理のパフォーマンス

[パフォーマンス] タブでは、以下の設定を行うことができます。

圧縮レベル

バックアップの圧縮レベルを選択することができます。

- **【なし】** - データが圧縮されずにコピーされるため、バックアップ ファイルのサイズは非常に大きくなります。
- **【標準】** - 推奨されるデータ圧縮レベルです(デフォルト設定)。
- **【高】** - バックアップ ファイルが高い圧縮レベルで圧縮されるため、バックアップの作成に要する時間が長くなります。
- **【最大】** - バックアップは最大圧縮レベルで圧縮されるため、バックアップの作成に要する時間が最も長くなります。

最適なデータ圧縮レベルは、バックアップに保存されるファイルの種類によって異なります。たとえば、.jpg、.pdf、.mp3 など、既に圧縮されたファイルを含むバックアップは、最大圧縮レベルで圧縮してもバックアップ サイズが大幅に縮小されることはありません。

処理の優先順位

バックアップ処理やリカバリ処理の優先度を変更すると、(優先度の上げ下げによって)バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、実行中の他のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあります。システムで実行中のどの処理に対しても、優先順位に応じて、その処理に割り当てられる CPU の使用時間とシステム リソースが決定されます。処理の優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。バックアップやリカバリの優先度を上げると、同時に実行している他の処理からリソースを取得するため、バックアップ処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

処理の優先度は、次のいずれかに設定することができます。

- **[低]**(デフォルトで有効) - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は低下しますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[標準]** - バックアップ処理やリカバリ処理に、他の処理と同じ優先度が割り当てられます。
- **[高]** - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は向上しますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、True Image 2013 による CPU 使用率が 100% になる場合があるので注意してください。

ネットワーク接続速度の上限

データをネットワーク ドライブまたは FTP に頻繁にバックアップする場合は、True Image 2013 が使用するネットワーク帯域を制限することもできます。

以下を選択することで、ネットワークのバックアップ データ転送速度を指定できます。

- **[転送速度の上限]** - バックアップ データの転送に使用する帯域制限を KB/秒単位で入力します。

3.13.19 バックアップ処理の通知

バックアップまたはリカバリの処理には 1 時間以上かかる場合があります。True Image 2013 では、この処理の終了時に電子メールの通知を受け取ることができます。また、処理中に発行されたメッセージや、処理完了後の詳細な処理ログも送信されます。

デフォルトでは、すべての通知は無効になっています。

空きディスク領域のしきい値

バックアップ ストレージの空き領域が指定したしきい値より少なくなったときに、通知を受け取ることができます。バックアップの開始後、選択したバックアップの場所の空き領域がその時点で既に指定値より少ないことが検出された場合、True Image 2013 では実際のバックアップ処理は開始されず、対応する通知メッセージが直ちに表示されます。メッセージには 3 つの選択肢が示されます。メッセージを無視してバックアップを続行するか、バックアップを保存する別の場所を参照するか、バックアップをキャンセルするかのいずれかを選択してください。

バックアップの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合も、同じメッセージが表示され、同様に選択する必要があります。

空きディスク領域のしきい値を設定する手順は、次のとおりです。

- **[ディスクの空き領域が不十分なときに通知メッセージを表示する]** チェックボックスをオンにします。
- **[サイズ]** ボックスでしきい値を入力または選択し、単位を選択します。

True Image 2013 では、次のストレージ デバイスの空き領域を監視できます。

- ローカル ハード ドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有(SMB/NFS)

[エラー処理] 設定で **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)]** チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

FTP サーバーと CD/DVD ドライブについては、このオプションを有効にすることはできません。

電子メール通知

バックアップ処理の通知に使用する電子メール アカウントを指定することができます。

電子メールによる通知を設定する手順は、次のとおりです。

- **[処理状態に関する電子メール通知を送信する]** チェックボックスを選択します。
- 電子メール アドレスを **[電子メール アドレス]** フィールドに入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
- 送信メール サーバー(SMTP)を **[送信メール サーバー(SMTP)]** フィールドに入力します。
- 送信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 25 に設定されます。
- **[ユーザー名]** フィールドにユーザー名を入力します。
- パスワードを **[パスワード]** フィールドに入力します。
- 設定が正しいかどうかをチェックするには、**[テスト メッセージの送信]** ボタンをクリックします。

その他の通知設定:

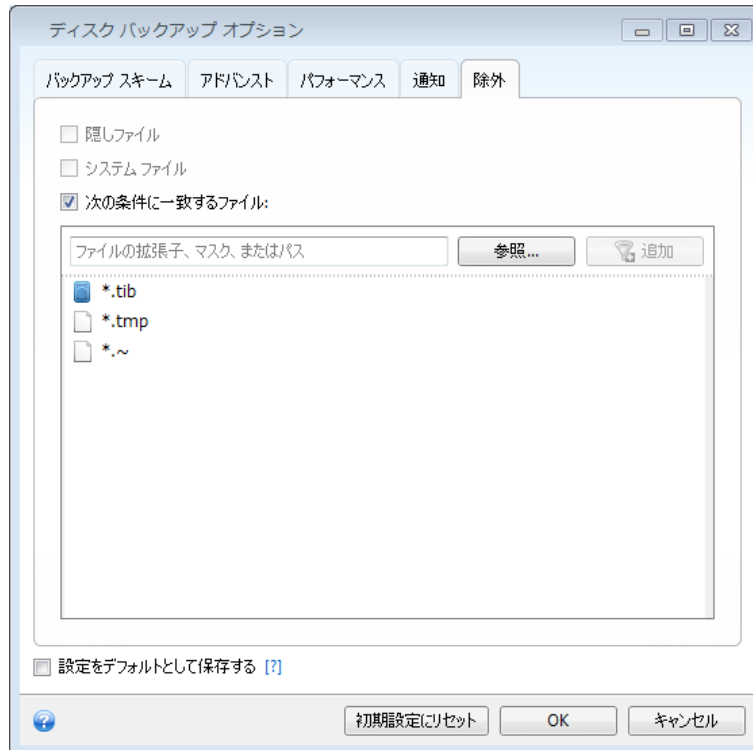
- 処理の完了に関する通知を送信するには、**[処理が正常に完了したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の失敗に関する通知を送信するには、**[処理が失敗したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理メッセージを添付して通知を送信するには、**[ユーザーの操作が必要な場合に通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の詳細なログを添付して通知を送信するには、**[完全なログを通知に含める]** チェックボックスをオンにします。

3.13.20 バックアップからの項目の除外

バックアップから不要なファイルを除外する場合は、バックアップ オプションの **[除外]** タブで該当するファイルの種類を指定します。**[ディスクとパーティションのバックアップ]**、**[ファイルのバックアップ]**、または **[オンライン バックアップ]** に対して、除外を指定できます。

デフォルトの除外設定を使用する方法

アプリケーションをインストールすると、すべての除外設定は初期値に設定されます。これらのオプションは、現在のバックアップ処理のためだけに変更することも、今後のすべてのバックアップ向けに変更することも可能です。**[設定をデフォルトとして保存する]** チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のバックアップ作業すべてにデフォルトで適用されます。製品のインストール後に変更した設定をすべて初期値にリセットする場合は、**[初期設定にリセット]** ボタンをクリックします。



除外の対象と方法を次に示します。

1. 対応するチェックボックスをチェックすることで、隠しファイルとシステム ファイルをバックアップから除外できます。

システム パーティションのバックアップから隠しファイルやシステム ファイルを除外することはお勧めできません。

2. 指定した条件と一致するファイルを除外することができます。この場合は、**[次の条件に一致するファイル]** チェックボックスをオンにし、除外条件を入力して **[追加]** をクリックします。

.~、.tmp、および .tib の拡張子を持つファイルは、デフォルトでバックアップから除外されます。

除外条件を追加する方法は、次のとおりです。

- バックアップから除外するファイル名を、次のように明示的に入力します。
 - file.ext - 該当するファイルはすべてバックアップから除外されます。
 - C:¥file.ext - C: ドライブにある file.ext ファイルが除外されます。
- 次のように、ワイルドカード文字(* および ?)を使用できます。
 - *.ext - .ext の拡張子を持つすべてのファイルが除外されます。

- `??name.ext` - 拡張子が `.ext` のファイルで、合計 6 文字(最初の 2 文字が任意の文字(??)で、残りの部分が `name`)のファイル名を持つすべてのファイルが除外されます。
- フォルダを除外する場合は、[参照...] をクリックし、ディレクトリ ツリーで除外するフォルダを選択して [OK] をクリックし、[追加] をクリックします。

たとえば誤って追加した条件を削除するには、その条件の右にある [削除] アイコンをクリックします。

3.14 バックアップのベリファイ

ベリファイ処理では特定のバックアップ バージョンからデータをリカバリできるか確認します。次のように、タイム ラインで選択したバックアップによってベリファイ対象が異なります。

- 完全バックアップ バージョン - 完全バックアップ バージョンのみがベリファイされます。
- 差分バックアップ バージョン - 最初の完全バックアップ バージョンと選択された差分バックアップ バージョンがベリファイされます。
- 増分バックアップ バージョン - 最初の完全バックアップ バージョン、選択された増分バックアップ バージョン、および選択された増分バックアップ バージョンまでのバックアップ バージョンのチェーン全体(ある場合)がベリファイされます。このチェーンに差分バックアップ バージョンが 1 つでも含まれている場合、(最初の完全バックアップ バージョンおよび選択した増分バックアップ バージョンに加えて)チェーン内の最新の差分バックアップ バージョンのみがベリファイされ、その差分バックアップ バージョンと選択した増分バックアップ バージョンの間に作成された増分バックアップ バージョンがあればそれらもすべてベリファイされます。

この情報は、たとえば、完全バックアップ バージョンおよび一連の増分バックアップで構成されるバックアップが、破損していることが分かった場合に役立ちます。バックアップのトラブルシューティングを行う手順は、次のとおりです。まず、完全バックアップ バージョンをベリファイします。ベリファイするには、タイム ラインで完全バックアップ バージョンを選択して、右クリックし、ショートカット メニューで [ベリファイ] を選択します。これが破損している場合は、バックアップ チェーン全体が使用できません。破損していない場合は、増分バックアップ バージョンを古いものから順に検証します。問題となっている増分バックアップ バージョンが見つかるまで続けます。破損している増分バックアップ バージョン以降の増分バックアップ バージョンはすべて使用できませんが、少なくともそれ以前のバックアップ バージョンからのデータのリカバリは可能です。

バックアップ全体をベリファイする手順は、次のとおりです。

1. ベリファイするバックアップを選択して、歯車アイコンをクリックします。[処理] メニューが開いたら、[ベリファイ] を選択します。選択したバックアップがパスワードで保護されている場合は、True Image 2013 によりパスワードの入力を求めるダイアログ ボックスが表示されます。
2. 正しいパスワードを入力すると、ベリファイ処理が開始されます。
3. ベリファイが完了すると、バックアップのボックスの下の行に結果が表示されます。[キャンセル] をクリックすると、ベリファイをキャンセルできます。

3.15 バックアップ バージョンの統合

バックアップ バージョンの統合を使用すると、選択したバックアップの削除と同時に、整合性のあるバックアップのコピーを作成できます。これにより、バックアップを破損することなく、任意のバックアップから不要になったバックアップ バージョンを削除できます。

統合では、削除されたバックアップ バージョンを含まない整合性のあるバックアップのコピーが作成されます。統合したバックアップに新しいロケーションを選択すると、ソース バックアップは、削除しない限りそのまま残されます。このため、必要なディスク領域は大きくなりますが、停電やディスク領域不足により統合に失敗した場合でもバックアップの安全性を確保できます。

現在の True Image 2013 バージョンでは、zip 形式で作成されたバックアップの統合はサポートされません。

True Image 2013 では、読み取り/書き込みモードでマウントしたパーティション イメージを編集する際に作成されたバックアップ バージョンは統合できません。

バックアップ内のバックアップ バージョンを統合する手順は、次のとおりです。

- **[バックアップとリカバリ]** タブで、統合するバックアップを選択します。
- 選択したバックアップのボックスの歯車アイコンをクリックし、**[その他]** をポイントして、**[バージョンの統合]** をクリックします。
- ウィザードの手順に従います。

Acronis セキュア ゾーンにあるバックアップ バージョンを統合する場合は、別のロケーションを選択することはできません。

3.15.1 アーカイブの統合保護

選択したアーカイブは、不正アクセスを防止するため、パスワードで保護されています。アーカイブにアクセスするには、以前に入力したパスワードを指定する必要があります。

パスワードを指定する手順は、次のとおりです。

- **[パスワード]** フィールドに、パスワードを入力します。正しいパスワードを入力しないと、アーカイブの統合処理を続行することはできません。
- 続行するには、**[OK]** をクリックしてください。

3.15.2 バックアップの選択

[バックアップの選択] ウィンドウには、(リカバリ ウィザードと同様に) 選択したアーカイブに含まれるバックアップと作成日時の一覧が表示されます。一番上に表示されているバックアップは完全バックアップ、その他は増分バックアップです。




保存するバックアップを選択する手順は、次のとおりです。

- 保存するバックアップを選択します。その他のバックアップは、統合アーカイブに含められません。ウィンドウの右側のペインには、選択したバックアップに関する情報(名前、作成日、種類とコメント)が表示されます。
- 続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。

3.15.3 保存先

アーカイブのコピーを保存するロケーションとアーカイブの名前を指定します。デフォルトでは、アーカイブの名前とロケーションは元のアーカイブと同じです。元のアーカイブは上書きされます。

統合アーカイブ用に別のロケーションを指定する手順は、次のとおりです。

- **[新しい場所]** 項目を選択し、**[参照]** ボタンをクリックします。ドライブ ツリーから、統合アーカイブを保存するロケーションを指定します。
必要に応じて、選択したロケーションに新しいフォルダを作成( **[新しいフォルダの作成]** ボタンをクリック)したり、不要なフォルダを削除( **[削除]** ボタンをクリック)したりすることもできます。
- **[ファイル名]** フィールドに統合したアーカイブの名前を入力するか、 **[名前の生成]** ボタンをクリックして名前を自動的に生成します。
- 元のアーカイブが不要な場合に削除するには、**[元のアーカイブを削除する]** チェックボックスをオンにします。
- 続行するには、**[次へ]** をクリックします。

Acronis セキュア ゾーンに保存されているアーカイブの中のバックアップを統合する場合は、別のロケーションを選択することはできません。

3.15.4 統合の概要

概要ウィンドウには、**[実行]** をクリックすると True Image 2013 で実行される処理の簡単な説明が表示されます。変更するパラメータがある場合は、ウィンドウの左側で必要なステップを選択して、パラメータを修正します。

[実行] ボタンをクリックすると、表示されている処理が開始します。

[オプション] ボタンをクリックすると、オプションのステップを実行できます。

[キャンセル] ボタンをクリックすると、処理は実行されず、ウィザードが終了します。

3.16 バックアップ設定のクローンの作成

バックアップが既に存在していて、同じ種類(ディスク、ファイル、またはメールのバックアップ)の新しいバックアップを作成する必要がある場合、バックアップ プロセスを最初から設定する必要はありません。既存のバックアップからすべての設定をコピーすることができます。その後、新しいバックアップ用にコピーした設定を多少修正して、**[今すぐバックアップ]** をクリックします。

既存のバックアップを基に新しいバックアップを作成する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、該当するバックアップ ボックスを参照して、歯車アイコンをクリックすると **[処理]** メニューが表示されます。そこで **[その他]** をポイントして、**[設定のクローン作成]** をクリックします。
[(1)[最初のバックアップの名前]] という名前の新しいバックアップ ボックスが作成されます。これには「親」のバックアップと同じ設定が含まれています。
2. クローン作成されたバックアップのボックスで歯車アイコンをクリックすると **[処理]** メニューが表示されます。そこで、**[設定の編集]** を選択します。
3. バックアップする項目を変更します。必要に応じて、バックアップ名、保存先、その他の設定を変更します。
4. **[保存]** ボタンをクリックします。
5. 最初のバックアップ バージョンを作成するには、バックアップ ボックスで **[今すぐバックアップ]** をクリックします。

4 データのリカバリ

データ バックアップの目的は、ハードウェア障害、火災、盗難、または誤ったファイルの削除によって元のデータが失われた際に、バックアップされたデータをリカバリすることです。

True Image 2013 のバックアップ機能を使用して、システムおよびデータをバックアップすることをおすすめします。バックアップがあれば安心です。

次のセクションでは、ディスク、パーティション、ファイル、およびフォルダのリカバリ方法について説明します。ほとんどの場合、ファイルおよびフォルダのリカバリには Acronis Backup Explorer を使用します。詳細については、「Acronis Backup Explorer (30ページ)」を参照してください。

セクションの内容

クラッシュ後のシステムのリカバリ.....	88
パーティションとディスクのリカバリ.....	92
Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ.....	94
複数のパーティションを一度にリカバリする方法.....	95
レスキュー メディアを使ってディスク バックアップを異なるディスクへリカバリする.....	99
ファイル レベルのバックアップからデータをリカバリする.....	105
ファイル バージョンのリカバリ.....	107
異なるハードウェアへのリカバリ.....	108
Acronis Universal Restore.....	112
Acronis スタートアップ リカバリ マネージャの使用法.....	113
ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて.....	115
[バックアップ保護] ダイアログボックス.....	116
BIOS での起動順の並び替え.....	116
リカバリ オプション.....	117
コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには.....	122

4.1 クラッシュ後のシステムのリカバリ

コンピュータが起動に失敗した場合、「クラッシュの原因を特定する (88ページ)」で説明されているヒントを参考にして、まず原因を特定することをお勧めします。クラッシュがオペレーティング システムの破損によって発生した場合は、バックアップを使用してシステムをリカバリします。「リカバリの準備 (89ページ)」を参照して準備を完了し、「システムのリカバリ」の手順に進みます。

4.1.1 異常停止の原因を特定する

システムが異常停止する原因には、2 つの基本的な要因があります。1 つ目は、ハードウェア障害によってコンピュータが起動できなくなることです。2 つ目の要因は、オペレーティング システムに障害が発生し、Windows が開始されなくなることです。

最初の原因の場合は、ハードウェア メーカーのサービス センターに問い合わせることをお勧めします。その前に、いくつかの検査を実行することもできます。ケーブル、コネクタ、外付けデバイスの電源などを確認します。その後、コンピュータを再起動してください。コンピュータの電源をオンにすると同時に POST (パワーオン セルフ テスト: power-on self test) が開始され、システム ハードウェアが確認されます。POST によって障害が検知された場合、PC を修理に出す必要があります。

POST によってハードウェア障害が見つからなかった場合、BIOS を開始して、システムのハード ディスク ドライブが認識されているかどうかを確認します。BIOS を開始するには、POST シーケンス中に必要なキーの組み合わせ (**Del** キー、**F1** キー、**Ctrl+Alt+Esc** キー、**Ctrl+Esc** キーなど。ご使用の BIOS によります) を押します。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、セットアップ メニューが表示されます。ハード ディスク自動検出ユーティリティを選択します。通常は、「Standard CMOS Setup」または「Advanced CMOS setup」の下に表示されています。ユーティリティによってシステム ドライブが検出されなかった場合、システム ドライブに障害が発生しているため、ドライブを交換する必要があります。

ユーティリティによって、システムのハード ディスク ドライブが正常に検出された場合、異常停止の原因は、ウイルス、マルウェア、または起動に必要なシステム ファイルの破損が考えられます。

システム ドライブが正常である場合は、システム ディスクまたはシステム パーティションのバックアップを使用してシステムをリカバリします。Windows を起動できないので、Acronis ブータブルレスキュー メディアを使用する必要があります。

破損したハード ディスク ドライブを交換した後でシステムをリカバリする際は、システム ディスクバックアップも使用する必要があります。

4.1.2 リカバリの準備

a) ウィルスまたはマルウェア攻撃のためにクラッシュが発生したことが疑われる場合、コンピュータがウイルスに感染しているかどうかスキャンします。

b) レスキュー メディアから起動し、リカバリに使用するバックアップをベリファイします。この手順は必須です。なぜなら、バックアップをリカバリ環境でベリファイする場合、Windows では正常にベリファイされたにもかかわらず、バックアップが破損しているとプログラムが宣言することがあるからです。これは、True Image 2013 で使用されるデバイス ドライバが Windows とリカバリ環境とで異なることが原因である可能性があります。True Image 2013 によって、バックアップが破損していると見なされた場合、リカバリは中止されます。

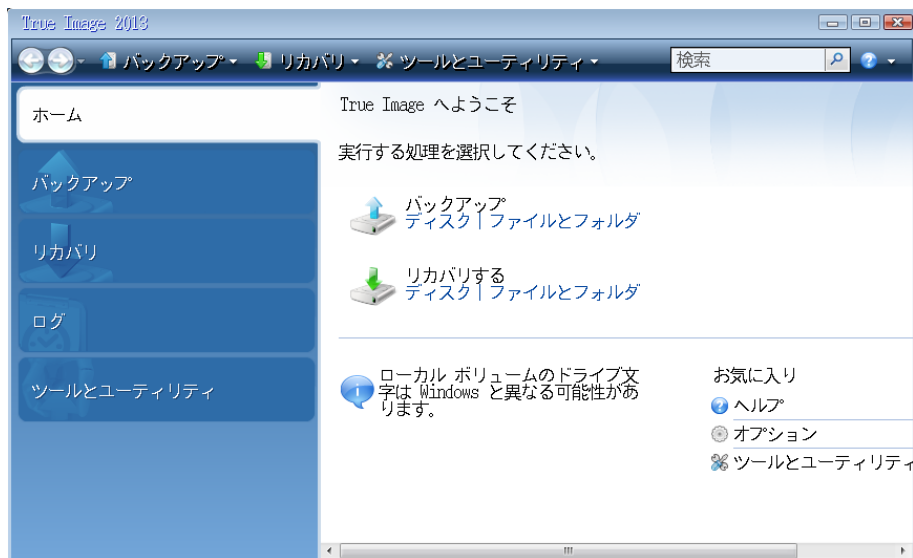
4.1.3 システムのリカバリ

「リカバリの準備 (89ページ)」で説明した手順を実行したら、システムのリカバリ処理を開始します。ここでは、破損したシステムを同じハードディスクにリカバリする方法について説明します。交換したハードディスク ドライブにシステムをリカバリする方法も、ほぼ同じです。新しいディスクのフォーマットは、リカバリ処理の中で実行されるので、実行する必要はありません。

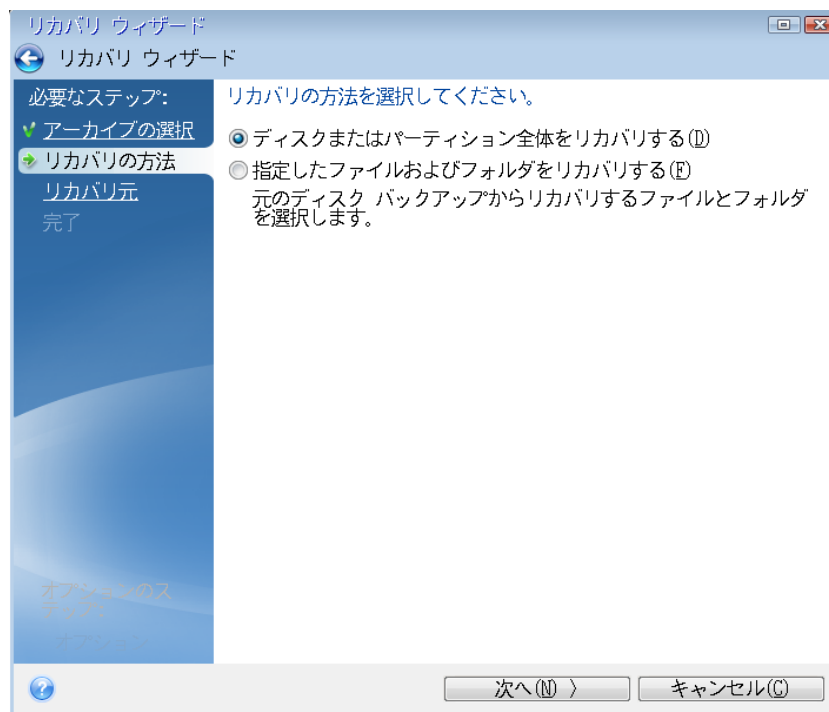
リカバリに使用するバックアップが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。これは、Acronis レスキュー メディアから起動する前に行います。

1. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え (116ページ)」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。

3. [ようこそ] 画面の [リカバリする] の下の [マイ ディスク] を選択します。

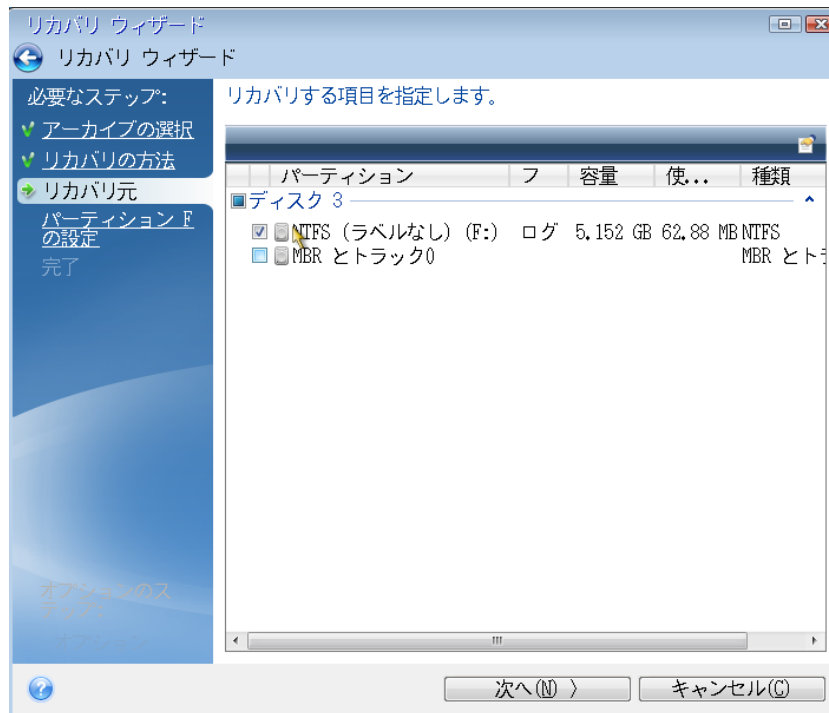


4. リカバリに使用するシステム ディスクまたはパーティション バックアップを選択します。バックアップを右クリックし、ショートカット メニューで [リカバリする] を選択します。
5. [リカバリの方法] で [ディスクとパーティション全体をリカバリする] を選択します。



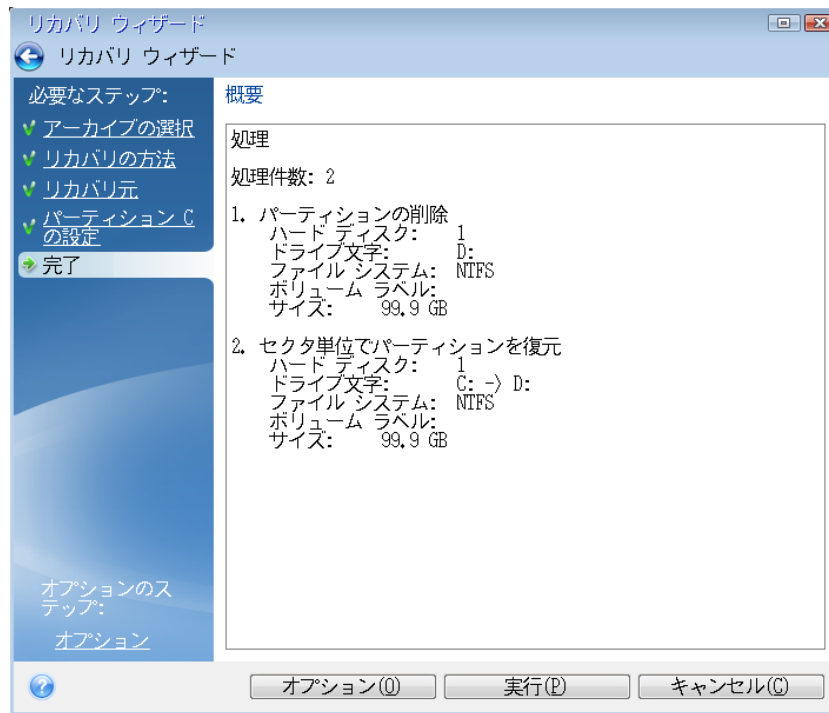
6. [リカバリ元] 画面で、システム パーティション (通常は C) を選択します。システム パーティションの文字が異なる場合は、[フラグ] 列を使用してパーティションを選択します。[プライマリ] および [アクティブ] フラグが設定されている必要があります。

Windows 7 の場合、システム予約済みパーティションには、**[プライマリ]**、**[アクティブ]** フラグが設定されます。システム予約済みパーティションとシステムパーティションの両方をリカバリするために選択する必要があります。



7. [パーティション C の設定](または、異なる場合は実際のシステムパーティションの文字)の手順で、デフォルトの設定を確認し、正しい場合は **[次へ]** をクリックします。正しくない場合は、必要に応じて設定を変更した後、**[次へ]** をクリックします。容量が異なる新しいハードディスクにリカバリする場合は設定を変更する必要があります。

8. **[完了]** の画面で処理の概要を確認します。パーティションのサイズを変更していない場合は、**[パーティションの削除]** 項目と **[パーティションのリカバリ]** 項目のサイズが一致している必要があります。概要を確認して、**[実行]** をクリックします。



9. 処理が終了したら、True Image 2013 のスタンドアロン版を終了し、レスキュー メディアを取り出して、リカバリされたシステム パーティションから起動します。必要な状態まで Windows をリカバリしたことを確認してから、元の起動順序を復元します。

4.2 パーティションとディスクのリカバリ

[バックアップとリカバリ] タブと Acronis Backup Explorer の両方で、イメージ バックアップからパーティションまたはディスクのリカバリを開始できます。**[バックアップとリカバリ]** タブからリカバリを開始するには、リカバリする必要があるパーティション イメージが格納されているバックアップのチェックボックスをオンにします。**[リカバリする]** ボタン(またはバックアップ ボックスが折りたたまれている場合は、リカバリ アイコン)をクリックします。これにより、**[ディスクのリカバリ]** ウィンドウが開きます。

かなり前の日付の状態にパーティションをリカバリする場合は、歯車アイコンをクリックして [処理] メニューを開き、[ファイルのリカバリ] をクリックします。これにより Acronis Backup Explorer が開き、特定の日付で作成されたイメージ バックアップ バージョンを選択できます。目的のバージョンを選択した後に [リカバリする] をクリックすると、[ディスクのリカバリ] ウィンドウが開きます。



1. リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。

ディスク全体をバックアップした場合は、[ディスク モードに切り替える] をクリックして、ディスク全体を一度にリカバリすることができます。パーティションを再度選択できるようにするには、[パーティション モードに切り替える] をクリックします。

2. パーティション名の下にあるリカバリ先のフィールドで、リカバリ先パーティションを選択します。リカバリ先として適切なパーティションは黒い文字で表示されます。適切ではないパーティションは赤い文字で表示されます。リカバリ先のパーティション上のデータは、リカバリされるデータおよびファイル システムによって置き換えられるので、すべて失われます。

サイズを変更せずに、ソース パーティションにイメージをリカバリするには、目的のパーティションに少なくとも 5% の空き領域が必要です。その領域がない場合、[今すぐリカバリする] ボタンは使用できません。

3. 選択し終わったら、[今すぐリカバリする] をクリックしてリカバリを開始します。

マスター ブート レコード (MBR) をリカバリする必要がある場合もあります。たとえば、リカバリ後に Windows が起動しない場合には必要である可能性があります。MBR を (パーティションと一緒に、または個別に) リカバリするには、[MBR を表示する] をクリックして [MBR] チェックボックスをオンにします。

ディスク全体をリカバリする場合は、[ディスク シグネチャをリカバリ] チェックボックスが表示されません。ディスク シグネチャは、ハードディスク MBR の一部です。このシグネチャによって、ディスクメディアが一意に識別されます。

この [ディスク シグネチャをリカバリ] チェックボックスはオンにすることをお勧めします。その理由は次のとおりです。

- True Image 2013 でスケジュールされたバックアップが作成されるときに、ソース ハード ディスクのシグネチャが使用されます。同じディスク シグネチャをリカバリする場合は、前に作成されたバックアップを再作成または編集する必要はありません。

- インストールされているアプリケーションの中には、使用許諾などの目的にディスク シグネチャを使用するものがあります。

次の場合は、**[ディスク シグネチャをリカバリ]** チェックボックスをオフにすることをお勧めします。

- イメージ バックアップを使用する目的が、災害復旧ではなく、Windows のハードディスク ドライブのクローン作成である場合。

この場合、同じドライブにリカバリしても、リカバリされたハード ディスク ドライブのディスク シグネチャは新たに生成されます。

[ディスク リカバリ オプション]: ディスク リカバリ処理に追加パラメータを設定する場合にクリックします。

[Acronis Universal Restore を使用]: リカバリ中に Acronis Universal Restore を使用する場合にクリックします。

Acronis Universal Restore (True Image 2013 Plus Pack によって提供) では、ブータブルなシステムのクローンを別のハードウェア上に作成できます (詳細については、「Acronis Universal Restore (112ページ)」を参照してください)。

システムをバックアップしたときにあったものとは異なるプロセッサ、マザーボード、または大容量記憶装置を持つコンピュータにシステム ディスクをリカバリする場合には、このオプションを選択します。

4.3 Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションのリカバリ

次の手順に従って、Acronis ノンストップ バックアップで保護されているパーティションをリカバリすることができます。最初に、Windows でデータ パーティションをリカバリする方法を示します。

1. True Image 2013 を起動します。
2. **[バックアップとリカバリ]** タブのノンストップ バックアップ ボックスで、**[リカバリする]** をクリックします。
3. **[ディスクとパーティション]** タブのタイム ラインで、リカバリするバックアップ バージョンを選択します。
4. リカバリするパーティションを選択して、**[リカバリする]** をクリックします。
5. これ以降の手順は、従来のイメージ バックアップからデータ パーティションまたはディスクをリカバリするときと似ています。詳細については、「パーティションとディスクのリカバリ」を参照してください。

状況によっては、システム パーティションのリカバリは、Windows と (Windows が起動しないときは) レスキュー メディアから起動した後の両方で実行できます。Windows でのリカバリはデータパーティションのリカバリと似ていますが、再起動が必要です。通常は、システム パーティションをリカバリするにはレスキュー メディアを使用する方が安全です。

レスキュー メディアを使用したリカバリ手順は、従来のバックアップからシステム パーティションをリカバリするときの手順とほぼ同じです。唯一の違いはリカバリ ポイントのステップで、これによりシステム パーティションをリカバリする時点を選択できます。リカバリ ポイントは、バックアップ エクスプローラのタイム ラインに表示されるバックアップ バージョンに対応しています。

4.4 複数のパーティションを一度にリカバリする方法

ここでは、2 つのパーティションのリカバリについて説明します。ハードディスクのイメージに複数のパーティションが含まれている場合は、同様の手順に従ってください。

次の手順は、ベーシック ディスクへリカバリする場合のみ有効です。パーティションのサイズ変更を伴うダイナミック ディスクへのリカバリは、実行できません。

1. 複数のパーティションが格納されているディスクのバックアップ ボックスで **[リカバリする]** をクリックします。**[ディスクのリカバリ]** ウィンドウが表示されます。

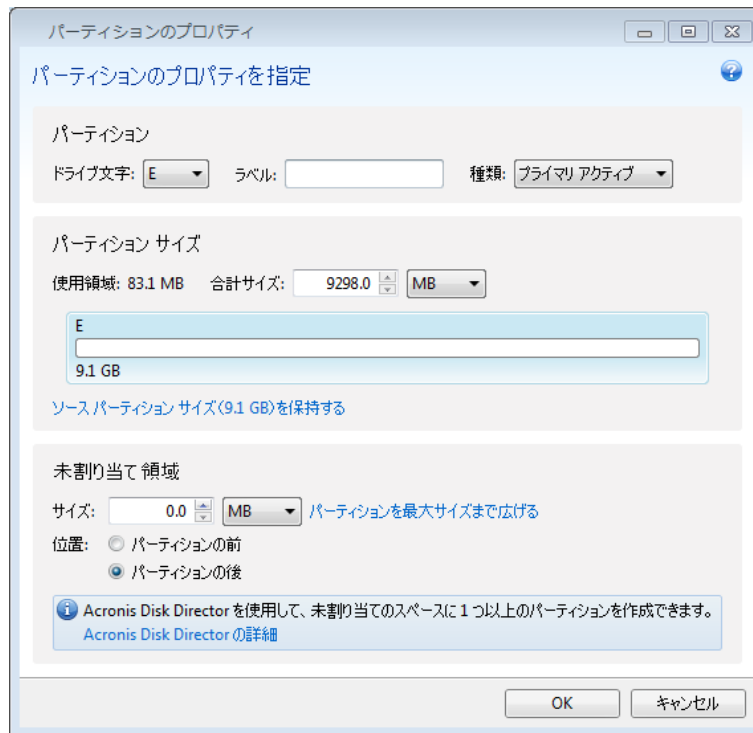


2. **[バージョン:]** の横の下矢印をクリックして、バックアップの日時をもとにリカバリするバックアップ バージョンを選択します。
3. リカバリするパーティションを選択します。これにより、パーティション ラベルの下にリカバリ先のフィールドが開きます。



4. フィールドの右側の下向き矢印をクリックして、リカバリ先のハードディスクを選択します。リカバリされるパーティションが、選択したハードディスク上に配置されます。このパーティションは、利

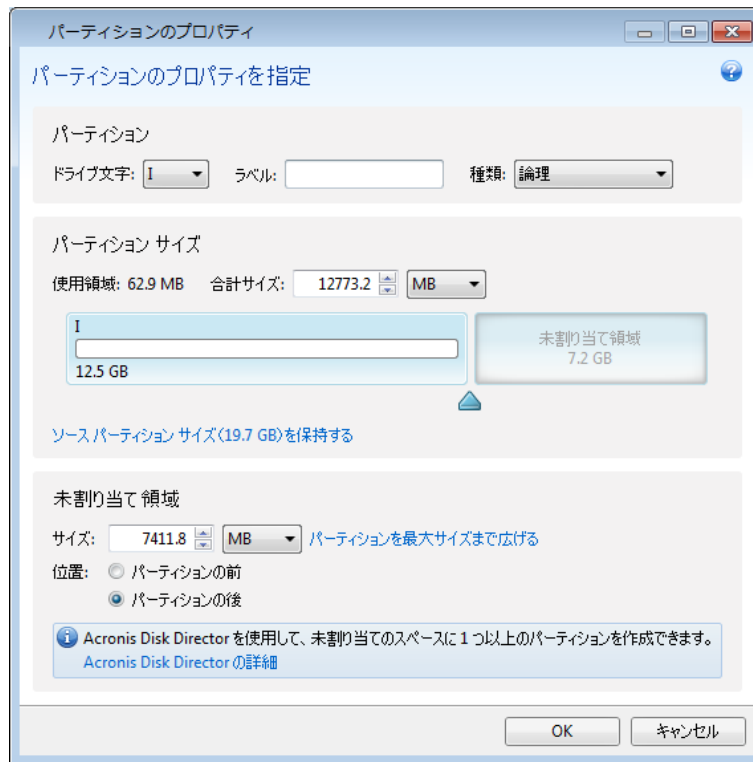
用可能なディスク領域すべてを占めます。残りのパーティション用として十分なディスク領域を残しておくためにパーティションのサイズを圧縮するには、リカバリ先のフィールドの下にある **[パーティションのプロパティ]** リンクをクリックします。**[パーティションのプロパティ]** ウィンドウが表示されます。



5. パーティションのサイズを変更するには、画面の水平バー上でマウスを使用して右の境界をドラッグします。

パーティションに特定のサイズを割り当てるには、**[合計サイズ]** フィールドに適切な数字を入力します。

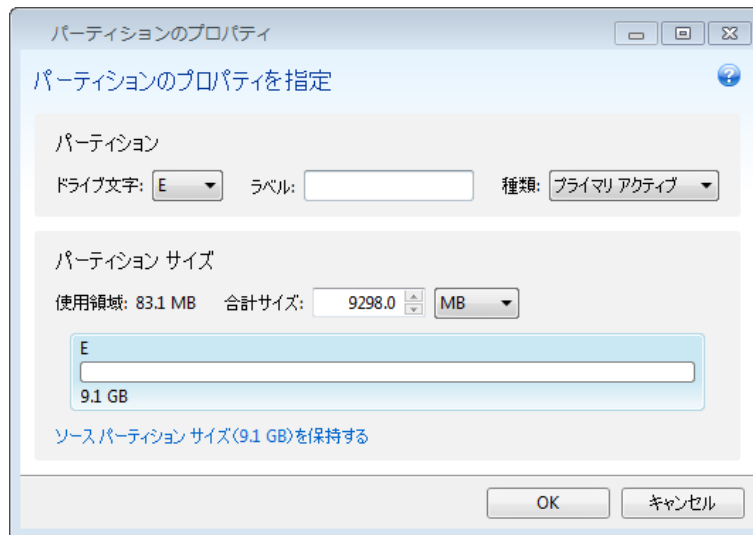
パーティションのサイズを変更した後、残りのパーティション用として必要な未割り当て(空き)領域を残しておく必要があることに注意してください。ドライブとパーティションの種類を選択します。設定を終了したら、**[OK]** をクリックしてその設定を確定し、[ディスクのリカバリ] メイン ウィンドウに戻ります。



6. 次のパーティションのチェックボックスをオンにします。
7. リカバリ先のハードディスク上の未割り当て領域を選択します。未割り当て領域を占有するパーティションが作成されます。



8. **[パーティションのプロパティ]** リンクをクリックし、パーティションの設定を行います。ドライブとパーティションの種類を選択します。設定を終了したら、**[OK]** をクリックしてその設定を確定し、**[ディスクのリカバリ]** メイン ウィンドウに戻ります。



イメージに複数のパーティションが含まれている場合は、リカバリするその他のパーティション用として未割り当ての領域を十分に残しておき、すべてのパーティションの設定を完了するまで手順 5~7 を繰り返します。

9. **[今すぐリカバリする]** をクリックして、パーティションをリカバリ先のハードディスクにリカバリします。



4.5 レスキュー メディアを使ってディスク バックアップを異なるディスクへリカバリする

複数のパーティションが格納されたディスクのバックアップを容量が異なるハードディスクへリカバリする作業は、最も複雑な処理の一つです。バックアップした元のハードディスクに診断またはリカバリのために作成された隠しパーティションが存在する場合には特に複雑になります。

「リカバリの準備 (89ページ)」を参照して、準備を完了してください。

まだ行っていない場合は、コンピュータのディスクの各パーティションに固有名(ラベル)を割り当ててください。これにより、パーティションをドライブ文字ではなく名前で識別できるようになります。レスキュー メディアから起動するときに、異なる文字がドライブに割り当てられる場合があります。そのため、名前はバックアップを含むドライブやリカバリ先(新規)ドライブを見つける際に役立ちます。

パーティションのサイズ、ドライブの容量、製造者、およびモデル番号も、ドライブを正確に識別するのに役立ちます。

新しいハードディスク ドライブはコンピュータ内の同じ場所に取り付け、元のドライブで使用したものと同一ケーブルおよびコネクタを使用することをお勧めします。元のドライブが IDE で新しいドライブが SATA である場合などは、不可能な場合もあります。どの場合でも、新しいドライブは使用するマシンに取り付けてください。

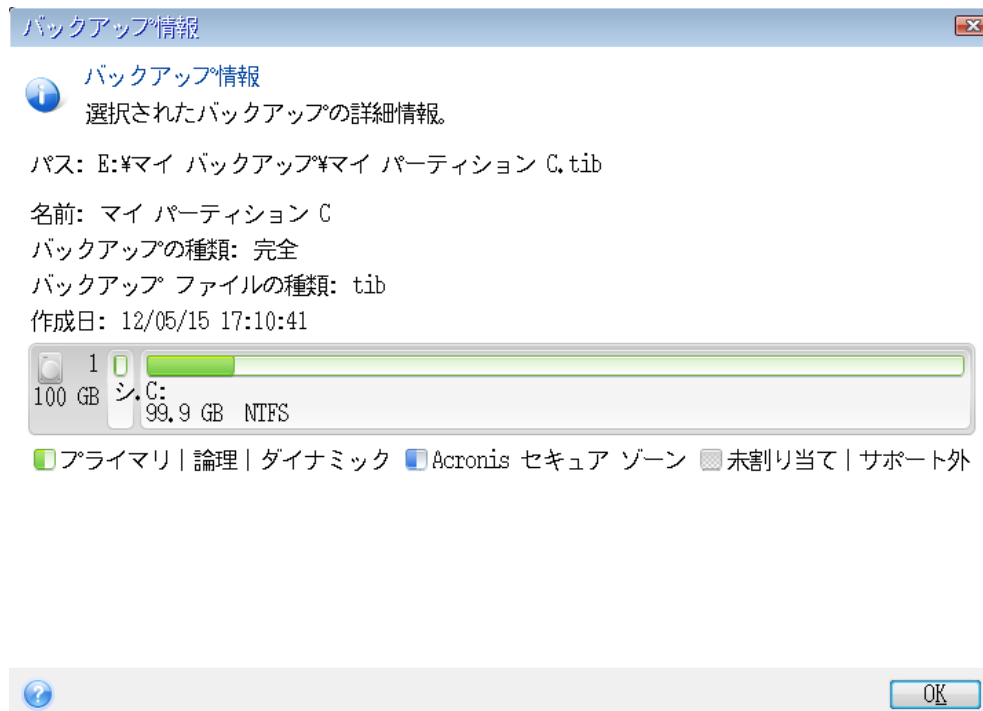
4.5.1 隠しパーティションを含むディスクのリカバリ

PC 製造元によって、診断やシステム リカバリ用の隠しパーティションが作成されている場合があります。Windows 7 の場合、通常、表示されないシステム予約済みパーティションがあります。隠しパーティションが存在するシステム ディスクのバックアップをリカバリする場合には、他にも考慮すべき点があります。まず、古いドライブに存在するパーティションの物理的順序を新しいドライブでも維持する必要があります。また、隠しパーティションを同じロケーション(通常はディスク領域の先頭または末尾)に配置する必要もあります。問題発生リスクを最小限に抑えるために、隠しパーティションのサイズを変更せずにリカバリすることをお勧めします。ここでは、Windows 7 でシステムディスクをリカバリする方法と、表示されないシステム予約済みパーティションについて説明します。

リカバリに使用するバックアップが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。これは、Acronis レスキュー メディアから起動する前に行います。

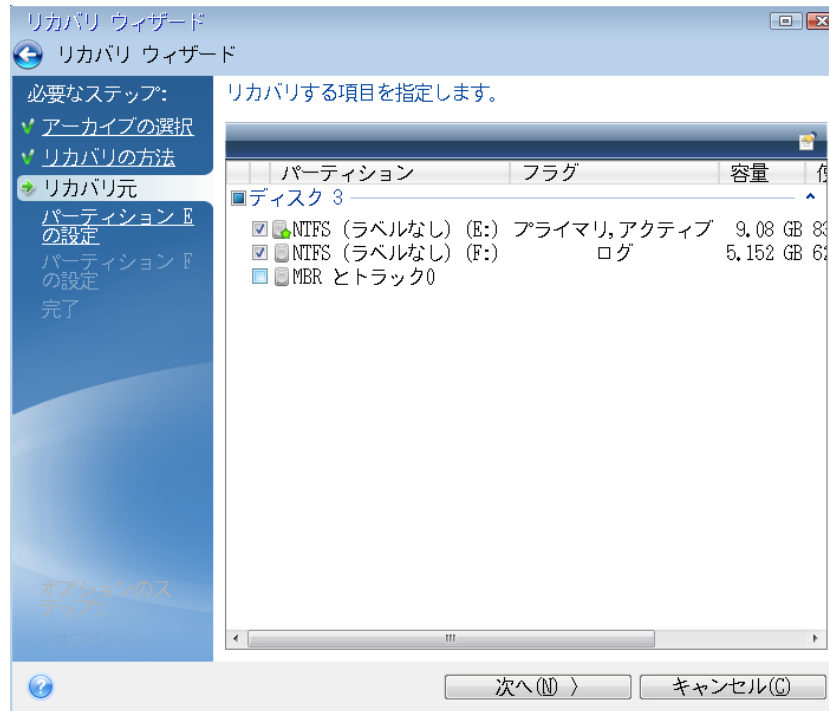
1. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス(CD、DVD、または USB スティック)を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え (116ページ)」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。
3. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択します。リカバリに使用するシステム ディスクのイメージ バックアップを選択します。

リカバリを続行する前に、既存のすべてのパーティションのサイズと物理的な順序を把握しておく必要があります。この情報を表示するには、ウィザードのツールバーで **[詳細]** をクリックします。True Image 2013 にバックアップの情報が表示されます。この情報には、ディスクに格納されているすべてのパーティションおよびディスク上の物理的順序の図が含まれます。



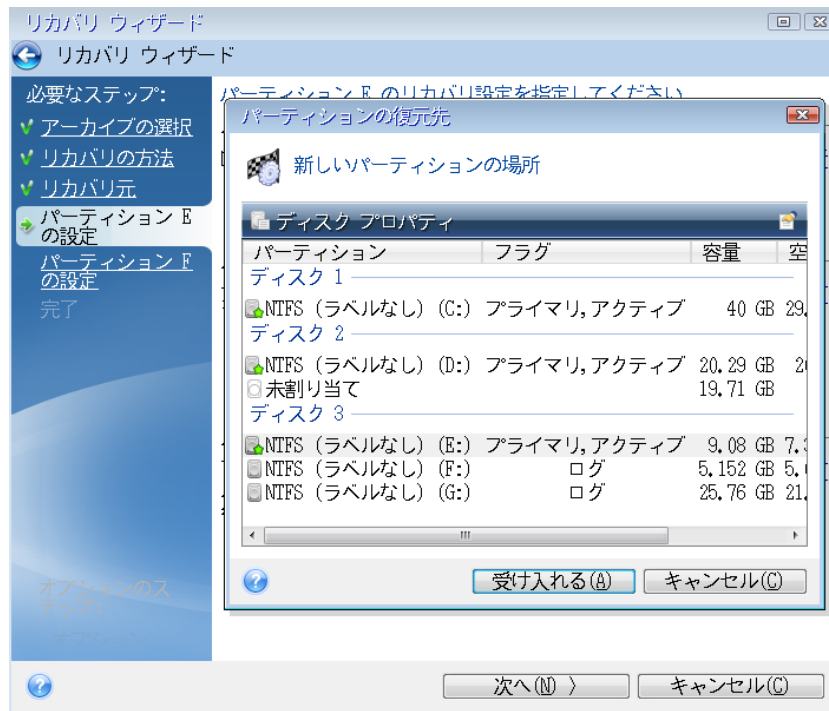
4. **[リカバリの方法]** で **[ディスクとパーティション全体をリカバリする]** を選択します。

5. **[リカバリ元]** で、リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。**[MBR とトラック 0]** チェックボックスはオンにしないでください。オンにすると、ディスク全体がリカバリの対象となります。ディスク全体のリカバリでは、パーティションのサイズを手動で変更することはできません。MBR は後でリカバリすることができます。パーティションを選択して **[次へ]** をクリックします。



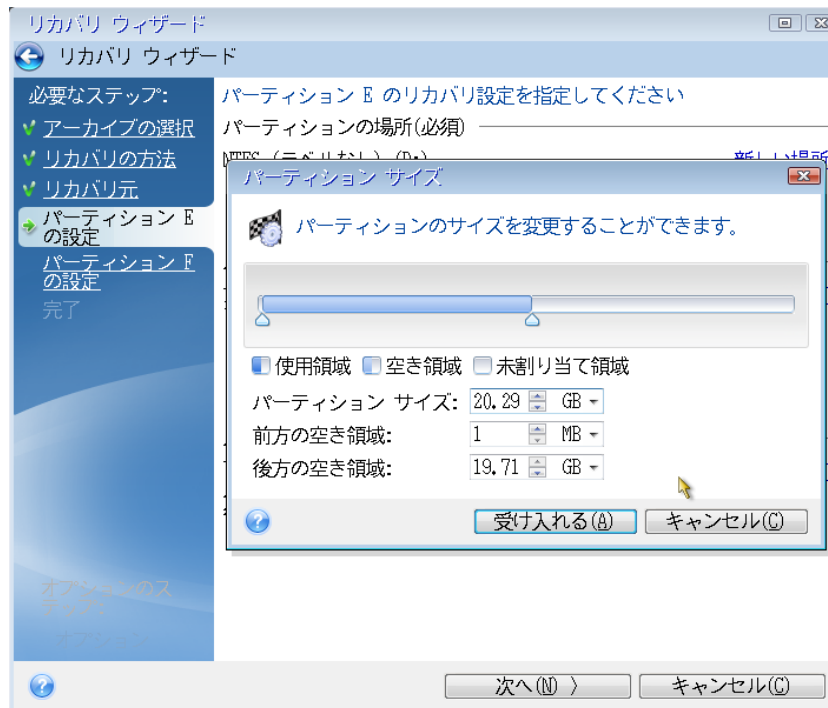
パーティションを選択すると、該当する [パーティションの設定...] の手順が表示されます。これらの手順は、ドライブ文字のないパーティション(隠しパーティションには通常、ドライブ文字はありません)から開始します。次に、パーティションのドライブ文字の昇順に進みます。この順序は変更できません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物理的順序とは異なる場合があります。

6. パーティション設定のうち、ロケーション、種類、およびサイズを指定できます。通常、ドライブ文字が割り当てられていないため、最初に、隠しパーティション(この場合は、システム予約済みパーティション)の設定を行う必要があります。新しいディスクにリカバリするため、**[新しい場所]** をクリックします。割り当てられた名前または容量によって、リカバリ先ディスクを選択します。

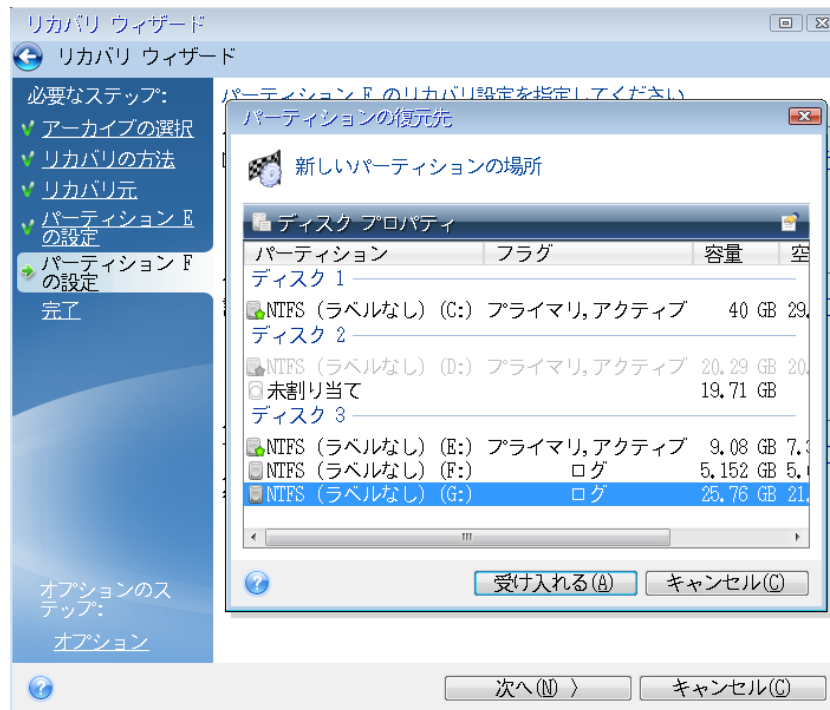


7. **[許可]** をクリックすると、[パーティション 1-1 の設定] 画面に戻ります。パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。システム予約済みパーティションはアクティブに設定されたプライマリパーティションである必要があります。

8. 次に、[パーティション サイズ] の領域で [デフォルトを変更] をクリックしてパーティションのサイズを指定します。デフォルトでは、新しいディスク全体がパーティションに使用されます。隠しパーティションは、サイズを変更せずそのままにし、ディスク上の同じロケーション(ディスク領域の先頭または末尾)に配置する必要があります。これを行うには、画面の水平バーでマウスを使用してパーティションの境界をドラッグし、パーティションのサイズおよびロケーションを変更します。または、適切なフィールド([パーティション サイズ]、[前方の空き領域]、[後方の空き領域])に対応する値を入力することも可能です。パーティションを必要なサイズおよびロケーションに指定したら、[許可] をクリックしてから [次へ] をクリックします。

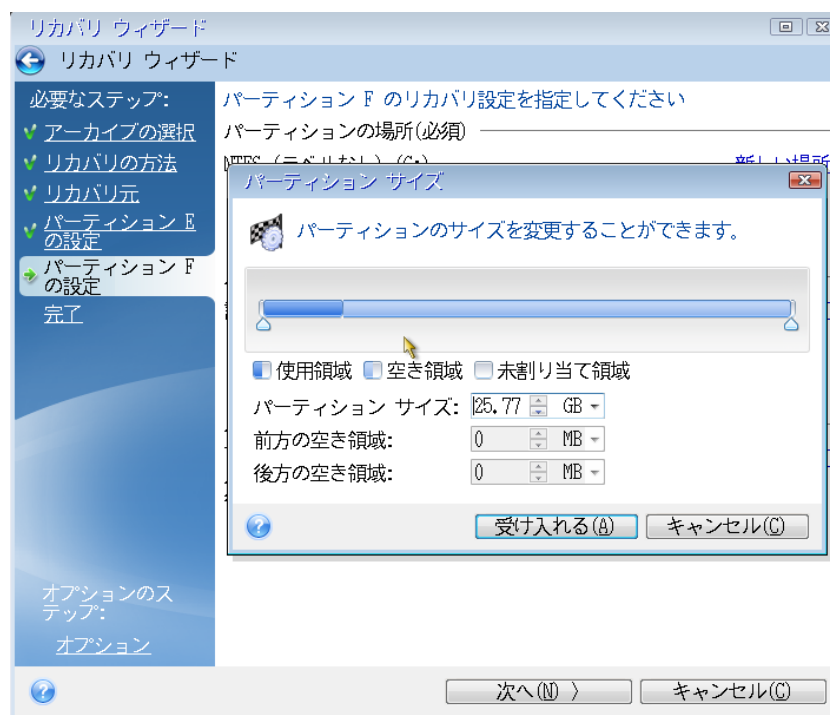


2 番目のパーティションの設定を指定します。このパーティションは、ここではシステム パーティションです。**[新しい場所]** をクリックしてから、パーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。



[許可] をクリックしてパーティションの種類を確認(必要に応じて変更)します。システム パーティションは、プライマリにする必要があります。

パーティションのサイズを指定します。デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、このパーティションの後ろには空き領域はないため、新しいディスク上の未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当てます。**[許可]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。



9. 実行する処理の概要を注意深く確認して、**[実行]** をクリックします。

説明しているこの事例(システム予約済みパーティションのリカバリ)では、手順 10~12 は実行しなくてもかまいません。PC の製造元が作成した隠しパーティションをリカバリする場合は、これらの手順を実行する必要があります。

10. 処理を終了したら MBR のリカバリに進みます。PC の製造元は、隠しパーティションへのアクセスを提供するために、Windows の MBR やトラック 0 上のセクタを変更している可能性があるため、MBR をリカバリする必要があります。
11. 同じバックアップをもう一度選択します。右クリックして、ショートカット メニューで **[リカバリする]** を選択します。**[リカバリの方法]** で **[ディスクとパーティション全体をリカバリする]** を選択してから、**[MBR とトラック 0]** チェックボックスをオンにします。
12. 次の手順で MBR のリカバリ先のディスクを選択し、**[次へ]** をクリックしてから **[実行]** をクリックします。MBR のリカバリが完了したら、True Image 2013 のスタンドアロン版を終了します。

リカバリ後の初回起動時には、Windows は新しいドライブおよび古いドライブを認識しません。認識した結果、Windows の起動に問題が発生する可能性があるからです。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、初回起動前に古いドライブを取り外してください。

古いドライブを取り外す必要がある場合はコンピュータの電源を切ってください。その必要がない場合は、レスキュー メディアを取り出してからコンピュータを再起動します。

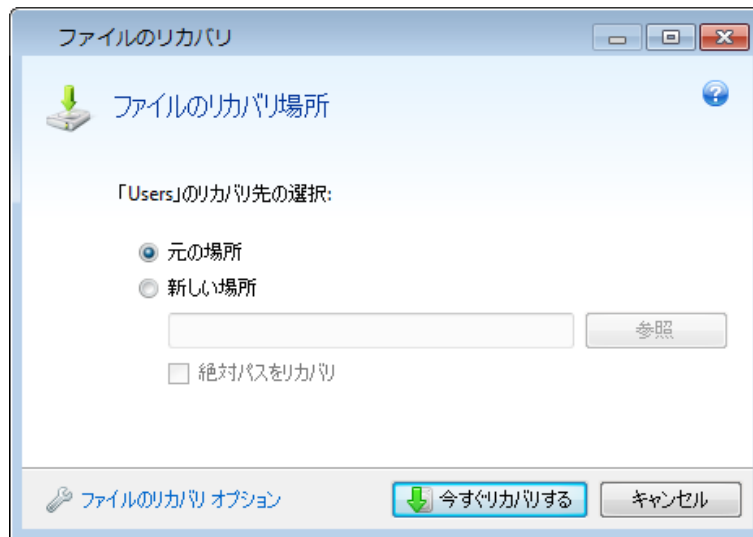
Windows でコンピュータを起動します。新しいハードウェア(ハード ドライブ)が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序に戻します。

4.6 ファイル レベルのバックアップからデータをリカバリする

通常、ファイルおよびフォルダのリカバリは、Acronis Backup Explorer で開始します。特定のバージョンをリカバリする場合は、**[バージョンの表示]** ウィンドウからリカバリの手順を開始します。いずれの場合でも、リカバリを開始すると、**[ファイルのリカバリ]** ウィンドウが開きます。

バックアップ エクスプローラでのファイルおよびフォルダのリカバリについて説明します。

1. バックアップ エクスプローラで、リカバリするファイルおよびフォルダを選択します。バックアップ エクスプローラでの選択操作については、「ファイルとフォルダ (33ページ)」を参照してください。[リカバリ] をクリックしてリカバリを開始します。[ファイルのリカバリ] ウィンドウが開きます。



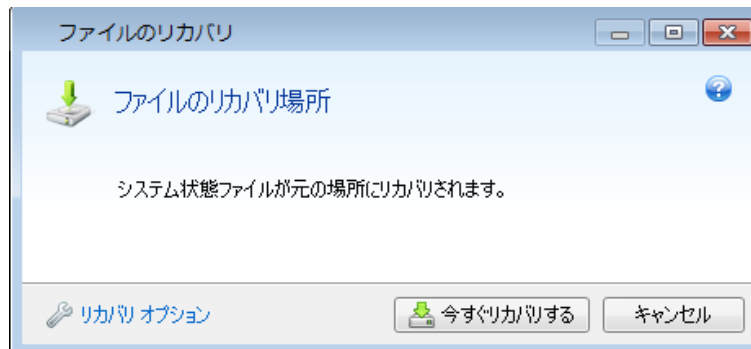
2. 選択したファイルまたはフォルダをリカバリするコンピュータ上のリカバリ先を選択します。元のロケーションにデータをリカバリすることができます。また、必要に応じて新しいロケーションを選択することもできます。新しいロケーションを選択するには、[参照] ボタンをクリックします。
3. 新しいロケーションを選択した場合、デフォルトでは、元の絶対パスはリカバリせずに、選択した項目がリカバリされます。項目をフォルダ構造全体と共にリカバリすることもできます。その場合は、[絶対パスをリカバリ] チェックボックスをオンにします。
4. 必要に応じて、リカバリ処理のオプション(リカバリ処理の優先度、ファイルレベルのセキュリティ設定など)を選択します。オプションを設定するには、[ファイルのリカバリ オプション] リンクをクリックします。ここで設定するオプションは、現在のリカバリ処理にのみ適用されます。
5. リカバリ処理を開始するには、[今すぐリカバリする] ボタンをクリックします。
6. リカバリの進行状況が別ウィンドウに表示されます。[キャンセル] をクリックすると、リカバリは中止されます。中止したリカバリによってリカバリ先のフォルダが変更されている場合があります。

メール、アプリケーション設定、およびシステム状態のリカバリ方法

メールは、電子メールのバックアップからデータのリカバリを意味します。アプリケーション設定およびシステム状態は、Acronis True Image Home 2010 など、旧バージョンの Acronis True Image Home によって作成された古いバックアップからのみリカバリできます。

電子メール、アプリケーション設定、およびシステム状態のバックアップからデータをリカバリする方法について説明します。

1. Acronis Backup Explorer で目的のバックアップ バージョンを選択し、**[リカバリする]** をクリックしてリカバリを開始します。**[ファイルのリカバリ]** ウィンドウが開きます。

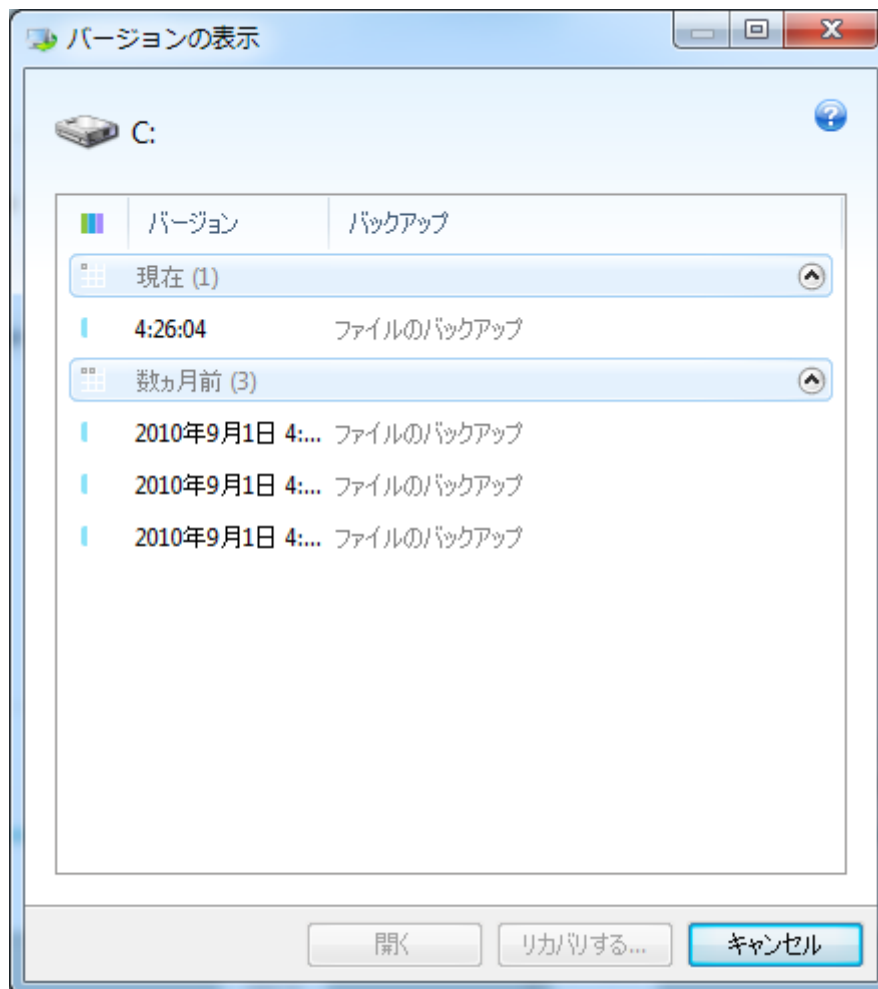


2. このようなデータをリカバリできるのは、元のロケーションに対してのみです。そのため、変更できるのはリカバリ オプションのみです。リカバリ オプションを変更するには、**[リカバリ オプション]** リンクをクリックします。ここで設定するオプションは、現在のリカバリ処理にのみ適用されます。
3. リカバリ処理を開始するには、**[今すぐリカバリする]** ボタンをクリックします。
4. リカバリの進行状況が別ウィンドウに表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、リカバリは中止されます。リカバリを中止しても元のロケーションで変更されている場合があることにご留意ください。

4.7 ファイル バージョンのリカバリ

ファイルの特定バージョンをリカバリする必要がある場合、バックアップ エクスプローラでファイルを選択します。ファイルを選択すると、ファイル サイズ情報の下に **[バージョンの表示]** リンクが表示されます。リンクをクリックすると、**[バージョンの表示]** ウィンドウが開き、バックアップ内のファイルバージョンすべての一覧が表示されます。

ファイルのバージョンを選択するまで、**[開く]** および **[リカバリする...]** ボタンは利用可能になりません。ファイル バージョンを選択すると、ボタンは有効になります。



バックアップ時刻に基づいて必要なバージョンを選択し、**[リカバリする...]** をクリックします。**[ファイルのリカバリ]** ウィンドウが開きます。リカバリ先を選択し、選択したフォルダにファイル バージョンをリカバリします。詳細については、「ファイル レベルのバックアップからデータをリカバリする」を参照してください。

Windows エクスプローラで選択したフォルダにバージョンをドラッグしてリカバリすることも可能です。

正しいバージョンを選択するには、関連するアプリケーションでバージョンを開き、ファイルの内容を表示します。バックアップ時刻に基づいてバージョンを選択してから、**[開く]** ボタンをクリックします。True Image 2013 によってファイル バージョンが一時フォルダにリカバリされます。次に、関連付けられているアプリケーションによってファイルが開きます。

4.8 異なるハードウェアへのリカバリ

Acronis Universal Restore (True Image 2013 Plus Pack によって提供) を使用すると、起動可能なシステム クローンを異なるハードウェア上に作成できます。詳細については、「Acronis Universal Restore (112ページ)」を参照してください。元のバックアップを作成したシステムとは異なるプロセッサ、マザーボード、または大容量記憶装置にシステム ディスクをリカバリするときは、

このオプションを選択します。たとえば、壊れたマザーボードを交換した後や、システムをデスクトップからラップトップに移行するときなどに役に立ちます。tib ファイルおよび vhd ファイルのどちらからシステム ディスクをリカバリする場合でも、Acronis Universal Restore を使用できます。

Acronis ノンストップ バックアップからシステム パーティションをリカバリするときは、Acronis Universal Restore を使用することはできません。

リカバリを開始する前に、ハードディスク ドライブ コントローラ用のドライバ、または新しいマザーボード用のチップセット ドライバが存在していることを確認してください。これらのドライバは、オペレーティング システムの起動に不可欠です。マザーボード用のドライバは、製品製造元のウェブ サイトからダウンロードできます。.exe、.cab、または .zip 形式でドライバをダウンロードした場合は、最初にそれらのドライバを取り出す必要があります。ドライバ ファイルの拡張子は、.inf、.sys、または .oem です。

4.8.1 Acronis Universal Restore を使用したシステムのリカバリ

1. **[バックアップとリカバリ]** タブで、システム パーティションを含むバックアップを選択します。
2. バックアップが単一バージョンで構成されている場合、バックアップのボックスの **[リカバリする]** ボタンをクリックします。複数のバックアップ バージョンが存在する場合、**[参照とリカバリ]** をクリックします。**[ディスクとパーティション]** タブで、リカバリするバックアップ バージョンを選択してから、**[リカバリする]** をクリックします。
3. **[ディスクのリカバリ]** ウィンドウが開いたら、システム パーティションのチェックボックスをオンにして、リカバリ先を選択します。
4. **[Universal Restore を使用]** チェックボックスをオンにします。次に、**[設定]** をクリックして、**[ドライバ マネージャ]** ウィンドウを開きます。
5. ターゲット ハードウェアに装着されているハード ディスク用の大容量記憶装置コントローラ (SCSI、RAID、ファイバ チャネル アダプタなど) がわかっている場合は、特定のハードウェア用のドライバ(複数可)を検索するロケーションを指定します。ドライバがフロッピー ディスクまたは CD に格納されている場合は、**[リムーバブル メディアからデバイス ドライバを検索]** チェックボックスをオンにします。ローカル ハード ディスクまたはネットワーク共有に格納されているドライバがある場合は、**[カスタム ドライバのロケーションを追加...]** をクリックします。次に、ドライバ(複数可)のロケーションを選択します。ドライバのロケーションを指定したら、**[OK]** をクリックします。

Acronis Universal Restore は、FTP サーバー上でのドライバの検索はサポートしていません。

ほとんどの場合、Acronis Universal Restore では次の 3 つのロケーションでドライバが検索されます。

- リムーバブル メディア
- この手順で指定したドライバ ストレージのロケーション(複数可)
- Windows のデフォルトのドライバ ストレージ フォルダ(リカバリされるイメージ内)

使用可能なドライバの中から最適なものが検索され、リカバリされたシステムにインストールされます。

6. リカバリを開始するには、**[今すぐリカバリする]** ボタンをクリックします。
7. 処理を続行するためにコンピュータを再起動するよう警告が表示されたら、**[再起動]** をクリックして続行します。

リカバリの際、指定された検索先で見つからないドライバがあると、エラー メッセージが表示されます。その場合、**[無視]** をクリックしてリカバリを続行するか、**[キャンセル]** をクリックして処理を取り消してから必要なドライバを検索します。その後、リカバリ処理を続行します。

システムがリカバリされたら、Acronis Universal Restore によってレジストリにパッチが当てられ、新しいドライバがインストールされます。そのため、ドライバのロケーションが有効であることを確認する必要があります。たとえば、バックアップのリカバリ先にするディスクと同じディスク上にドライバの検索パスを指定しないでください。別の USB ハードディスク、USB フラッシュ スティック、またはネットワーク共有にドライバを配置することをお勧めします。

システム パーティションのリカバリが成功したら、リカバリされた Windows を起動します。

初めて Windows を起動すると、「新しいハードウェアが見つかりました」というポップアップ メッセージが何回も表示され、コンピュータを再起動するように要求されます。

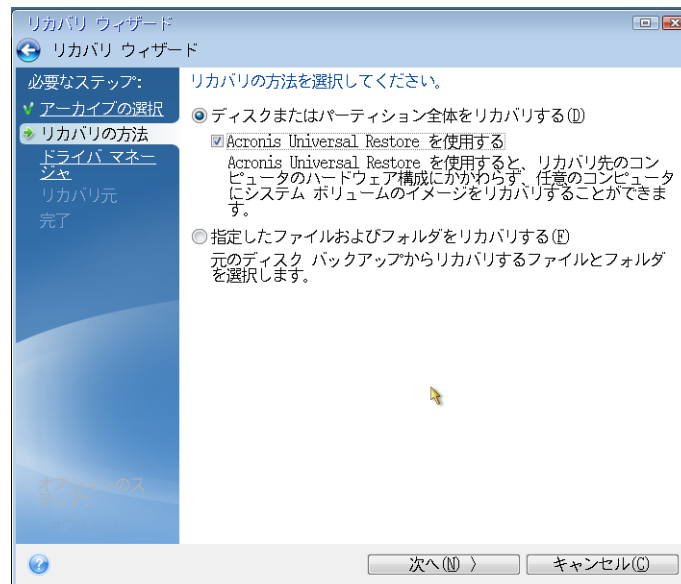
複数の Windows OS によるマルチブート構成のバックアップをリカバリするために Acronis Universal Restore を使用する場合、最も重要なドライバはすべての Windows インストールで置き換えられます。

4.8.2 レスキュー メディアで Acronis Universal Restore を使用したシステムの リカバリ

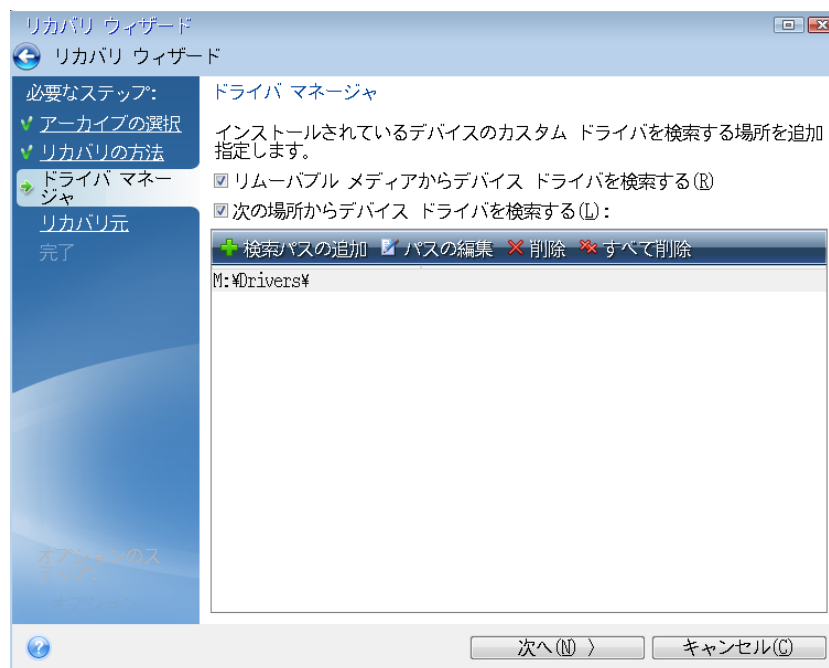
ほとんどの場合、システムのリカバリにはブータブル レスキュー メディアが適しています。レスキュー メディアには、Acronis Universal Restore アドオンが格納されている必要があります。そのため、True Image 2013 Plus Pack をインストールして、レスキュー メディアを再度作成する必要があります。

1. BIOS でレスキュー メディアを最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え (116ページ)」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。
3. [ようこそ] 画面の **[リカバリする]** の下にある **[マイ ディスク]** リンクをクリックして、リカバリ ウィザードを起動します。次に、リカバリするシステム ディスクのバックアップを選択します。スタンドアロン版の True Image 2013 でのドライブ文字は Windows でのドライブの認識方法と異なることがあるため、バックアップ ファイルのパスを指定する場合があります。このような場合、**[参照]** をクリックして、バックアップが保存されているディスクとフォルダを選択します。

4. **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択し、**[Acronis Universal Restore を使用]** チェックボックスをオンにします。



5. ターゲット ハードウェアに装着されているハード ディスク用の大容量記憶装置コントローラ (SCSI、RAID、ファイバ チャンネル アダプタなど)がわかっている場合は、**[ドライバ マネージャ]** の手順で、特定のハードウェア用のドライバ(複数可)を検索するロケーションを指定します。ドライバがフロッピー ディスクまたは CD に格納されている場合は、**[リムーバブル メディアからデバイス ドライバを検索]** チェックボックスをオンにします。ローカルのハード ディスクまたはネットワーク共有に格納されているドライバがある場合は、**[次のロケーションからデバイス ドライバを検索する]** チェックボックスをオンにします(デフォルトでオンになっていない場合)。**[検索パスの追加]** をクリックしてからドライバ(複数可)へのパスを指定します。



この手順で両方のチェックボックスをオンにすると、Acronis Universal Restore では次の 3 つのロケーションからドライバが検索されます。

- リムーバブル メディア
- この手順で指定したドライバ ストレージ フォルダ (複数可)
- Windows のデフォルトのドライバ ストレージ フォルダ (リカバリされるイメージ内)

使用可能なドライバの中から最適なものが検索され、リカバリされたシステムにインストールされます。

6. **[リカバリ元]** でシステム ディスクを選択します。次に、リカバリされるディスク (新しいシステム ディスク) のリカバリ先を指定します。この時点で、ターゲット ディスクが空かどうかチェックされます。空ではない場合は、ターゲット ディスクにパーティションが存在し必要なデータが含まれている可能性があることを知らせる確認ウィンドウが表示されます。パーティションの削除を確定するには、**[OK]** をクリックします。
7. **[完了]** の画面で処理の概要を確認して、**[実行]** をクリックします。

バックアップ元およびリカバリ先ディスクの容量が異なる場合、新しいディスク領域は、リカバリされる各パーティションに比例して配分されます。

システム パーティションのリカバリが成功したら、True Image 2013 を終了します。BIOS に移動し、システムのハードディスクを最初のブート デバイスにしてから、リカバリした Windows を起動します。

4.9 Acronis Universal Restore

4.9.1 Acronis Universal Restore の目的

Universal Restore は True Image 2013 Plus Pack の一部です。True Image 2013 Plus Pack には固有のライセンスがあり、独自のセットアップ ファイルからインストールします。新しくインストールした Universal Restore アドオンを起動用のリカバリ環境で機能させるには、ブータブルメディアを再度作成する必要があります。

システム ディスク イメージを、それが作成されたハードウェアまたは同一構成のハードウェアに、簡単に復元できます。ただし、ハードウェア障害などの状況で、マザーボードを交換したり、バージョンの異なるプロセッサを使用したりすると、リカバリされたシステムを起動できないことがあります。

通常、より高スペックなコンピュータにシステムを移動させようとした場合にも同じ結果になります。これは、新しいハードウェアが、イメージに含まれている重要なドライバと互換性がないからです。

Microsoft System Preparation Tool (Sysprep) を使用しても、この問題は解決しません。Sysprep で置き換えることができるのは、プラグ アンド プレイのデバイス ドライバ (サウンド カード、ネットワーク アダプタ、ビデオ カードなど) に限られているためです。

ただし、システムの HAL (Hardware Abstraction Layer) と大容量記憶装置デバイス ドライバは、ソース コンピュータとターゲット コンピュータの両方で同じである必要があります (Microsoft サポート技術情報の文書番号 302577 と 216915 をご参照ください)。

Acronis Universal Restore テクノロジは、重要な HAL および大容量記憶装置のドライバを置き換えることによって、ハードウェアに依存しないシステムの復元の効率的なソリューションを提供します。

Acronis Universal Restore は次の操作に使用できます。

1. さまざまなハードウェアで障害が発生したシステムの迅速なリカバリ

2. ハードウェアに依存しないオペレーティング システムのクローン作成

Acronis Universal Restore の使用上の制限

1. イメージのパーティション構造またはターゲット ディスクのパーティションがソース ディスクのパーティションと一致しないと、Acronis Universal Restore によってリカバリされたシステムは起動しない可能性があります。イメージから復元されたローダーは誤ったパーティションをポイントすることになり、システムが起動しなかったり、正しく動作しなかったりします。

これは、次の場合に発生することがあります。

- ソース ディスク全体ではなく、選択したパーティションのみをバックアップした場合
- ソース ディスク全体ではなく、選択したパーティションのみを復元した場合。システムが元のパーティション以外のパーティション上にある場合など、条件によってはローダーに混乱が生じて、復元されたシステムを起動できなくなります。

この問題を回避するには、システム ディスク全体をバックアップし、システム全体をリカバリすることをお勧めします。

2. Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ(F11 キー)を使用してコンピュータを起動した場合や、バックアップ イメージが Acronis セキュア ゾーンにある場合は、Acronis Universal Restore オプションが機能しません。これは、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャと Acronis セキュア ゾーンが主に同じコンピュータ上でのデータ リカバリを目的としているためです。

4.9.2 Acronis Universal Restore の一般的な原理

1. HAL および大容量記憶装置ドライバの自動選択

Acronis Universal Restore は、(復元されるイメージの)Windows デフォルト ドライバ ストレージフォルダで HAL および大容量記憶装置ドライバを検索し、復元先ハードウェアに最も適したドライバをインストールします。

カスタム ドライバ リポジトリ(ネットワーク ドライブまたは CD にある 1 つ以上のフォルダ)を指定して、このリポジトリでドライバを検索するようにすることもできます。さらに、Acronis Universal Restore はリムーバブル メディア上のドライバを検索することもできます。

Windows のデフォルトのドライバ ストレージ フォルダは、レジストリ キー

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\DevicePath のレジストリ値「DevicePath」で指定されています。通常、このストレージ フォルダは WINDOWS/inf です。

2. プラグ アンド プレイ デバイス用のドライバのインストールでは、Acronis Universal Restore は組み込みのプラグ アンド プレイの検出および設定処理を利用して、システム起動時に重要ではないデバイスのハードウェアの違いに対処します。このようなデバイスには、ビデオ、オーディオ、および USB が含まれます。このログオン段階で Windows にこの処理が行われます。新しいハードウェアが検出されないときは、後から手動でドライバをインストールできます。

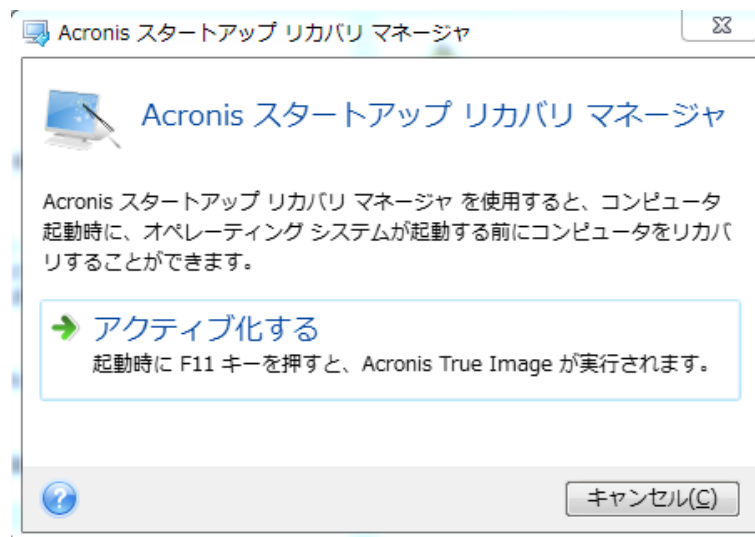
4.10 Acronis スタートアップ リカバリ マネージャの使用法

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、オペレーティング システムを読み込まずにローカル コンピュータ上で True Image 2013 を起動することができます。

Windows が読み込まれない場合でも、この機能により、True Image 2013 を単独で使用して、破損しているパーティションをリカバリすることができます。

コンピュータ起動時に Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用できるようにするための手順は、次のとおりです。

- [ツールとユーティリティ] タブをクリックし、[Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ] を選択します。
- [アクティブ化する] ボタンをクリックします。



注意

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、MBR(マスター ブート レコード)がスタートアップ リカバリ マネージャのブート コードで上書きされます。サード パーティ製のブート マネージャがインストールされている場合は、リカバリ マネージャをアクティブ化した後に、そのブート マネージャを再度アクティブ化する必要があります。Linux のローダー(LiLo、GRUB など)を使用している場合は、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化する前に、ローダーを MBR ではなく、Linux の root(または boot)パーティションのブート レコードにインストールすることをお勧めします。

障害が発生した場合は、コンピュータの電源を入れて、「Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager」というメッセージが表示されたら F11 キーを押します。スタンドアロン版の True Image 2013 が起動します。このスタンドアロン版と完全版との違いはごくわずかです。システムパーティションのイメージが格納されているバックアップを参照し、システムをリカバリします。

スタンドアロンの True Image 2013 で使用されるドライブ文字は、Windows でのドライブ文字とは異なることがあります。たとえば、スタンドアロン版の True Image 2013 の D: ディスクが、Windows の E: ディスクに対応していることもあります。ディスクのラベル、パーティション サイズ、ファイル システム、ドライブの性能、メーカー、およびモデル番号に関する情報を参照することによって、ディスクおよびパーティションを正しく特定することができます。

Try&Decide がオンの場合、以前にアクティブ化した Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用することはできません。Try モードでコンピュータを再起動すると、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを再び利用できるようになります。

4.11 ダイナミック/GPT ディスクおよびボリュームのリカバリについて

1) True Image 2013 では、ローカル ハード ドライブの次のロケーションへダイナミック ボリュームをリカバリすることができます。

- 元のロケーションへ(同じダイナミック ボリュームへ)
- 別のダイナミック ディスクまたはボリュームへ
- ダイナミック グループの未割り当て領域へ
- ベーシック ディスクへ

ダイナミック ボリュームをダイナミック グループの未割り当て領域にリカバリすると、リカバリされたボリュームの種類はバックアップ内でのボリュームの種類と同じになります。

ダイナミック ディスクにリカバリする際に、手動でダイナミック ボリュームのサイズを変更することはサポートされていません。リカバリ中にダイナミック ボリュームのサイズを変更する必要がある場合は、ベーシック ディスクにリカバリする必要があります。

ダイナミック ボリュームを新しい未フォーマット ディスクに「ベアメタル リカバリ」を行うと、リカバリされたボリュームはベーシックになります。リカバリされたボリュームをダイナミックのままにしておきたい場合は、ターゲット ディスクをダイナミックとして準備(パーティションが設定され、フォーマットされている)する必要があります。これは、Windows Disk Management スナップインなどの、サードパーティのツールを使用して行うことができます。

2) リカバリ後のターゲット ディスクのパーティションには次の種類があります。ご使用のコンピュータが UEFI をサポートしているかどうか、およびシステムが BIOS 起動であるか、UEFI 起動であるかどうかによって異なります。以下の表を参照してください。

	システムは BIOS 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)	システムは UEFI 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしていない	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。	処理完了後、パーティション スタイルは MBR のままとなります。お使いのオペレーティング システムではサポートされていないため、UEFI 起動はできません。
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。	ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換され、ターゲット ディスクの UEFI 起動が可能になります。
ソース ディスクは GPT であり、OS は UEFI をサポートしている	処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、システムは BIOS から起動できなくなります。	処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなり、オペレーティング システムは UEFI 起動が可能となります。

リカバリ後も Windows のブータビリティを確保するために、ソース ディスクのイメージをディスク モードでリカバリする必要があります。

- 3) 既存のボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームの種類は変化しません。例:
- ダイナミック ボリュームをベーシック ボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームはベーシックのままです。
 - ダイナミック ストライプ ボリュームをダイナミック スパン ボリュームにリカバリすると、ターゲット ボリュームはスパンのままです。
- 4) ベーシック ボリュームまたはディスクをダイナミック グループへリカバリする場合、次のようなパターンがあります。
- ベーシック ボリュームをダイナミック グループの未割り当て領域にリカバリすると、リカバリされたボリュームはダイナミックになります。
 - ベーシック ディスクを 2 つのディスクから構成されるダイナミック グループのダイナミック ディスクにリカバリすると、リカバリされたディスクはベーシックのままです。リカバリの実行先のダイナミック ディスクは「見つからない」状態となり、2 つ目のディスク上のスパン/ストライプ ダイナミック ボリュームは「エラー」になります。

4.12 [バックアップ保護] ダイアログボックス

バックアップ ファイルをパスワードで保護することができます。バックアップの作成時に、バックアップ オプションでパスワードによる保護を設定できます。

パスワードで保護されたバックアップからのデータのリカバリやマウント、パスワードで保護されたバックアップへの増分バックアップの追加を行う場合は、ウィンドウが表示され、パスワードが要求されるので、権限を持つユーザーしかアクセスできません。この場合、選択したバックアップ ファイルに対して正しいパスワードを指定する必要があります。正しいパスワードを指定すると、選択した処理を続行できます。

4.13 BIOS での起動順の並び替え

BIOS には、コンピュータの初期構成を行うためのセットアップ ユーティリティが組み込まれています。セットアップ ユーティリティを開始するには、コンピュータの電源をオンにした直後に開始される POST (power-on self test) シーケンス中に、特定のキーの組み合わせ (**Del**、**F1**、**Ctrl+Alt+Esc**、**Ctrl+Esc** キーなど、BIOS によって異なります) を押す必要があります。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、BIOS に組み込まれているセットアップ ユーティリティのメニューが表示されます。

メニューの外観、メニューに表示される項目と項目名は、BIOS の製造元によって異なります。コンピュータのマザーボード用の BIOS の製造元として最もよく知られているのは、Award/Phoenix と AMI です。また、標準的なセットアップ メニューの項目に関しては BIOS ごとの違いはほとんどありませんが、拡張(または高度な)セットアップの項目は、コンピュータおよび BIOS バージョンによって大幅に異なります。

BIOS メニューでは、特に**起動順**を調整することができます。

コンピュータ BIOS では、オペレーティング システムをハードディスクからだけでなく、CD-ROM、DVD-ROM、およびその他のデバイスからも起動できます。レスキュー メディア (CD、DVD、または USB スティック) デバイスを最初の起動デバイスにするなど、起動順の変更が必要になることがあります。

コンピュータに C:、D:、E:、および F: というドライブ文字が割り当てられた複数のハードディスクがある場合は、オペレーティング システムをたとえばディスク E: から起動するように起動順を変更することができます。この場合、起動順を E:、CD-ROM:、A:、C:、D: のように設定する必要があります。

これは、起動順の一覧にある最初のデバイスから起動が実行されることを意味するものではありません。単に、オペレーティング システムの起動がこのデバイスで**最初の試行**であることを意味します。ディスク E: にオペレーティング システムがない場合や、E: がアクティブでない場合もあります。この場合、BIOS は一覧に記載された次のデバイスを照会します。

BIOS は、IDE コントローラに接続されている順序(プライマリ マスタ、プライマリ スレーブ、セカンダリ マスタ、セカンダリ スレーブの順)に従ってディスクに番号を付け、次に SCSI ハードディスクに番号を付けます。

BIOS セットアップで起動順を変更した場合、この順序どおりではなくなります。たとえば、起動をハードディスク E: から実行するよう指定した場合、通常的环境下では 3 番目になるハードディスク(一般的には IDE ハードディスクのセカンダリ マスタ)から番号付けが開始されます。

マザーボードの中には、いわゆるブート メニューが用意されているものもあります。ブート メニューは、特定のキーまたはキーの組み合わせ、たとえば F12 キーなどを押すと開きます。ブート メニューを使用すれば、BIOS 設定を変更することなく、ブータブル デバイスのリストからブート デバイスを選択できます。

4.14 リカバリ オプション

[ディスク リカバリ オプション]、[ファイルのリカバリ オプション]、および [電子メールのリカバリ オプション] ウィンドウで、それぞれ、ディスク/パーティション、ファイル、および電子メールのリカバリ処理のオプションを設定できます。アプリケーションをインストールすると、すべてのオプションは初期値に設定されます。それらのオプションは、現在のリカバリ処理用のみに、または、その後のすべてのリカバリ処理用に変更できます。[設定をデフォルトとして保存する] チェックボックスをオンにすると、変更した設定が今後のリカバリ作業すべてにデフォルトで適用されます。

ディスク リカバリ オプション、ファイル リカバリ オプション、および電子メール リカバリ オプションは完全に独立しており、個別に設定する必要があるので注意してください。

製品のインストール後に変更したオプションをすべて初期値にリセットする場合は、[初期設定にリセット] ボタンをクリックします。

セクションの内容

ディスク リカバリ モード	117
リカバリ処理前後に実行するコマンド	118
ベリファイ オプション	118
コンピュータの再起動	119
ファイル リカバリ オプション	119
ファイル上書きオプション	119
リカバリ処理のパフォーマンス	120
リカバリ処理の通知	120

4.14.1 ディスク リカバリ モード

このオプションを使用して、イメージ バックアップのディスク リカバリ モードを選択できます。

- **[セクタ単位のリカバリ]** - ディスクまたはパーティションの使用済みセクタと未使用セクタの両方をリカバリする場合にこのチェックボックスをオンにします。このオプションが有効になるのは、セクタ単位バックアップのリカバリを選択した場合のみです。

4.14.2 リカバリ処理前後に実行するコマンド

リカバリ処理の前後に自動的に実行するコマンド(またはバッチ ファイル)を指定することができます。

たとえば、リカバリを開始する前に特定の Windows プロセスを開始/停止することや、リカバリ対象データのウィルスの有無を調べることができます。

コマンド(バッチ ファイル)を指定する手順は、次のとおりです。

- リカバリ処理の開始前に実行するコマンドを **[処理前に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。
- リカバリ処理の終了後に実行するコマンドを **[処理後に実行するコマンド]** フィールドで選択します。新しいコマンドを作成する、または新しいバッチ ファイルを選択するには、**[編集]** ボタンをクリックします。

ユーザーの入力を必要とする対話型のコマンド(pause など)は実行しないでください。これらのコマンドは、サポートされていません。

リカバリ用ユーザー コマンドの編集

リカバリの前または後に実行するコマンドを指定することができます。

- **[コマンド]** フィールドにコマンドを入力するか、一覧から選択します。[...] をクリックすると、バッチ ファイルを選択できます。
- **[作業ディレクトリ]** フィールドに、コマンド実行のためのパスを入力するか、入力済みのパスの一覧から選択します。
- コマンド実行引数を **[引数]** フィールドに入力するか、一覧から選択します。

[コマンドの実行が完了するまで処理を行わない](デフォルトでは有効)パラメータを無効にすると、コマンド実行と同時にリカバリ処理を実行できません。

[ユーザー コマンドが失敗したら処理を中止する] パラメータを有効にした場合は(デフォルトでは有効)、コマンド実行でエラーが発生すると処理が中止されます。

入力したコマンドをテストするには、**[コマンドのテスト]** ボタンをクリックします。

4.14.3 ベリファイ オプション

- **[リカバリ前にバックアップをベリファイする]**

デフォルトの設定は **[無効]** です。

バックアップからデータをリカバリする前に、True Image 2013 で整合性をチェックすることができます。バックアップが破損している疑いがある場合は、このオプションを有効にします。

- **[リカバリ後にファイル システムをチェックする]**

デフォルトの設定は **[無効]** です。

イメージからパーティションをリカバリ済みの場合、True Image 2013 でファイル システムの整合性をチェックできます。これを行うには、このオプションを有効にします。

このオプションの使用に関する制限

- ファイル システムのチェックは、FAT16/32 および NTFS ファイル システムを使用してパーティションをリカバリするときのみ使用することができます。
- システム パーティションを元の場所にリカバリする場合のように、リカバリ中に再起動が必要な場合は、ファイル システムはチェックされません。

4.14.4 コンピュータの再起動

デフォルトの設定は **[無効]** です。

リカバリが必要な場合に自動的にコンピュータを再起動させるには、**[リカバリに必要であればコンピュータを自動的に再起動する]** チェックボックスをオンにします。このオプションは、オペレーティング システムによってロックされているパーティションをリカバリする必要がある場合に使用します。このオプションをオンにすると、リカバリ時にユーザーの操作なしでコンピュータが再起動するようになります。

4.14.5 ファイル リカバリ オプション

次のファイル リカバリ オプションを選択できます。

- **[元のセキュリティ設定でファイルをリカバリする]**: バックアップ時にファイルのセキュリティ設定を保存してある場合(「バックアップ用ファイル レベルのセキュリティ設定 (80ページ)」を参照してください)は、ファイルの元のセキュリティ設定をリカバリするか、リカバリ先のフォルダのセキュリティ設定をファイルに継承させるかを選択できます。このオプションは、ファイルまたはフォルダのバックアップからファイルをリカバリする場合にのみ有効です。
- **[リカバリされたファイルに現在の日時を設定する]**: ファイルの日付/時刻をバックアップからリカバリするか、現在の日付/時刻を割り当てるかを選択することができます。デフォルトでは、バックアップの日付と時刻が割り当てられます。

4.14.6 ファイル上書きオプション

バックアップにあるファイルと同じファイル名が復元先フォルダで見つかった場合の処理を選択します。

このオプションは、ファイルレベルのバックアップからデータを復元する場合にのみ使用できます。

[既存のファイルを上書きする] チェックボックスをオンにすると、ハードディスクにあるファイルよりバックアップにあるファイルの方が無条件で優先されますが、デフォルト設定では、新しいファイルやフォルダは上書きから保護されます。これらのファイルやフォルダも上書きする場合は、該当するチェックボックスをオフにします。

一部のファイルは上書きする必要がない場合:

- **[隠しファイルと隠しフォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべての隠しファイルと隠しフォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[システム ファイルとシステム フォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべてのシステム ファイルとシステム フォルダの上書きを有効または無効にします。

- **[新しいファイルとフォルダ]** チェックボックスをオン/オフすることで、すべての新しいファイルとフォルダの上書きを有効または無効にします。
- **[特定のファイルやフォルダを追加する]** をクリックして、上書きしたくないカスタム ファイルとカスタム フォルダの一覧を管理します。
 - 特定のファイルの上書きを無効にするには、**[追加]** ボタンをクリックして、除外の条件を作成します。
 - 条件の指定には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、拡張子 **.exe** を持つすべてのファイルを保護するには、***.exe** を追加します。**My????.exe** を追加すると、「my」で始まり 5 文字で構成される名前が付いた拡張子 **.exe** のファイルがすべて保護されます。

たとえば誤って追加した条件を削除するには、その条件の右にある **[削除]** アイコンをクリックします。

4.14.7 リカバリ処理のパフォーマンス

[パフォーマンス] タブでは、以下の設定を行うことができます。

処理の優先順位

バックアップ処理やリカバリ処理の優先度を変更すると、(優先度の上げ下げによって)バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、実行中の他のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあります。システムで実行中のどの処理に対しても、優先順位に応じて、その処理に割り当てられる CPU の使用時間とシステム リソースが決定されます。処理の優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。バックアップやリカバリの優先度を上げると、同時に実行している他の処理からリソースを取得するため、バックアップ処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

処理の優先度は、次のいずれかに設定することができます。

- **[低]**(デフォルトで有効) - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は低下しますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[標準]** - バックアップ処理やリカバリ処理に、他の処理と同じ優先度が割り当てられます。
- **[高]** - バックアップ処理やリカバリ処理の速度は向上しますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、True Image 2013 による CPU 使用率が 100% になる場合がありますので注意してください。

4.14.8 リカバリ処理の通知

バックアップまたはリカバリの処理には 1 時間以上かかる場合があります。True Image 2013 では、この処理の終了時に電子メールの通知を受け取ることができます。また、処理中に発行されたメッセージや、処理完了後の詳細な処理ログも送信されます。

デフォルトでは、すべての通知は無効になっています。

空きディスク領域のしきい値

バックアップ ストレージの空き領域が指定したしきい値より少なくなったときに、通知を受け取ることができます。バックアップの開始後、選択したバックアップの場所の空き領域がその時点で既に指

定値より少ないことが検出された場合、True Image 2013 では実際のバックアップ処理は開始されず、対応する通知メッセージが直ちに表示されます。メッセージには 3 つの選択肢が示されます。メッセージを無視してバックアップを続行するか、バックアップを保存する別の場所を参照するか、バックアップをキャンセルするかのいずれかを選択してください。

バックアップの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合も、同じメッセージが表示され、同様に選択する必要があります。

空きディスク領域のしきい値を設定する手順は、次のとおりです。

- **[ディスクの空き領域が不十分なときに通知メッセージを表示する]** チェックボックスをオンにします。
- **[サイズ]** ボックスでしきい値を入力または選択し、単位を選択します。

True Image 2013 では、次のストレージ デバイスの空き領域を監視できます。

- ローカル ハード ドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有 (SMB/NFS)

[エラー処理] 設定で **[処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)]** チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

FTP サーバーと CD/DVD ドライブについては、このオプションを有効にすることはできません。

電子メール通知

リカバリ処理の通知に使用する電子メール アカウントを指定することができます。

電子メールによる通知を設定する手順は、次のとおりです。

- **[処理状態に関する電子メール通知を送信する]** チェックボックスを選択します。
- 電子メール アドレスを **[電子メール アドレス]** フィールドに入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
- 送信メール サーバー (SMTP) を **[送信メール サーバー (SMTP)]** フィールドに入力します。
- 送信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 25 に設定されます。
- **[ユーザー名]** フィールドにユーザー名を入力します。
- パスワードを **[パスワード]** フィールドに入力します。
- 設定が正しいかどうかをチェックするには、**[テスト メッセージの送信]** ボタンをクリックします。

その他の通知設定:

- 処理の完了に関する通知を送信するには、**[処理が正常に完了したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の失敗に関する通知を送信するには、**[処理が失敗したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理メッセージを添付して通知を送信するには、**[ユーザーの操作が必要な場合に通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の詳細なログを添付して通知を送信するには、**[完全なログを通知に含める]** チェックボックスをオンにします。

4.15 コンピュータを工場出荷時の設定に復元するには

新品のコンピュータに工場出荷時の構成のバックアップがバンドルされていた場合、True Image 2013 はこのバックアップでリカバリし、このコンピュータを工場出荷時の設定に戻すことができます。システムは、購入時の状態に戻ります。

注意: 復元すると、Acronis セキュア ゾーン内のバックアップすべてを含め、コンピュータ上の個人データやプログラムはすべて消去されます。

コンピュータに工場出荷時の構成を復元できるかどうかをチェックする方法

True Image 2013 で、コンピュータを工場出荷時の設定に戻す方法は次の 3 通りです。

- 直接、Windows で。この場合、True Image 2013 の標準リカバリ機能を使用します。
- Acronis スタートアップ リカバリ マネージャから起動する。
- 工場出荷時の設定を含むブータブル メディアから起動する。

工場出荷時の環境設定がコンピュータの Acronis セキュア ゾーンにバックアップされている場合には、Windows から、または Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用して初期状態にリカバリできます。このバックアップは、通常、コンピュータをエンド ユーザーに提供したハードウェア サプライヤが作成し、Acronis セキュア ゾーンに保存しています。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアからリカバリする場合、このメディアには工場出荷時のイメージ構成がバックアップされています。

Windows で工場出荷時の設定を復元するには

Windows で工場出荷時の構成を復元するには、True Image 2013 の標準リカバリ機能を使用します。

コンピュータを工場出荷時の設定に復元する手順は次のとおりです。

1. True Image 2013 を起動します。
2. **[バックアップとリカバリ]** タブをクリックします。
3. バックアップのリストで、「初期状態」という名前のバックアップを選択します。
4. **[リカバリする]** をクリックします。
5. **[再起動]** をクリックします。

この処理は、コンピュータの再起動後も継続されます。処理の完了後、コンピュータには、初期状態の Windows がロードされます。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用して工場出荷時の設定を復元するには

コンピュータを工場出荷時の設定に復元する手順は次のとおりです。

1. コンピュータの電源をオンにします。
2. プロンプトが表示されたら、**F11** を押して、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを実行します。
3. **[リカバリする]** を選択します。
バックアップが複数のバージョンから構成されている場合、リカバリするバージョンを選択します。

4. **[はい]** をクリックして処理を確定します。

処理が完了すると、コンピュータは再起動されるか、または電源がオフになります。次回、コンピュータを起動すると、初期状態の Windows がロードされます。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアから工場出荷時の設定を復元するには

ここで説明する手順は、ユーザー自身が作成した、またはハードウェア サプライヤから新品のコンピュータとともに提供された工場出荷時の設定を含むブータブル メディアが対象です。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成手順については、「工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成 (199ページ)」を参照してください。

コンピュータを工場出荷時の設定に復元する手順は次のとおりです。

1. 工場出荷時の設定を含むブータブル メディアを使用して、コンピュータを起動します。
2. **[リカバリする]** を選択します。
3. **[はい]** をクリックして処理を確定します。

処理が完了すると、コンピュータは再起動されるか、または電源がオフになります。次回、コンピュータを起動すると、初期状態の Windows がロードされます。

5 データの同期

セクションの内容

同期機能について	124
データのセキュリティを確保する方法	124
Acronis サーバーへのログイン	125
同期可能な対象と不可能な対象	125
同期アイコン	126
デフォルトの同期	127
同期の作成	128
モバイル デバイスの同期	132
同期されるファイルのバージョン	133
Acronis Cloud で領域をクリーンアップする方法	133
削除されたファイルをリカバリする方法	135
フォルダの共有方法	136
ファイルやフォルダへの公開リンクの作成方法	137
アカウントからデバイスをリンク解除する方法	137
同期共有の招待を取り消す方法	138
同期を解除する方法	139

5.1 同期機能について

同期機能の主な利点は、コンピュータや iOS および Android オペレーティング システムが搭載されたすべてのモバイル デバイスで同じデータ(ドキュメント、写真、ビデオなど)を使用できることです。いつでもどこでも簡単にデータを利用できます。電子メールで自分にファイルを送ったり、常にフラッシュ スティックを持ち歩いたりする必要はなくなります。

- Acronis Sync を使用すると、共同プロジェクトで作業している同僚などの他の人々とデータを同期できます。同期により、全員が常に同じプロジェクト ファイルを使用できます。
- 必要な数の同期を作成することができます。たとえば、コンピュータの重要なデータの同期を維持するためと友人や親戚と写真を共有するために別々の同期を使用できます。
- Acronis Cloud は同期されたファイルおよびそれらのファイルのバージョンを維持します。これにより、必要なときにいつでも前のファイルのバージョンに戻すことができます。
- すべてのコンピュータおよびモバイル デバイスから Acronis Cloud 内のファイルにアクセスできます。
- また、アプリケーションをインストールせずにウェブ ブラウザを使用して Cloud にアクセスすることもできます。

5.2 データのセキュリティを確保する方法

個人用ファイルが犯罪者に悪用されないようにする必要があります。モバイル デバイスの場合は同期されているすべてのデータがインターネット経由で転送されるので特に注意する必要があります。

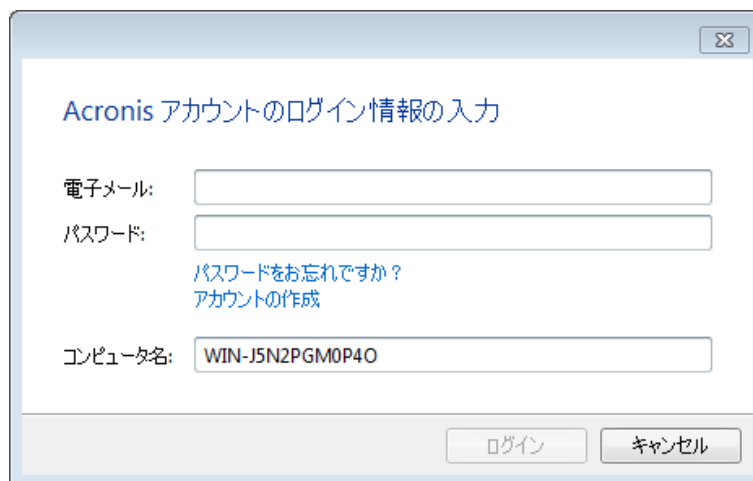
アクロニスはデータの安全性を保証します。第 1 に、インターネットと LAN の両方で暗号化されたプロトコル(SSL、TLS)を使用してすべてのデータを転送します。同期されているデータにアクセ

スするには、アカウントの電子メール アドレスとパスワードを入力することによってアカウントにサインインします。

さらに、データはサーバーに暗号化された形式で保存されます。暗号化されたデータにアクセスできるのは、ユーザーのみです。

5.3 Acronis サーバーへのログイン

データの同期機能またはオンライン バックアップの使用を開始するには、Acronis のマイ アカウントで使用している電子メール アドレスとパスワードを入力する必要があります。また、コンピュータに名前を付けることをお勧めします。オペレーティング システムに割り当てられた名前である必要はなく、自由に名前を入力できます。



Acronis のマイ アカウントを所有していない場合は、**[アカウントの作成]** をクリックし、アクロニスのウェブサイトにある登録フォームに情報を入力します。

パスワードを忘れた場合は、**[パスワードをお忘れですか?]** をクリックして、開かれるウェブ ページの指示に従って操作します。新しいパスワードが電子メールで送信されます。

必要な情報を入力し、**[ログイン]** をクリックします。

5.4 同期可能な対象と不可能な対象

2 つ以上のフォルダに保存されたデータは、同期することができます。これらのフォルダを配置できるロケーション、およびそのロケーションに格納できるデータについて考えてみましょう。

ストレージの種類

同期処理は、次の対象の間で実行できます。

- 同じコンピュータ上の 2 つのローカル フォルダ (1 つのフォルダとそのサブフォルダを除く)
- コンピュータ上のローカル フォルダとストレージ デバイス上のフォルダ (USB フラッシュ ドライブ、USB ハード ドライブ、NAS など)
- 2 つのストレージ デバイス上の 2 つのフォルダ
- 2 台以上のコンピュータにある 2 つ以上のフォルダ

1 つの同期処理では、全コンピュータとストレージ デバイスで、1 つの同期フォルダのみを割り当てることができます(2 つのローカル フォルダ間の同期を除く)。

1 つのファイルのみ同期用に選択することはできません。ファイルを同期するには、該当のファイルが入っているフォルダを選択します。

データの種類

次のデータを同期することができます。

- 以下に示すファイルを除く、すべてのファイル(写真、音楽、ビデオ、ドキュメントなど)
ネイティブの FAT32 および NTFS ファイル属性のみが同期されます。同期されるフォルダが異なるファイル システムに属している場合、両方のファイル システムでサポートされる属性のみが同期されません。
- 同期フォルダ内のその他のフォルダ(つまり、同期サブフォルダ)とその内容

次のデータは同期することができません。

- ディスクとパーティション
- システム ファイルとフォルダ
- 隠しファイルとフォルダ
- 一時ファイルとフォルダ
- システム レジストリ
- データベース
- 電子メール プログラムのデータ(Microsoft Outlook およびその他のプログラムを含む)
- 個別のファイルまたはフォルダとして表現できないその他のデータ(たとえば、アドレス帳の連絡先など)
- Windows 7 および Windows 8 ライブラリ(ドキュメント、音楽など)

5.5 同期アイコン

同期の操作をしている間は特別なアイコンが表示されます。アイコンは次の情報を提供します。

- 同期の種類と現在の状態(このアイコンは同期ボックスと通知領域に表示されます)。
- 同期されたファイルとフォルダの現在の状態(このアイコンは Acronis Time Explorer および Windows エクスプローラに表示されます)。

同期ボックス

同期の種類のアイコン:



同一コンピュータ内での同期 (128ページ) (リムーバブル ストレージ デバイスとリモート ストレージ デバイスでの同期を含む)







同じアカウントのコンピュータ間で同期を行う場合(たとえば、自宅のコンピュータ間)、詳細については、「自身のコンピュータ間でデータを同期する方法 (128ページ)」を参照してください。






アカウントが異なるコンピュータ間で同期を行う場合（たとえば、自己所有のコンピュータと友人のコンピュータ間など）、詳細については、「他の人のコンピュータとデータを同期する方法（129ページ）」参照してください。

同期の状態のアイコン:

-  前回の同期が正常に完了しました。
-  同期が現在進行中です。
-  同期は一時停止されています。
-  前回の同期でエラーが発生しました。





Windows エクスプローラ

ファイルとフォルダの同期状態アイコン:

-  ファイルまたはフォルダが同期されます。
-  ファイルまたはフォルダが現在同期されています。
-  エラーのためにファイルまたはフォルダが同期されていません。

通知領域

同期の状態のアイコン:

-  前回の同期が正常に完了しました。
-  (回転) 同期が現在進行中です。
-  (静止) すべての同期が一時停止されたか各同期の参加者が 1 人だけです。
-  前回の同期でエラーが発生しました。

5.6 デフォルトの同期

True Image 2013 をインストールすると、インストーラによってデフォルトの同期が作成されます。この同期のデフォルト名前は Sync です。

この同期には次のような主な機能があります。

- インストールを完了した直後に使用できます。Acronis のマイ アカウントにサインインした場合、同期するファイルをデフォルトの同期フォルダにドラッグするだけです。
- デフォルトの同期は常に Acronis Cloud と同期されます。このストレージとは、同期を解除することはできません。
- またファイルのバージョンが常に Acronis Cloud に保存されます。
- True Image 2013 がインストールされている限り、デフォルトの同期フォルダを削除することはできません。たとえば、Windows エクスプローラを使用してフォルダを削除した場合、次のプログラム起動時にフォルダが再作成されます。
- デフォルトの同期フォルダの内容は、同じ Acronis マイ アカウントに登録された他のコンピュータ上のデフォルトの同期フォルダと自動的に同期されます。

- さらに、True Image アプリケーションがインストールされているモバイル デバイスとも自動的に同期されます。

デフォルトの同期を使用すると最も簡単にデータを同期できます。必要な場合は他の同期を作成することもできます。

5.7 同期の作成

新しい同期の作成を始める前に、新しい同期で使用するコンピュータやストレージ デバイスを選択します。次に、以下の条件が満たされていることを確認します。

- True Image 2013 または True Image Home 2012 がすべてのコンピュータにインストールされている。
- ローカルの接続が確立されている (LAN 経由でコンピュータを接続する場合)。
- 使用するコンピュータの全所有者が Acronis のアカウントを持っている。
- すべてのコンピュータがインターネットに接続できる。

新しい同期で使用するコンピュータやストレージ デバイスに応じて、次のいずれかの同期方法を選択します。

- 同一コンピュータ内での同期 (128ページ) (リムーバブル ストレージ デバイスとリモート ストレージ デバイスでの同期を含む)
- 2 台以上のコンピュータ間での同期 (128ページ)

必要な場合は、これらの 2 種類の同期を 1 つの同期に組み合わせることができます。

5.7.1 自身のコンピュータ間でデータを同期する方法

同じ Acronis のアカウントに属する 2 台以上のコンピュータの間でデータを同期する方法について説明します。たとえば、自宅にある複数のコンピュータ間で、または自宅のコンピュータと事務所のコンピュータの間で、データを同期する必要があるとします。

両方のコンピュータでデフォルトの同期フォルダを使用する場合、手順は非常に簡単です。

1. True Image 2013 を両方のコンピュータにインストールします。
2. コンピュータからマイ アカウントでサインインします。
3. 同期するファイルを Sync フォルダにドラッグすると、それらがすべてのコンピュータで自動的に同期されます。

Sync フォルダには、ファイルとフォルダの両方を置くことができます。

5.7.2 ローカル フォルダと同期する方法

1 台のコンピュータ上で選択した任意の 2 つのフォルダを同期することができます。これには次のロケーションにあるフォルダが含まれます。

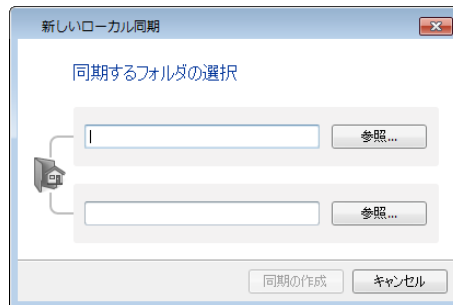
- コンピュータのハード ディスク
- リムーバブル ストレージ デバイスまたはリモート ストレージ デバイス
- USB フラッシュ ドライブ
- USB ハード ドライブ

- NAS(ネットワーク接続ストレージ)デバイス

NAS または USB ドライブにあるフォルダを同期する場合、新しい同期を作成する前に、NAS との接続が確立していること、または USB ドライブがコンピュータに接続されていることを確認してください。

2 つのローカル フォルダを同期する手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 を起動し、**[同期]** タブをクリックします。
2. **[ローカル フォルダの同期]** をクリックします。
3. 表示されるウィンドウで、**[参照...]** をクリックし、同期する最初のフォルダを指定します。



4. 同じ方法で 2 つ目のフォルダを指定します。
5. **[同期の作成]** をクリックします。

Windows エクスプローラから新しい同期を作成する方法もあります。同期するフォルダを右クリックし、**[同期]** -> **[同期先]** -> **[ローカル フォルダ...]** を選択します。表示される **[フォルダーの選択]** ウィンドウでフォルダを選択します。

この方法で同期する場合は、次のようないくつかの注意点があります。

- 同期されるフォルダのいずれかをリモートの SMB(サーバー メッセージ ブロック) 共有に置くことができます。共有がマップされているかどうかは関係ありません。

ヒント: 共有フォルダを使用すると、共有フォルダが置かれているコンピュータに True Image 2013 をインストールせずに 2 台のコンピュータで同期することができます。

- リムーバブル デバイスまたは NAS を取り外すと、同期が一時停止します。デバイスを再び取り付けると同期が再開されます。
- 同期を作成した後に、別のコンピュータまたは Acronis Cloud に同期を追加することができます。

ヒント: 定期的にアップデートされるローカル フォルダのコピーを USB ドライブに保存する場合、先に空のフォルダを USB ドライブに作成し、後でそれを同期フォルダとして選択します。

ヒント: コンピュータで同期フォルダの処理を行うときは、USB ドライブを取り付けた状態にしておきます。第 1 に、作業の最後にファイルを同期することを忘れることがありません。第 2 に、True Image 2013 は、データの変更を段階的に素早く処理します。

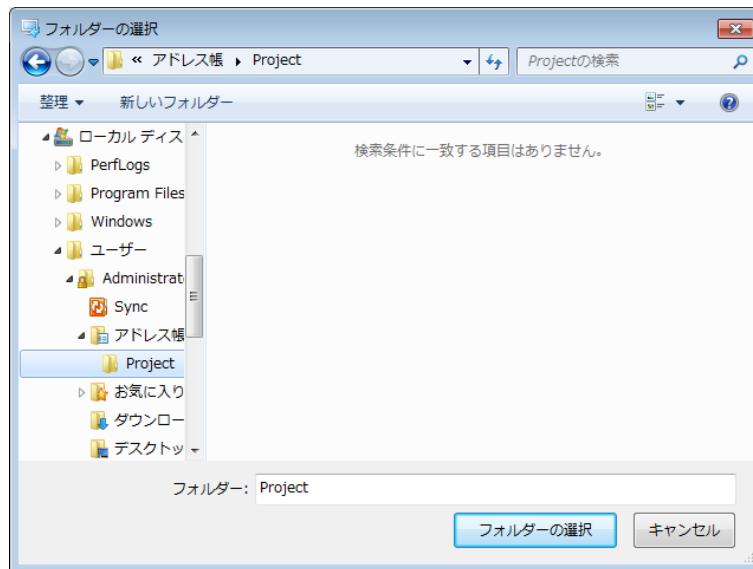
5.7.3 他の人のコンピュータとデータを同期する方法

異なる Acronis アカウントに属するコンピュータ間でデータを同期することができます。たとえば、同じプロジェクトで作業している同僚と同期するとします。

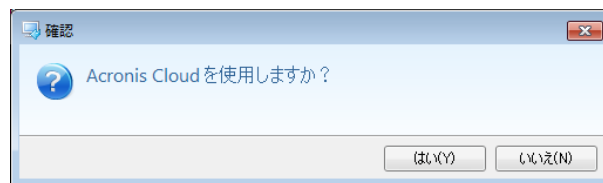
同期を所有するコンピュータで実行する手順は、次のとおりです。

同期の設定を変更する、他のユーザーを同期に招待する、同期を削除する、などの操作は同期の所有者のみが実行できます。

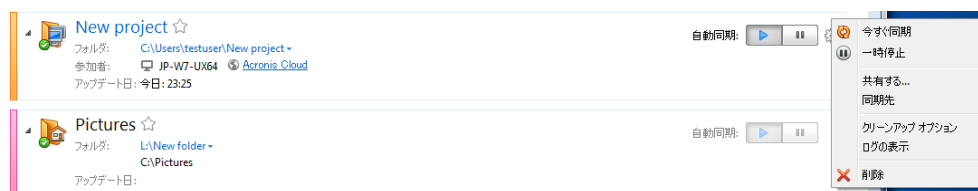
1. True Image 2013 を起動し、**[新規同期]** をクリックします。
2. 表示されるウィンドウで同期するフォルダを参照し、**[フォルダーの選択]** をクリックします。



3. データのバージョンを Acronis Cloud に保存する場合は、**[確認]** ウィンドウで **[はい]** をクリックし、保存しない場合は、**[いいえ]** をクリックします。

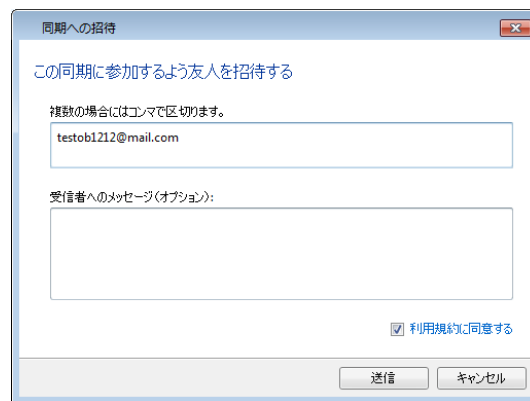


4. 作成された同期ボックスで **[設定]** アイコン(⚙️)をクリックし、**[共有する...]** を選択します。



5. 招待するユーザーの電子メール アドレスを 1 件以上入力します。複数のユーザーを招待する場合はカンマで区切ります。オプションで、招待するユーザーへのメッセージを入力することができます。

6. **[利用規約に同意する]** チェックボックスをオンにし、**[送信]** をクリックします。



同期への招待

この同期に参加するよう友人を招待する

複数の場合にはコマで区切ります。

testob1212@mail.com

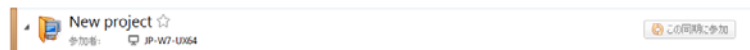
受信者へのメッセージ(オプション):

利用規約に同意する

送信 キャンセル

招待されたユーザーが実行する手順は、次のとおりです

1. 同期に招待する電子メール メッセージを見つけて開きます。
2. 同期に参加するには、**[招待を受ける]** をクリックします。受け入れを完了するための適切なウェブ ページが表示されます。
3. True Image 2013 を起動します。
4. 目的の同期ボックスを見つけて、**[この同期に参加する]** をクリックします。



5. **[フォルダの参照]** ウィンドウで、同期するフォルダを選択し、**[OK]** をクリックします。

3 台以上のコンピュータで同期するには

3 台以上のコンピュータ間で同期を作成する場合は、次の同僚を同期に招待します。同僚の電子メール アドレスを入力します。コンピュータの所有者は招待したユーザーに対して上記の手順を実行する必要があります。他のすべてのユーザーについて同様の手順を実行します。

ヒント: ファイルを友人と同期する場合、各ユーザーは同期に空のフォルダを選択し、この空のフォルダ内にファイルが入ったフォルダを移動することをお勧めします。結果的に、自分自身のファイルと友人のファイルは、別々のサブフォルダに保存されることとなります。したがって、同期フォルダ内でファイルが混乱することを防止できます。

同期の競合の解決

同期の競合は 2 台以上のコンピュータ間での同期でのみ発生します。これは、別のユーザー（親戚、友人、または同僚）とデータを同期するときに発生します。

たとえば、同期フォルダにある同じファイルを、自分自身と友人が編集している場合などです。2 人がファイルを変更して同時に保存した場合、True Image 2013 が 1 回の同期操作でファイルの変更を 2 つ（自分自身と友人の変更）処理する必要があります。通常、ファイルの変更は 1 つのみです。この競合は、最初に保存されたファイルの名前を変更することによって解決できます。これで、自分自身と友人の 2 つのファイルが同期フォルダ内に存在します。2 ファイルのうち、1 ファイルは元のファイル名のままになります。もう 1 つのファイルは、元のファイル名、ファイルを変更したコンピュータの名前、ファイルの保存時刻に基づいて名前が付けられます。

変更されたファイル名の例

2011 年 4 月 15 日に、自分自身と友人がファイル **file_name.doc** を編集していると仮定します。自分自身は 10 時 4 分に変更を保存し、友人は 10 時 6 分に変更を保存しました。同期が実行された後、自分自身のフォルダには次のファイルが入っています。

- **file_name.doc**: 友人の変更が適用されたファイル
- **file_name your_computer_name 15.04.2011 10.04.doc**: 自分自身の変更が適用されたファイル

自分自身と友人が、同期フォルダ内で、ファイル/サブフォルダの作成、保存、名前変更、削除を同時に実行するたびに、同期の競合が発生します。競合には、さまざまなパターンが考えられますが、ファイルまたはサブフォルダの削除の発生は、1 つのパターンのときのみに限られます。削除されるのは、両者が同じファイルまたはサブフォルダを同時に削除した場合です。それ以外の場合、True Image 2013 では、ファイルが 1 つまたは 2 つ保持され、いずれかの名前が変更されることとなります。

5.8 モバイル デバイスの同期

モバイル デバイスは Acronis Cloud および True Image 2013 をインストールしたすべてのコンピュータと自動的に同期されます。

同期を開始する手順は、次のとおりです。

1. Acronis True Image アプリケーションをインストールします。「True Image アプリケーションをモバイル デバイスにインストールする方法 (132 ページ)」を参照してください。
2. アプリケーションを起動します。
3. マイ アカウントの電子メール アドレスとパスワードを入力します。
4. **[サインイン]** をタップします。

サインインすると、デバイスの同期が自動的に開始されます。

デフォルトの設定を変更しない場合、その後のサインインと同期は自動的に続行されます。

5.8.1 True Image アプリケーションをモバイル デバイスにインストールする方法

モバイル デバイスと同期するには、適切な True Image アプリケーションをインストールする必要があります。

モバイル デバイスに応じて、App Store または Google Play にアクセスし、True Image アプリケーションを検索します。

たとえば、iOS 用の True Image アプリケーションを検索してインストールする手順は、次のとおりです。

1. iPhone で **App Store** を開きます。
2. **[検索]** アイコンをタップします。
3. 検索フィールドに「**acronis**」と入力します。
4. 検索結果で **acronis true image** を選択し、アプリケーションのページに移動します。
5. 標準的なインストール手順に従います。

Android アプリケーションを見つけてインストールする手順もほとんど同じです。

5.9 同期されるファイルのバージョン

True Image 2013 では、同期の結果としてファイルに適用された変更を取り消すことができます。一部のファイルに不適切な変更が適用されたとわかった場合は、そのファイルの以前のバージョンを参照し、正しいバージョンを選択して、そのバージョンにロールバックできます。詳細については、「以前のファイル バージョンへの復帰 (133ページ)」を参照してください。

すべてのバージョンは、Acronis Cloud に保存され、インターネット経由でアクセスできます。Acronis Cloud を使用するには、Acronis Cloud サービスのサブスクリプションを持っている必要があります。サブスクリプションを取得していない場合は、250 GB のストレージ領域を使用できる試用版サブスクリプションが自動的に付与されます。詳細については、「サブスクリプション情報 (141ページ)」を参照してください。

自動クリーンアップ ルールを設定して、古いバージョンを削除することができます。詳細については、「Acronis Cloud で領域をクリーンアップする方法 (133ページ)」を参照してください。

複数のバージョンを保存するオプションをオフにすると、最新バージョンを除くすべてのバージョンが Cloud から削除されます。

True Image 2013 の試用版を使用している場合、試用期間が切れると、最新バージョンを含めて、保存されているすべてのバージョンが Cloud から削除されます。

各ユーザーは、オプションをオンにして、他のユーザーに依存しないでファイル バージョンを管理します。別の Acronis のアカウントを使用している友人と一部のデータを同期する場合、このオプションをオンにするかどうかは自分自身で判断できます。Cloud で割り当てられるバージョン ストレージも、個別に設定されます。

5.9.1 以前のファイル バージョンへの復帰

同期の履歴を Acronis Cloud に保存している場合、現在のバージョンの同期ファイルを以前のバージョンに戻すことができます。望ましくない同期処理を一部取り消す場合は、この方法が役立ちます。

以前のファイル バージョンに戻すには、次の手順に従います。

1. メイン画面の **[同期]** タブで、必要なファイルが保存された同期ボックスを見つけます。**[Acronis Cloud]** リンクをクリックします。
2. 同期項目のリストがウェブ ブラウザに表示されたら、前のバージョンに戻すファイルを選択します。右側の歯車アイコンをクリックします。表示されるメニューで **[バージョンの表示]** を選択します。
3. ロールバックするバージョンを選択します。バージョンの正確な日付と時刻が表示されます。現在のバージョンは、その時点における状態に戻されます。
4. **[リカバリする]** をクリックして続行します。選択したバージョンが Cloud の最新バージョンになります。次に、同期を所有しているコンピュータにダウンロードされます。

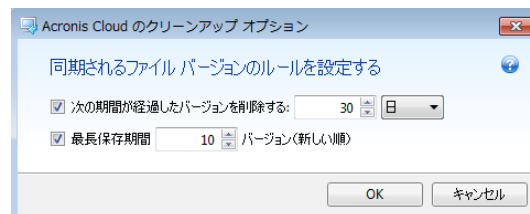
5.10 Acronis Cloud で領域をクリーンアップする方法

新しいデータのために Acronis Cloud の領域をクリーンアップして空けることができます。これはいくつかの方法で実行できます。

最も簡単な方法は、プログラムで自動的に領域をクリーンアップすることです。デフォルトでは、プログラムは最大 10 個の変更されたファイルのバージョンを保持し、30 日以上経過したバージョンを削除します。これらのデフォルトの値を変更することができます。

同期のクリーンアップ オプションを表示または変更する手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 を起動し、**[同期]** タブをクリックします。
2. 目的の同期の右側にある **[設定]** アイコン(⚙️)をクリックし、**[クリーンアップ オプション]** をクリックします。

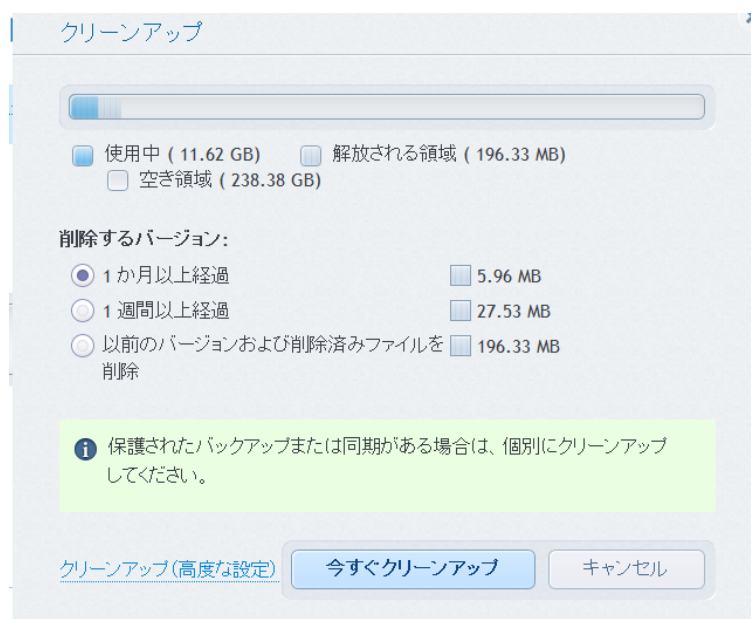


3. オプションを変更し、**[OK]** をクリックするか、**[キャンセル]** をクリックします。

Acronis Cloud 領域を手動でクリーンアップする方法

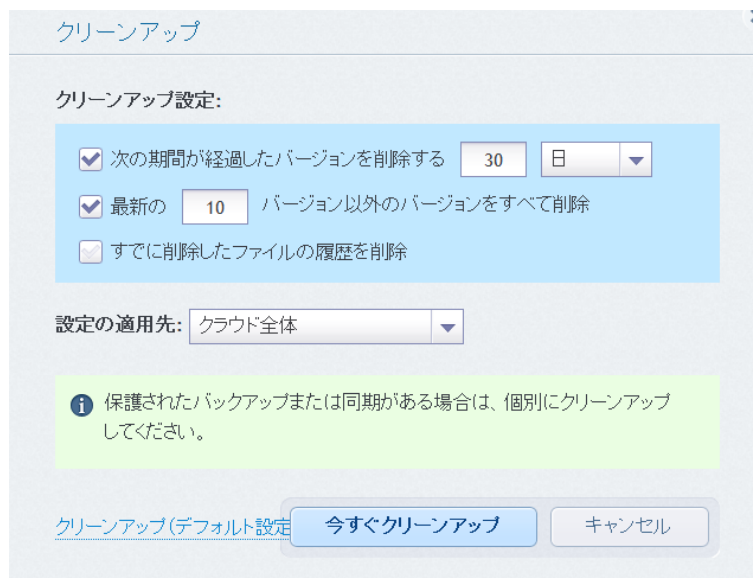
1. デフォルトの同期ボックスで **[Acronis Cloud]** リンクをクリックし、**[ストレージ ステータス]** タブをクリックします。
2. 画面の中央で **[領域をクリーンアップする]** リンクをクリックします。
3. 適切なダイアログ ボックスが表示されたら、次の削除するバージョンを選択します。
 - すべてのバージョン。
 - 1 カ月より前のバージョン。
 - 1 週間より前のバージョン

開放される領域の量が表示されます。



ご注意ください。削除されたバージョンは、復元することができません。

4. **[クリーンアップ(高度な設定)]** をクリックして、他のクリーンアップ ルールを選択できます。



クリーンアップ ルールは次のいずれかに適用できます。

- 個別の同期とオンライン バックアップ
- Acronis Cloud 上にある同期とオンライン バックアップ

5. 必要なルールを選択し、**[今すぐクリーンアップ]** をクリックします。

不要になった同期またはオンライン バックアップを削除してクリーンアップする方法もあります。この場合、同期またはオンライン バックアップのすべてのバージョン履歴が Acronis Cloud から削除されます。

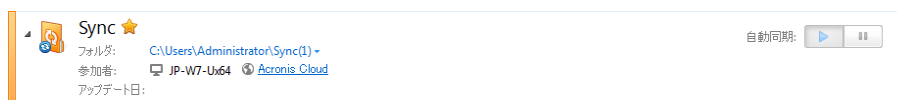
5.11 削除されたファイルをリカバリする方法

誤って同期からファイルを削除することがあります。しかし、後で削除したファイルをリカバリしたい場合があります。Acronis Cloud にファイルのバージョンが保持されている同期ではこの処理を実行できる場合があります。

ただし、削除されたファイルが Cloud のクリーンアップ中に完全に削除されていないことが条件になります。

削除されたファイルをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 を起動します。
2. デフォルトの同期ボックスの **[Acronis Cloud]** リンクをクリックします。



3. **[ファイル]** タブをクリックし、削除したファイルが含まれていた同期を選択します。
4. 同期を選択した後に、ファイルとフォルダのリストが表示されます。

5. **[削除済みを表示]** チェックボックスをオンにし、リカバリする削除したファイルを選択します。



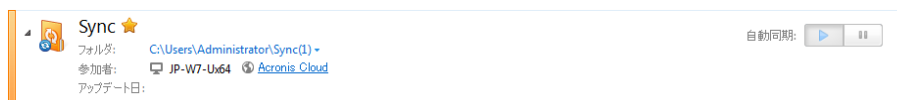
6. **[リカバリする]** ボタンをクリックして、削除したファイルを元のフォルダにリカバリします。

5.12 フォルダの共有方法

電子メール アドレスを知っていれば誰とでもフォルダを共有することができます。相手は、Acronis のマイ アカウントがなくても共有フォルダにアクセスできます。

フォルダの共有は、Acronis Cloud で行います。

1. True Image 2013 を起動します。
2. デフォルトの同期ボックスの **[Acronis Cloud]** リンクをクリックします。



3. **[ファイル]** タブをクリックし、共有するフォルダが含まれる同期またはオンライン バックアップを選択します。
4. リストで目的のフォルダを選択し、右側にある歯車 アイコンをクリックします。表示されるメニューで **[フォルダの共有]** を選択します。
5. フォルダを共有する相手の電子メール アドレスを入力します。また、オプションで招待する相手へのメッセージを入力します。



6. **[招待状を送信]** をクリックして、招待の電子メール メッセージを送信します。

無制限の数のユーザーとファイルやフォルダを共有する場合は、公開リンクを使用できます。たとえば、ファイルの公開リンクを作成し、フォーラムで公開することができます。フォーラムにアクセスしたすべてのユーザーがそのファイルをダウンロードまたは表示できます。

公開リンクを作成すると、システム内の任意のフォルダをそのフォルダが同期に含まれるかどうかに関係なく共有できます。他のユーザーと共有するすべてのファイルとフォルダが、Acronis Cloud 上の自分の制限容量を消費することに注意してください。詳細については、「ファイルやフォルダへの公開リンクの作成方法（137ページ）」を参照してください。

5.13 ファイルやフォルダへの公開リンクの作成方法

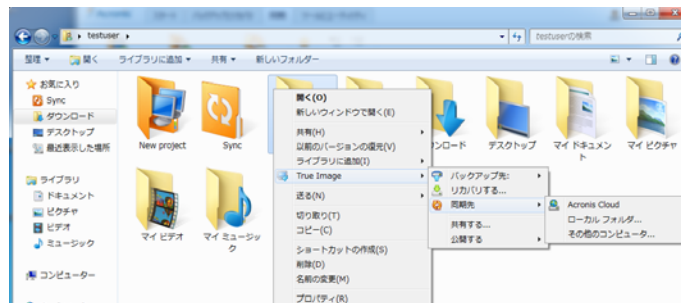
PC 上のファイルやフォルダおよび Acronis ウェブ アプリケーションの公開リンクを作成することができます。True Image 2013 がインストールされたコンピュータでこの手順を実行する方法について説明します。

プログラム自体を起動する必要はありません。Windows エクスプローラの Acronis ショートカットメニューから公開リンクを作成することができます。さらに、同期に含まれるファイルやフォルダだけでなく任意のファイルやフォルダへの公開リンクを作成できます。

Acronis Cloud にバージョンが保存されていないファイルの公開リンクを作成する場合は、このファイルはストレージにあるデフォルトの同期にアップロードされます。

フォルダの公開リンクを作成する手順は、次のとおりです。

1. Windows エクスプローラで、公開リンクを作成する対象のフォルダを見つけます。



2. フォルダを右クリックし、[True Image] -> [公開する] の順にポイントして、次のいずれかを選択します。
 - [リンクを電子メールで送る] - 作成したリンクを電子メールで送信する場合は、この項目を選択します。
 - [リンクをコピーする] - リンクをクリップボードにコピーしてフォーラムなどに貼り付ける場合は、この項目を選択します。この項目はすべてのファイルやフォルダで選択できます。

Acronis Cloud 上に保持しているファイルの公開リンクは常に最新バージョンにリンクされます。

5.14 アカウントからデバイスをリンク解除する方法

場合によっては、いずれかのコンピュータまたはモバイル デバイスをマイ アカウントからリンク解除する必要があります。たとえば、コンピュータが故障した場合や盗まれた場合などがあります。

デバイスをリンク解除する手順は、次のとおりです。

1. <http://www.acronis.co.jp/my/index.html/> の Acronis マイ アカウント ページに移動します。
2. アカウントにログインします。

- 画面左側の **[同期]** をクリックします。同期の管理領域にデフォルトで **[コンピュータ]** タブが表示されます。



- リンク解除するコンピュータの名前の右側にある **[リンク解除]** をクリックします。
- 確認メッセージで **[OK]** をクリックします。

コンピュータのリンク解除

- コンピュータ リストからコンピュータを削除します。
- コンピュータが参加しているすべての同期からコンピュータを削除します。
- 同期参加証明書をブロックします。

5.15 同期共有の招待を取り消す方法

別のユーザーに送信した同期共有の招待を取り消すことができます。この操作はいつでも実行できます。取り消しは、相手が既に招待を受け入れたかどうかに関係なく実行できます。

この操作は、Acronis のウェブサイトで行います。

- <http://www.acronis.co.jp/my/index.html/> の Acronis マイ アカウント ページに移動します。
- マイ アカウントにログインします。
- 画面左側の **[同期]** をクリックします。
- 同期の管理領域で **[共有されている同期]** タブをクリックします。

5. **[自分の同期]** 見出しの下で、参加者を削除する同期の横にある **[+]** アイコンをクリックします。これにより、同期に招待した参加者のリストが表示されます。



6. 削除する参加者の名前の右側にある **[解除]** をクリックします。
複数のユーザーを招待した場合は、**[全参加者を解除]** をクリックしてすべての招待を一度に取り消すことができます。
7. 確認メッセージで **[OK]** をクリックします。

5.16 同期を解除する方法

同期は、ユーザーの意思または同期所有者が同期への招待を取り消したときに解除されます。所有者が招待を取り消した場合、同期が停止し、ウェブおよび True Image 2013 メイン ウィンドウの同期リストから同期ボックスが削除されます。

同期への参加を終了したい場合は、対応するフォルダの同期を解除します。この場合、後で同期を再開することができます。

同期を完全に解除する手順は、次のとおりです。

1. <http://www.acronis.co.jp/my/index.html/> の Acronis マイ アカウント ページに移動します。
2. マイ アカウントにログインします。
3. 画面左側の **[同期]** をクリックします。

- 同期の管理領域で **[共有されている同期]** タブをクリックします。



- [参加している同期]** 見出しの下で、解除する同期を選択し、同期名の右にある **[外れる]** をクリックします。
- 確認メッセージで **[OK]** をクリックします。

6 オンライン バックアップの使用

セクションの内容

Acronis Cloud とは.....	141
サブスクリプション情報.....	141
Acronis Cloud へのバックアップ.....	142
オンライン バックアップの管理.....	144
オンライン バックアップのオプション.....	145
Acronis Cloud からのリカバリ.....	150
Acronis Cloud からのデータの削除.....	151

6.1 Acronis Cloud とは

Acronis Cloud は、データを保存するために使用できるリモート ストレージです。このストレージを使用するために必要なのは、Acronis アカウントだけです。

重要なファイルを安全なリモートのロケーションに保存し、必要に応じてそれらのファイルをリカバリできます。ファイルはリモート ストレージに保管されるので、コンピュータが盗難や火災に遭っても、データは保護されます。そのため、盗難、火災、その他の自然災害によってデータが消失するリスクは、実質的に排除されます。バックアップ イメージ、PC、または外付けストレージ デバイスに問題が発生した場合でも、最も重要なファイルを手に入れることが可能です。コンピュータが異常停止しても、True Image 2013 がインストールされている自分自身の PC または別のシステムに、ファイルをリカバリすることができます。

また、Acronis Cloud は、Acronis Cloud に保存したデータのリカバリと管理に使用できるウェブアプリケーションでもあります。ウェブ ブラウザがインストールされた任意のコンピュータを使用できます。Acronis Cloud を操作するための True Image 2013 または他の Acronis アプリケーションをインストールする必要はありません。

アクロニス ウェブサイト(<https://www.acronis.co.jp/my/online-backup/>)に移動し、マイ アカウントにログインします。サブスクリプション情報ページが開いたら、**[データを今すぐリカバリする]** をクリックします。Acronis Cloud ページが開いたら、リカバリが必要なファイルが格納されたバックアップまたは同期を選択して、現在のコンピュータにファイルをダウンロードします。

1 つのアカウントで最大 5 台の PC のドキュメント、写真、および音楽などを保存できます。コンピュータがクラッシュしても、問題はありません。別のコンピュータからログインして、ファイルを取得するだけで済みます。

6.2 サブスクリプション情報

Acronis Cloud にバックアップするには、Acronis Cloud サービスのサブスクリプションが必要です。申し込むには、True Image 2013 を起動し、ログイン ウィンドウで **[アカウントの作成]** リンクをクリックします。これにより、ウェブ ブラウザが開き、Acronis のメイン ウェブサイトが表示され、登録できます。

適切なフィールドに入力すると、アカウントが作成されます。姓、名、および電子メール アドレスを入力します。コンピュータの IP アドレスを基に選択された国名が表示されます。必要に応じて、別の国名を選択できます。

次に新しいアカウントのパスワードを入力し、該当するフィールドに確認のパスワードを再度入力します。アカウント登録に必要なすべての操作を実行したら、アカウントの作成確認電子メール メッセージが届くのを待ちます。

個人データを安全に維持するために、オンライン バックアップ用の強力なパスワードを選択して、悪意のある第三者に知られないように保護し、時々変更してください。

Acronis のアカウントを作成したら、マイ アカウント ページにログインして Acronis Cloud サービスの申し込みを行い、サブスクリプション プランの詳細と有効期限が記載された電子メール メッセージが届くのを待ちます。

試用のサブスクリプション

Acronis Cloud サービスの試用を希望する方のために、アクロニスでは、Acronis Cloud サービスを 30 日間無料で試用できるサブスクリプションをご用意しています。試用期間中、ストレージの容量は 250 GB になります。試用期間が終了すると、Acronis Cloud サービスは利用できなくなり、Cloud のデータはすべて削除されますのでご注意ください。

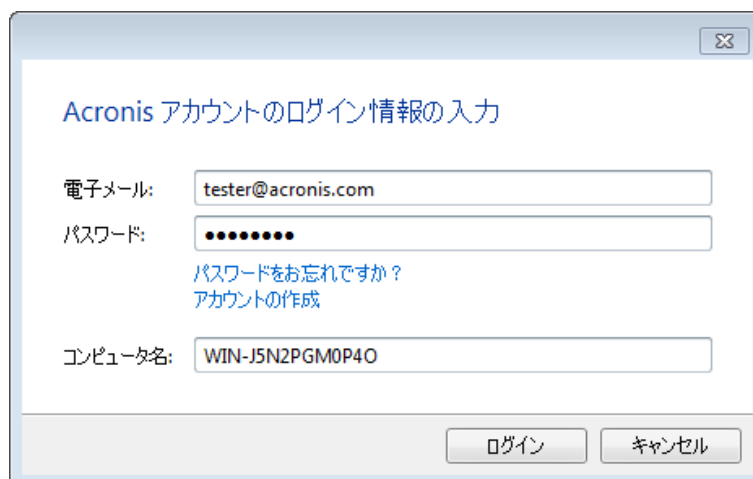
Acronis Cloud サービスが気に入った場合は、<https://www.acronis.co.jp/my/online-backup/> にアクセスし、適切なサブスクリプション プランをお申し込みください。支払いの変更、サブスクリプションの更新または解約を行う場合は、同じサブスクリプション ウェブ ページにアクセスします。

6.3 Acronis Cloud へのバックアップ

稼働中のコンピュータに設定できるアクティブなオンライン バックアップは 1 つだけです。Acronis Cloud を初めて使用する場合に、オンライン バックアップを設定する方法について説明します。

オンライン バックアップを作成する手順は、次のとおりです。

1. [ホーム] ウィンドウにある [バックアップとリカバリ] タブの [オンライン バックアップ] をクリックします。
2. ログイン ウィンドウで Acronis のマイ アカウントで使用している電子メール アドレスとパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。



同期機能を使用する目的などでマイ アカウントに既にログインしている場合は、このウィンドウはスキップされます。

次のオプションがあります。

- パスワードを忘れた場合は、[パスワードをお忘れですか?] をクリックして、開かれるウェブ ページの指示に従って操作します。新しいパスワードが電子メールで送信されます。
- Acronis のマイ アカウントを所有していない場合は、[アカウントの作成] をクリックし、開かれたウェブ ページの該当するフィールドに情報を入力してアカウントを作成します。詳細については、「サブスクリプション情報 (141ページ)」を参照してください。

Acronis Cloud を使用するには、Acronis Cloud サービスのサブスクリプションが必要です。サブスクリプションがない場合は、250 GB のストレージ領域を使用できる 1 ヶ月の試用版サブスクリプション*が自動的に付与されます。

*試用期間とストレージの量は予告なしに変更される場合があります。

3. ログインするとウィンドウが開き、このウィンドウでオンライン バックアップ設定を行うことができます。



4. バックアップ対象の項目を指定するには、対応するチェックボックスをオンにします。ファイル カテゴリと個々のファイルおよびフォルダの両方を含めることができます。カテゴリの詳細については、「データ カテゴリ (50ページ)」を参照してください。現在のバックアップの内容をデータ カテゴリとして残しておく必要がない場合は、ファイルおよびフォルダを選択します。
5. オンライン バックアップから、隠しファイルまたはシステム ファイル、指定した条件と一致するフォルダおよびファイルを除外することができます。詳細については、「バックアップからの項目の除外 (83ページ)」を参照してください。
6. バックアップ先は Acronis Cloud になります。バックアップ先フィールドには、Acronis Cloud 上のストレージ領域の制限と、バックアップ対象データの概算量が表示されます。

7. オンライン バックアップのスケジュールを設定するには、**[スケジュール]** の横にある **[オンにする]** リンクをクリックします。オンライン バックアップのスケジュール設定の詳細については、「スケジュール設定（175ページ）」を参照してください。スケジュールに基づいてバックアップを実行するには、**[今すぐバックアップ]** ボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウン リストで **[後で実行]** を選択します。設定が行われたバックアップは、スケジュールに従って実行されます。

バックアップは、Acronis Cloud からログオフした後も実行されます。

8. バックアップを即座に実行したい場合は、**[今すぐバックアップ]** ボタンをクリックします。バックアップの開始を最大 6 時間まで遅らせることも可能です。その場合は、このボタンの右側にある下向き矢印をクリックして、ドロップダウン リストから遅らせる時間を選択します。

最初のオンライン バックアップは、完了するまでにかなりの時間を要することがあります。以降のバックアップ処理は、ファイルに対する変更のみがインターネットを使って転送されるので、大幅に速くなります。

6.4 オンライン バックアップの管理

最大 5 つの異なるコンピュータから、最大 5 つのオンライン バックアップを作成できますが、同時にアクティブ化できるのは、1 つのオンライン バックアップに限られます。

Acronis のマイ アカウントにログインすると、True Image 2013 はオンライン バックアップがあるか検出を試みます。

マイ アカウントにオンライン バックアップが作成されている場合は（例：別のコンピュータで実行するなど）、プログラムは次の処理を行います。既存のオンライン バックアップが **[バックアップとリカバリ]** タブに追加され、検出したオンライン バックアップについての通知が画面下部に表示されます。

既存のオンライン バックアップを 1 つ選択し、**[ここでバックアップを続ける]** ボタンをクリックすると、バックアップをアクティブ化できます。前に作成したこのバックアップを使用する場合、データのバックアップに使用したコンピュータがどのコンピュータであったかは問題になりません。バックアップされたデータは、そのままリカバリに利用可能な状態に保たれ、現在のコンピュータからさらに多くのデータをバックアップできます。

新しいオンライン バックアップを作成する場合は、**[バックアップとリカバリ]** タブの **[オンライン バックアップ]** をクリックします。

現在のコンピュータから Acronis Cloud にバックアップしたデータがある場合は、ツールバーの **[オンライン バックアップ]** が **[オンライン編集バックアップ設定]** に変わります。これは、一度にアクティブにできるオンライン バックアップは 1 つのみであるためです。他のコンピュータのオンライン バックアップでは、バックアップ データのリカバリのみが行えます。また、これらのオンライン バックアップの削除も可能です。

5 つのオンライン バックアップを既に作成した場合、True Image 2013 によってダイアログが表示され、既にオンライン バックアップの最大数に達していることが通知されます。既存のバックアップのアクティブ化、新しいコンピュータに対する設定の変更、既存のオンライン バックアップの削除、新しいバックアップの作成を行うことができます。

6.5 オンライン バックアップのオプション

オンライン バックアップで利用可能なオプションは次のとおりです。

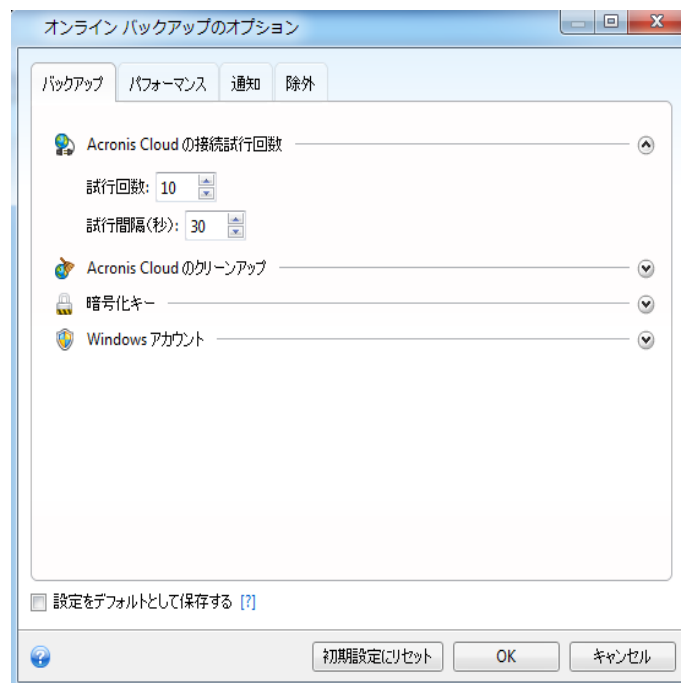
- Acronis Cloud の接続試行回数 (145ページ)
- Acronis Cloud のクリーンアップ (145ページ)
- 暗号化キー (146ページ)
- Windows アカウント (146ページ)
- 処理の優先順位 (146ページ)
- ネットワーク接続速度の上限 (147ページ)
- 通知 (148ページ)
- 除外 (149ページ)

製品のインストール後に変更したオプションをすべて初期値にリセットする場合は、[初期設定にリセット] ボタンをクリックします。

6.5.1 Acronis Cloud の接続試行回数

接続試行の回数と、試行の間隔を指定できます。

ネットワークに問題があり、最初の接続試行が失敗した場合、プログラムは接続が正常に確立されるまで試行を繰り返します。接続試行の回数と、試行の間隔を秒で設定できます。そのためには、該当するボックスで値を入力または選択します。

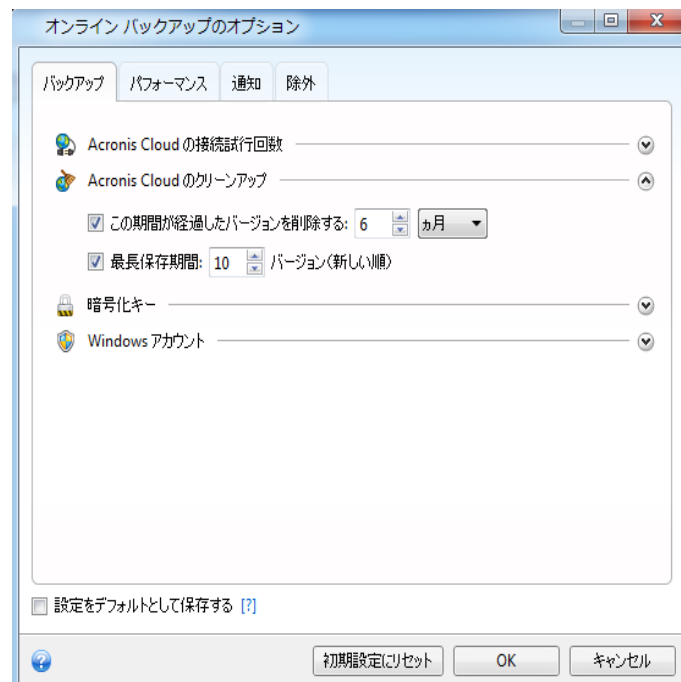


6.5.2 Acronis Cloud のクリーンアップ

Acronis Cloud のクリーンアップ設定を構成して、その容量の使用率を最適化します。

Acronis Cloud でバージョン数の制限を設定する手順は、次のとおりです。

- **[この期間が経過したバージョンを削除する]** チェックボックスをオンにしてから、古いバージョンを保持する期間の上限を入力します。他のバージョンは、最新のバージョンを除き、すべて自動的に削除されます。
- **[最長保存期間]** チェックボックスをオンにしてから、ストレージに保持するバージョンの最大数を入力します。



6.5.3 暗号化キー

Acronis Cloud のデータを不正アクセスから保護するために、暗号化を使用することができます。この場合データは、暗号化された形式で Acronis Cloud に保存されます。データの暗号化と暗号化解除を行うためには、暗号キーが必要です。暗号キーは、コンピュータを登録するときに指定します。暗号キーは英数値からなる一意のコードで、パスワードのようなものです。任意の文字の組み合わせを指定できます。暗号キーでは大文字/小文字が区別されます。

暗号キーを取り出すことはできません。コンピュータ登録時に指定したキーを覚えておいてください。

暗号化されたデータにアクセスすると、暗号キーの入力を求められます。

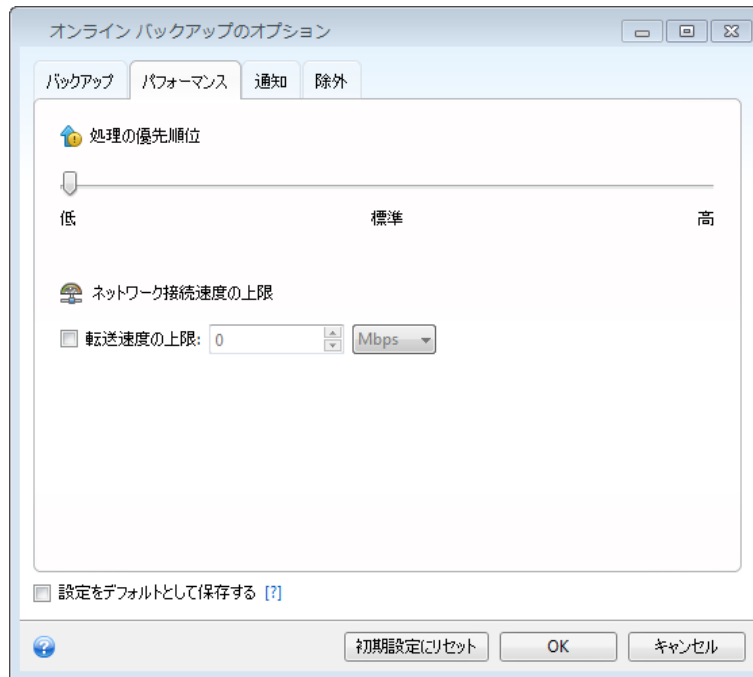
6.5.4 オンライン バックアップ用の Windows アカウント

デフォルトの場合、True Image 2013 では現在のユーザーのデータがバックアップされます。別の Windows アカウントを指定できます。このプログラムでは、指定されたアカウントのデータのみがバックアップされます。詳細については、「Windows アカウント (81ページ)」を参照してください。

6.5.5 処理の優先順位

処理の優先度を変更すると、(優先度を上げるか下げるかにより)バックアップの処理速度を速くしたり遅くしたりできますが、他の実行中のプログラムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性もあ

ります。システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステム リソースの使用量を決定します。処理の優先度を下げること、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。処理の優先度を上げると、同時に実行している他の処理からリソースを取得するため、バックアップ処理の速度が向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。



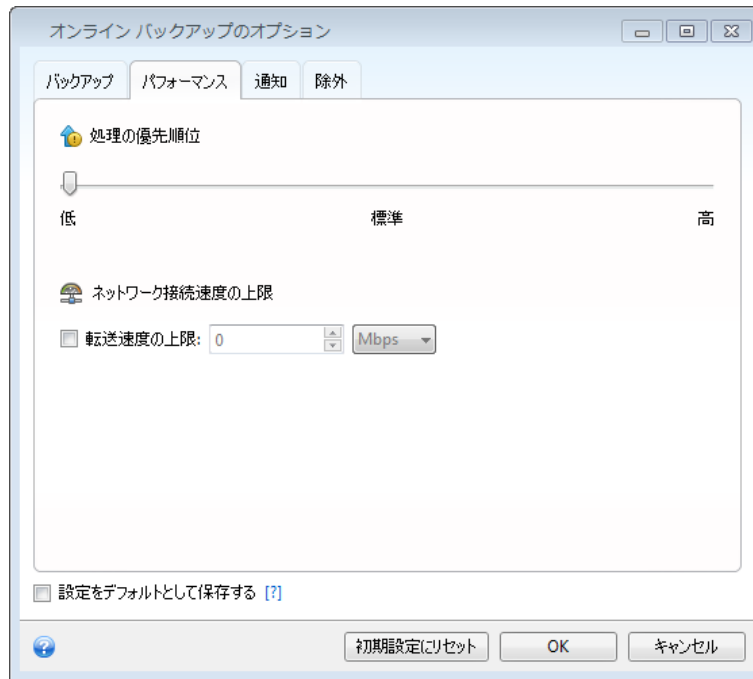
バックアップ処理の優先度は、次のように設定することができます。

- **[低]** (デフォルトで有効): バックアップ処理はより遅くなりますが、他のプログラムのパフォーマンスは向上します。
- **[標準]**: バックアップ処理と他の処理に、同じ優先度が割り当てられます。
- **[高]**: バックアップ処理は速くなりますが、他のプログラムのパフォーマンスは低下します。このオプションを選択すると、True Image 2013 による CPU 使用率が 100% になる場合があるので注意してください。

6.5.6 ネットワーク接続速度の上限

Acronis Cloud への接続がその他のネットワーク接続に及ぼす影響を軽減できます。オンラインバックアップを実行中に、速度の低下を気にすることなく電子メールの送信やウェブの閲覧を実行できる接続速度を設定します。手順は次のとおりです。

- **[転送速度の上限]** チェックボックスをオンにして、適切な値と単位 (KB/秒または MB/秒) を指定します。



6.5.7 通知

バックアップ処理の通知に使用する電子メール アカウントを指定することができます。

電子メールによる通知を設定する手順は、次のとおりです。

- 電子メール アドレスを **[電子メール アドレス]** フィールドに入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
- 送信メール サーバー(SMTP)を **[送信メール サーバー(SMTP)]** フィールドに入力します。
- 送信メール サーバーのポート番号を設定します。デフォルトの場合、ポート番号は 25 に設定されます。
- **[ユーザー名]** フィールドにユーザー名を入力します。

- パスワードを **[パスワード]** フィールドに入力します。

その他の通知設定を指定するには、**[その他の通知設定]** リンクをクリックします。

- 処理の完了に関する通知を送信するには、**[処理が正常に完了したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の失敗に関する通知を送信するには、**[処理が失敗したら通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理メッセージを添付して通知を送信するには、**[ユーザーの操作が必要な場合に通知を送信する]** チェックボックスをオンにします。
- 処理の詳細なログを添付して通知を送信するには、**[完全なログを通知に含める]** チェックボックスをオンにします。

その他の設定を行った後、**[OK]** をクリックして以前のウィンドウに戻ります。

- 暗号化を使用する場合は、**[暗号化]** フィールドのドロップダウン リストから目的の暗号化プロトコルを選択します。

設定が正しいかどうかをチェックするには、**[テスト メッセージを送信する]** ボタンをクリックします。

6.5.8 除外

隠しファイルやフォルダ、システム ファイルやフォルダ、ユーザーが指定した条件と一致するファイルをオンライン バックアップから除外できます。詳細については、「バックアップからの項目の除外 (83ページ)」を参照してください。

6.6 Acronis Cloud からのリカバリ

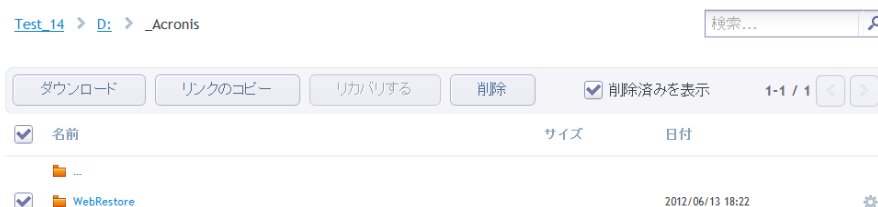
6.6.1 オンライン バックアップからデータをリカバリ

True Image 2013 では、Acronis Cloud にバックアップされたデータを参照およびリカバリすることができます。複数のコンピュータからデータをバックアップした場合、データのリカバリを行う目的のコンピュータのオンライン バックアップ ボックスを選択します。

1. データのリカバリ元のオンライン バックアップのボックスの **[リカバリする]** ボタンをクリックします。Acronis Cloud ウェブサイトが表示されます。

選択したコンピュータから取得したデータが、暗号化された形式で Cloud に保存されている場合、暗号化に使用した暗号化キーの入力を求められます。正しい暗号化キーを入力するまで、データにはアクセスできません。

2. Acronis Cloud ウェブサイトの **[ファイル]** タブが表示されたら、**[バックアップ]** 領域で目的のオンライン バックアップを選択します。
3. リカバリするファイルとフォルダを選択します。**[ダウンロード]** ボタンをクリックして、リカバリを開始します。



複数のファイルとフォルダを選択した場合は、それらが zip アーカイブに格納されます。

4. **[ファイルのダウンロード]** ウィンドウが表示されたら、**[保存]** をクリックして、ダウンロード j を開始します。



5. デフォルトでは、データは **Downloads** フォルダにダウンロードされます。ダウンロード パスは変更できます。
6. ダウンロードが終了したら、**[フォルダを開く]** をクリックして、**Downloads** フォルダを開くことができます。

6.6.2 リカバリするバージョンの選択

デフォルトでは、指定した日付に基づいた最新バージョンが True Image 2013 で選択されます。ただし、どのファイルでも、リカバリするファイルの特定のバージョンを選択できます。

特定のファイル バージョンをリカバリする手順は、次のとおりです。

1. バックアップの内容で、リカバリするバージョンのファイルを選択し、右側にある歯車アイコンをクリックします。表示されるメニューで **[バージョンの表示]** を選択します。
2. 表示されるウィンドウで、目的のバージョンを選択し、**[リカバリする]** をクリックします。



3. ロールバックするバージョンを選択します。バージョンの正確な日付と時刻が表示されます。現在のバージョンは、その時点における状態に戻されます。
4. **[リカバリする]** をクリックして続行します。選択したバージョンが Acronis Cloud の最新バージョンになります。
5. 処理が終了したら、ウェブ ブラウザで **[ファイル]** ページを更新します。
6. ファイルをもう一度選択し、**[ダウンロード]** をクリックして、選択したバージョンを Downloads フォルダにダウンロードします。

6.7 Acronis Cloud からのデータの削除

Acronis Cloud 上の空き領域は限られているため、古いデータや不要になったデータをクリーンアップして Cloud を管理する必要があります。クリーンアップはさまざまなやり方で実行できます。最も「抜本的な」方法は、Acronis Cloud 上のコンピュータからバックアップ全体を削除する方法です。バックアップを削除するには、オンライン バックアップのボックスで歯車アイコンをクリックして **[処理]** メニューを開き、**[削除]** を選択して、確認ウィンドウで **[はい]** をクリックします。

オンライン バックアップ オプションには、Acronis Cloud の自動クリーンアップもあります。指定された月数または日数を超えて保存されているファイルを削除するように指定できます。また、Acronis Cloud に保存されるファイル バージョンの最大数を設定できます。これらのオプションのデフォルト設定をそのまま利用するか、必要に応じて値を設定します。詳細については、「Acronis Cloud のクリーンアップ (145ページ)」を参照してください。

個別のファイルやフォルダを削除することによって Acronis Cloud を管理することもできます。

1. データを削除するオンライン バックアップのボックスにある歯車アイコンをクリックし、**[ウェブ アプリケーションを開く]** を選択します。
2. Acronis Cloud ウェブサイトの **[ファイル]** タブが表示されたら、**[バックアップ]** 領域で目的のオンライン バックアップを選択します。
3. 削除するファイルやフォルダのチェックボックスをオンにして選択します。選択が終了したら、**[削除]** ボタンをクリックします。

7 役立つ情報

セクションの内容

システムの保護	152
バックアップの保存場所の決定	154
必要なときにレスキュー メディアを確実に使用できるようにする	156
バックアップのリカバリ テスト	161
HDD から SSD へのシステムの移行	162
安全なシステム変更の試行	168
スケジュール設定	175
バックアップとその内容の検索	178
ウィザードに表示する項目の選択	182
バックアップ情報	183
タイムアウトの設定	183

7.1 システムの保護

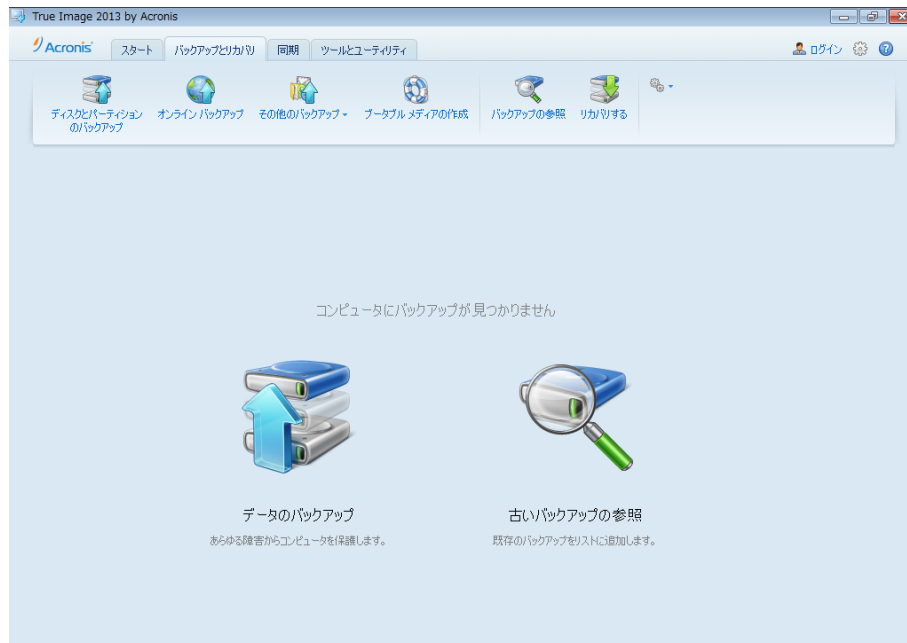
システムを保護するためには、次の必要な予防措置をとってください。

- 1) システムを障害から保護するには、システムの完全バックアップを作成する必要があります。可能な限り早い時点で、システム バックアップを作成することを強くお勧めします。
- 2) 可能な限り、プライマリ ディスク(C: ドライブ)以外のハード ドライブ(できれば外付けハード ドライブ)にシステム バックアップを保存する必要があります。これにより、プライマリ ハードディスクドライブに障害や災害が発生した場合でも、システムをより確実にリカバリできます。
- 3) ほとんどの場合、障害後のシステムのリカバリはレスキュー メディアを起動してから実行するので、レスキュー メディアを作成(「ブータブル レスキュー メディアの作成 (186ページ)」を参照)してから、「必要なときにレスキューメディアを確実に使用する」で説明したとおりにそのレスキュー メディアをテストする**必要があります**。
- 4) システム パーティションをバックアップする前に、システム パーティションのウイルスをスキャンすることを勧めます。

システム パーティションのバックアップ

外付けドライブにバックアップを格納する場合は、True Image 2013 を起動する前に、ドライブを接続して電源を入れてください。

1. True Image 2013 を起動するには、[バックアップとリカバリ] タブを選択して、[ディスクとパーティションのバックアップ] をクリックします。



2. この手順で [ディスク バックアップ] ウィンドウが開かれ、デフォルトで選択されたシステム パーティション(通常、C:)が表示されます。



3. バックアップ先を選択します(デフォルトのバックアップ先のままにするか、現在のバックアップ先の右側にある下矢印をクリックして [参照...] を選択し、任意のバックアップ先を参照することが可能です)。

4. [今すぐバックアップ] をクリックします。

その他の推奨事項

多くの IT 担当者はシステム バックアップのコピーを少なくとも 2 つ(できれば 3 つ)持つように推奨しています。バックアップしたコピーのうち 1 つは、その他のコピーとは別の場所(バックアップコンピュータを自宅で使用している場合は、たとえば会社や友人の自宅など他の建物が望ましい)に保存することもお勧めします。

複数のバックアップが有効なもう 1 つの点として、次のことが挙げられます。リカバリを開始すると、True Image 2013 により、リカバリ先のパーティション(またはディスク)が削除されます。そのため、バックアップが 1 つしかない場合、リスクが大きくなります。リカバリするコンピュータでシステム パーティションが削除された時点で、残っているのはリカバリするイメージだけになるからです。そのイメージが破損していた場合、システムをリカバリすることができなくなってしまいます。

7.2 バックアップの保存場所の決定

True Image 2013 では、さまざまなストレージ デバイスがサポートされています。詳細については「サポートされるストレージ メディア」を参照してください。サポートされている保存場所について、以下で説明します。

ハードディスク ドライブ

現在はハードディスクが安価になっているため、ほとんどの場合、外付けハード ドライブを購入してバックアップを保存する方法が最適です。外部ドライブを使用すると、データをオフサイト(たとえば、仕事場のコンピュータのバックアップを自宅に、またはその逆)で保持できるため、データのセキュリティが強化されます。コンピュータの設定ポートと必要なデータ転送速度に応じて、USB、FireWire、eSATA など、さまざまなインターフェイスを選択できます。多くの場合(特にご使用のコンピュータで USB 3.0 がサポートされている場合)、USB の外付けハードディスク ドライブが最善の選択と言えるでしょう。

デスクトップ PC で USB の外付けハードディスク ドライブを使用する場合は、短いケーブルを使用して背面のコネクタにドライブを接続すれば最も動作の信頼性が高くなります。この方法を使用すると、バックアップ/リカバリ時のデータ転送エラーの可能性が低くなります。

NAS や NDAS などのホーム ファイル サーバー

Gigabit Ethernet ホーム ネットワーク、および専用のファイル サーバーや NAS をお持ちの場合は、(内蔵ドライブと同様に)ファイル サーバーや NAS にバックアップを保存することができます。

NAS、NDAS などの外付けハード ディスク ドライブを使用する場合は、選択したバックアップ ストレージが True Image 2013 によって認識されるかどうかをチェックする必要があります。これは Windows とレスキュー メディアからの起動時の両方で確認が必要です。

NDAS 対応のストレージ デバイスにアクセスするには、多くの場合 NDAS デバイス ID(20 文字)と書き込みキー(5 文字)を指定する必要があります。書き込みキーを使用すると、NDAS が有効なデバイスを書き込みモード(バックアップの保存など)で使用できます。通常、デバイス ID と書き込みキーは NDAS デバイスの底面のステッカーまたはエンクロージャの内側に記載されています。ステッカーが見つからない場合は、NDAS デバイスの製造元に問い合わせるこの情報を入力してください。

一部の NAS デバイスは、Bonjour ソフトウェアがインストールしてある場合にのみ True Image 2013 で検出できます。

光学ディスク

DVD-R、DVD+R などの空の光学ディスクは非常に価格が安いので、最も低コストなバックアップソリューションではありますが、時間は一番かかります。DVD に直接バックアップする場合は特にそうです。また、複数の DVD でバックアップを行った場合は、データ リカバリの際に何度もディスクを入れ替える必要があります。一方で、ブルーレイ ディスクも使用できます。

ディスクが 4 枚以上になる場合はディスクの入れ替えが頻繁になるため、DVD 以外の方法でバックアップすることを強くお勧めします。DVD 以外に方法がない場合は、すべての DVD をハードディスク上のフォルダにコピーし、そのフォルダからリカバリすることをお勧めします。

オンライン バックアップ

True Image 2013 では、Acronis Cloud サービスを使用して、極めて重要なファイルを安全なリモートのロケーションに保存して保護することができます。ファイルはリモート ストレージに保管されるので、コンピュータが盗難などに遭ってもデータは保護されます。そのため、盗難、火災、その他の自然災害によってデータが消失するリスクは、実質的に排除されます。バックアップ イメージ、PC、または外付けストレージ デバイスに問題が発生した場合でも、最も重要なファイルを入手することが可能です。

7.2.1 FTP 接続

True Image 2013 を使用すれば、FTP サーバーにバックアップを保存できます。

新しい FTP 接続を作成するには、バックアップ ストレージを選択するときに、**[新しい FTP 接続]** をクリックし、開いたウィンドウに次のように入力します。

- FTP サーバーへのパス(例: my.server.com)
- ポート
- ユーザー名
- パスワード

設定を確認するには、**[接続のテスト]** ボタンをクリックします。コンピュータで、指定した FTP サーバーに対する接続が試行されます。テスト接続が確立された場合、**[接続]** ボタンをクリックして、FTP 接続を追加します。

作成された FTP 接続は、フォルダ ツリーに表示されます。接続を選択し、使用するバックアップ ストレージを参照します。

単に FTP サーバーのルート フォルダを開いても、ユーザーのホーム ディレクトリには移動されないことに注意してください。

FTP サーバーから直接リカバリするデータの場合、バックアップはそれぞれが 2 GB 以下のファイルで構成される必要があります。

このため、True Image 2013 は、FTP サーバーに直接バックアップするときにバックアップを 2 GB ずつのサイズのファイルに分割します。バックアップを後で FTP サーバーに転送するためにハード ディスクにバックアップする場合は、バックアップ オプションでファイル サイズを設定することでバックアップを 2 GB ずつのファイルに分割することができます。

FTP サーバー側がパッシブ モードのファイル転送を許可している必要があります。

バックアップ元のコンピュータのファイアウォール設定では、ポート 20 および 21 が TCP プロトコルと UDP プロトコル用に開いており、機能するようになっていることが必要です。Windows のルーティングとリモート アクセス サービスは無効にする必要があります。

7.2.2 認証設定

ネットワークのコンピュータに接続するほとんどの場合では、ネットワーク共有にアクセスするために必要なログイン情報を入力する必要があります。たとえば、**[保存先を参照する]** ウィンドウでバックアップ ストレージを選択する場合などがあります。ネットワーク コンピュータの名前をクリックすると、**[認証設定]** ウィンドウが自動的に表示されます。手動で開くには、ツールバーの **[この場所のログイン情報を指定してください]** をクリックします。

ユーザー名とパスワードを指定する方法は、次のとおりです。

- **[ユーザー名]** - ユーザー名を入力します。
- **[パスワード]** - ユーザーのパスワードを入力します。

[接続のテスト] ボタンをクリックすると、選択したネットワーク共有への接続が試行されます。エラーメッセージが表示される場合は、ログイン情報が正しいか確認し、選択したネットワーク共有用の正しいユーザー名とパスワードを入力します。接続試行を繰り返すには、**[再テスト]** ボタンをクリックします。

必要な情報を入力したら、**[接続]** をクリックします。

7.3 必要なときにレスキュー メディアを確実に使用できるようにする

コンピュータを正常にリカバリできるよう、レスキュー メディアからコンピュータを起動できることをテストしておく必要があります。また、レスキュー メディアがコンピュータのデバイス(ハード ドライブ、マウス、キーボード、ネットワーク アダプタなど)をすべて認識することを確認する必要があります。

ブータブル CD を含むパッケージ版の製品を購入された場合は、その CD をテストしてください。

レスキュー メディアをテストするには、次の手順を実行します。

バックアップの保存に外付けドライブを使用する場合、レスキュー CD から起動する前にそのドライブを接続しておく必要があります。接続されていないと、ドライブが検出されない場合があります。

1. レスキュー メディアから起動できるように、コンピュータを設定します。次に、レスキュー メディア デバイス(CD-ROM/DVD-ROM ドライブまたは USB スティック)が最初のブート デバイスになっていることを確認します。「BIOS での起動順の並び替え」を参照してください。
2. レスキュー CD がある場合は、「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたらすぐに任意のキーを押して CD からの起動を開始します。5 秒以内にキーを押さなかった場合は、コンピュータを再起動する必要があります。
3. ブート メニューが表示されたら、**True Image** を選択します。

ワイヤレス マウスが動作しない場合は、有線のマウスに交換してみてください。キーボードについても、同様です。

予備のマウスやキーボードがない場合は、Acronis サポートにご連絡ください。ご利用のマウスとキーボードのモデルに対応したドライバを含むカスタム レスキュー CD を作成します。適切なドライバを見つけてカスタム レスキュー CD を作成するには、ある程度の時間がかかることをご了承ください。また、一部のモデルには、対応できないことがあります。



4. プログラムが開始されたら、バックアップからいくつかのファイルをリカバリしてみることをお勧めします。リカバリをテストすることによって、そのレスキュー CD をリカバリに使用できることを確認することができます。さらに、システムのすべてのハードディスク ドライブが検出されているかどうかを確認できます。

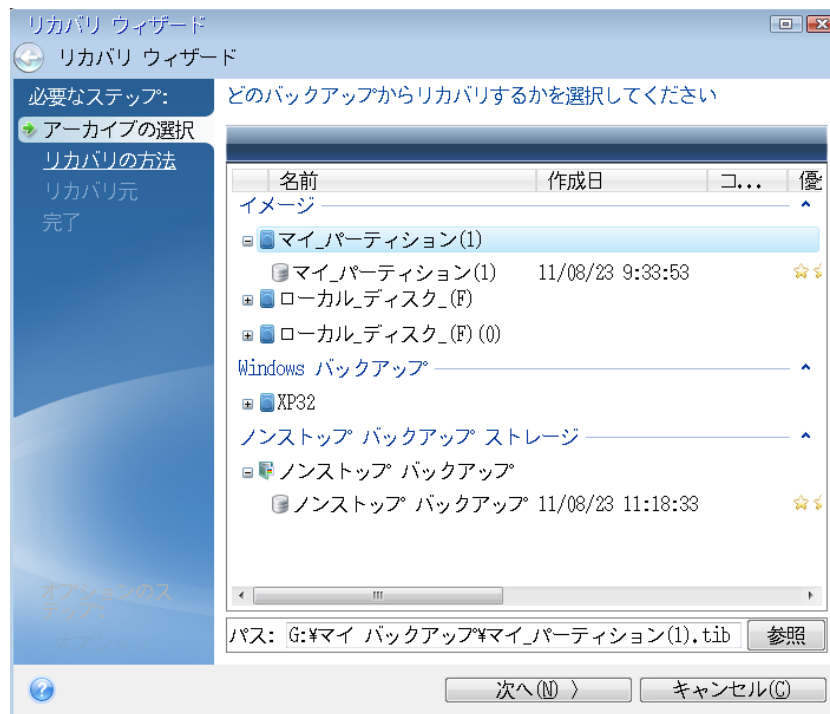
予備のハードディスク ドライブがある場合は、このハードディスク ドライブにシステム パーティションをリカバリできるかどうかをテストすることを強くお勧めします。

リカバリをテストし、同時にドライブとネットワーク アダプタをチェックするには、次の手順を実行します。

1. ファイルのバックアップがある場合、ツールバーで [リカバリ] -> [ファイルのリカバリ] をクリックして、リカバリ ウィザードを起動します。

ディスクとパーティションのバックアップだけがある場合でも、リカバリ ウィザードを開始して同様の手順を実行します。その場合、[リカバリの方法] のステップで [指定したファイルおよびフォルダをリカバリする] を選択してください。

2. **[アーカイブのロケーション]** のステップでバックアップを選択し、**[次へ]** をクリックします。

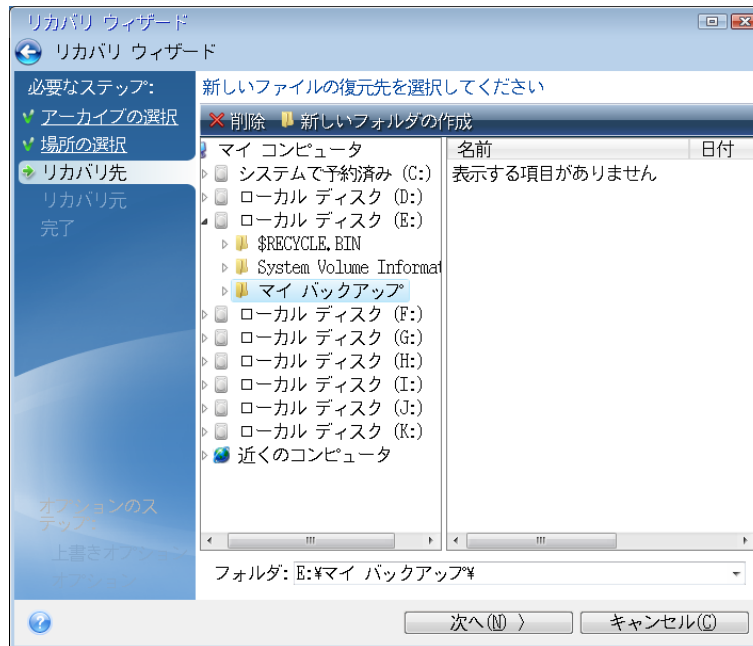


3. レスキュー CD でファイルをリカバリする場合、リカバリされるファイルには新しいロケーションしか選択できません。したがって、**[ロケーションの選択]** ステップでは **[次へ]** をクリックするのみの作業になります。
4. **[リカバリ先]** ウィンドウが開いたら、**[マイ コンピュータ]** の下にすべてのドライブが表示されていることを確認します。

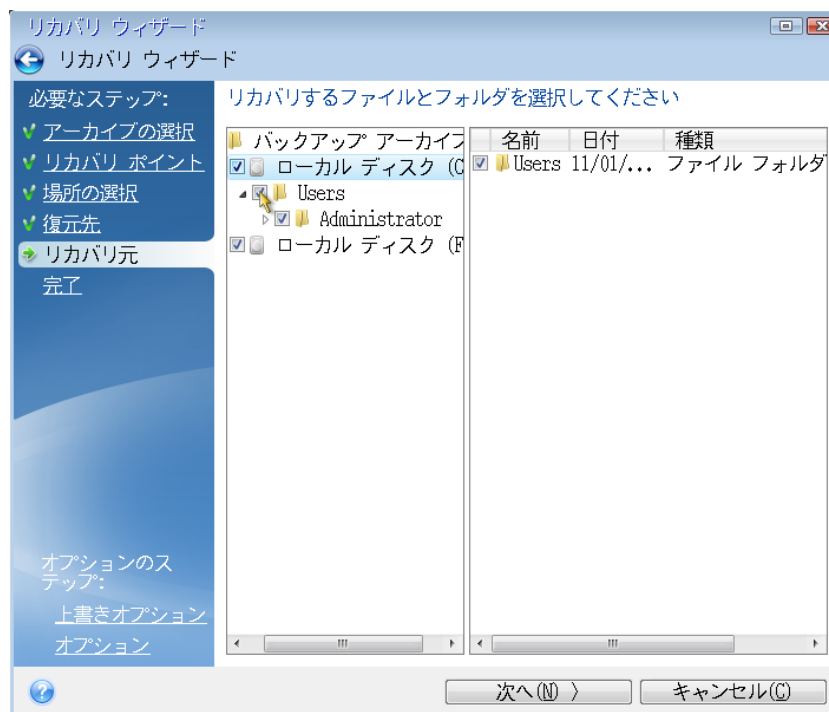
バックアップをネットワークに保存する場合は、ネットワークにアクセスできることも確認してください。

ネットワークにコンピュータがまったく表示されないが **[マイ コンピュータ]** の下に **[近くのコンピュータ]** アイコンが表示されている場合は、ネットワーク設定を手動で指定します。手動で指定するには、**[ツールとユーティリティ]** → **[オプション]** → **[ネットワーク アダプタ]** で使用できるウィンドウを開きます。

[マイ コンピュータ] で [近くのコンピュータ] アイコンが表示されない場合は、ネットワーク カードまたは True Image 2013 に付属しているカード ドライバに問題がある可能性があります。



5. ファイルの保存場所を選択して、[次へ] をクリックします。
6. リカバリするファイルのチェック ボックスをいくつかオンにして、[次へ] をクリックします。



7. [概要] ウィンドウの [実行] をクリックして、リカバリを開始します。
 8. リカバリが終了したら、スタンドアロンの True Image 2013 を終了します。
- これで、必要な場合にレスキュー CD が役に立つことがお分かりかと思います。

7.3.1 レスキュー メディアからの起動時におけるビデオ モードの選択

レスキュー メディアからの起動時には、ビデオ カードおよびモニタの仕様に応じて最適なビデオ モードが自動で選択されます。ただし、使用しているハードウェアに適していないビデオ モードが選択される場合もあります。このような場合は、次の手順で適したビデオ モードを選択できます。

1. レスキュー メディアからの起動を開始します。ブート メニューが表示されたら、**True Image** の項目にマウス ポインタを置いて **F11** キーを押します。
2. コマンド ラインが表示されたら、「vga=ask」と入力して **[OK]** をクリックします。



3. ブート メニューで **True Image** を選択してレスキュー メディアからの起動を続けます。使用できるビデオ モードを表示するには、該当するメッセージが表示されたら **Enter** キーを押します。

4. 使用しているモニタに最適なビデオ モードを選択し、その番号をコマンド ラインに入力します。たとえば、338 と入力すると 1600x1200x16 のビデオ モードが選択されます(下図参照)。

```
333 1024x768x16 VESA      334 1152x864x16 VESA      335 1280x960x16 VESA
336 1280x1024x16 VESA    337 1400x1050x16 VESA    338 1600x1200x16 VESA
339 1792x1344x16 VESA    33A 1856x1392x16 VESA    33B 1920x1440x16 VESA
33C 320x200x32 VESA      33D 320x400x32 VESA      33E 640x400x32 VESA
33F 640x480x32 VESA      340 800x600x32 VESA      341 1024x768x32 VESA
342 1152x864x32 VESA    343 1280x960x32 VESA    344 1280x1024x32 VESA
345 1400x1050x32 VESA    346 1600x1200x32 VESA    347 1792x1344x32 VESA
348 1856x1392x32 VESA    349 1920x1440x32 VESA    34A 1366x768x8 VESA
34B 1366x768x16 VESA     34C 1366x768x32 VESA     34D 1680x1050x8 VESA
34E 1680x1050x16 VESA    34F 1680x1050x32 VESA    350 1920x1200x8 VESA
351 1920x1200x16 VESA    352 1920x1200x32 VESA    353 2048x1536x8 VESA
354 2048x1536x16 VESA    355 2048x1536x32 VESA    356 320x240x8 VESA
357 320x240x16 VESA      358 320x240x32 VESA      359 400x300x8 VESA
35A 400x300x16 VESA      35B 400x300x32 VESA      35C 512x384x8 VESA
35D 512x384x16 VESA      35E 512x384x32 VESA      35F 854x480x8 VESA
360 854x480x16 VESA      361 854x480x32 VESA      362 1280x720x8 VESA
363 1280x720x16 VESA     364 1280x720x32 VESA     365 1920x1080x8 VESA
366 1920x1080x16 VESA    367 1920x1080x32 VESA    368 1280x800x8 VESA
369 1280x800x16 VESA     36A 1280x800x32 VESA     36B 1440x900x8 VESA
36C 1440x900x16 VESA     36D 1440x900x32 VESA     36E 720x480x8 VESA
36F 720x480x16 VESA      370 720x480x32 VESA      371 720x576x8 VESA
372 720x576x16 VESA      373 720x576x32 VESA      374 800x480x8 VESA
375 800x480x16 VESA      376 800x480x32 VESA      377 1280x768x8 VESA
378 1280x768x16 VESA     379 1280x768x32 VESA
Enter a video mode or "scan" to scan for additional modes: _
```

5. True Image 2013 が起動するまで待つてから、モニタ上の [ようこそ] 画面の表示状態が適していることを確認します。

他のビデオ モードをテストするには、True Image 2013 を閉じてから上記の手順を繰り返してください。

ハードウェアに最適なビデオ モードを見つけたら、そのビデオ モードを自動的に選択する新しいブータブル レスキュー メディアを作成できます。

これを行うには、Acronis メディア ビルダを起動して目的のメディア コンポーネントを選択し、[ブータブル メディアの起動パラメータ] のステップにおいてコマンド ラインに接頭辞「0x」を付加してモードの番号を入力(この例では「0x338」)してから、通常通りにメディアを作成します。

7.4 バックアップのリカバリ テスト

推奨事項は以下の通りです。

1) Windows でアクティブ パーティションのリカバリを開始する場合でも、プログラムはリカバリ プロセスの開始後に Linux 環境で再起動されます。これは、Windows 自体のパーティションのリカバリ中に Windows を実行しておくことはできないためです。したがって、すべてのケースにおいてリカバリ環境下でアクティブ パーティションをリカバリします。

予備のハードディスク ドライブがある場合は、このハードディスク ドライブにリカバリできるかどうかをテストすることを強く推奨します。これは、Linux を使用するレスキュー メディアからの起動後に実行する必要があります。

スペア ドライブがない場合は、少なくともリカバリ環境でイメージの検証を実行してください。Windows での検証中に読み取ることができるバックアップを、Linux 環境でも常に読み取れるとは限りません。

True Image 2013 のレスキュー メディアを使用すると、Windows でのドライブの識別方法とは異なるディスク ドライブ文字が作成されることがあります。たとえば、スタンドアロン版の True Image 2013 の D: ディスクが、Windows の E: ディスクに対応していることもあります。ハードディスク ドライブのすべてのパーティションに一意の名前(ラベル)を割り当てておくことをお勧めします。これにより、バックアップを含むディスクを見つけることが容易になります。

2) Windows 7 の Enterprise Edition または Ultimate Edition を使用している場合は、リカバリしたシステム パーティションから起動できるかどうかを事前にテストできます。True Image 2013 では、システム パーティション イメージを TIB ファイルに格納して、このファイルからコンピュータを起動することができます。バックアップからの起動テストで起動することができれば、実際のシステム リカバリ後ほぼ確実にそのバックアップから起動することができます。

True Image 2013 で起動元の tib ファイルを選択すると、このファイルが一時的に vhd ファイルに変換されます。ハードディスク ドライブには、このファイルを保存できるだけの空き領域が必要です。次に、Windows のブート ローダーの一覧に新しい項目が追加されます。ブート ローダーの一覧から tib ファイルを選択すると、コンピュータは、この一時 vhd ファイルから起動します。起動可能なバックアップが tib ファイルに保存されていることを確認したら、このファイルをブート ローダーの一覧から削除し、vhd 一時ファイルを削除できます。詳細については、「Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する (246ページ)」を参照してください。

7.5 HDD から SSD へのシステムの移行

セクションの内容

移行の準備	162
True Image 2013 が SSD を認識しない場合の処理	163
SSD パーティション アラインメントの確認	165
SSD パーティション アラインメントの修正	165
バックアップとリカバリを使用した SSD への移行	166
SSD に HDD の内容のための十分な領域がない場合の処理	167

7.5.1 移行の準備

ソリッド ステート ディスク(SSD)が急速に普及しており、多くのユーザーが、ディスク システムのパフォーマンスを向上させるためにシステム ハード ディスクを SSD に交換することを選択しています。

このような交換に際しては、多くの検討事項があります。SSD は依然としてやや高額なので、新しい SSD のサイズは通常、古いハード ディスクよりも小さくなる場合が多く、ハード ディスクにオペレーティング システム、プログラム、およびデータが含まれている場合に問題になることがあります。

SSD のアラインメントに関する考慮する必要があります。SSD の最適なパフォーマンスを実現し、長期間使用できるようにするには、パーティション オフセットが特定の条件を満たしている必要があります。詳細については、「SSD のサポート (16ページ)」を参照してください。

SSD を購入する前に、オペレーティング システムとアプリケーションによって占有されるおおよその領域を見積り、適切な予備の容量がある SSD を選択することをお勧めします。

最初に、True Image 2013 が、Windows と Acronis レスキュー メディアの両方で SSD を検出することを確認します。問題がある場合は、「True Image 2013 が SSD の認識しない場合の処理 (163ページ)」を参照してください。

次の 2 つのケースについて考えてみましょう。

1. 新しい SSD には、古いシステム ディスクに対応する十分な容量があり、追加の準備は必要ありません。
2. 古いハード ディスク上で占有されている領域は SSD のサイズを超えています。

最初のケースでは、システムを移行する方法が複数あります。システム ディスクが 1 つのパーティションで構成されている場合 (Windows 7 の多くのインストールに存在する隠しシステム予約パーティションは数えません)、クローン ツールを使用して SSD に移行することができます。詳細については、「ハード ディスクのクローン作成 (206ページ)」を参照してください。

ただし、ほとんどの場合はバックアップとリカバリを使用することをお勧めします。この方法の方が柔軟性に優れ、移行をより詳細に管理できます。「バックアップとリカバリを使用した SSD への移行 (166ページ)」を参照してください。

2 つ目のケースでは、移行を可能にするためにシステム ディスク上の領域を開放する必要があります。「SSD に HDD の内容のための十分な領域がない場合の処理 (167ページ)」を参照してください。

7.5.2 True Image 2013 が SSD を認識しない場合の処理

True Image 2013 が SSD を認識しないことがあります。

このような場合には、SSD が BIOS で認識されているかどうかを確認します。

コンピュータの BIOS に SSD が表示される場合は、電源ケーブルおよびデータ ケーブルが適切に接続されていることを確認します。BIOS と SATA ドライバのアップデートを試行します。これらの推奨策の効果がない場合は、SSD 製造元のサポートに問い合わせます。

コンピュータの BIOS に SSD が表示される場合は、次の手順を試すことができます。

Windows Vista/Windows 7 の場合は、[検索] フィールドに「`cmd`」と入力し、**Enter** キーを押します。

Windows XP の場合は、[ファイル名を指定して実行] フィールドに「`cmd`」と入力し、**Enter** キーを押します。

コマンド ライン プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
diskpart
```

`list disk` 画面には、コンピュータに接続されているディスクが表示されます。SSD のディスク番号を見つけます。サイズを参照しながら確認します。

`select disk N`。この例では、SSD の番号は N です。

`clean` この操作は、SSD からすべての情報を削除し、MBR をデフォルトの情報で上書きします。

exit

exit

True Image 2013 を起動し、SSD が検出されるかどうかを確認します。SSD が検出される場合は、新しいディスクの追加ツールを使用して、ディスク領域全体を占めるパーティションを 1 つディスク上に作成します。パーティションを作成するときに、パーティションの前に空き領域が 1 MB あることを確認します。詳細については、「新しいハード ディスクの追加 (214ページ)」を参照してください。

次に、Acronis ブータブル レスキュー メディアが SSD を認識するかどうかを確認します。

1. レスキュー メディアから起動します。
2. メイン メニューで **[ツールとユーティリティ]** -> **[新しいディスクの追加]** を選択すると、**[ディスクの選択]** 画面にシステム内のすべてのハード ディスクに関する情報が表示されます。この情報を使用して、リカバリ環境で SSD が検出されているかどうかを確認します。
3. 画面に SSD が表示されている場合は、**[キャンセル]** をクリックします。

レスキュー メディアが SSD を認識しないときに、SSD コントローラ モードが AHCI である場合は、モードを IDE(または一部の BIOS ブランドでは ATA)に変更し、これにより問題を解決するかどうかを確認します。

注意 モードを変更した後に Windows を起動しないでください。ここで起動するとシステムに重大な問題が発生する場合があります。Windows を起動する前にモードを AHCI に戻す必要があります。

モードを変更した後でレスキュー メディアが SSD を検出する場合は、次の手順に従ってレスキュー メディアでリカバリまたはクローン作成を行うことができます。

1. コンピュータをシャットダウンします。
2. BIOS を起動し、モードを AHCI から IDE(または一部の BIOS ブランドでは ATA)に変更します。
3. Acronis レスキュー メディアから起動します。
4. ディスクのリカバリまたはクローン作成を行います。
5. BIOS を起動し、IDE を AHCI に戻します。
6. Windows を起動します。

上記の推奨策の効果がなかった場合の処理

True Image 2013 Plus Pack のユーザーは、WinPE ベースのレスキュー メディアの作成を試すことができます。このメディアに、必要なドライバがある場合があります。詳細については、「WinPE ベースのレスキュー メディアの作成 (194ページ)」を参照してください。

アクロニス サポートにカスタム レスキュー メディアを要求することもできます。詳細については、「カスタム レスキュー CD の作成 (253ページ)」を参照してください。

適切なドライバを見つけてカスタム レスキュー メディアを作成するには、ある程度の時間がかかることをご了承ください。場合によっては適切なドライバが見つからないこともあります。

7.5.3 SSD パーティション アラインメントの確認

Windows Vista/Windows 7 をインストール DVD から新しいハード ディスクにインストールした場合は、インストール中にハード ディスクがオペレーティング ディスクによって自動的に 4096 の倍数(通常は 1.024 MB)にアラインメントされます。いずれのサイズでも確認しやすくなります。

SSD をコンピュータ内の目的のロケーションにマウントします。

Windows Vista/Windows 7

1. [検索] フィールドに「cmd」と入力し、**Enter** キーを押します。
2. コマンド ライン プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
wmic partition get BlockSize, Index, Name, StartingOffset
```

次のように出力されます。

```
C:\Users\Administrator>wmic partition get BlockSize, Startingoffset, Name, Index
BlockSize Index Name StartingOffset
512 0 ディスク #0, パーティション #0 1048576
512 1 ディスク #0, パーティション #1 105906176
512 0 ディスク #1, パーティション #0 135266304
512 0 ディスク #2, パーティション #0 32256
512 0 ディスク #3, パーティション #0 32256
512 1 ディスク #3, パーティション #1 16113323520
512 2 ディスク #3, パーティション #2 32210196480
512 0 ディスク #5, パーティション #0 16384
```

このスクリーンショットでは、ディスク 0 は正しくアラインメントされず、ディスク 3 と 4 は正しくアラインメントされています。

Windows XP

この場合、より多くのコマンドを実行する必要があります。

1. [ファイル名を指定して実行] フィールドに「cmd」と入力し、**Enter** キーを押します。
2. コマンド ライン プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
diskpart
```

```
list disk
```

画面には、コンピュータに接続されているディスクが表示されます。SSD のサイズを参考にして、SSD のディスク番号を確認します。

```
select disk N
```

この例では、SSD の番号は N です

```
list partition
```

出力に SSD パーティションのサイズとオフセット値が表示されます。

SSD のオフセット値が正しくない場合は、「SSD パーティション アラインメントの修正 (165ページ)」を参照してください。

7.5.4 SSD パーティション アラインメントの修正

システムを SSD に転送する前の準備が適切でないと、実際の開始オフセットが正しくない場合があります。たとえば、Windows XP を Windows Vista/7 にアップグレードする場合にこの状況が発生することがあります。

配置の問題を修正する方法について説明します。

1. True Image 2013 を起動し、[バックアップとリカバリ] タブをクリックします。

2. ディスク バックアップ モードで SSD をバックアップするタスクを作成します。
3. 外部ハード ディスクなどをターゲットに指定して SSD をバックアップします。
4. コンピュータをシャットダウンし、Windows インストール CD から起動します。

WinPE ベースの Acronis レスキュー メディアがある場合、そのメディアから起動できます。True Image を起動して終了し、コマンド ライン プロンプトに移動します。

コマンド ライン プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
diskpart
select disk Nこの例では、SSD の番号は N です
clean
create partition primary align=1024
active
format fs=ntfs quick
exit
exit
```

5. コンピュータをシャットダウンし、Acronis レスキュー メディアから起動します。
6. バックアップをリカバリに使用できることをベリファイします。
7. **[リカバリ]** タブをクリックし、**[ディスクのリカバリ]** をクリックします。
8. **[アーカイブの選択]** のステップで SSD のバックアップを選択し、**[次へ]** をクリックします。

Windows とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、**[参照]** をクリックして、バックアップのパスを表示します。

9. **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
10. SSD ディスク全体のチェックボックスをオンにし、**[次へ]** をクリックします。
11. ターゲットとして SSD を選択し、**[次へ]** をクリックします。
12. ターゲット ディスクにパーティションが含まれ、有効なデータが含まれている可能性があることを知らせる確認ウィンドウが表示されたら、**[OK]** をクリックします。
13. 処理の概要を注意深く読んで設定を確認し、**[実行]** をクリックします。
14. リカバリが終了したら、パーティションのオフセットをもう一度確認して修正されていることを確認します。

7.5.5 バックアップとリカバリを使用した SSD への移行

サポートされているすべてのオペレーティング システムについて、次の手順を使用できます。最初に、システム ディスクが 1 つのパーティションで構成されている単純なケースについて考えてみま
す。Windows 7 の場合、システム ディスクには通常隠しシステム予約パーティションがあります。

1. True Image 2013 を起動し、**[バックアップとリカバリ]** タブをクリックします。
2. **[ディスクとパーティションのバックアップ]** をクリックし、システム ハード ディスクと SSD 以外のハード ディスクにシステム ディスクをディスク バックアップ モードでバックアップします。
3. SSD をハード ディスクが装着されていたスロットにマウントします。

一部の SSD ブランドでは、SSD を PCI Express スロットに挿入する必要があります。

4. Windows DiskPart ユーティリティを使用して、SSD 上にパーティションを作成します。
Win + R キーを押し(または **[スタート]** -> **[ファイル名を指定して実行]** を選択)、「cmd」と入力してコマンド ライン プロンプトを開き、次のように入力します。

```
diskpart
select disk Nこの例では、SSD の番号は N です
clean
create partition primary align=1024
active
format fs=ntfs quick
exit
exit
```

5. コンピュータの電源を切り、システム ハード ディスクを取り外します。
6. Acronis レスキュー メディアから起動します。
7. バックアップをリカバリに使用できることをベリファイします。ベリファイするには、左側のペインで **[リカバリ]** をクリックし、バックアップを選択します。右クリックし、ショートカット メニューで **[ベリファイ]** を選択し、**[実行]** をクリックします。
8. ベリファイが終了したら、バックアップを右クリックし、ショートカット メニューで **[リカバリする]** を選択します。
9. **[リカバリの方法]** で **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
10. **[リカバリ元]** でシステム ディスクを選択します。
11. **[新しい場所]** をクリックし、システム ディスクの新しいロケーションとして SSD を選択し、**[確定]** をクリックします。
12. 次に、**[実行]** をクリックしてリカバリを開始します。
13. リカバリが完了したら、True Image 2013 のスタンドアロン版を終了します。
14. SSD から起動し、Windows とアプリケーションが正しく機能することを確認します。

多くのノートブックで見られるように、システム ハード ディスクに隠しリカバリ パーティションまたは診断パーティションが含まれている場合、手順は異なります。通常は、SSD へのリカバリ中に手動でパーティションのサイズを変更する必要があります。手順については、「**隠しパーティションを含むディスクのリカバリ (99ページ)**」を参照してください。

7.5.6 SSD に HDD の内容のための十分な領域がない場合の処理

次に、古いハード ディスクで使用されていた領域が SSD のサイズを超えている場合の対応について説明します。

この場合、データ ファイルを古いハード ディスクから別のロケーション(たとえば別のハード ディスク ドライブ)に移動する必要があります。

ノートブックにディスク 1 台分の領域しかない場合、オプションは制限されます。使用頻度の少ないデータ ファイルは外付けハード ディスクに移動することができます。または、ファイルの zip アーカイブを作成してから、元のファイルを削除することもできます。さらに、ハード ディスクをクリーンアップすることができます。**[ディスク クリーンアップ]** ウィンドウの **[詳細オプション]** タブで、システム復元ポイントの削除を選択します。

古いハード ディスク上で領域を開放した後に、使用されている領域が SSD のサイズより小さいかどうかを確認します。小さい場合は、前述の移行手順を実行します。安定した処理のために、Windows は、システム パーティション上に数 GB の空き領域を必要とします。

システムを移行した後で、Windows のいくつかの設定を調整することができます。これにより、Windows に必要なディスク領域が少なくなります。ほとんどの場合、次の操作は安全に実行できます。

- システムの復元をオフにします。システムの復元には、True Image 2013 があるので、この設定は不要です。
- インデックス サービスを無効にします。
- 休止状態モードをオフにします。

7.6 安全なシステム変更の試行

セクションの内容

Try&Decide とは	168
Try モードの開始	171
Try モードの停止	171
Try&Decide のオプションと通知	172
Try&Decide: 典型的な使用例	173

7.6.1 Try&Decide とは

Try&Decide 機能を使用すると、特別な仮想化ソフトウェアをインストールせずに、管理された安全な一時的作業スペースをコンピュータ上に作成できます。オペレーティング システム、プログラム、またはデータを破損する可能性を心配せずに、さまざまなシステム操作を実行できます。

保持しておきたい仮想の変更を加える場合は、元のシステムにそれらを適用できます。

この機能を使って試す操作の例には、未知の差出人からのメール添付ファイルを開く、危険なコンテンツが存在する可能性のあるウェブサイトアクセスするなどがあります。

たとえば、ウェブ サイトにアクセスしたときや電子メールの添付ファイルを開いたときに、オペレーティング システムの一時的な複製がウイルスに感染しても、その複製を削除すれば何の被害も及ぶことはなく、コンピュータがウイルスに感染することはありません。

Try モードで POP メール サーバーから電子メールをダウンロードしたり、新しいファイルの作成や既存の文書の編集を行ったりした後、変更を破棄するように決定した場合、それらのファイル、文書の変更、および電子メールは失われることにご注意ください。POP 電子メールを使用する場合は、Try モードを有効にする前に、電子メールをサーバーに残すようにメール設定を変更してください。このようにすると、いつでも電子メールを再度取得できます。同様に、新しいファイルや編集した文書は、Try&Decide で保護されていないドライブに保存してください。

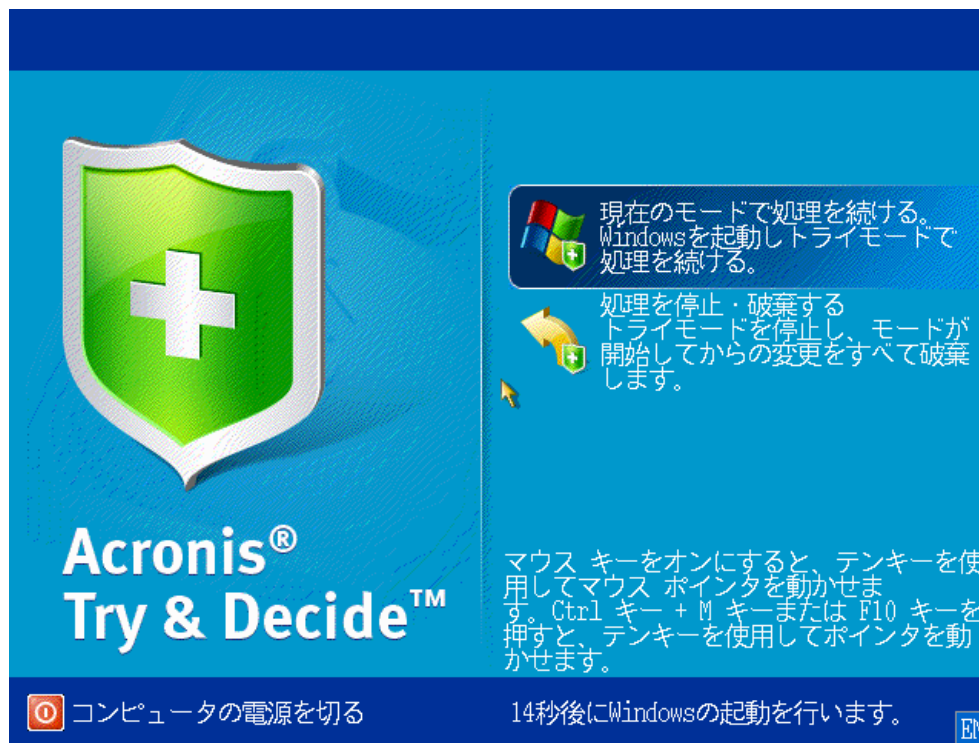
Try モードを開始した後は、システムに対する影響を懸念せずに、システム アップデート、ドライバ、およびアプリケーションを安全にインストールすることができます。何らかの問題が生じた場合は、Try モードで行った変更を破棄します。



Try&Decide モードの最も優れた特長の 1 つは、アップデートによって一時的なオペレーティング システムの複製に加えられた変更から「実際」のオペレーティング システムが隔離されることです。このため、システムのアップデートが提供されたときに、それを安全にインストールすることができます。Windows Update によってシステムおよび Microsoft 社のアプリケーション用の更新がインストール可能であることを通知された場合は、Try&Decide を有効にしてから、更新のインストールを実行します。何らかの問題が発生した場合は、変更を破棄すれば、実際のオペレーティング システムとアプリケーションに影響が及ぶことはありません。

Try&Decide はオペレーティング システムを再起動しても継続されるため、必要に応じて有効のままにしておくことができます。

Try モードでの作業中に何らかの理由でコンピュータが再起動された場合は、オペレーティング システムの起動が開始する前に表示されるダイアログで、Try モードを停止して変更を破棄するか、Try モードを継続するかを選択できます。これにより、システム クラッシュを発生させた変更を破棄することができます。逆に、たとえばアプリケーションをインストールした後で再起動した場合などは、Windows が起動した後も継続して Try モードで作業することができます。



このモードをオフにする場合は、Try&Decide アイコンをクリックします。Try モードで行ったシステムへの変更を適用するか破棄するかを選択するためのダイアログが表示されます。

[変更を適用する] を選択すると、システムに対する変更が残り、**[変更を破棄する]** を選択すると、Try&Decide を有効にする前のシステム状態に戻ります。**[再起動して変更を適用]** を選択すると、変更の適用を高速化できます。

Try&Decide 使用上の制限

Windows Vista または Windows 7 を使用している場合、Try モードではコンピュータがアイドル状態のときでもプログラムがディスクの空き領域をかなり消費することがあるため、注意してください。これは、バックグラウンドで実行されるインデックス作成などのハウスキーピング処理のためです。

Try モードでの作業中は、システムのパフォーマンスが低下することに注意してください。また、特に数日間 Try モードをオンにしている場合など、変更を適用する処理には長い時間がかかることがあります。

Try&Decide はディスクのパーティションの変更を追跡できないため、パーティションのサイズ変更やレイアウトの変更など、パーティションの仮想処理には Try モードを使用できないことにご注意ください。また、Try&Decide と同時にディスク最適化やディスク エラー チェックのユーティリティを使用しないでください。同時に使用すると、ファイル システムが修復不可能なほど破損することや、システム ディスクが起動不能になることがあるからです。

Try モードを開始すると、それ以前に Acronis スタートアップ リカバリ マネージャがアクティブ化されていても、使用できなくなります。Try モードでコンピュータを再起動すると、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを再び利用できるようになります。

Try&Decide とノンストップ バックアップを同時に有効にすることはできません。Try モードを開始すると、ノンストップ バックアップが一時停止します。Try モードを停止すると、ノンストップ バックアップが再開されます。

Try モードを開始すると、「休止」省電力モードを使用できなくなります。

7.6.2 Try モードの開始

Try モードを開始する手順は、次のとおりです。

- [ツールとユーティリティ] タブの [Try&Decide] をクリックします。
- Try&Decide のオプションを設定します。
 - 保護されたパーティション (172ページ)
 - 仮変更用のストレージ (172ページ)
 - 警告の設定 (173ページ)
- [Try & Decide] アイコンをクリックして、Try モードを開始します。OS とファイルに対するすべての変更の追跡が開始され、選択したディスクにすべての変更が一時的に保存されます。

Try モードでコンピュータを再起動(ソフト リブート)するたびに、最大 500 MB の Try&Decide のハウスキーピング データが、仮変更の保存先として選択したストレージに追加されます。このデータは、再起動の間に、保護されているパーティションを変更しなかった場合でも追加されます。

試用する変更をすべて実行した後、[Try & Decide] アイコンを再度クリックして Try モードを終了します。メッセージが表示され、変更の適用または破棄の選択を求められます。

True Image 2013 による変更の追跡は、仮変更の保存先として選択したディスクの領域が十分にあり、選択した場合は変更を適用できる間は実行されます。この状態になると、アラート メッセージが表示され、それまでに行った変更を適用するか破棄するかをユーザーが選択する必要があります。アラート メッセージを無視した場合、ディスクの空き領域がなくなったときにシステムは自動的に再起動され、変更は破棄されます。この時点ですべての変更は失われます。

7.6.3 Try モードの停止

このモードをオフにするには、[Try & Decide] ウィンドウの [Try & Decide] アイコンをクリックします。

[変更を適用する] を選択すると、システムに加えた変更が保存されます。

[再起動して変更を適用] を選択すると、変更の適用を短時間で実行できます。このボタンをクリックすると、コンピュータが再起動され、再起動中に変更が適用されます。

[変更を破棄する] を選択すると、Try モードを有効にする前の状態にシステムを戻すことができます。

[変更を破棄する] を選択して複数のオペレーティング システムがインストールされているコンピュータを再起動すると、Try モードでの作業に使用したオペレーティング システム以外は起動できなくなります。もう一度再起動すると、元の MBR がリカバリされて、他のオペレーティング システムも起動できるようになります。

7.6.4 Try&Decide のオプションと通知

[Try&Decide] 機能のデフォルト オプションの表示や編集を行うには、**[ツールとユーティリティ]** タブを選択して **[Try&Decide]** をクリックします。**[Try&Decide]** ウィンドウの対応する領域にオプションと通知が表示されます。

次の Try&Decide のオプションと通知を変更することができます。

- **[保護されたパーティション]:** Try&Decide でのセッション中に、不正な変更から保護するパーティションを指定します。Try&Decide のデフォルトではシステム パーティション(ディスク C)が保護されますが、システムの他の任意のパーティションやディスクを保護するように選択することもできます。
- **[仮変更用のストレージ]:** Try&Decide で、システムに対する仮変更についての情報を保存するロケーションを指定します。デフォルトでは、Try&Decide によって、ディスク C の空き領域に情報が保存されます。また Acronis セキュア ゾーン、他の論理ディスク、ハード ドライブなどを選択することもできます。

複数のパーティションを保護するように選択した場合、保護するパーティションの中から仮変更の保存先を選択することはできません。また、外部ハードディスク ドライブは選択できません。

- **[通知]:** 仮変更の保存用に割り当てたすべての空き領域が Try&Decide によって使用された場合と、指定した時間が経過した場合に警告を表示するかどうかを指定します。デフォルトでは、すべての通知がオンになっています。デフォルトの設定を変更するには、**[警告の設定を変更します...]** をクリックします。

設定を構成した後、いつでもデフォルト値に戻すことができます。そのためには、**[設定値をデフォルトに戻す]** ボタンをクリックします。

保護されたパーティション

Try&Decide セッション中の不正な変更から保護するパーティション(複数可)を指定します。Try&Decide のデフォルトではディスク C が保護されますが、システムの他のパーティションを保護するように選択することもできます。

パーティションを選択する手順は、次のとおりです。

- 対応するパーティションのチェックボックスをオンにします。ディスク全体を選択するには、そのディスクのパーティションをすべて選択する必要があります。
- **[OK]** をクリックします。

仮変更用のストレージ

Try&Decide セッション中に行われる仮の変更を保存するためのパーティションを指定します。デフォルトでは、Try&Decide によって、ディスク C の空き領域に情報が保存されます。また Acronis セキュア ゾーン、他の論理ディスク、ハード ドライブなどを選択することもできます。

複数のパーティションを保護する場合、保護するパーティションの中から仮変更の保存先を選択することはできません。また、外部ハード ディスク ドライブは選択できません。

パーティションを選択する手順は、次のとおりです。

- 仮変更を保存するパーティションをクリックします。
- [OK] をクリックします。

警告の設定

仮変更の保存用に割り当てたすべての空き領域が Try&Decide によって使用された場合と、指定した時間が経過した場合に警告を表示するかどうかを指定します。デフォルトでは、この設定はオンになっています。

次から選択できます。

- **残りのディスク空き領域** - このオプションを使用すると、Try&Decide で使用されているディスクの空き領域の残りと、ユーザーの指定した値が自動的にチェックされます。空き領域が指定値より少なくなると、通知メッセージが表示されます。
- **Try&Decide 開始からの経過時間** - このオプションを使用すると、Try&Decide での動作時間が、ユーザーの指定した時間を超えた場合に通知が行われます。

警告の設定値を指定したら、[OK] をクリックします。

7.6.5 Try&Decide: 典型的な使用例

Try&Decide 機能は、さまざまな場合に役立ちます。以下にその例を示します。

ソフトウェアのテスト

ウイルス対策ソフトウェアをインストールすると、一部のアプリケーションの機能が損なわれる場合があります。また、ウイルス対策ソフトウェアをインストールした後に、アプリケーションが起動できなくなる場合もあります。Try&Decide ユーティリティは、このような問題を防ぐのに役立ちます。次に例を示します。

- 試してみたい製品のベンダのウェブサイトから、ウイルス対策ソフトウェアの試用版をダウンロードします。
- Try&Decide を有効にします。
- ウィルス対策ソフトウェアをインストールします。
- ウィルス対策ソフトウェアがコンピュータにインストールされている状態で、通常の作業が実行できるかどうかを試みます。
- すべての作業が問題なく実行できた場合は、互換性に関する問題は存在しないと判断でき、このウイルス対策ソフトウェアを購入することができます。
- 何らかの問題が発生した場合は、このウイルス対策ソフトウェアのインストールによって生じたシステムの変更を破棄して、他のベンダのウイルス対策ソフトウェアを試みます。このようにして、別のソフトウェアが正常に動作するかどうかを確認することができます。

ファイルのリカバリ

ファイルを誤って削除してしまった後に、ごみ箱を空にしたとします。削除したファイルには重要な情報が含まれていたことに気づき、適切なソフトウェアを使用して、削除したファイルの回復を試みます。ただし、削除したファイルを回復する際に何らかの問題が発生し、回復を試みる前よりも状況が悪化する場合があります。このような場合は、次の手順を実行します。

- Try&Decide モードを有効にします。

- 削除ファイルの回復ユーティリティを起動します。
- ユーティリティによってディスクをスキャンされ、削除したファイルまたはフォルダのエントリが検索されます。削除したエントリが見つかった場合はそのエントリが表示され、リカバリ可能なものを元に戻す機会が得られます。その際に、必要なファイルとは異なるファイルを誤って選択してしまうと、リカバリしたいファイルがユーティリティにより上書きされてしまう可能性があります。Try&Decide を使用していない場合、このようなエラーは致命的であり、ファイルは完全に失われてしまいます。
- これに対し、Try&Decide モードが有効になっている場合は、間違った変更を破棄するだけで良く、再び Try&Decide モードを有効にしてから、正しいファイルのリカバリを試みることができます。ファイルのリカバリで最良の結果が得られるまで、このような試行を何回でも繰り返すことができます。

ソフトウェアのアンインストール

Windows のコントロール パネルの [プログラムの追加と削除] コンポーネントでは、アプリケーションを完全に削除できるとは限りません。これは、このコンポーネントがアプリケーションの痕跡を残さずにアンインストールするために十分な情報を、ほとんどのアプリケーションが提供していないためです。このため、試用版プログラムを追加して削除すると、ほぼ毎回、コンピュータにゴミ(不要となったデータ)が残り、放置すると Windows の動作が遅くなります。特別なアンインストーラユーティリティを使用したとしても、完全にアンインストールできるとは限りません。しかし、Try&Decide 機能を使うと、どのようなソフトウェアに対しても、完全なアンインストールを短時間で簡単に行うことができます。以下はその方法です。

- Try&Decide モードを有効にします。
- 評価するソフトウェア アプリケーションをインストールします。
- アプリケーションを試用します。
- アンインストールする場合は、Try&Decide モードで行ったコンピュータへの変更をすべて破棄します。

これは、たとえば、さまざまなゲームをプレイしたいユーザーに役立つだけでなく、プロのソフトウェア テスト担当者がテスト用マシンで使用することもできます。

Web のプライバシー

アクセスしたウェブサイトや開いたページを、誰にも知られたくない場合について考えてみましょう。プライバシーを守る権利はすべての人にあります。しかし、この際に問題になるのが、より速く快適に ウェブサーフィンを行うために、サイトやページの情報の他にも、受信したクッキー、検索エンジンで実行したクエリ、入力した URL などのさまざまな情報が、特殊な隠しファイルに保存されてしまうということです。また、これらの情報は、ブラウザのツールを使用してインターネット一時ファイルをクリアしたり、クッキーを削除したり、最近開いたウェブ ページの履歴をクリアしても、完全には削除されません。このため、特別なソフトウェアを使用すると、これらの情報に不正にアクセスできる場合があります。インターネットのすべての操作履歴をクリーンアップするためのサードパーティ製のプログラムもありますが、その多くは、価格が高かったり、習得に時間がかかったりします。Try&Decide 機能を使用すると、はるかに容易に、このような問題に対処できます。

まず、インターネット ブラウザを起動する前に、マウスを数回クリックして Try&Decide モードを有効にします。Try&Decide モードを有効にすると、仮想ディスクが作成されます。Try&Decide モードの実行中は、システム自体による変更も含め、システムに対するすべての変更がこの仮想ディスクに保存されます。この状態で、必要なだけ ウェブサーフィンを楽しむことができます。ブラウザの使用が終わった後に、マウスを数回クリックすると、Try&Decide モード中にシステムに蓄積さ

れた変更が破棄され、システムは再起動されます。これで、すべての隠しファイルも含めたシステム全体が、Try&Decide モードを開始する前とまったく同じ状態に復元されます。

7.7 スケジュール設定

[スケジューラ] ウィンドウを開くには、バックアップの設定時に [スケジュール] の右側に表示される [オンにする] リンクをクリックします。

ここでは、バックアップとベリファイのスケジュール設定を指定できます。



バックアップおよびベリファイ実行の間隔を、次のいずれかから選択して設定できます。

- **[日単位]** (176ページ) : 処理は 1 日 1 回以上実行されます。
- **[週単位]** (177ページ) : 処理は 1 週間に 1 回、または 1 週間に複数回、指定した曜日に実行されます。
- **[月単位]** (177ページ) : 処理は 1 カ月に 1 回、または 1 カ月に複数回、指定した日に実行されます。
- **[イベント発生時]** (177ページ) : 処理はイベントの発生時に実行されます。

[スケジュールを設定しない] ボタンをクリックすると、現在の処理に設定されているスケジューラが無効になります。この場合、バックアップやベリファイはそれぞれ、メイン ウィンドウで [今すぐバックアップ] または [バックアップのベリファイ] をクリックした場合にのみ実行されます。

詳細設定

[詳細設定] をクリックすると、バックアップおよびベリファイの次の追加設定を指定できます。

- スケジュールされた処理の実行を、コンピュータが使用中でない状態(スクリーン セーバーが表示される、またはコンピュータがロックされている状態)になるまで延期するには、[コンピュータのアイドル時にのみバックアップを実行] チェックボックスをオンにします。ベリファイのスケジュールを設定すると、チェックボックスが [コンピュータのアイドル時にのみベリファイを実行する] に変化します。

- スリープ/休止状態のコンピュータを起動して、スケジュールされた処理を実行するには、**[スリープ/休止状態のコンピュータを起動]** チェックボックスをオンにします。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合、処理は実行されません。実行されなかった処理は、次のシステム起動時に強制的に実行することができます。そのように設定するには、**[システム起動時に遅延して実行(分単位)]** チェックボックスをオンにします。
さらに、システムを起動して一定時間後にバックアップを開始するために、時間遅延を設定できます。たとえば、システム起動の 20 分後にバックアップを開始するには、該当するボックスに「20」と入力します。
- USB フラッシュ ドライブへのバックアップ、または USB フラッシュ ドライブに存在するバックアップのベリファイを設定すると、もう 1 つのチェックボックス、**[現在のターゲット デバイスが接続されている場合に実行]** が表示されます。チェックボックスをオンにすると、スケジュールした時刻に USB フラッシュ ドライブが接続されていなかったために実行されなかった処理を、USB フラッシュ ドライブが接続されたときに実行することができます。
- リムーバブル メディア(たとえば、USB フラッシュ ドライブ)またはリモート ストレージ(たとえば、ネットワーク フォルダまたは NAS)にあるデータを定期的にバックアップする場合、**[現在のソース デバイスが接続されている場合に実行]** チェックボックスをオンにすることをお勧めします。バックアップの予定時間に、外部のストレージ デバイスが利用できないことも多いため、この設定は便利です。この場合、チェックボックスをオンにすると、デバイスが接続または取り付けられた時点で、予定されていたバックアップ処理が開始されます。
- **[HDD アラーム発生時にバックアップを実行]**(Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能): 有効にすると、バックアップ元に含まれているいずれかのハード ディスクで考えられる問題が発生し、Acronis Drive Monitor のアラームがオンになるとすぐにバックアップが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプト情報に基づいた、ハード ドライブの状態監視ユーティリティです。

スケジュール設定が終了したら、**[OK]** をクリックします。

セクションの内容

日単位の実行パラメータ	176
週単位の実行パラメータ	177
月単位の実行パラメータ	177
イベント発生時の実行パラメータ	177

7.7.1 日単位の実行パラメータ

日単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **開始時刻または実行間隔**
 - **[時刻:]** を選択した場合、開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。複数の開始時刻を指定するには、**[追加]** をクリックします。
 - **[毎]** を選択した場合は、ドロップダウン リストから日単位の処理の実行間隔を選択します(例: 2 時間ごと)。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定 (175ページ)」を参照してください。

7.7.2 週単位の実行パラメータ

週単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **曜日**
処理の名前をクリックして、処理を実行する日を選択します。
- **開始時刻**
処理の開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定（175ページ）」を参照してください。

7.7.3 月単位の実行パラメータ

月単位の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **実行間隔または日付**
 - **[毎]** を選択した場合、ドロップダウン リストから週の番号と曜日を選択します（たとえば、第 1 月曜日を選択すると、処理は毎月第 1 月曜日に実行されます）。
 - **[指定日]** を選択した場合、処理の実行日を選択します（たとえば、その月の 10 日、20 日、および最終日に処理を実行できます）。
- **開始時刻**
処理の開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定（175ページ）」を参照してください。

7.7.4 イベント発生時の実行パラメータ

イベント発生時の処理の実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **イベント**
 - **[ユーザーログオン]**: 現在のユーザーがオペレーティング システムにログオンするたびに処理が実行されます。
 - **[ユーザーログオフ]**: 現在のユーザーがオペレーティング システムからログオフするたびに処理が実行されます。
 - **[システムの起動]**: オペレーティング システムの起動時に毎回処理が実行されます。
さらに、システムを起動して一定時間後にバックアップを開始するために、時間遅延を設定できます。たとえば、システム起動の 20 分後にバックアップを開始するには、該当するボックスに「20」と入力します。
 - **[システムシャットダウンまたは再起動]**: コンピュータのシャットダウン時または再起動時に毎回処理が実行されます。

このオプションは電子メールのバックアップには使用できません。
- **追加条件**
 - 当日そのイベントが最初に発生したときにのみ処理を実行する場合は、**[1 日 1 回のみ]** チェックボックスをオンにします。

[詳細設定] の説明については、「スケジュール設定（175ページ）」を参照してください。

7.8 バックアップとその内容の検索

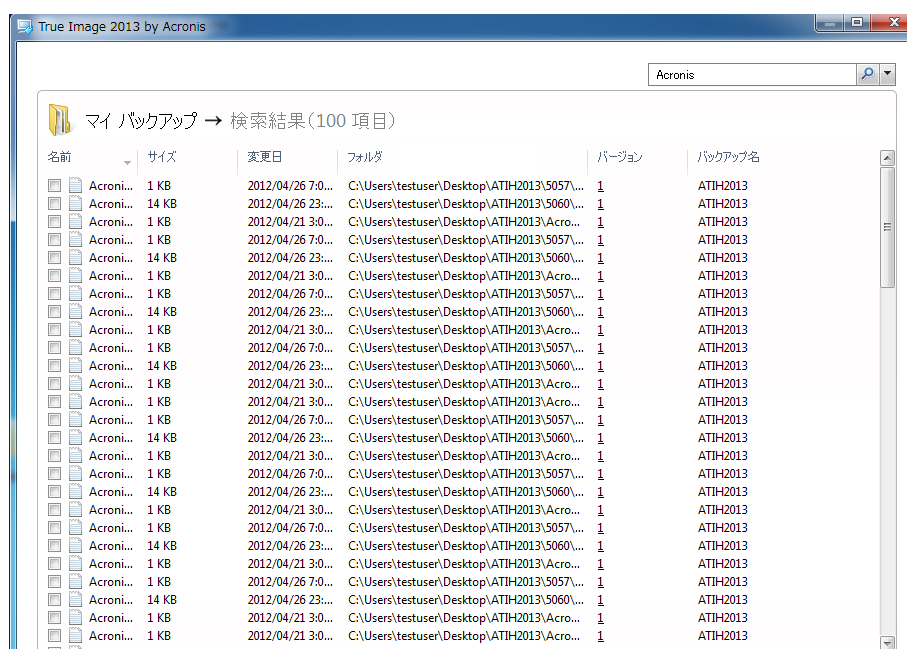
セクションの内容

検索	178
Windows サーチと True Image 2013 の組み合わせ	179

7.8.1 検索

True Image 2013 では、バックアップを参照できるだけでなく、バックアップ内のファイルも検索できます。

検索文字列を True Image 2013 ウィンドウ右上の [検索] フィールドに入力します。Acronis Backup Explorer 画面が表示されます。検索結果が表示されます。



デフォルトでは、True Image 2013 が情報を検索することのできるすべてのソースで検索が実行されます。つまり、すべてのローカル ストレージ デバイス上の、すべてのバックアップとそのバージョン内のファイルが検索されます。

True Image 2013 は、ネットワーク共有、Acronis Cloud、および Windows で [リムーバブル記憶域があるデバイス] として認識されるデバイスは検索できません。

tib バックアップ内のファイルやフォルダの検索結果が画面に表示されます。ファイル名をダブルクリックすると、そのファイルが開きます。ファイル名を右クリックしてショートカット メニューで [リカバリする] を選択すると、ファイルをリカバリすることができます。このショートカットを使用して、ファイルを開いたり、そのバージョンを表示したりすることもできます。

バックアップにあるファイルを検索する際には、ファイル名の全部または一部を入力します。一般的な Windows のワイルドカード文字を使用することもできます。たとえば、バックアップにあるすべてのバッチ ファイルを検索するには、「*.bat」と入力します。「my???.exe」と入力すると、「my」で始ま

る 5 文字の名前を持つ拡張子 .exe ファイルをすべて検索できます。検索では大文字と小文字が区別されないため、「Backup」と「backup」は同じ検索文字列とみなされます。

1 つのファイルが複数のバックアップに格納されており、そのファイルが変更された場合、検索結果には、対応する列内にファイル バージョンの数が表示されます。

True Image 2013 では、暗号化およびパスワード保護された TIB バックアップにあるファイルや、パスワード保護された Acronis セキュア ゾーンにあるファイルは検索されません。また、True Image 2013 で作成された ZIP バックアップ内のファイルも検索されません。

7.8.2 Windows サーチと True Image 2013 の組み合わせ

デスクトップ検索機能が組み込まれているいずれかのエディションの Windows Vista または Windows 7、あるいは Windows デスクトップ サーチ 3.0 以降を使用している場合、tib ファイルをインデックス付けすることができます。

Windows サーチをインストールしていないが使用したい場合は、Microsoft のウェブサイトから Windows Search 4.0 を無料でダウンロードできます。ダウンロードするには、<http://www.microsoft.com/downloads/ja-jp/details.aspx?FamilyID=55C18CB3-C916-4298-AB A3-5B98904F7CDA> をクリックしてください。ダウンロードしたファイルをダブルクリックしてインストール手順に従います。

True Image 2013 には、Windows サーチ用のプラグインがあります。プラグインをインストールしてバックアップをインデックス付けすると、バックアップの検索を高速化できます。インデックス付けすると、Windows サーチの検索フィールドにファイル名を入力すると、True Image 2013 を起動せずにバックアップの内容を検索できます。検索結果を使用して、以下のことを行えます。

- 任意のファイルを選択し、開いて参照したり、ファイル システムの(バックアップ以外の)任意のロケーションに保存したり、元のロケーションに戻す
- どのバックアップに指定したファイルが保存されているか確認し、そのバックアップをリカバリする

バックアップ内のファイル名のインデックス付け機能のほか、Windows サーチを使用して、バックアップに含まれる大量のファイル内のテキストに対してフルテキストをインデックス付けできます。これにより、複数ファイル内の検索を実行できます。

バックアップに含まれるファイルのフルテキスト インデックスは、Windows サーチにより認識されるファイルの種類にのみ作成されます。認識されるデータとしては、テキスト ファイル、Microsoft Office ファイル、Microsoft Office Outlook や Microsoft Outlook Express のすべてのアイテムなどがあります。

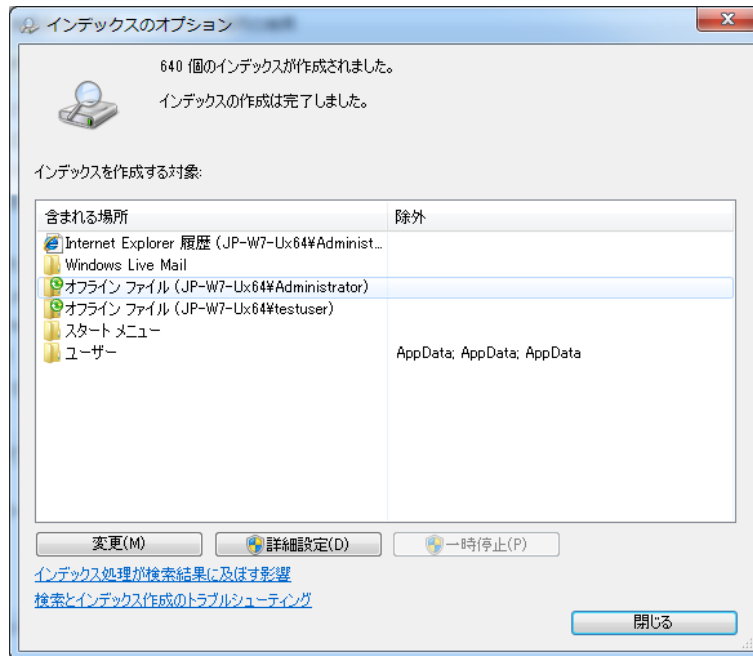
パスワードで保護されているバックアップや、パスワードおよび暗号化で保護されているバックアップの内容は、インデックス付けされませんが、Windows サーチでは、そのようなバックアップの tib ファイルの検索が可能です。また、Windows サーチは Acronis セキュア ゾーンにアクセスできないため、ゾーン内のバックアップの検索やインデックス付けはできません。

Windows サーチは、zip ファイル コンテンツのインデックス付けには対応していません。

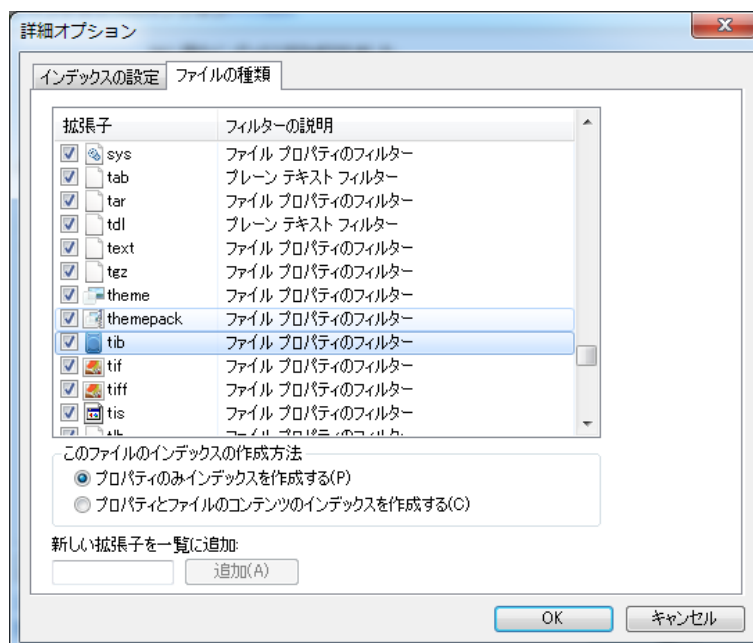
1. プラグインを登録するには、メイン プログラム ウィンドウの右上にある [検索] フィールドの右側の下矢印をクリックして、**[Windows サーチを使用]** をクリックします。
2. tib ファイルのインデックス付けのサポートが有効になっていることを確認します。システム トレイにある Windows サーチ アイコンを右クリックし、コンテキスト メニューで **[Windows デス**

クトップ サーチのオプション...] を選択します。次のウィンドウが表示されます。[含まれるロケーション] の一覧に「tib://...」という項目が表示されていることを確認します。

Windows Vista または Windows 7 で [インデックスのオプション] ウィンドウを開くには、コントロールパネルを開いてから [インデックスのオプション] アイコンをダブルクリックします。Windows Vista と Windows 7 のインデックスのオプションは、それぞれ内容や外観が多少異なりますが、以下の説明の大部分は両オペレーティング システムに当てはまります。

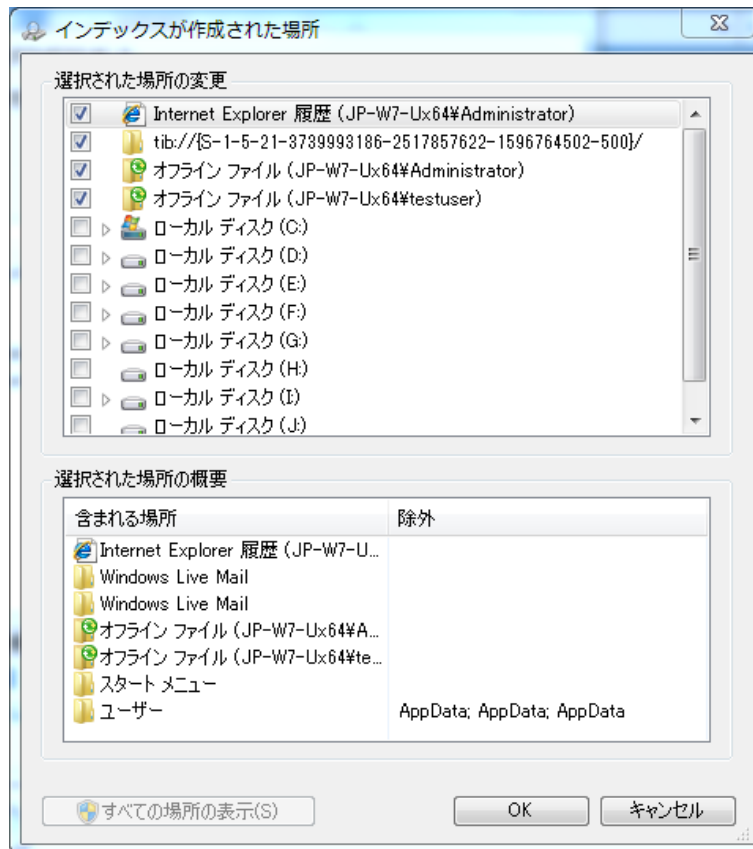


3. **[詳細設定]** をクリックして **[ファイルの種類]** タブを選択し、**tib** 拡張子が選択されており、[フィルタの説明] フィールドに「.tib IFilter」と表示されていることを確認します。**[プロパティとファイルのコンテンツのインデックスを作成する]** を選択します。



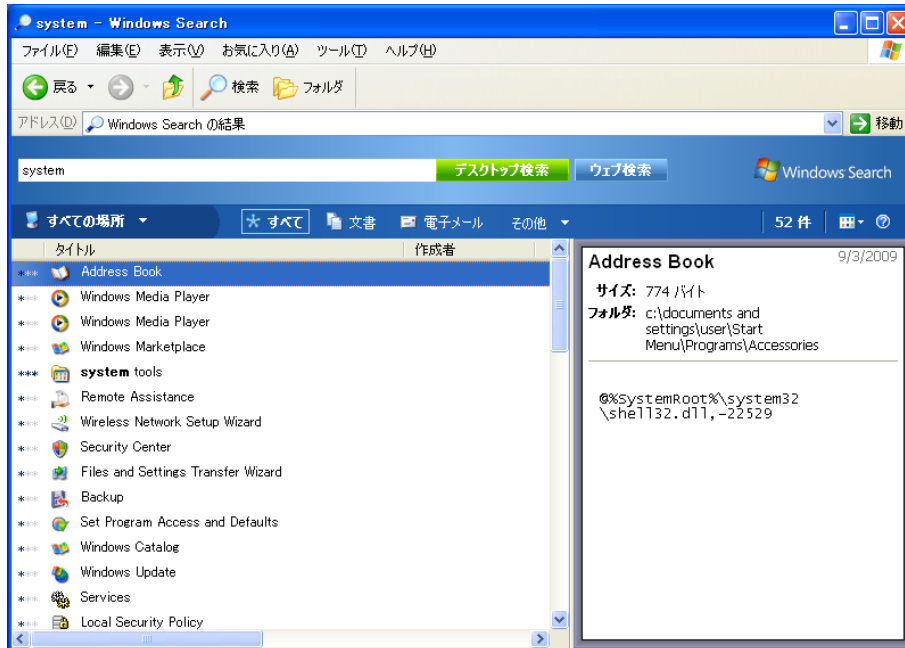
4. **[OK]** をクリックし、**[インデックスのオプション]** ウィンドウで、バックアップが保存されているディスクが **[含まれるロケーション]** の一覧に表示されていることを確認します。そのディスクがリス

トに表示されていない場合、バックアップのインデックスは作成されません。ディスクを追加するには、**[変更]** をクリックし、表示されたウィンドウでそのディスクを選択します。

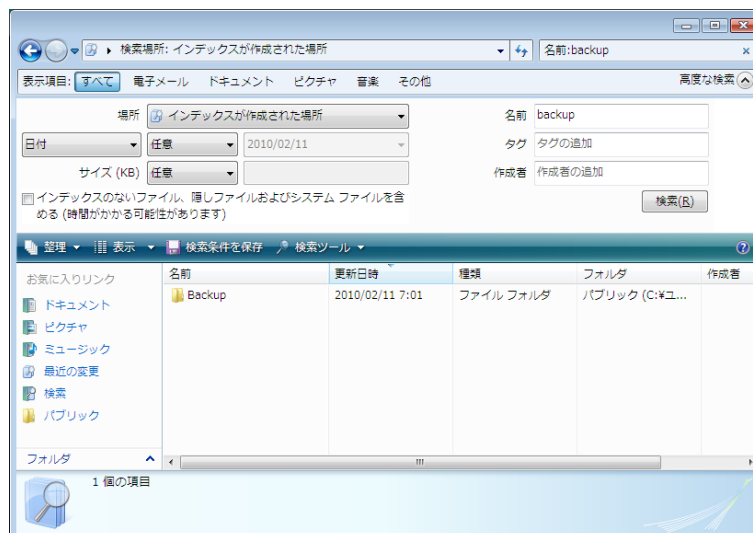


バックアップをネットワーク共有に保存している場合も、Windows 検索でインデックス付けできます。必要な作業は、共有を [含まれるロケーション] の一覧に追加するだけで、追加するには、**[詳細オプション]** の **[UNC のロケーションの追加]** タブを選択して、適切な UNC パスを **[UNC パスの追加]** に入力します。

Windows サーチによりコンピュータのハード ディスク上にある Acronis バックアップがインデックス付けされ、そのインデックス情報がインデックス データベースに追加されるまでには、多少の時間がかかります。所要時間はバックアップと、バックアップに格納されているファイル数によって異なります。インデックス付けが完了すると、Windows サーチにより tib バックアップ内のファイルを検索できるようになります。



Windows サーチと、Windows Vista または Windows 7 の検索エンジンは同様に機能しますが、検索結果の表示方法はやや異なります。



7.9 ウィザードに表示する項目の選択

各ウィザードでの項目の表示方法を変更できます。

特定の列を基準に項目を並べ替えるには、ヘッダーをクリックします(もう一度クリックすると、逆の順序で項目が並べ替えられます)。

表示する項目を選択するには、右側のペインで右クリックして、ショートカットメニューで **[表示]** を選択します。それから、表示する項目にフラグを設定します。また、**[昇順]** および **[降順]** ボタンを使って項目の表示順を変更することもできます。

項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更できます。

7.10 バックアップ情報

[バックアップ情報] ウィンドウには、選択したバックアップに関する詳細な情報が表示されます。

- **[パス]** - バックアップが保存されているロケーション。増分バックアップまたは差分バックアップの場合、完全バックアップが保存されているのとは異なるロケーションである可能性があります。
- **バックアップの方法** - 完全、増分、または差分です。バックアップの種類の詳細については、「完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ (44ページ)」を参照してください。
- **バックアップ ファイルの種類** - Acronis *.tib、または *.zip 圧縮ファイルのいずれかです。拡張子 zip は、ファイルまたはフォルダのバックアップのみに付きます。一方、拡張子 tib は、ディスク/パーティションのバックアップ、およびファイル/フォルダのバックアップの両方に付きます。
- **作成日** - バックアップが作成された日付と時刻です。
- **コメント** - コメントを入力すると、ここに表示されます。

7.11 タイムアウトの設定

プログラムが処理を実行するとき、エラー メッセージや警告が表示され、処理の進行が中断されることがあります。処理を再開するには、ユーザーがなんらかの情報を入力するか、オプションを選択する必要があります。

たとえば、バックアップ処理中に、バックアップの保存先でバックアップを完了させるのに十分なストレージ領域が不足したとき、このような状況が発生します。プログラムは、バックアップをキャンセルするか、ストレージ領域を増やすか、またはバックアップ先として別の場所を選択するかをユーザーが決定するのを待機します。

タイムアウト設定では、プログラムがユーザーの応答を待機する間隔を指定できます。間隔を設定 (分単位) するには、スライダを右に移動します。設定オプションの **[無制限]** はお勧めしません。この指定された間隔中に応答がない場合、処理はキャンセルされます。

8 ツールとユーティリティ

Acronis ツールとユーティリティには、Try&Decide、保護ツール、マウント ツール、バックアップ変換ツール、クローン ディスク ユーティリティ、セキュリティおよびプライバシー ユーティリティ、ディスク管理ユーティリティ、バックアップ設定の転送ツールがあります。

Try&Decide

安全ではない処理は Try モードで実験してから、それを適用するか、破棄するかを判断します。

保護ツール

- **Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ**
コンピュータ起動時にオペレーティング システムを読み込まずに True Image 2013 を起動することができます(オペレーティング システムが起動する前に F11 キーを押します)。
- **レスキュー メディア ビルダ**
コンピュータにインストールされている Acronis 製品(または指定したコンポーネント)が収録されたブータブル レスキュー メディアを作成することができます。
- **Acronis セキュア ゾーン**
ディスク上の安全な専用パーティションにバックアップを保存することができます。
- **ブート シーケンス マネージャ**
Windows 7 システム パーティションのイメージをブート リストに追加して、そのリストを管理することができます。このツールは、Windows 7 Ultimate/Enterprise の各エディション専用です。

バックアップ設定の転送

- **バックアップ設定をインポートする**
別のコンピュータからバックアップ設定を取得できます。
- **バックアップ設定をエクスポートする**
バックアップの設定を別のコンピュータにコピーおよび移動できます。

バックアップの変換

- **Acronis バックアップ変換**
バックアップ ファイルの形式を TIB から VHD に変換するときに使用します。VHD ファイルを使用すると、たとえば、Windows Vista や Windows 7 で True Image 2013 を使用せずにディスク イメージをマウントできるようになります。
- **Windows バックアップ変換**
バックアップ ファイルの形式を vhd から tib に変換するときに使用します。tib は、Acronis バックアップのネイティブ ファイル形式です。

ディスクのクローン作成

ディスクのクローン作成ウィザードは、ハードディスク ドライブのクローンを作成する場合に使用します。このウィザードを実行すると、パーティションが別のハードディスクにコピーされます。

セキュリティとプライバシー

- **Acronis DriveCleanser**

Acronis DriveCleanser は、ハード ディスクのデータを確実に消去するためのユーティリティです。

- **ファイル シュレッダー**

ファイル シュレッダーを使用すると、不要なファイルやフォルダを選択して完全に消去することができます。

- **システムのクリーンアップ**

システム クリーンアップ ユーティリティを使用すると、一般的なシステム タスクに関連するコンポーネント(フォルダ、ファイル、レジストリ セクションなど)を消去することができます。これらの Windows コンポーネントには、ユーザーによるコンピュータの操作履歴が保持されているため、個人情報を守るためにもこれらを完全に消去する必要があります。

ディスクの管理

- **新しいディスクの追加**

新しいディスクの追加ウィザードを使用すると、コンピュータに新しいハードディスク ドライブを容易に追加できます。パーティションを作成しフォーマットして、このハードディスク ドライブを使用できるようにします。

- **Acronis 容量拡張マネージャ**

ハード ドライブの容量に 2 TB の制限があるオペレーティング システムの場合、このツールはこの制限を解除するために役立ちます。2 TB に制限されず、3 TB のディスクでは、すべての容量を利用できるようになります。

- **ディスクの現在の状態を表示**

このリンクをクリックすると、統合された Acronis Disk Editor(読み取り専用モード)が開き、クリーンアップしたディスクまたはパーティションの状態が表示されます。詳細については、「ディスク エディタ(読み取り専用モード) (228ページ)」を参照してください。

イメージのマウント

- **イメージのマウント**

作成済みのイメージを参照できるようになります。パーティション イメージに一時的なドライブ文字を割り当て、通常の論理ドライブとしてアクセスすることができます。

- **イメージのアンマウント**

イメージを参照するために作成した一時的な論理ドライブのマウントを解除できます。

8.1 Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

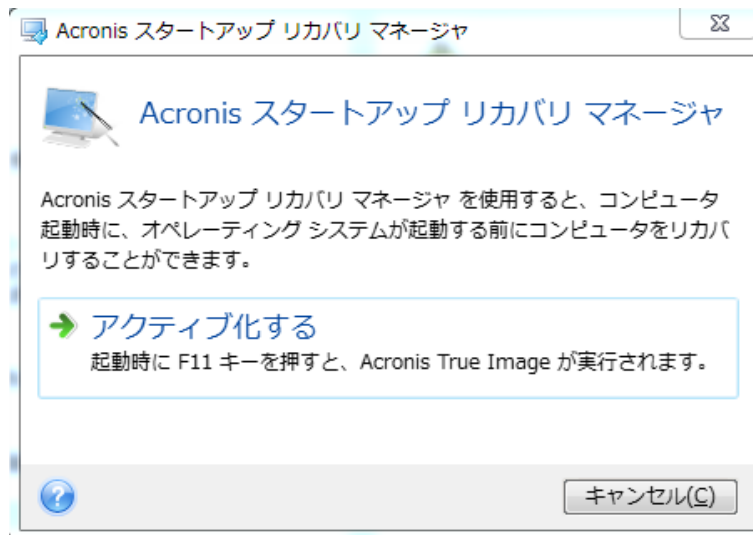
8.1.1 動作

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、オペレーティング システムを読み込まずに True Image 2013 を起動することができます。この機能を利用すれば、オペレーティング システムが起動しなくなったときでも、True Image 2013 を使用して、破損したパーティションをリカバリすることができます。Acronis のリムーバブル メディアからコンピュータを起動する場合とは異なり、True Image 2013 の起動時には独立したメディアやネットワーク接続は必要ありません。

8.1.2 使用方法

コンピュータ起動時に Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用できるようにするための準備手順は、次のとおりです。

1. True Image 2013 をインストールします。
2. Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化します。



Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、MBR(マスター ブート レコード)がスタートアップ リカバリ マネージャのブート コードで上書きされます。サード パーティ製のブート マネージャがインストールされている場合は、スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化した後に、そのブート マネージャを再度アクティブ化する必要があります。Linux のローダー(LiLo、GRUB など)を使用している場合は、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化する前に、ローダーを MBR ではなく、Linux の root(または boot)パーティションのブート レコードにインストールすることをお勧めします。

障害が発生した場合は、コンピュータの電源を入れて、「Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager」というメッセージが表示されたら F11 キーを押します。スタンドアロン版の True Image 2013 が起動します。このスタンドアロン版と完全版との違いはごくわずかです。

8.2 ブータブル レスキュー メディアの作成

セクションの内容

Acronis メディア ビルダ	186
True Image 2013 での BartPE ディスクの作成.....	191
WinPE ベースのレスキュー メディアの作成	194
Acronis メディア ビルダ用に USB フラッシュ ドライブを準備する方法	199

8.2.1 Acronis メディア ビルダ

緊急用起動メディアを使用して、ベアメタル システムまたはクラッシュしたコンピュータで True Image 2013 を起動できます。Windows 以外のコンピュータのハードディスクをバックアップすることもできます。セクタ単位モードでディスクをイメージ作成することにより、すべてのデータをバックアップにコピーします。これには、スタンドアロン版の True Image 2013 がインストールされたブータブル メディアが必要になります。

ボックス版製品を購入した場合は、インストール CD 自体がブータブルであるので、既にブータブル CD をお持ちです。

True Image 2013 をアクロニス オンラインストアから購入した場合や小売業者からダウンロード版を購入した場合は、レスキュー メディア ビルダを使用して、ブータブル メディアを作成することができます。このメディアを作成するには、空の CD-R/RW、DVD+R/RW、またはコンピュータの起動に使用可能なその他のメディア(USB フラッシュ ドライブなど)が必要です。

USB フラッシュ ドライブ上に作成されたブータブル メディアからは Windows オペレーティング システムは起動できませんので注意してください。

True Image 2013 には、ブータブル ディスクの ISO イメージをハードディスク上に作成する機能もあります。

コンピュータに Acronis Disk Director Home などの他の Acronis 製品がインストールされている場合は、それらのプログラムのスタンドアロン版も同じブータブル メディアに追加することができます。

メモ

- インストール時にレスキュー メディア ビルダをインストールしなかった場合は、True Image 2013 でこの機能を使用することはできません。
- ブータブル メディアから起動する場合は、Ext2/Ext3/Ext4、ReiserFS、Linux SWAP ファイルシステムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うことはできません。
- 新しいバージョンのプログラムで作成されたバックアップは、前のバージョンのプログラムとは互換性がない可能性があることに注意してください。このため、True Image 2013 をアップグレードした場合は必ず新しいブータブル メディアを作成することを強くお勧めします。
- レスキュー メディアから起動していてスタンドアロン版の True Image 2013 を使用している場合は、Windows XP 以降のオペレーティング システムの暗号化機能で暗号化されたファイルやフォルダをリカバリすることはできません。詳細については、「バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定 (80ページ)」を参照してください。これに対し、True Image 2013 の暗号化機能を使用して暗号化されたバックアップはリカバリすることができます。

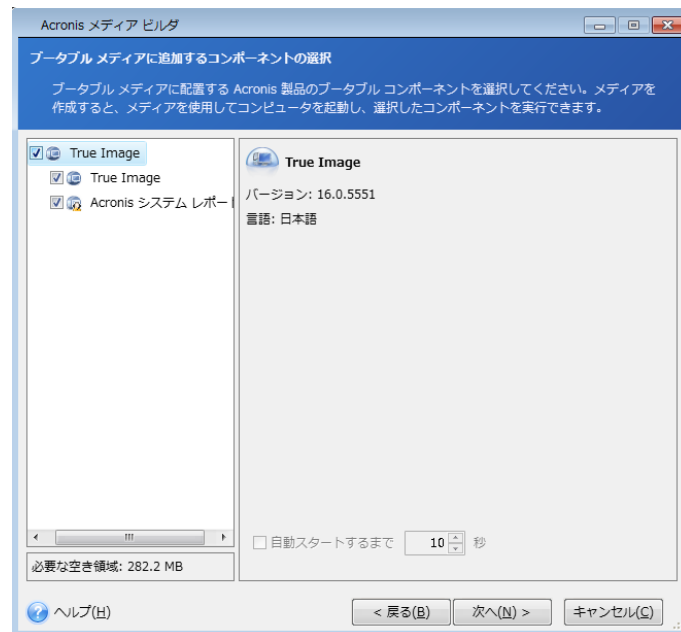
レスキュー メディアに追加するコンポーネントの選択

Acronis プログラムのどのコンポーネントをブータブル メディアに追加するかを選択できます。他の Acronis 製品、たとえば Acronis Disk Director Home がコンピュータにインストールされている場合は、そのプログラムのコンポーネントも選択可能です。

True Image 2013 には、次のコンポーネントがあります。

- **True Image:** USB、PC カード(旧 PCMCIA)、SCSI、およびこれらの各インターフェイスを介して接続されるストレージ デバイスがサポートされます。したがって、このコンポーネントの追加を強くお勧めします。

- **Acronis システム レポート:** システム レポートが生成されます。このレポートは、プログラムの問題が発生したときに、システムに関する情報を集めるのに利用できます。レポート生成は、ブータブル メディアから True Image 2013 を起動する前でも実行可能です。生成されたシステム レポートは、USB フラッシュドライブに保存できます。



コンポーネントを選択する手順は、次のとおりです。

- ブータブル メディアに格納したいプログラムのチェックボックスをオンにします。一番下のフィールドには、選択したコンポーネントに必要な容量が表示されます。コンピュータに他の Acronis 製品がインストールされている場合は、そのプログラムのスタンドアロン版も同じブータブル メディアに追加することができます。
- プログラムを自動的に起動する場合は、**[自動スタートするまで [n] 秒]** チェックボックスをオンにします。**[自動スタートするまで [n] 秒]** パラメータでは、ブート メニューのタイムアウト間隔を指定します。このパラメータが指定されていない場合、ブート メニューが表示され、OS または Acronis コンポーネントのどちらを起動するかが選択されるまで待機します。たとえば、Acronis レスキュー メディアに対してこのパラメータを **10 秒** に設定すると、ブート メニューが表示されてから 10 秒後にスタンドアロン版の True Image 2013 が起動します。
- 続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。

ブータブル メディアの起動パラメータ

ブータブル メディアの起動パラメータを設定することにより、ブータブル メディアの起動オプションを構成し、さまざまなハードウェアとの互換性を向上させることができます。nousb、nomouse、noapic などのオプションが利用できます。上級ユーザー向けに用意されているパラメータです。ブータブル メディアからの起動をテスト中にハードウェアの互換性の問題が発生した場合は、Acronis テクニカル サポートにお問い合わせください。

起動パラメータを追加する手順は、次のとおりです。

- **[パラメータ]** フィールドにコマンドを入力します。
- 起動パラメータを指定したら、**[次へ]** をクリックして先に進みます。

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ

説明

次のパラメータを使用すると、Linux カーネルを特殊モードで読み込むことができます。

- **acpi=off**

ACPI を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **noapic**

APIC (Advanced Programmable Interrupt Controller) を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **nousb**

USB モジュールの読み込みを無効にします。

- **nousb2**

USB 2.0 のサポートを無効にします。このオプションを指定しても、USB 1.1 デバイスは動作しません。このオプションを指定すると、USB 2.0 モードでは動作しない一部の USB ドライブを USB 1.1 モードで使用できます。

- **quiet**

このパラメータはデフォルトで有効になっており、起動メッセージは表示されません。このパラメータを削除すると、Linux カーネルが読み込まれるときに起動メッセージが表示されるようになり、Acronis プログラムが実行される前にコマンド シェルが提供されます。

- **nodma**

すべての IDE ディスク ドライブの DMA を無効にします。カーネルが一部のハードウェアでフリーズするのを防ぎます。

- **nofw**

FireWire (IEEE1394) のサポートを無効にします。

- **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を無効にします。

- **nomouse**

マウスのサポートを無効にします。

- **[モジュール名]=off**

モジュールを無効にします (例: **sata_sis=off**)。

- **pci=bios**

PCI BIOS の使用を強制し、ハードウェア デバイスには直接アクセスしません。たとえば、コンピュータが標準以外の PCI ホスト ブリッジを備えているような場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を無効にします。ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。たとえば、BIOS が原因で起動時にクラッシュが発生すると考えられる場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=biosirq**

PCI BIOS の呼び出しを使用して、割り込みルーティング テーブルを取得します。これらの呼び出しは、一部のコンピュータではバグがあり、使用するとコンピュータがフリーズしますが、他のコンピュータでは、割り込みルーティング テーブルを取得する唯一の方法です。カーネルが IRQ を割り当てることができない場合、またはマザーボード上のセカンダリ PCI バスを検出できない場合は、このオプションを試してください。

- **vga=ask**

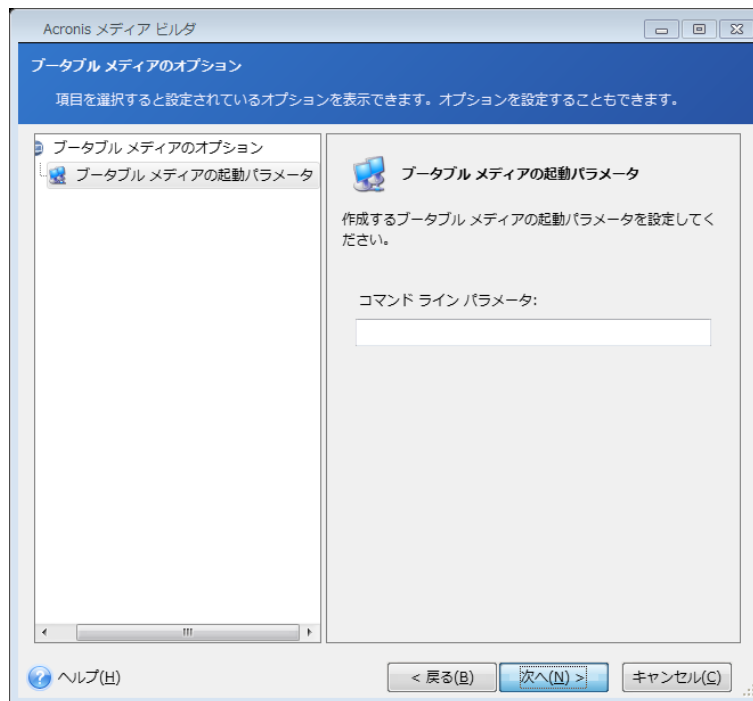
現在のビデオ カードで利用できるビデオ モードの一覧を取得し、ビデオ カードとモニタに最適なビデオ モードを選択できるようにします。自動的に選択されたビデオ モードがお使いのハードウェアに適合しない場合は、このオプションを試してください。

ブータブル メディアの選択

ブータブル メディアの作成先を選択します。

- **CD-R/RW** - CD に作成する場合は、空のディスクを挿入します。プログラムによってディスクの容量が確認されます。
- **ISO イメージ** - ISO ディスク イメージを作成すると、DVD ライティング ソフトウェアを使用して、書き込み可能な任意の DVD メディアに書き込むことができます。ブータブル メディア ビルダから直接ブータブル DVD を作成することはできません。
- USB メモリなど、コンピュータを起動できるその他のメディア。

非光学メディアを使用する場合、メディアのファイル システムは、FAT ファイル システムでなければなりません。この制限事項は、ISO イメージには該当しません。



ファイルの保存先の選択

ブータブル メディアの ISO イメージの作成を選択した場合は、作成する ISO イメージのファイル名と保存先のフォルダを指定します。

- フォルダ ツリーで保存先のフォルダを選択します。
- **[ファイル名]** フィールドに、.iso ファイルの名前を入力します。

- 続行するには、[次へ] をクリックしてください。

ブータブル メディア作成の概要

このページでは実行される処理が表示されます。

ブータブル メディアの作成プロセスを開始する場合は、[実行] をクリックします。

左のサイドバーは、ウィザードのステップで行った設定を変更する場合に使用します。

処理をキャンセルして Acronis メディア ビルダを終了する場合は、[キャンセル] をクリックします。

起動ディスクの作成後は、ディスクに必要事項を記入して安全な場所に保管してください。

新しいバージョンのプログラムで作成されたバックアップは、前のバージョンのプログラムとは互換性がない可能性があることに注意してください。このため、True Image 2013 をアップグレードした場合は必ず新しいブータブル メディアを作成することを強くお勧めします。また、レスキュー メディアから起動していてスタンドアロン版の True Image 2013 を使用している場合は、Windows XP 以降のオペレーティング システムの暗号化機能で暗号化されたファイルやフォルダをリカバリできませんので、注意してください。詳細については、「バックアップ用のファイル レベルのセキュリティ設定 (80ページ)」を参照してください。これに対し、True Image 2013 の暗号化機能を使用して暗号化されたバックアップはリカバリすることができます。

ブータブル USB フラッシュ ドライブを作成する方法

スタンドアロンの True Image 2013 が格納されたブータブル USB フラッシュ ドライブを作成できます。これは、たとえば、ノートパソコンに CD/DVD ドライブが内蔵されていない場合などに便利です。

必要な USB フラッシュ ドライブの容量は、256 MB 以上です。ドライブは、FAT16 または FAT32 ファイル システムにフォーマットしてください。

ブータブル USB フラッシュ ドライブを作成するには、そのドライブを USB ポートに接続します。メディア ビルダを起動し、レスキュー メディアを作成するロケーションとして対象のドライブを選択します。メディア ビルダ ウィザードのステップを順に実行します。メディアの作成の詳細については、「ブータブル メディアを作成する方法」を参照してください。

メディア ビルダが USB フラッシュ ドライブを認識しない場合は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.acronis.com/content/1526>) で説明されている手順を試してください。

8.2.2 True Image 2013 での BartPE ディスクの作成

BartPE (Bart Preinstalled Environment) とは、Windows XP または Windows Server 2003 のオリジナル インストール/セットアップ CD から作成された、ブータブルな Windows CD/DVD です。True Image 2013 の現在のバージョンには、Windows Vista および Windows 7 のプレインストール環境のためのプラグインはありません。

BartPE の一番の利点は、Windows のドライバが使用されることと、グラフィカル ユーザー インターフェイスが Windows に似ていることです。任意のストレージ ドライバを起動時に追加することもできます。方法は、Windows をハード ドライブにインストールするときと同じです (F6 キーを押し、ドライバのフロッピー ディスクを挿入します)。

BartPE にインストールされるアプリケーションはプラグインの形でインストールされます。True Image 2013 プラグインを BartPE プラグイン タブで追加することができます。

True Image 2013 のパッケージ製品を購入された場合以外は、次の手順に従って、別のインストール ファイルを Acronis のマイ アカウントからダウンロードする必要があります。

- <https://www.acronis.co.jp/my> にアクセスします。
- ログインします。
- 購入した True Image 2013 のプロダクト キーを登録します(未登録の場合)。
- **[登録済み製品とダウンロード]** をクリックします。
- **True Image 2013** の項目を展開します。
- **[無償プラグイン]** タブをクリックしてから、**[BartPE プラグイン]** をクリックします。プラグインのダウンロードが開始されます。

次の手順に従って、プラグインをインストールします。

1. ダウンロードされたファイルをダブルクリックすると、インストールが開始します。
2. インストールが完了すると、BartPE の CD/DVD を作成して True Image 2013 のプラグインを追加することができるようになります。

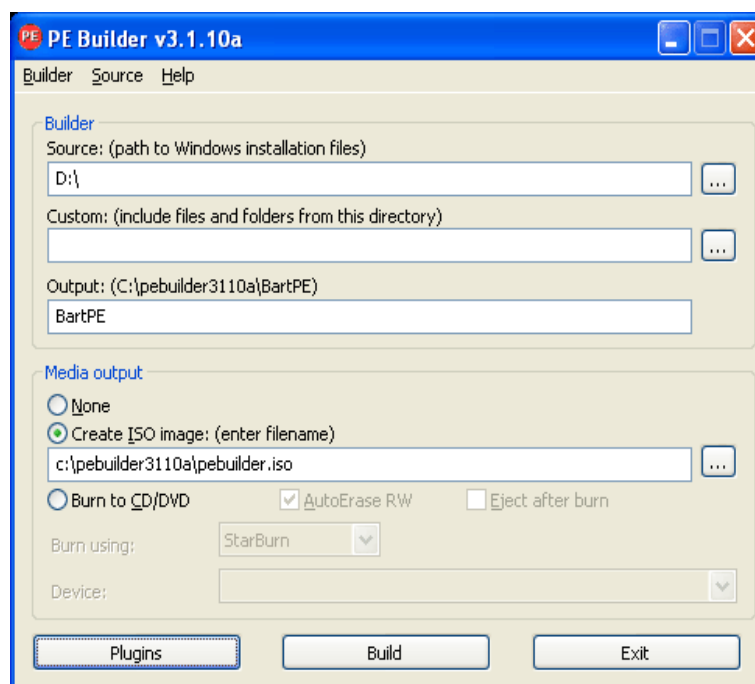
以下の説明は、PE Builder バージョン 3.1.10a の場合の手順です。

True Image 2013 プラグイン付きの BartPE CD を作成するには、次の手順に従います。

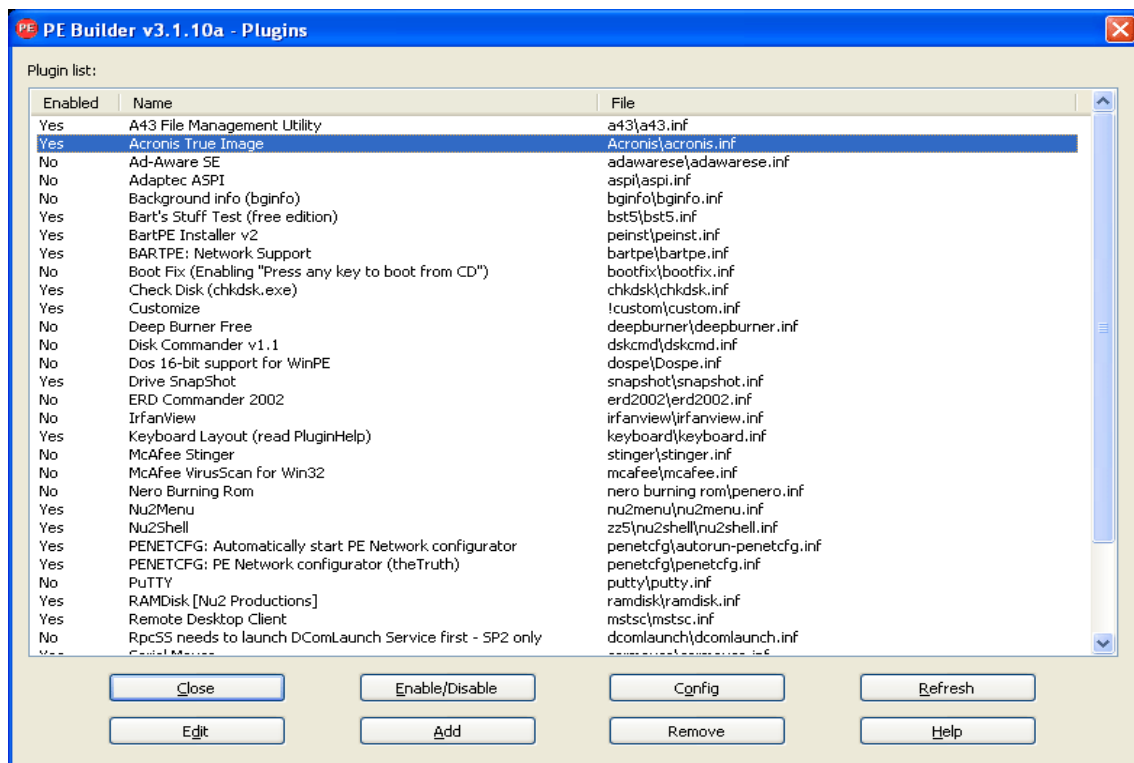
- リンク <http://nu2.nu/pebuilder/download/>(英語)を使用して PE Builder をダウンロードしてインストールします。

True Image 2013 のインストール フォルダを開きます(デフォルトのフォルダは C:\Program Files\Acronis または C:\Program Files\Acronis\Media Add-ons です)。BartPE フォルダの名前を Acronis に変更します。このフォルダを、PE Builder のインストール ディレクトリ内にある Plugin フォルダにコピーします(デフォルト ディレクトリは C:\pebuilder3110a または同様のディレクトリです)。

PE Builder を起動して、必要なパスを入力し(オンライン ヘルプ: <http://nu2.nu/pebuilder/help>(英語))、[Plugins](プラグイン) ボタンをクリックします。



[Plugins](プラグイン)画面で True Image 2013 のプラグインが有効になっていることを確認します。



[Plugins](プラグイン)ウィンドウを閉じて [Build](ビルド) ボタンをクリックすると、ビルド プロセスが開始します。イメージを CD に書き込む場合は、[Burn to CD](CD/DVD に焼く)オプションを選択して、書き込みツールとデバイスをメニューから選択します。

イメージが作成されたら、CD または DVD に書き込みます (前のステップで [Burn to CD](CD/DVD に焼く)オプションを選択しなかった場合)。

この CD/DVD からコンピュータを起動した後で、[Go](実行) -> [System](システム) -> [Storage](ストレージ)を選択すると、True Image 2013 プラグインを起動できます。

ドライバの追加

BartPE で追加できるドライバには、ストレージ ドライバとネットワーク ドライバの 2 種類があります。ドライバを追加する方法については、PE Builder のドライバのヘルプ (<http://www.nu2.nu/pebuilder/help/english/drivers.htm>) (英語)を参照してください。

ストレージ ドライバ(RAID または SCSI デバイス用)を、BartPE の起動時に追加することもできます (F6 キーを押して、ドライバのフロッピー ディスクを読み込ませる必要があります)。共通のストレージ ドライバは、<http://nu2.nu/pebuilder/drivers/> (英語)にあります。

作成した BartPE メディアからコンピュータを起動したときに、True Image 2013 は次のロケーションにあります。

[Go](実行) -> [System](システム) -> [Storage](ストレージ) -> [True Image 2013]

8.2.3 WinPE ベースのレスキュー メディアの作成

WinPE ベースのレスキュー メディアを作成するには、True Image 2013 Plus Pack をインストールする必要があります。

WinPE 用 Acronis プラグインは、次のいずれかのカーネルに基づく WinPE ディストリビューションに追加できます。

- Windows Vista (PE 2.0) (KB926044 以降の Windows XP SP2 にも使用可能)
- Windows Vista SP1 (PE 2.1) (KB926044 以降の Windows XP SP2 にも使用可能)
- Windows 7 (PE 3.0) (Windows 8 にも使用可能)

注意 WinPE 用 Acronis プラグインは、Windows 8 カーネル (PE 4.0) に基づく WinPE ディストリビューションに追加できません。

PE 2.x および 3.0 イメージを作成または変更できるようにするには、Windows 自動インストールキット (AIK) がインストールされている必要があります。

PC に Windows AIK がインストールされていない場合は、次の手順に従って準備します。

1. Windows 自動インストール キットをダウンロードしてインストールします。

Windows Vista および Windows XP Service Pack 2 以降の AIK (PE 2.0):

<http://www.microsoft.com/Downloads/details.aspx?familyid=C7D4BC6D-15F3-4284-9123-679830D629F2&displaylang=ja>

Windows Vista SP1 用 AIK (PE 2.1):

<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=94bb6e34-d890-4932-81a5-5b50c657de08&DisplayLang=ja>

Windows 7 用 AIK (PE 3.0):

<http://www.microsoft.com/DOWNLOADS/details.aspx?familyid=696DD665-9F76-4177-A811-39C26D3B3B34&displaylang=ja>

2. (オプション) Windows AIK を DVD に書き込むかフラッシュ ドライブにコピーします。
3. このキットから Microsoft .NET Framework v.2.0 (ハードウェアに応じて、NETFXx86 または NETFXx64 を選択) をインストールします。
4. このキットから Microsoft Core XML (MSXML) 6.0 パーサーをインストールします。
5. このキットから Windows AIK をインストールします。

Windows AIK で提供されているヘルプ ドキュメントの内容を把握しておくことをお勧めします。ホワイト ペーパー (Getting Started for IT Professionals) の「Create an image」セクションをお読みになることをお勧めします。このドキュメントにアクセスするには、**[スタート]** メニューから **[Microsoft Windows AIK] -> [ドキュメント] -> [Getting Started for IT Professionals]** を選択します。

Windows PE のカスタマイズの詳細については、(Windows プレインストール環境 (Windows PE) ユーザーズ ガイド) (Winpe.chm) をご参照ください。

True Image 2013 と WinPE 2.x または 3.0 ISO の統合

Acronis WinPE ISO ビルダには、True Image 2013 を WinPE 2.x および WinPE 3.0 に統合する次の 3 つの方法があります。

- プラグインが組み込まれた PE 2 または PE 3 ISO を最初から作成する。

- Acronis プラグインを既存の PE 2 または PE 3 ISO に追加する。この方法は、以前に設定済みで既に使用中の PE 2 または PE 3 ISO にプラグインを追加するときに便利です。
- 将来使用する目的で(手動での ISO 作成、イメージへの他のツールの追加など)、Acronis プラグインを WIM ファイルに追加する。

上記の操作のいずれかを実行できるようにするには、True Image 2013 Plus Pack および Windows 自動インストール キット(WAIK)が PC にインストールされている必要があります。WAIK をインストールしていない場合は、このセクションの説明に従ってインストールしてください。

Acronis WinPE ISO ビルダでは、x86 WinPE 2.x および WinPE 3.0 のみがサポートされます。この WinPE ディストリビューションは、x64 ハードウェア上でも動作します。

Win PE 2.x または 3.0 に基づく PE イメージが動作するには、少なくとも 256 MB の RAM が必要です。PE 2.x または 3.0 の推奨メモリ サイズは 512 MB です。

Acronis プラグインを使用した、新しい Win PE 2.x または PE 3.0 ISO の作成

True Image 2013 Plus Pack が PC にインストールされている必要があります。

Acronis プラグインを使用して新しい Win PE 2.x または PE 3.0 ISO を作成するには、まず以下の手順で Windows PE ビルド ディレクトリを作成します。

1. **[スタート]** メニューから、**[Microsoft Windows AIK] -> [Windows PE ツールのコマンド プロンプト]** を選択します。

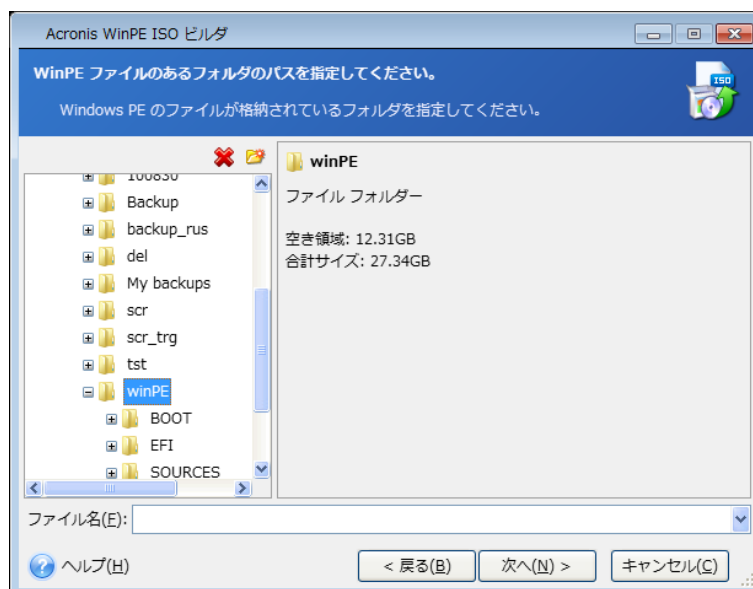
Windows 7 の環境の場合は、**[スタート]** メニューから、**[Microsoft Windows AIK] -> [Deployment ツールのコマンド プロンプト]** を選択します。

2. **copype.cmd** スクリプトを実行し、Windows PE ファイルが格納されたフォルダを作成します。たとえば、コマンド プロンプトから次のように入力します。

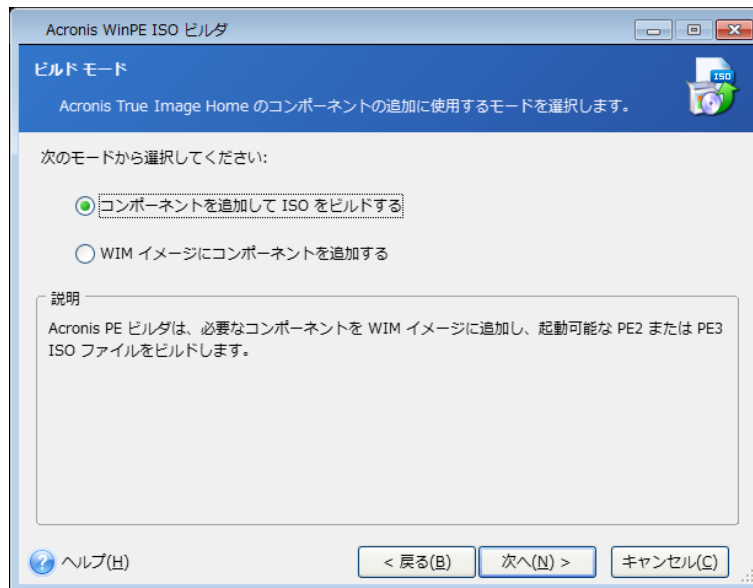
```
copype x86 c:¥winpe_x86
```

処理が完了したら、以下の手順で ISO を作成します。

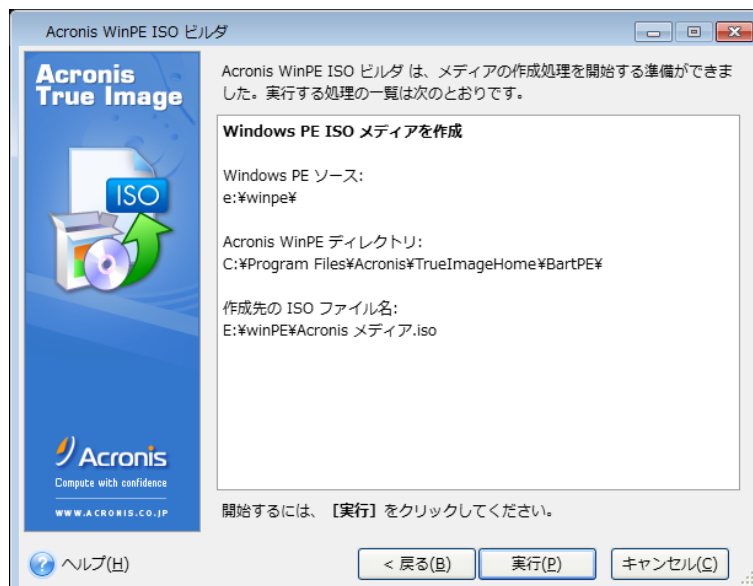
3. **[スタート]** メニューから、**[Acronis] -> [True Image 2013 Plus Pack] -> [Acronis WinPE ISO ビルダ]** を選択します。
4. WinPE¥ISO フォルダのパス(c:¥winpe_x86¥ISO など)を指定します。



5. 次の画面で **[コンポーネントを追加して ISO をビルドする]** オプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。



6. 作成するイメージ ファイルのファイル名を含むフル パスを指定するか、デフォルトのパスおよびファイル名 (AcronisMedia.iso) のままにします。
7. 概要の画面で設定を確認し、**[実行]** をクリックします。



8. サードパーティのツール (Nero など) を使用して .ISO を CD に書き込むと、True Image 2013 が格納されたブータブル Windows PE ディスクが作成されます。

コンピュータが WinPE で起動すると、True Image 2013 が自動的に起動します。起動するまでには時間がかかることがあります。

既存の WinPE 2.x または 3.0 ISO への Acronis プラグインの追加

Acronis プラグインを追加する場合、最初に True Image 2013 Plus Pack を PC にインストールする必要があります。

1. Win PE 2 または 3 ISO のすべてのファイルをハード ディスク上の別のフォルダに展開します。
2. **[スタート]** メニューから、**[Acronis]** -> **[True Image 2013 Plus Pack]** -> **[Acronis WinPE ISO ビルダ]** を選択します。
3. WinPE ファイルが格納されたフォルダへのパスを指定します。
4. 作成する ISO ファイルのフル パスを、ファイル名を含めて指定するか、デフォルトのパスおよびファイル名 (AcronisMedia.iso) のままにします。
5. 概要の画面で設定を確認し、**[実行]** をクリックします。
6. サードパーティのツール (Nero など) を使用して .ISO を CD に書き込むと、True Image 2013 が格納されたブータブル Windows PE ディスクが作成されます。

コンピュータが WinPE で起動すると、True Image 2013 が自動的に起動します。起動するまでには時間がかかることがあります。

WinPE 2.x または 3.0 WIM への Acronis プラグインの追加

1. **[スタート]** メニューから、**[Acronis]** → **[True Image 2013 Plus Pack]** → **[Acronis WinPE ISO ビルダ]** を選択します。
2. 追加元の WINPE.WIM ファイルのパスを指定します。x86 ハードウェア用のこのファイルの標準のパスは、¥Program Files¥Windows AIK¥Tools¥PETools¥X86¥winpe.wim です。
3. 作成する WIM ファイルのフル パスを、ファイル名を含めて指定するか、デフォルトのパスおよびファイル名 (AcronisMedia.wim) のままにします。
4. 概要の画面で設定を確認し、**[実行]** をクリックします。

結果の WIM ファイルから PE イメージ (ISO ファイル) を作成する手順は、次のとおりです。

1. **[スタート]** メニューから、**[Microsoft Windows AIK]** → **[Windows PE ツールのコマンド プロンプト]** を選択します。

Windows 7 の環境の場合は、**[スタート]** メニューから、**[Microsoft Windows AIK]** → **[Deployment ツールのコマンド プロンプト]** を選択します。

2. **copype.cmd** スクリプトを実行し、Windows PE ファイルが格納されたフォルダを作成します。たとえば、コマンド プロンプトから次のように入力します。

```
copype x86 c:\winpe_x86
```

3. Windows PE フォルダ内のデフォルトの boot.wim ファイルを、新しく作成した WIM ファイルに置き換えます。新しく作成した WIM ファイルへのデフォルト パスを使用した、上記の WIM ファイル作成の例の場合、次のように入力します。

```
copy c:\Program Files\Windows AIK\Tools\PETools\x86\AcronisMedia.wim
c:\winpe_x86\ISO\sources\boot.wim
```

Windows 7 のユーザーは、次のコマンドを入力します。

```
move "c:\Program Files\Windows AIK\Tools\PETools\x86\AcronisMedia.wim"
c:\winpe_x86\ISO\sources\boot.wim
```

4. **Oscdimg** ツールを使用します。ISO ファイルを作成するには、次のように入力します。

```
oscdimg -n -bc:\winpe_x86\etfsboot.com c:\winpe_x86\ISO
c:\winpe_x86\winpe_x86.iso
```

5. サードパーティのツール (Nero など) を使用して .ISO を CD に書き込むと、True Image 2013 が格納されたブータブル Windows PE ディスクが作成されます。

ドライバを含むカスタム WinPE 3.0 ISO の作成

Acronis プラグインを含む基本的な WinPE ディスクに、ストレージ デバイス コントローラなどのお使いのハードウェアのドライバが含まれていないことがあります。Windows 7 のユーザーは、そのようなドライバを基本的な WinPE 3.0 イメージ(WIM)に追加してから、Acronis プラグインを含む ISO ファイルを作成することができます。

注意

.inf ファイル拡張子が付いたドライバのみを追加できます。

次の手順は、[http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd799244\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd799244(WS.10).aspx) にある MSDN の記事を基にしています。

カスタム Windows PE イメージを作成するには、次の手順に従います。

1. **[スタート]** メニューから、**[Microsoft Windows AIK]** -> **[Deployment ツールのコマンド プロンプト]** を選択します。

2. **copype.cmd** スクリプトを実行し、Windows PE ファイルが格納されたフォルダを作成します。たとえば、コマンド プロンプトから次のように入力します。

```
copype x86 c:\winpe_x86
```

3. DISM ツールを使用して基本イメージをローカル ディレクトリにマウントします。たとえば、次のようになります。

```
Dism /Mount-Wim /WimFile:C:\winpe_x86\winpe.wim /index:1 /MountDir:C:\winpe_x86\mount
```

4. Dism コマンドと **/Add-Driver** オプションを使用してハードウェア ドライバを追加します。たとえば、次のようになります。

```
Dism /image:C:\winpe_x86\mount /Add-Driver /driver:C:\drivers\mydriver.inf
```

5. 追加する必要がある他のすべてのドライバについて手順 4 を繰り返します。

6. Dism コマンドと **/Unmount-Wim /Commit** オプションを使用して変更をコミットします。

```
Dism /Unmount-Wim /MountDir:C:\winpe_x86\mount /Commit
```

コマンド プロンプトは終了しません。

カスタム WIM が作成されたら、次に Acronis プラグインを追加します。

1. **[スタート]** メニューから、**[Acronis]** → **[True Image 2013 Plus Pack]** → **[Acronis WinPE ISO ビルダ]** を選択します。
2. 作成した winpe.wim ファイルのパスを指定します。この例では、パスは C:¥winpe_x86¥winpe.wim です。
3. 作成する WIM ファイルのフル パスを、ファイル名を含めて指定するか、デフォルトのパスおよびファイル名 (C:¥winpe_x86¥AcronisMedia.wim) のままにします。
4. 概要の画面で設定を確認し、**[実行]** をクリックします。

結果の WIM ファイルから PE イメージ (ISO ファイル) を作成する手順は、次のとおりです。

1. Windows PE フォルダ内のデフォルトの boot.wim ファイルを、新しく作成した WIM ファイルに置き換えます。上の WIM ファイル作成の例では、次のように入力します。

```
copy C:\winpe_x86\AcronisMedia.wim c:\winpe_x86\ISO\sources\boot.wim
```

2. **Oscdimg** ツールを使用します。ISO ファイルを作成するには、次のように入力します。

```
oscdimg -n -bc:\winpe_x86\etfsboot.com c:\winpe_x86\ISO  
c:\winpe_x86\winpe_x86.iso
```

3. サードパーティのツール(Nero など)を使用して .ISO を CD に書き込むと、True Image 2013 とハードウェア ドライバが格納されたブータブル Windows PE ディスクが作成されます。

8.2.4 Acronis メディア ビルダ用に USB フラッシュ ドライブを準備する方法

ブータブルにする USB フラッシュ ドライブが Acronis メディア ビルダで認識されない場合は、次の手順に従ってドライブを準備します。

1. USB ポートにフラッシュ ドライブを挿入します。
2. **Win + R** キーを押し(または [スタート] -> [ファイル名を指定して実行] を選択)、「cmd」と入力してコマンド ライン プロンプトを開きます。
3. 「diskpart」と入力し、Windows DiskPart ユーティリティを起動します。
4. 「list disk」と入力し、コンピュータに接続されているすべてのディスクの一覧を表示します。

```
DISKPART> list disk
```

ディスク ###	状態	サイズ	空き	ダイナ ミック	GPT
ディスク 0	オンライン	40 GB	0 B		
ディスク 1	オンライン	150 GB	1024 KB		
ディスク 2	オンライン	409 MB	1984 KB		

上の例では、サイズを基にして、USB メモリ スティックがディスク 2 だと推測できます。

正しいディスク番号を慎重に調べる必要があります。間違ったドライブを消去しないようにしてください。

5. 「select disk [number]」と入力し、フラッシュ ドライブを選択します。
6. 「clean」と入力して、選択したディスクのフォーマットをすべて削除します。
7. 「create partition primary」と入力します。
8. 「select partition 1」と入力して、現在フラッシュ ドライブ上にあるパーティションのみを選択します。
9. 「active」と入力して、パーティションをアクティブとしてマークします。
10. 「format quick fs=fat32」と入力して、ディスクを FAT32 でフォーマットします(これ以外のフォーマットでは、ディスクはブータブルになりません)。
11. 「assign」と入力してドライブ文字を割り当てます。
12. 「exit」と入力し、Windows DiskPart ユーティリティを終了します。

8.3 工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成

この機能は、コンピュータの Acronis セキュア ゾーンに、このコンピュータの工場出荷時の構成がバックアップされている場合のみ使用可能です。このバックアップは、通常、コンピュータをエンド ユーザーに提供したハードウェア サプライヤが作成し、Acronis セキュア ゾーンに保存されています。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアは特別な種類のレスキュー ブータブル メディアで、コンピュータの工場出荷時の構成がバックアップされています。このメディアを使用して、コンピュータを工場出荷時の設定に戻すことができます。ただし、これによりコンピュータ上の個人データやプログラムはすべて消去されます。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアは、新品のコンピュータに付属している場合があります。ただし、ハードウェア サプライヤによってメディアが提供されていない場合や、何らかの理由でメディアがないという場合は、緊急時に備えて、工場出荷時の設定を含むブータブル メディアを作成し、保存することができます。

True Image 2013 を使用して、USB スティック、CD または DVD に工場出荷時の設定を含むブータブル メディアを作成することができます。また、このメディアを ISO イメージとして作成しておいて、後で CD または DVD に記録することも可能です。

工場出荷時の設定を含むブータブル メディアを作成する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップとリカバリ]** タブの **[工場出荷時のブータブル メディアの作成]** をクリックします。
ダイアログ ウィンドウが開き、ブータブル メディアのパラメータが表示されます。
2. メディアのパラメータを定義します。
3. **[作成]** をクリックします。
工場出荷時の設定を含むブータブル メディアの作成が開始されます。CD または DVD への記録を選択した場合、1 枚目のディスクへの記録が完了すると、空のディスクの挿入を求めるメッセージが表示されます。

メディアの作成ウィザード

このウィザードを使用して、USB、CD/DVD、または ISO イメージからメディアの種類を選択します。

USB スティックにブータブル メディアを作成する場合は、作業を開始する前に、コンピュータに USB スティックを接続してください。この USB スティックのフォーマットは FAT 32 でなければなりません。

ISO イメージを作成する場合、以下のパラメータも指定してください。

- **[分割]**: 作成される ISO イメージを、指定したサイズの複数の .iso ファイルに分割するかどうかを選択します。
- **[ファイルの保存先]**: 作成される ISO イメージの保存先を指定します。

メディアを選択したら、**[作成]** をクリックして、メディアの作成を開始します。

8.4 Acronis セキュア ゾーンの使用法

Acronis セキュア ゾーンは、バックアップを作成したコンピュータ上にバックアップを保存するための特別なパーティションです。現在の True Image 2013 では、FAT32 パーティションとしてゾーンが作成されます。

[ツールとユーティリティ] タブで **[Acronis セキュア ゾーン]** をクリックすると、すべてのローカルドライブでゾーンが検索されます。ゾーンが見つかった場合は、その管理(サイズ変更やパスワードの変更)や削除を行うことができます。ゾーンが存在しない場合は、作成するための画面が表示されます。

セクションの内容

Acronis セキュア ゾーン	201
Acronis セキュア ゾーンのリネーション	202
パーティションの選択	203
Acronis セキュア ゾーンのリサイズ	203

Acronis セキュア ゾーンの管理	204
Acronis セキュア ゾーンの概要	206

8.4.1 Acronis セキュア ゾーン

Acronis セキュア ゾーンは、管理対象コンピュータのディスク領域にバックアップを保存するための、セキュリティで保護されたパーティションです。ディスクのバックアップが保存されているディスクをリカバリできます。

Acronis セキュア ゾーンを作成すると、**[マイ コンピュータ]** の下の **[その他]** セクションにアイコンが表示されます。この Acronis セキュア ゾーンアイコンをダブルクリックすると、このセキュア ゾーンに保存されているすべてのバックアップが一覧表示されます。このアイコンを右クリックしてショートカット メニューの **[開く]** を選択するという方法でも、セキュア ゾーンを開くことができます。

バックアップ アイコンをダブルクリックすると、そのバックアップ内に含まれるすべてのバックアップバージョン(完全、増分、差分)が表示されます。特定のバックアップ バージョンを右クリックすると、ショートカット メニューが開き、目的の操作を選択することができます。たとえば、バックアップの検索、マウント(イメージ バックアップの場合)、リカバリ、ベリファイ、アップデート、削除、およびバックアップの詳細の表示を選択できます。Acronis セキュア ゾーンがパスワードで保護されている場合、バックアップの詳細の表示以外の操作には正しいパスワードの入力が必要です。バックアップをダブルクリックすると、そのバックアップが開きます。

Acronis セキュア ゾーンアイコンを右クリックしたときに表示されるショートカット メニューには、その他に **[開く]** と **[ショートカットの作成]**(デスクトップへの配置)という項目もあります。

Acronis セキュア ゾーンをバックアップ ファイルの保存先として使用するには、空き領域があることが条件です。十分な領域がない場合は、空き領域を作成するために古いバックアップが削除されます。

True Image 2013 では、次の方法で Acronis セキュア ゾーンがクリーンアップされます。

- バックアップの作成中に、バックアップ作成のための十分な空き領域がない場合は、Acronis セキュア ゾーンがいっぱいであることを警告するダイアログ ボックスが表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、バックアップ処理をキャンセルできます。この場合は、たとえば Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大してからバックアップ処理を再度実行します。ゾーン内の領域を自動的に解放するには、**[OK]** をクリックします。作成しようとしているバックアップ バージョンと同じ種類の完全バックアップ バージョンのうち最も古いものが、後続のすべての増分/差分バックアップ バージョンと共に削除されます。その後、バックアップ処理が再開されます。
- 最も古いバックアップを削除しても空き領域が不十分な場合は、同じ警告メッセージが再度表示されます。この場合、次に古いバックアップ(存在する場合)を削除することができます。この操作は、以前のバックアップがすべて削除されるまで繰り返すことができます。
- 以前のバックアップをすべて削除してもバックアップを完了するために十分な領域が解放されない場合、エラー メッセージが表示され、バックアップはキャンセルされます。

ゾーン内のバックアップの種類は、イメージのバックアップとファイル レベルのバックアップの 2 種類のみです。ファイルおよび電子メールのバックアップは、ファイル レベルのバックアップと見なされます。たとえば、ゾーン内に電子メールのバックアップがあり、空き領域が不足しているためにフォルダのバックアップを作成できない場合は、フォルダ バックアップ用の領域を解放するために電子メールのバックアップが削除されます。

Try モードでは、Acronis セキュア ゾーンを仮のシステム変更用のストレージとして使用できます。Try&Decide セッションを停止すると、Try&Decide データは自動的にクリーンアップされます。

Acronis セキュア ゾーンをノンストップ バックアップ データの保存先として使用する場合、ノンストップ バックアップ データが自動的にクリーンアップされることはありません。ノンストップ バックアップ データは手動でクリーンアップできます。詳細については、「Acronis ノンストップ バックアップのデータ ストレージ (59ページ)」を参照してください。

スケジュールされたバックアップの実行時にゾーンがいっぱいになることを避けるためには、**[ASZ に十分な空き領域がない場合、最も古いバックアップを削除する]** ボックスを選択することをお勧めします。このボックスはスケジュール バックアップ オプション(エラー処理)にあります。

8.4.2 Acronis セキュア ゾーンのロケーション

Acronis セキュア ゾーンを作成する場合は、Acronis セキュア ゾーンを作成に使用する領域が存在するディスクおよびパーティションを選択します。また、選択した同じディスクの他のパーティションに存在する空き領域や未割り当ての領域を選択することもできます。Acronis セキュア ゾーンは、ベーシック ディスク上にものみ配置できます。ダイナミック ディスクやダイナミック ボリュームには作成できません。

Acronis セキュア ゾーンのロケーションを指定する手順は、次のとおりです。

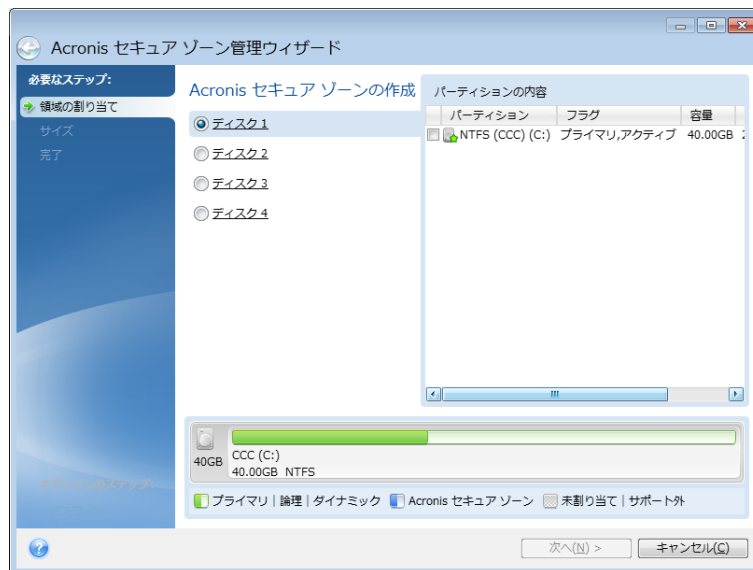
- Acronis セキュア ゾーンを作成するハード ディスク ドライブをクリックします。
- 選択したハード ディスク ドライブ上で、使用する未割り当ての領域または空き領域のパーティションを 1 つ以上選択します。選択したパーティションは、Acronis セキュア ゾーン用に領域を使用する必要がある場合、必要に応じて、サイズが調整されます。
- ディスクとパーティションを選択した後、**[次へ]** をクリックして、**[Acronis セキュア ゾーンのサイズ]** (203ページ) のステップに進みます。

Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大/縮小する手順は、次のとおりです。

- Acronis セキュア ゾーンのサイズを拡大するために領域を使用するパーティション、または Acronis セキュア ゾーンのサイズの縮小後に解放される空き領域を割り当てるパーティションを選択します。未割り当ての領域が存在するパーティションも選択できます。
- **[次へ]** をクリックして、**[Acronis セキュア ゾーンのサイズ]** (203ページ) のステップに進みます。

8.4.3 パーティションの選択

Acronis セキュア ゾーンを作成に使用するパーティションの空き領域を選択します。未割り当ての領域を選択することもできます。

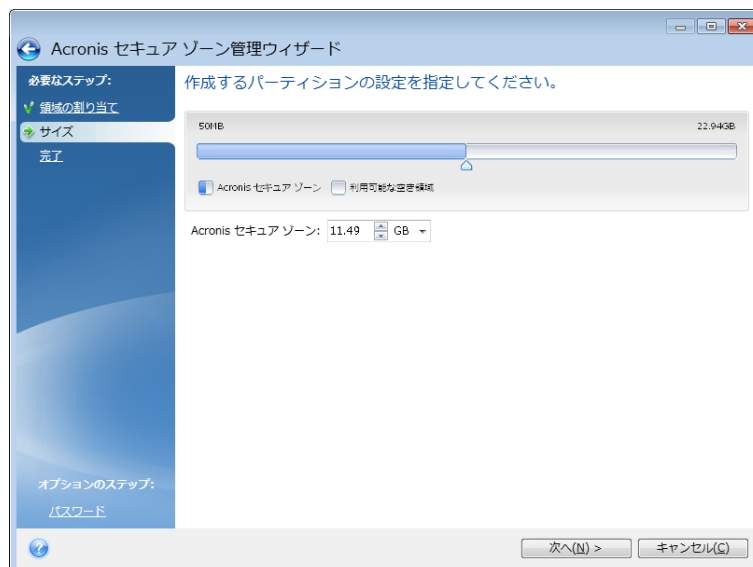


パーティションを選択する手順は、次のとおりです。

- 適切なパーティションのチェックボックスをオンにして [次へ] をクリックします。

8.4.4 Acronis セキュア ゾーンのサイズ

Acronis セキュア ゾーンのサイズを指定できます。



最小サイズは、ハード ディスクの構成により異なりますが、およそ 50 MB です。最大サイズは、ディスクの未割り当て領域に、前の手順で選択したすべてのパーティション上の空き領域の合計を加えたものです。

Acronis セキュア ゾーンを作成または拡大する際には、まず未割り当ての領域が使用されます。作成するゾーンのサイズに対して未割り当ての領域が不十分な場合は、選択したパーティションのサイズが縮小されます。パーティションのサイズ変更を行うと、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

Acronis セキュア ゾーンのサイズを縮小する際に、ハード ディスクに未割り当ての領域が存在する場合は、Acronis セキュア ゾーンの縮小によって生じた領域と共に、その未割り当ての領域が、選択したパーティションに割り当てられます。したがって、ディスク上には未割り当ての領域はなくなります。

システム パーティションを最小サイズまで縮小すると、オペレーティング システムが起動しなくなる場合があります。

Acronis セキュア ゾーンのサイズを指定する手順は、次のとおりです。

- スライダを適切な位置にドラッグするか、**Acronis セキュア ゾーン**の [サイズ] フィールドに具体的な値を入力します。

8.4.5 Acronis セキュア ゾーンの管理

Acronis セキュア ゾーンを管理することができます。

- [サイズを拡大する] (204ページ) - Acronis セキュア ゾーンのサイズを大きくする場合に、この項目を選択します。
- [サイズを縮小する] (204ページ) - Acronis セキュア ゾーンのサイズを小さくする場合に、この項目を選択します。
- [削除] (205ページ) - Acronis セキュア ゾーンをハード ディスクから削除する場合にこの項目を選択します。
- [パスワードの変更] (204ページ) - Acronis セキュア ゾーンにアクセスするパスワードを変更する場合に、この項目を選択します。

サイズを拡大する

どのパーティションの空き領域を Acronis セキュア ゾーンのサイズ拡大に使用するかを選択します。未割り当ての領域も選択できます。

パーティションを選択する手順は、次のとおりです。

- 適切なパーティションのチェックボックスをオンにして、**[次へ]** をクリックします。

サイズを縮小する

Acronis セキュア ゾーンのサイズ縮小後に解放される空き領域を割り当てるパーティションを選択します。未割り当ての領域を選択することもできます。

パーティションを選択する手順は、次のとおりです。

- 適切なパーティションのチェックボックスをオンにして、**[次へ]** をクリックします。

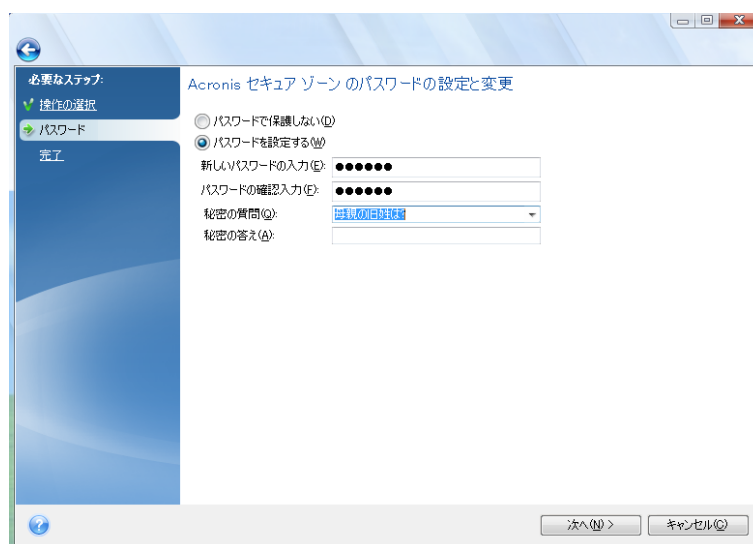
Acronis セキュア ゾーンの保護

ここでは、不正アクセスを防止するため、Acronis セキュア ゾーンに対するパスワード保護を設定することができます。

Acronis セキュア ゾーンを使用したデータのバックアップやリカバリ、イメージのマウント、バックアップの検証、Acronis セキュア ゾーンのサイズ変更や削除など、Acronis セキュア ゾーンに関連するすべての処理に対してパスワードが要求されます。

パスワードの設定

- **[パスワードで保護しない]** - セキュア ゾーンに対してパスワード保護を使用しない場合、このオプションを選択します。
- **[パスワードを設定する]** - パスワードを使用して Acronis セキュア ゾーンを保護する必要がある場合、このオプションを選択します。
 - **[新しいパスワードの入力]** フィールドに、パスワードを入力します。
 - **[パスワードの確認入力]** フィールドに、先に入力したパスワードをもう一度入力します。
 - また、パスワードを忘れた場合に使用できる、本人確認用の秘密の質問を選択することもできます。一覧から秘密の質問を選択して、その答えを入力します。
- 続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。



True Image 2013 の修復またはアップデートにより、パスワードが影響を受けることはありません。ただし、ディスク上に Acronis セキュア ゾーンを保持したまま、プログラムを削除して再インストールした場合は、Acronis セキュア ゾーンのパスワードがリセットされます。

Acronis セキュア ゾーンの削除

Acronis セキュア ゾーンが占めていた領域をどのパーティションに追加するかを選択します。複数のパーティションを選択した場合、領域は各パーティションのサイズに比例して配分されます。

パーティションを選択する手順は、次のとおりです。

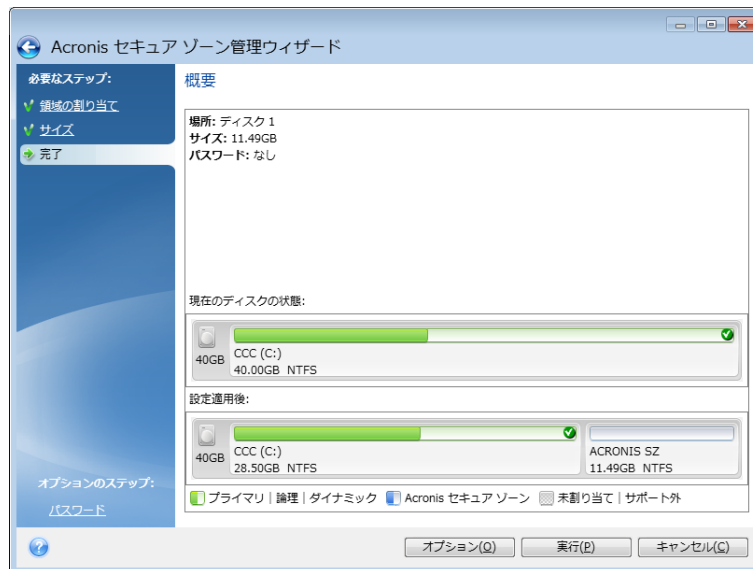
- 該当するパーティションのチェックボックスをオンにして、**[次へ]** をクリックします。

Acronis セキュア ゾーンの削除は、プログラムをアンインストールするときに行うこともできます。Acronis セキュア ゾーンを削除せずにプログラムをアンインストールするか、ソフトウェア と共に Acronis セキュア ゾーンを削除するかを選択できます。

Acronis セキュア ゾーンを削除すると、その中に保存されているバックアップはすべて自動的に消去されます。

8.4.6 Acronis セキュア ゾーンの概要

Acronis セキュア ゾーンの [概要] ウィンドウには、実行される処理の一覧が表示されます。Acronis セキュア ゾーンの作成または管理を行う場合、再起動が必要になる可能性があります。その場合は、[実行] ボタンをクリックするとメッセージが表示され、再起動するかどうかの確認を求められます。



[実行] ボタンをクリックすると、表示されている処理が開始します。

パスワードを使用して Acronis セキュア ゾーンを保護する場合、**[オプション]** ボタンをクリックします。

[キャンセル] ボタンをクリックすると、処理は実行されず、ウィザードが終了します。

8.5 ハードディスクのクローン作成

セクションの内容

一般情報.....	207
セキュリティ.....	207
クローン作成モードの選択.....	208
ソース ディスクの選択.....	209
ターゲット ディスクの選択.....	210
移行方法.....	210
データ マイグレーション.....	211
手動パーティション操作.....	211
クローン作成の概要.....	213

8.5.1 一般情報

オペレーティング システムやインストールするアプリケーションが使用できる十分な領域がハードディスクにないと、ソフトウェアのアップデートや新しいアプリケーションのインストールを行うことができなくなります。この場合は、システムを大容量のハードディスクに移行する必要があります。

システムを移行するには、まずコンピュータに新しいディスクを取り付ける必要があります。コンピュータに別のハードディスク用のベイがなければ、ハードディスクを一時的に CD ドライブの場所に取り付けるか、または USB 2.0 を使用して外付け型のターゲット ディスクに接続します。それができない場合は、ディスク イメージを作成してより大きなパーティションを持つ新しいハードディスクにリカバリすることで、ハードディスクのクローンを作成します。

プログラムの画面では、破損したパーティションの左上の隅に、赤い丸に白い「x」のマークが付きます。クローン作成を開始する前に、適切なオペレーティング システム ツールを使用して、ディスクにエラーがないかどうかを調べ、エラーがあれば修正する必要があります。

転送を効率的に行うには、転送先(新しい)ドライブをコンピュータに取り付けてから、転送元ドライブを別の場所(たとえば外付けの USB エンクロージャ)に取り付けます。特にラップトップ コンピュータの場合は、このとおりにすることをお勧めします。

安全措置として、元のディスク全体のバックアップを作成することを強くお勧めします。それによって、クローン作成中に元のハードディスクに問題が発生した場合でも、データは安全に守られます。そのようなバックアップを作成する方法の詳細は、「パーティションとディスクのバックアップ」を参照してください。バックアップを作成したら、確実にベリファイしてください。

ディスクのクローンを作成する手順は、次のとおりです。

- ホーム画面の [ツールとユーティリティ] タブの [ディスクのクローン作成] をクリックします。
- [ディスクのクローン作成ウィザード] のステップを順に実行します。

8.5.2 セキュリティ

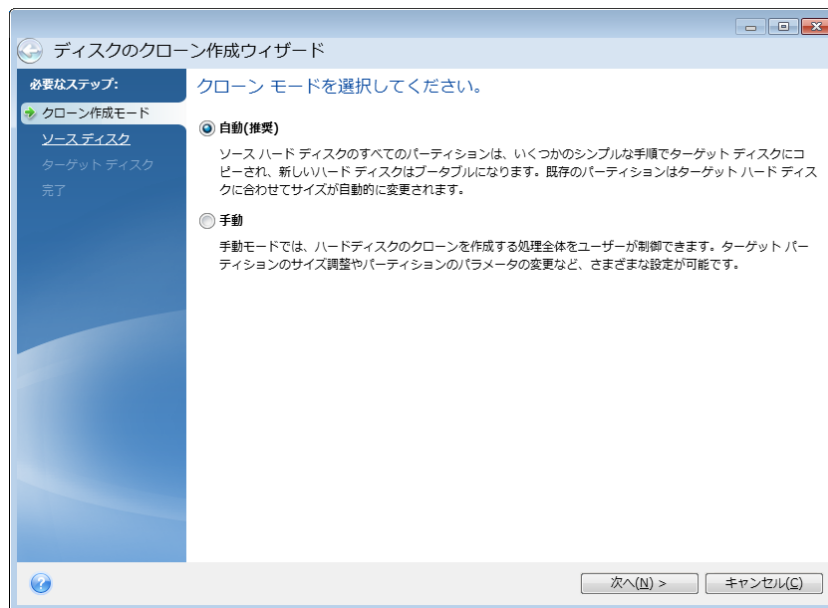
転送の実行中にコンピュータの電源が切れた場合や、誤って [リセット] が押された場合は、転送処理は未完了となるため、ハード ディスクのパーティション作成とフォーマットまたはクローン作成をもう一度行う必要があります。

元のディスクは読み取り専用で、パーティションやサイズが変更されるわけではないので、データが失われることはありません。システム転送手順を実行しても、元のディスクは一切変更されません。手順の完了後に、古いディスクをフォーマットするか、含まれているデータを完全に消去することをお勧めします。これらのタスクには、Windows のツールまたは Acronis DriveCleanser を使用します。

ただし、元のディスクのデータはすぐには削除しないことをお勧めします。データが新しいディスクに正しく転送されて、そのディスクからコンピュータが正常に起動し、すべてのアプリケーションが動作していることを確認するまでは、削除しないでください。

8.5.3 クローン作成モードの選択

使用可能な移行モードには次の 2 種類があります。

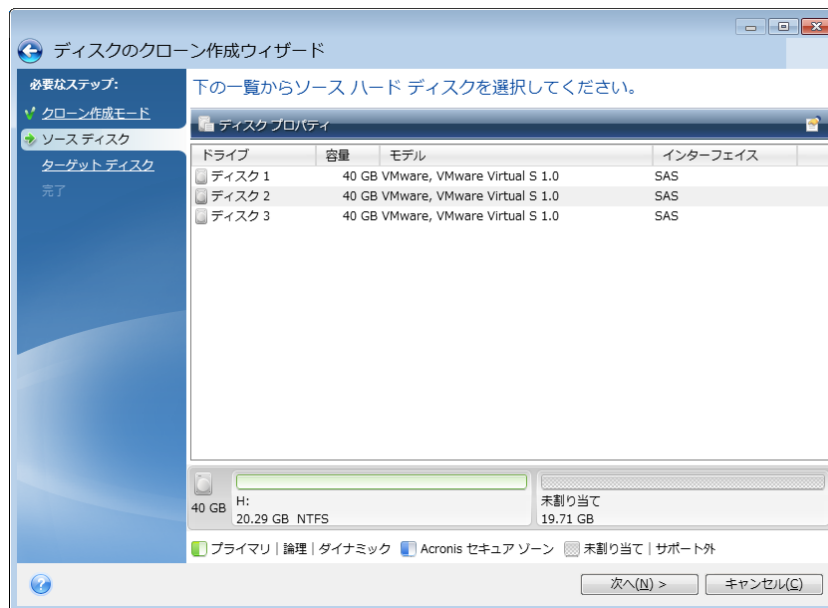


- **[自動]**(ほとんどの場合は自動モードの使用をお勧めします)- 自動モードでは、いくつかの簡単な操作を行うだけで、パーティション、ファイル、およびフォルダを含むすべてのデータを新しいディスクに移行することができます。元のディスクがブータブル(起動用)ディスクだった場合は、新しいディスクがブータブルになります。
- **[手動]** - 手動モードでは、さまざまなデータ転送に対応できます。手動モードは、ディスクパーティションレイアウトの変更が必要な場合に役立ちます。

ディスクが 2 つ検出されて、一方にパーティションがあり、他方にはない場合は、パーティションのあるディスクが自動的にソースディスクとして認識され、パーティションのないディスクがターゲットディスクとして認識されます。これに該当する場合は、以降のステップが省略され、クローン作成の概要画面が表示されます。

8.5.4 ソース ディスクの選択

このウィンドウに表示される情報(ディスク番号、容量、ラベル、パーティション、およびファイル システムの情報)を参照して、移行元と移行先を決定することができます。パーティションを持つディスクが複数検出されたときは、ソース ディスク(つまり、古い方のデータ ディスク)を指定するためのウィンドウが表示されます。



True Image 2013 では、ダイナミック ディスクのクローン作成はサポートされません。

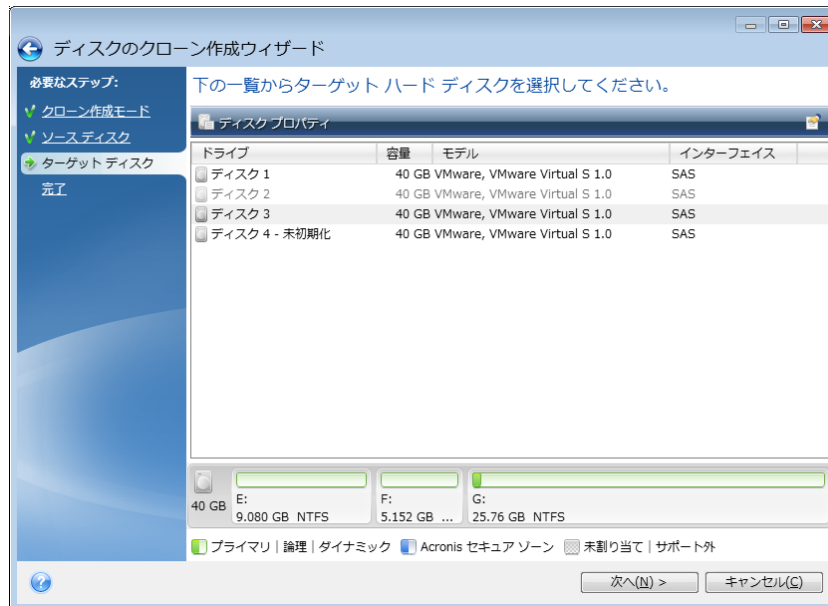
- 移行元ディスクを選択し、[次へ] をクリックして次に進みます。

ディスクとパーティション情報の表示

- [項目]: 表示する項目を選択します。項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更できます。
- [ディスク プロパティ](オブジェクトを右クリックすると開かれるコンテキスト メニューからもアクセス可能): 選択したパーティションまたはディスクのプロパティ ウィンドウが表示されます。このウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左側のペインにはプロパティのツリーが、右側のペインには選択したプロパティの詳細な説明が表示されます。ディスク情報にはディスクの物理的なパラメータ(接続の種類、デバイスの種類、サイズなど)が表示されます。パーティション情報にはパーティションの物理的なパラメータ(セクタ、位置など)と論理的なパラメータ(ファイル システム、空き領域、割り当てられているドライブ文字など)の両方が表示されます。

8.5.5 ターゲット ディスクの選択

コピー元(ソース)のハードディスクを選択後、ディスク情報のコピー先(ターゲット)のハードディスクを選択します。前のウィンドウでソースとして選択したディスクはグレー表示になり、選択できなくなっています。



- ターゲット ディスクを選択し、**[次へ]** をクリックして先に進みます。

この時点で、ターゲット ディスクが空かどうかの検査が行われます。空ではない場合は、ターゲット ディスクにパーティションが存在し必要なデータが含まれている可能性があることを知らせる確認ウィンドウが表示されます。パーティションの削除を確定するには、**[OK]** をクリックします。

実際の変更やデータ消去はまだ行われなことに注意してください。この時点では、クローン作成に必要な指定を行います。すべての変更は、**[実行]** をクリックするまで実際には行われません。

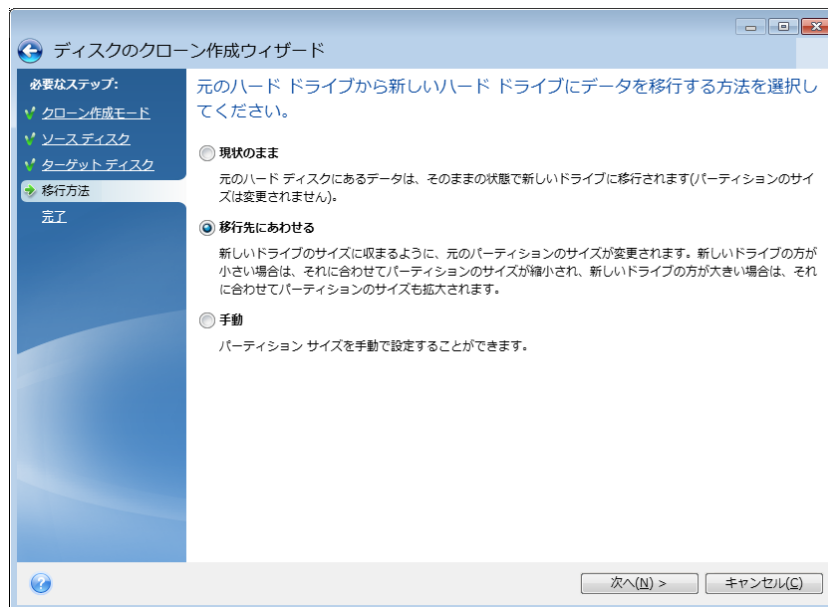
パーティションが作成されていないディスクがある場合は、そのディスクが自動的に移行先と見なされるため、このステップは省略されます。

8.5.6 移行方法

手動クローン作成モードを選択した場合は、データ移動方法として次のいずれかを選択できます。

- **[現状のまま]** - 古いパーティション 1 つにつき 1 つの新しいパーティションが、同一のサイズ、種類、ファイル システム、ラベルで作成されます。使用されない領域は未割り当てになります。
- **[移行先にあわせる]** - 新しいディスクの領域は、各パーティションの元の大きさに比例して配分されます。

- **[手動]** - 新しいサイズとその他のパラメータを指定できます。



[現状のまま] を選択した場合は、古いパーティションのそれぞれについて、同じサイズ、種類、ファイル システム、ラベルの新しいパーティションが作成されます。使用されない領域は未割り当てになります。後で、この未割り当ての領域を、新しいパーティションの作成や既存パーティションの拡大に使用することができます。その場合は、Acronis Disk Director Suite などの専用ツールを使用します。

基本的に、転送方法として [現状のまま] を選択することはお勧めできません。新しいディスクのかなりの部分が未割り当てのままになるからです。[現状のまま] を選択すると、サポートされていないファイル システムや破損したファイル システムも転送されます。

[移行先にあわせる] を選択した場合は、各パーティションの大きさが、古いディスクと新しいディスクの容量の比率に従って拡大されます。

FAT16 パーティションには、4 GB というサイズの上限があるため、他のパーティションほど拡大率は大きくなりません。

選択された組み合わせに応じて、クローン作成の概要ウィンドウまたは次に説明する [ディスク レイアウトの変更] ステップの画面が表示されます。

8.5.7 データ マイグレーション

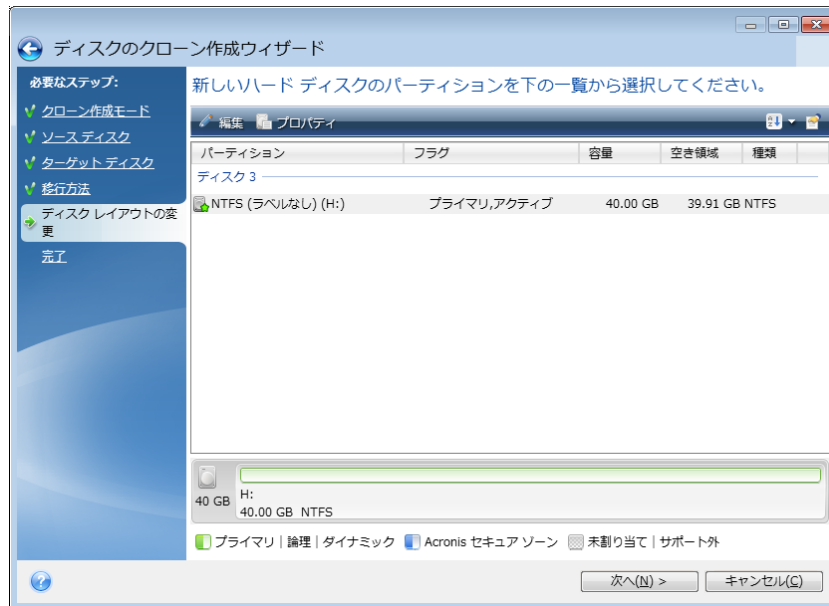
True Image 2013 では、クローン作成処理完了後にターゲット ディスクのパーティション レイアウトを選択できます。

8.5.8 手動パーティション操作

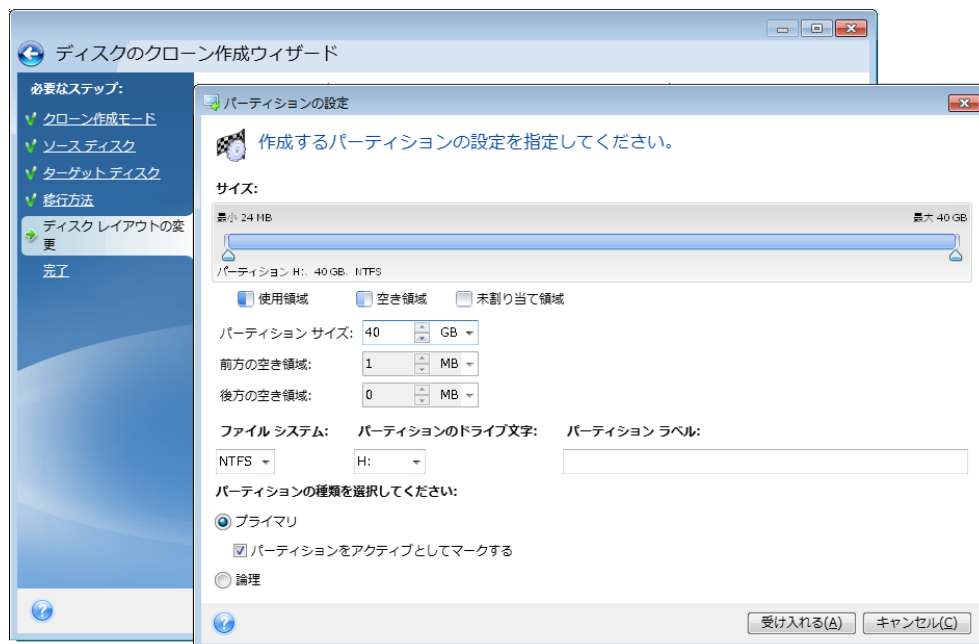
移行方法として [手動] を選択した場合は、新しいディスクのパーティションのサイズを変更できます。デフォルトでは、ソース ディスクとターゲット ディスクの容量の比率に応じて、サイズが変更されます。

このウィンドウには、移行元のハードディスクを表す四角形と、各ディスクのパーティションおよび未割り当て領域、および新しいディスク レイアウトが表示されます。

ハードディスク番号とともに、ディスク容量、ラベル、ボリューム、およびファイル システム情報が表示されます。ボリュームの種類(プライマリ、論理、および未割り当ての領域)は、それぞれ異なる色で表示されます。



既存のボリュームのサイズ、ボリュームの種類、ラベルを変更するには、ボリュームを右クリックし、ショートカット メニューで **[編集]** を選択します。[パーティションの設定] ウィンドウが開きます。



変更するには、**[前方の空き領域]**、**[パーティション サイズ]**、**[後方の空き領域]** の各フィールドに値を入力するか、パーティションの境界またはパーティション自体をドラッグします。

パーティションの境界にマウス カーソルを置くと、左右に矢印が付いた縦の二重線に変化します。この二重線をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。パーティション上にマウス カーソルを置くと、4 方向の矢印に変わり、パーティションを左右に移動できるようになります(未割り当て領域が近くにある場合)。

新しい位置とサイズを指定したら、**[許可]** をクリックします。[ディスク レイアウトの変更] ウィンドウが再び表示されます。意図したとおりのレイアウトになるまで、必要であればさらにサイズや位置を変更します。

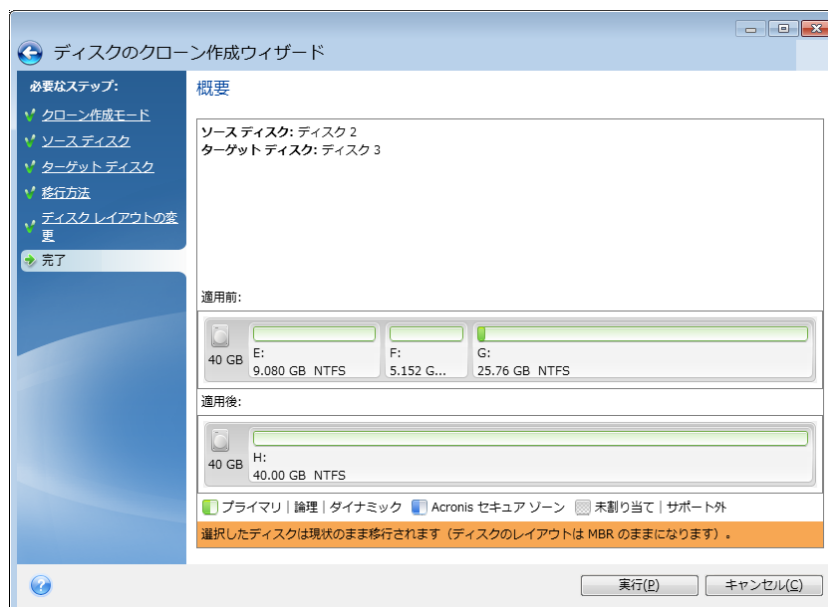
[次へ] をクリックすると、クローン作成の概要ウィンドウに進みます。

 **ご注意ください。**

クローン作成の概要ウィンドウのサイドバーで、ウィザードの前の手順のいずれかをクリックすると、選択されたサイズと位置の変更内容がすべてリセットされるため、もう一度指定し直す必要があります。

8.5.9 クローン作成の概要

クローン作成の [概要] ウィンドウには、ソース ディスク(パーティションと未割り当て領域)およびターゲット ディスクのレイアウトに関する情報が図表形式(四角形)で表示されます。ディスク番号と共に、ディスク容量、ラベル、パーティションおよびファイル システム情報などいくつかの追加情報が表示されます。



- **[実行]** をクリックすると、ディスクのクローン作成が開始します。
- 処理をキャンセルしてメイン プログラム ウィンドウに戻るには、**[キャンセル]** をクリックします。

現在アクティブになっているオペレーティング システムが含まれているディスクのクローン作成の場合は、再起動が必要になります。その場合は、**[実行]** をクリックするとメッセージが表示され、再起動するかどうかの確認を求められます。再起動をキャンセルすると、処理全体がキャンセルされます。クローン作成処理の終了後、いずれかのキーを押してコンピュータをシャットダウンするオプションが表示されます。これにより、マスタ/スレーブのジャンパ位置を変更し、1 台のハードディスクを取り外すことができます。

システム用に使用されていないディスク、または現在アクティブになっていないオペレーティング システムを含むディスクのクローン作成では、再起動の必要はありません。**[実行]** をクリックすると、元のディスクから新しいディスクへのクローン作成処理が開始し、別のウィンドウに進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。キャンセルした場合は、新しいディスクにパーティションを再作成してフォーマットするか、クローン作成の手順を繰り返す必要があります。クローン作成処理が完了すると、結果メッセージが表示されます。

8.6 新しいハードディスクの追加

ハードディスクにデータ(家族の写真や動画など)を保存するための十分な空き領域が存在しない場合は、古いハードディスクを新しい大容量のハードディスクに交換するか(新しいディスクへのデータ転送については前章で説明しています)、古いハードディスクをシステム用として残し、データ保存専用の新しいハードディスクを追加します。コンピュータに別のハードディスクを追加する空きベイが存在する場合は、ハードディスク ドライブを追加する方が、ハードディスクのクローンを作成するよりも簡単です。

新しいハードディスクを追加するには、まずコンピュータにハードディスクを取り付ける必要があります。

新しいハードディスクを追加する手順は、次のとおりです。

- **[ツールとユーティリティ]** タブをクリックし、**[新しいディスクの追加]** をクリックします。
- 新しいディスクの追加ウィザードのステップに従います。

32 ビット バージョンの Windows XP を使用している場合、このオペレーティング システムでは GPT ディスクがサポートされないため、ウィザードには **[初期化オプション]** のステップが表示されません。

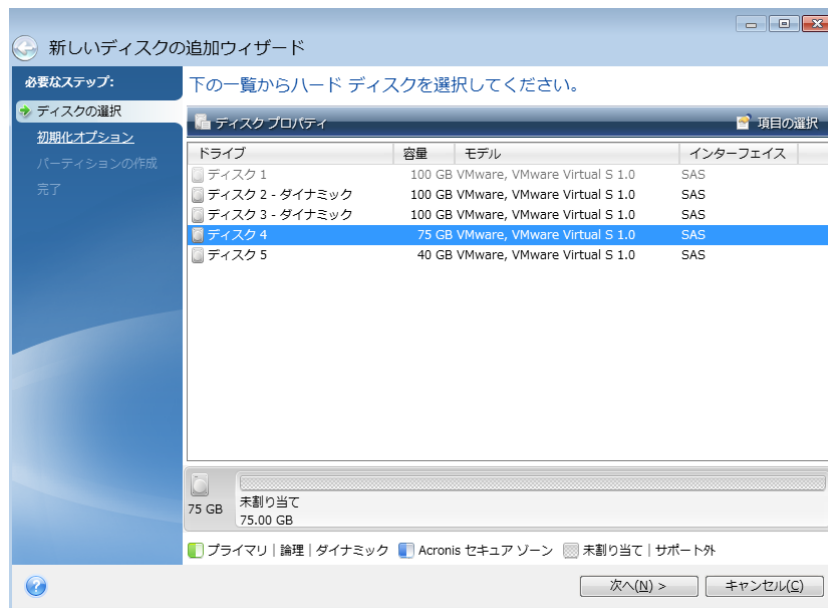
セクションの内容

ハードディスクの選択	214
初期化方法の選択	215
新しいパーティションの作成	216
新しいディスクの追加の概要	219

8.6.1 ハードディスクの選択

コンピュータに追加したハードディスクを選択します。複数のハード ディスクを追加した場合は、そのうちの 1 台を選択し、**[次へ]** をクリックして先に進みます。後で、新しいディスクの追加ウィザードを起動し、別のディスクを追加することもできます。

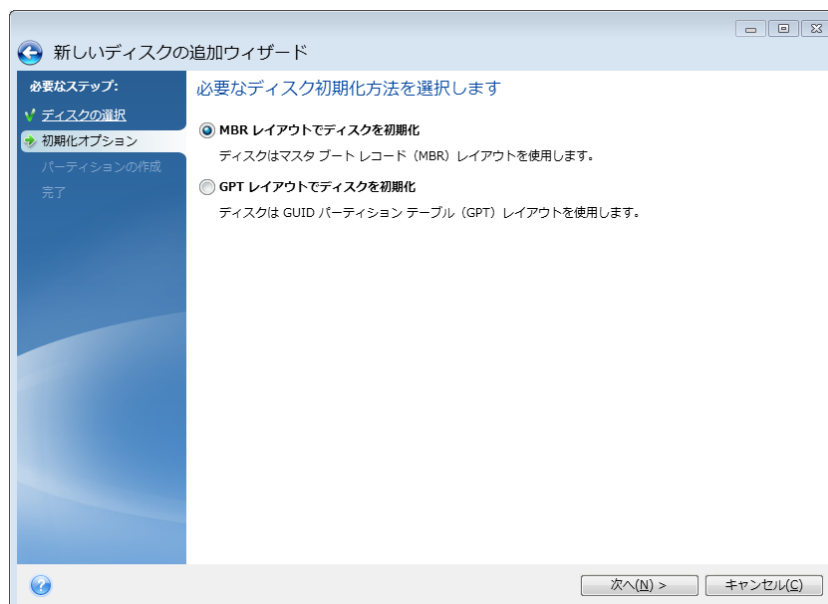
新しいハードディスクに既にパーティションが存在する場合は、まず、そのパーティションを削除する必要があります。追加したハード ディスクにパーティションが含まれている場合、True Image 2013 には警告メッセージが表示されます。追加したハード ディスク上の既存のパーティションを削除するには、**[OK]** をクリックします。



システムにインストールしたすべてのハード ディスクのディスク名、ディスク ドライブのモデル、ディスク容量、ファイル システム、インターフェイスなどのプロパティを表示することもできます。

8.6.2 初期化方法の選択

True Image 2013 は、MBR と GPT の両方のパーティショニングをサポートしています。GUID パーティション テーブル (GPT) は、ハード ディスクの新しいパーティショニング方法であり、従来の MBR よりもパーティショニング方法として優れています。オペレーティング システムが GPT ディスクをサポートする場合、新しいディスクを GPT ディスクとして初期化することを選択できます。



- GPT ディスクを追加するには、[GPT レイアウトでディスクを初期化] をクリックします。
- MBR ディスクを追加するには、[MBR レイアウトでディスクを初期化] をクリックします。

32 ビット バージョンの Windows XP を使用している場合、初期化方法として GPT を使用できないため、初期化オプションの手順は表示されません。

該当の初期化方法を選択したら、[次へ] をクリックします。

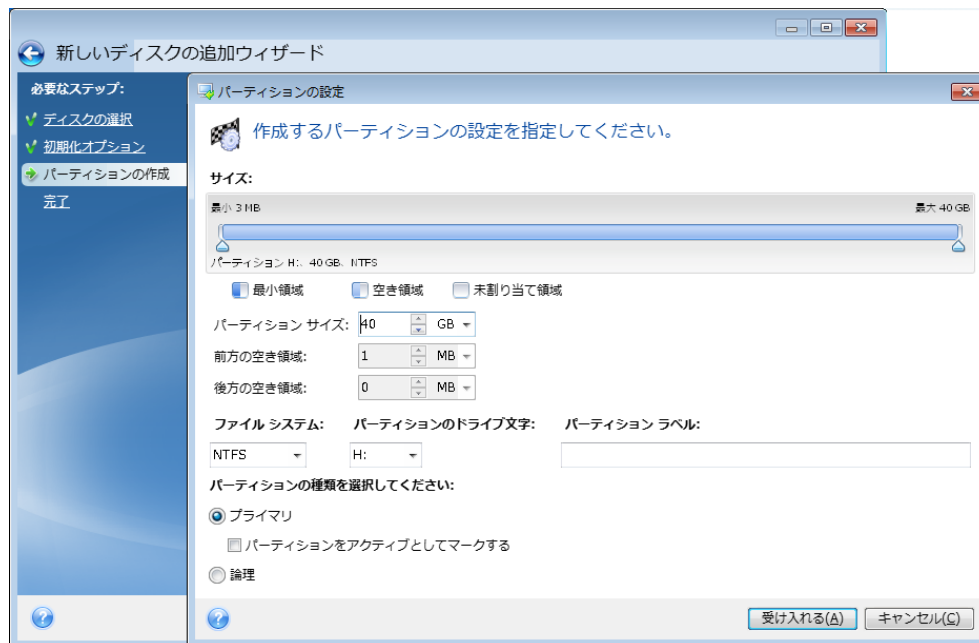
8.6.3 新しいパーティションの作成

ハードディスクの空き領域を使用するには、パーティションが作成されている必要があります。パーティショニングは、ハードディスクの空き領域を論理領域に分割する処理です。論理領域はそれぞれ独立したディスクとして機能することができ、固有のドライブ文字とファイル システムなどが割り当てられます。ハードディスクを複数の論理領域に分割しない場合でも、パーティションの作成は必要です。そのハードディスク全体を 1 つとして扱うつもりであることを、オペレーティング システムに認識させるためです。

最初は、ディスク領域全体が未割り当てになっています。未割り当て領域の大きさは、新しいパーティションを追加すると変化します。

新しいパーティションを作成する手順は、次のとおりです。

- 未割り当て領域を選択してウィンドウ上部の [新しいパーティションの作成] をクリックするか、未割り当て領域を右クリックしてショートカット メニューの [新しいパーティションの作成] を選択します。
- 作成するパーティションについて、以下の設定を指定します。
 - 新しいパーティションのサイズ
 - 新しいパーティションのファイル システム
 - パーティションの種類 (MBR ディスクでのみ使用可能)
 - パーティションのドライブ文字とラベル



ディスクの未割り当て領域をすべて新しいパーティションに割り当てると、**[新しいパーティションの作成]** ボタンが表示されなくなります。

パーティションの設定

作成するパーティションについて次の設定を行います。

サイズ

作成するパーティションのサイズと位置を変更できます。

パーティションのサイズを変更する手順は、次のとおりです。

- パーティションの境界にマウス カーソルを置きます。パーティションの境界上にマウス カーソルを置くと、両側に矢印が付いた縦の二重線に変化します。
- マウスの左ボタンを押してパーティション境界をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。

パーティションのサイズを手動で設定することもできます。その場合は、サイズを **[パーティションサイズ]** フィールドに直接入力してください。

パーティションの場所を変更する手順は、次のとおりです。

- パーティションにマウス カーソルを置きます。マウス カーソルが、十字カーソルに変化します。
- **[前方の空き領域]** フィールドと **[後方の空き領域]** フィールドの値が目的のサイズになるまで、マウスの左ボタンを押したままパーティションをドラッグします。各フィールドに値を直接入力して、手動で設定することもできます。

論理ドライブを作成する場合は、作成されるパーティションの直前に、システムが使用するための未割り当て領域が確保されます。プライマリ パーティションのみ、または論理パーティションとプライマリ パーティションを作成する場合は、システムが使用する未割り当て領域は確保されません。

ファイル システム

作成するパーティションに対して、ファイル システムの種類を選択します。パーティションごとにファイル システムの種類を変えることもできます。

パーティションをフォーマットしないままにするか、または次のファイル システムの種類から選択することができます。

- **[NTFS]** は、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、Windows Vista、Windows 7 のネイティブのファイル システムです。これらのオペレーティング システムを使用している場合に選択してください。Windows 95/98/Me および DOS からは、NTFS パーティションにアクセスできないことに注意してください。
- **[FAT32]** は、FAT ファイル システムの 32 ビット版で、最大 2 TB のボリュームをサポートします。
- **[FAT 16]** は、DOS ネイティブのファイル システムです。ほとんどのオペレーティング システムはこのファイル システムを認識します。ただし、ディスク ドライブのサイズが 4 GB を超える場合は、FAT16 でフォーマットすることはできません。
- **[Ext2]** は、Linux ネイティブのファイル システムです。十分に高速ですが、ジャーナリング ファイル システムではありません。
- **[Ext3]** は、Red Hat Linux Version 7.2 で正式に導入された、Linux のジャーナリング ファイル システムです。Ext2 との上位および下位互換性があります。複数のジャーナリング モード

を備え、32 ビットおよび 64 ビット アーキテクチャの双方で、プラットフォームに依存しない幅広い互換性を実現します。

- **[Ext4]** は、Linux の新しいファイル システムです。このシステムでは、ext3 よりも機能が拡張されています。このシステムでは、ext2 および ext3 に対する下位互換性が完全に維持されています。ただし、ext3 の ext4 に対する上位互換性は限定的です。
- **[ReiserFS]** は、Linux のジャーナリング ファイル システムです。一般的に Ext2 より信頼性が高く高速です。Linux のデータ パーティションにはこれを選択します。
- **[Linux Swap]** は、Linux 用のスワップ パーティションです。Linux 用のスワップ領域を広げる必要がある場合に選択してください。

ドライブ文字

作成するパーティションに割り当てるドライブ文字を、ドロップダウン リストから選択します。**[自動]** を選択すると、アルファベット順で最初の未使用のドライブ文字が割り当てられます。

パーティション ラベル

パーティション ラベルは、パーティションを簡単に識別できるように割り当てる名前です。たとえば、オペレーティング システムがインストールされているパーティションは System、アプリケーションのパーティションは Program、データが保存されているパーティションは Data、などのように名前を付けます。パーティション ラベルは、オプションの属性です。

パーティションの種類(これらの設定は、MBR ディスクのみで利用できます)

作成するパーティションの種類を選択します。新しいパーティションの種類を「プライマリ」または「論理」として指定することができます。

- **[プライマリ]:** このパーティションからコンピュータを起動できるようにする場合は、このパラメータを選択します。それ以外の場合は、論理ドライブとして作成することをお勧めします。各ドライブを、4 つのプライマリ パーティションだけにするか、または 3 つのプライマリ パーティションと 1 つの拡張パーティションにすることができます。

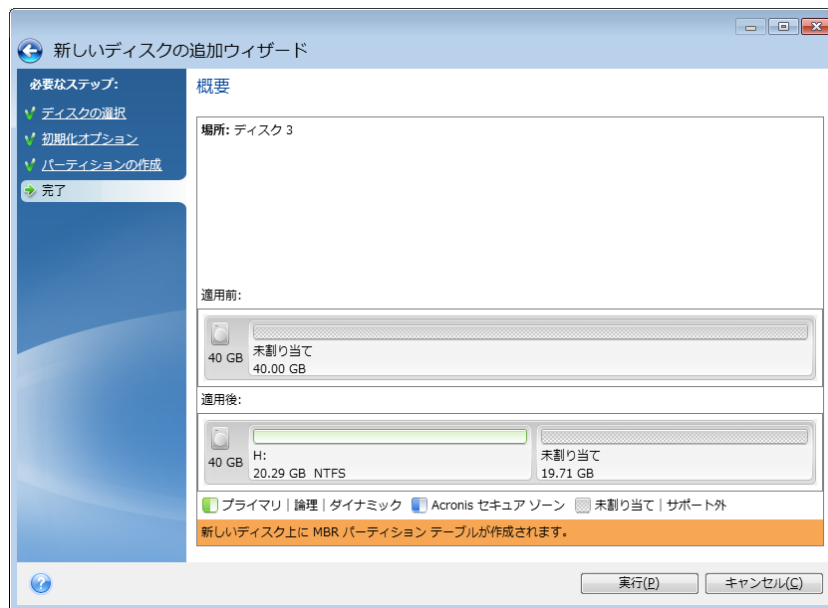
注意: 複数のプライマリ パーティションがある場合に、アクティブになるのは一度に 1 つだけです。他のプライマリ パーティションは隠しパーティションとなり、オペレーティング システムからはアクセスできなくなります。

- **[パーティションをアクティブとしてマークする]:** アクティブなパーティションは、オペレーティング システムの読み込みに使用されます。オペレーティング システムがインストールされていないパーティションをアクティブに選択すると、コンピュータを起動できなくなります。
- **[論理]:** このパーティションにオペレーティング システムをインストールして起動する予定がない場合は、このパラメータを選択します。論理ドライブは、パーティション分割されて独立した単位として割り当てられた物理ディスクの一部ですが、それぞれ別のドライブとして機能します。

作成するパーティションに対して設定の指定が完了したら、**[許可]** をクリックして次に進みます。

8.6.4 新しいディスクの追加の概要

新しいディスクの追加の概要では、パーティション設定前後の新しいディスク レイアウトに関する情報がグラフィカルに(長方形で)示されます。



- **[実行]** をクリックすると、新しいパーティションの作成処理が開始されます。
- 処理をキャンセルしてメイン プログラム ウィンドウに戻るには、**[キャンセル]** をクリックします。

[実行] をクリックすると、新しいパーティションの作成が開始し、別のウィンドウに進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックして処理を中止する場合、新しいディスクのパーティション設定とフォーマットをやり直すか、ディスク追加手順をもう一度実行する必要があります。

[実行] ボタンをクリックする前に、サイドバーを使用して **[新しいディスクの追加ウィザード]** 手順の間を移動し、設定を変更することができます。

8.7 Acronis 容量拡張マネージャ

Acronis 容量拡張マネージャを使用すると、オペレーティング システムで MBR パーティション スタイルによる大容量のディスクをサポートできるようになります。2 TB を超えるディスク領域を使用できます。この空き領域は、異なるディスクとして認識され、オペレーティング システムおよびアプリケーションから、通常の物理ハード ディスクと同様に取り扱えるようになります。

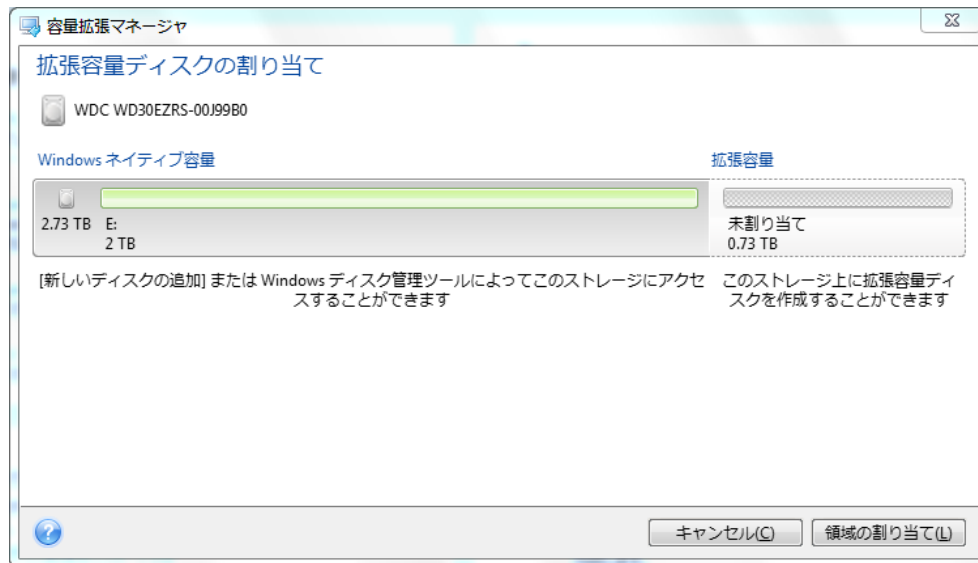
Acronis 容量拡張マネージャ ウィザードには、2 TB を超える(未割り当てまたは MBR パーティション スタイルの)すべてのハード ディスクが表示されます。Windows によって認識され割り当てられたディスク領域を確認できます。この領域は、ウィザードでは **[Windows ネイティブ容量]** と呼ばれます。

2 TB を超える領域は、**[拡張容量]** と表示されます。容量拡張ディスクを有効にすることができます。一度有効にすると、この領域がオペレーティング システムに認識されるようになり、ディスク管理処理の対象となります。

1. Acronis 容量拡張マネージャを起動するには、**[ツールとユーティリティ]** タブを選択し、**[Acronis 容量拡張マネージャ]** をクリックします。

2 TB を超える容量のある MBR ディスクが検出されない場合は、ディスク領域全体にアクセスでき、Acronis 容量拡張マネージャを使用する必要がないことを示すメッセージが表示されます。

2. Acronis 容量拡張マネージャに、割り当て可能な容量拡張が示されます。



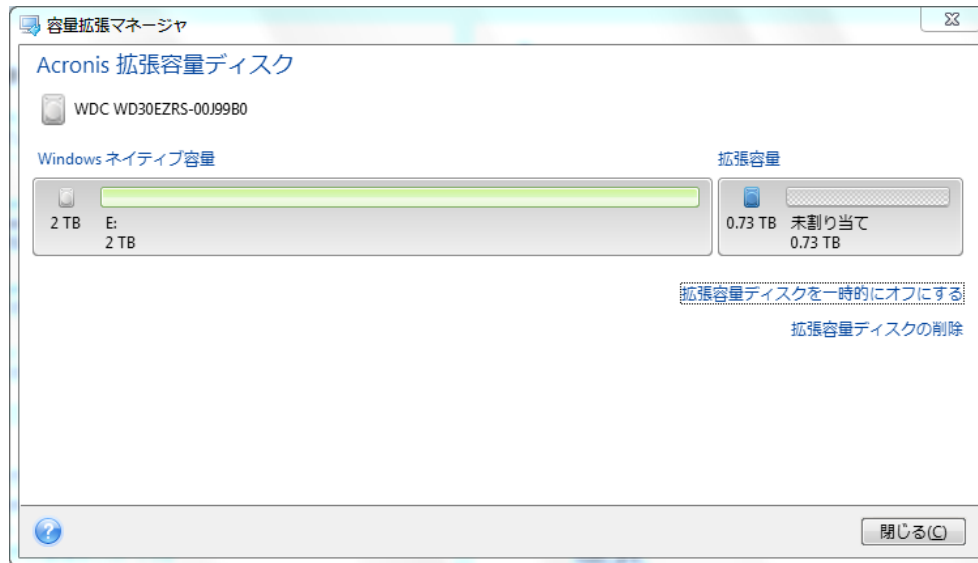
3. **[領域の割り当て]** をクリックすると、次のステップで割り当てることができるディスク領域が表示されます。

[適用] ボタンをクリックすると、拡張容量ディスクが物理ディスク上にエミュレートされます。物理ディスクの容量が 4 TB を超える場合は、オペレーティング システムは GPT パーティション スタイルをサポートしていないため、複数の MBR 容量拡張ディスクが作成されます。

容量拡張ディスクのほとんどのプロパティは物理ディスクと同様ですが、容量拡張ディスクはブータブルディスクではありません。

4. **[閉じる]** をクリックして、Acronis 容量拡張マネージャを終了します。

領域の割り当て後に、**[容量拡張ディスクを一時的にオフに切り替える]** をクリックして、容量拡張ディスクを一時的にオフに切り替えることができます。この操作によって、容量拡張ディスクがディスク管理ツールに認識されなくなりますが、このディスク領域の割り当て状態が維持され、後でこれらのパーティションが認識されるよう再設定できます。その場合は、Acronis 容量拡張マネージャを起動し、**[領域の割り当て]** をクリックします。



容量拡張ディスクを削除するには、**[容量拡張ディスクの削除]** をクリックし、次のステップで **[適用]** をクリックします。容量拡張ディスクがシステムから削除され、2 TB を超えるディスク領域にアクセスできなくなります。この領域を後で割り当てるには、容量拡張マネージャをもう一度起動し、ウィザードの手順を繰り返す必要があります。

True Image 2013 のアンインストール後も、容量拡張ディスクを使用し続けることができます。アンインストール時に、容量拡張ディスクを削除するかどうかの確認を求められます。ディスクを削除しないよう選択した場合は、ディスクは引き続き使用可能です。

8.7.1 Acronis 容量拡張マネージャが起動しない場合

次のいずれかの理由により、Acronis 容量拡張マネージャが起動しない場合があります。

- 2 TB を超える MBR パーティション スタイルのハード ドライブがシステムにない - **新しいディスクの追加ツール**を使用して、ハード ドライブ上の領域全体の割り当てと管理を実行できます。
- システムに大容量ディスクはあるが、まだ初期化されていない
- ディスクのセクタ サイズが 512 kB を超えている

8.8 セキュリティとプライバシーのツール

True Image 2013 には、ハード ディスク ドライブ全体と個々のパーティションのデータを確実に消去するためのユーティリティが含まれています。このユーティリティでは、個別ファイルを消去したり、システムでのユーザーの操作履歴を消去したりすることもできます。

古いハード ディスク ドライブを新しい大容量のディスクに交換するときに、古いディスク上に個人的な機密情報が残ってしまうことがあります。このような情報は、たとえディスクが再フォーマットされたとしても、リカバリできてしまうことがあります。

Acronis DriveCleanser は、ハード ディスク ドライブやパーティション上の機密情報を消去するツールです。このツールに採用されている技術は、ほとんどの国や州の基準を満たすか上回っています。データ消去の方法は、機密情報の重要性に応じてさまざまなものから選択することができます。

ファイル シュレッダーは、機能は同じですが、個々のファイルやフォルダに対して実行することができます。

最後のシステム クリーンアップ ウィザードは、ユーザーのコンピュータ上の操作履歴をすべて確実に消去するためのツールです。コンピュータを使用している間、ユーザーが行った操作の履歴が大量のデータとして記録されますが、ユーザー自身は、そのような履歴の存在に気付きません。この履歴には、ユーザー名やパスワード、その他の個人情報も含まれていることがあります。犯罪者の手に渡れば、個人情報が悪用される恐れがあります。このユーティリティを実行すれば、このような情報がすべてハード ディスク ドライブから完全に消去されます。

データ消去方法については、このガイドの「ハード ディスクの消去方法 (237ページ)」で詳しく説明されています。

セクションの内容

Acronis DriveCleanser	222
ファイル シュレッダー.....	229
システムのクリーンアップ	231
ハードディスクの消去方法.....	237

8.8.1 Acronis DriveCleanser

オペレーティング システムの多くは、安全にデータを消去するツールがないため、削除されたファイルのリカバリも、単純なアプリケーションで簡単に実行できます。ディスク全体を再フォーマットしても、機密データが完全に消去されたことは保証されません。

Acronis DriveCleanser を使用すれば、選択されたハード ディスクおよびパーティション上のデータを確実にかつ永久的に消去することができます。消去するデータの重要性に応じて、複数のデータ消去アルゴリズムの中から適切な方法を選択できます。

選択したパーティションの合計サイズと選択したデータ消去アルゴリズムによっては、データ消去到数時間がかかることがあります。

Acronis DriveCleanser の使用方法

Acronis DriveCleanser を使用すると、以下の処理を行うことができます。

- 既存の消去アルゴリズムを使用して、選択したハードディスクやパーティションのデータを消去する。
- ユーザー定義(カスタム)の消去アルゴリズムを作成して、選択したハードディスクやパーティションのデータを消去する

Acronis DriveCleanser は、ウィザード形式でハード ディスクに対するすべての処理を順に指定できるようになっています。データの消去は、ユーザーがウィザードの [概要] ウィンドウで [実行] を

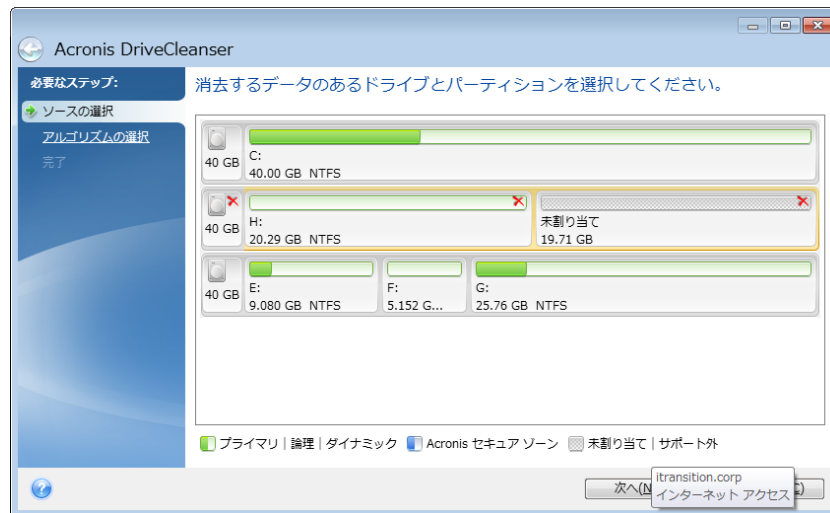
クリックするまでは行われません。どの時点でも、前のステップに戻って他のディスクやパーティションまたはデータ消去アルゴリズムを選択することができます。

ディスク上のデータを完全に消去する手順は、次のとおりです。

- ツールバーの [ツールとユーティリティ] タブをクリックし、[Acronis DriveCleanser] をクリックします。
- Acronis DriveCleanser ウィザードのステップに従います。

データの選択

データを消去するハード ディスク パーティションを選択します。



消去するパーティションを決定するには、該当する四角形を選択します。パーティションが選択されたことを示す赤いマークが右上に表示されます。

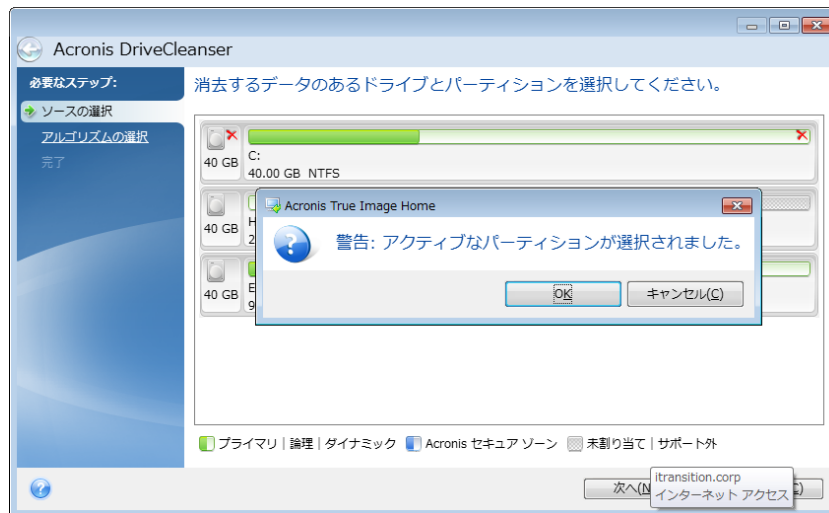
データを消去する対象として、ハード ディスク全体や複数のハード ディスクを選択することができます。選択するには、ハード ディスクに対応する四角形(デバイス アイコン、ディスク番号、および容量が表示されています)をクリックします。

複数のパーティションを同時に選択でき、パーティションが存在するハード ディスク ドライブまたはディスクがそれぞれ異なってもかまいません。また、ディスクの未割り当て領域を選択することもできます。

Acronis DriveCleanser は、ダイナミック ディスクおよび GPT ディスクのパーティションを削除できないため、[ソースの選択] ウィンドウに表示されません。

続行するには、[次へ] をクリックしてください。

選択されたディスクやパーティションにシステムのディスクまたはパーティションが含まれている場合は、警告ウィンドウが表示されます。

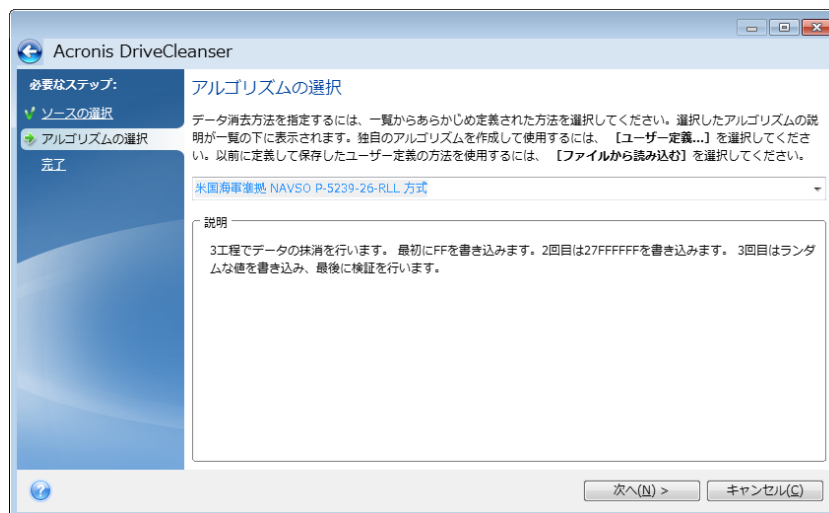


この場合は注意が必要です。警告ウィンドウの **[OK]** をクリックしてから、[概要] ウィンドウの **[実行]** をクリックすると、Windows オペレーティング システムが格納されているシステム パーティションの内容が消去されます。

アルゴリズムの選択

Acronis DriveCleanser では、広く使用されているさまざまなデータ消去アルゴリズムを使用できます。ドロップダウン リストから使用する消去アルゴリズムを選択します。

データ消去方法については、このガイドの「ハード ディスクの消去方法 (237ページ)」で詳しく説明されています。



消去アルゴリズムを選択すると、Acronis DriveCleanser により、選択したパーティションまたはディスクの内容の消去に必要なすべての処理が実行されます。消去が終了すると、作業が完了したことを示すメッセージが表示されます。

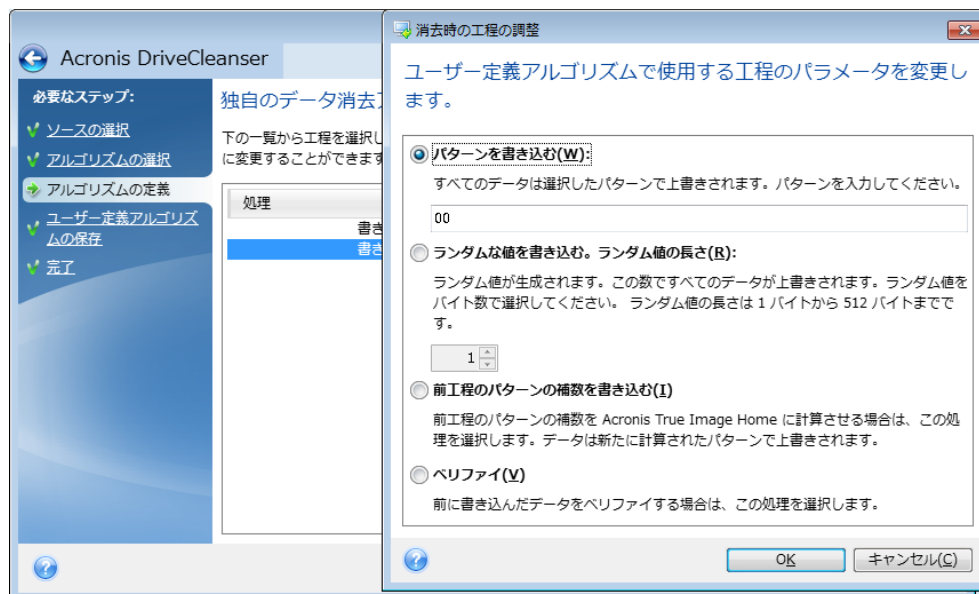
Acronis DriveCleanser には、もう 1 つの便利な機能が用意されています。ハード ディスクまたはパーティションでデータ消去アルゴリズムを実行した場合の結果を推定する機能です。この機能では統合ディスク エディタ(ハード ディスクの閲覧ツール)を利用できます。

前述の消去アルゴリズムは、機密データを消去するレベルがそれぞれ異なっています。このため、消去結果の表示内容も消去アルゴリズムによってそれぞれ異なります。実際に表示されるのは、0 またはランダムな記号で埋められたディスクのセクタになります。

データを消去するユーザー定義消去アルゴリズムの作成

Acronis DriveCleanser には、ハード ディスク データのユーザー独自の消去アルゴリズムを作成する機能が用意されています。さまざまなレベルのデータ消去方式があらかじめ定義されていますが、ユーザー独自の消去方法を作成することも選択できます。この機能は、確実なディスク消去の方法で使用されている原則を十分に理解したうえで使用してください。

ユーザー独自の消去アルゴリズムを作成するには、[消去アルゴリズムの選択] ウィンドウのドロップダウン リストで [ユーザー定義...] をクリックします。このオプションを選択すると、新しい必須ステップが DriveCleanser ウィザードに追加され、実際のセキュリティ要件に合わせてデータ消去アルゴリズムを作成することができます。



作成した独自のアルゴリズムを保存しておくことができます。この機能は、作成したアルゴリズムを再び使用する予定がある場合に便利です。

ファイルから消去アルゴリズムを読み込む

True Image 2013 ソフトウェアを使用して作成および保存したユーザー定義の消去アルゴリズムは、次の方法で使用できます。

[消去アルゴリズムの選択] ウィンドウのドロップダウン リストから [ファイルから読み込む...] を選択し、ユーザー定義の消去アルゴリズムのパラメータを含むファイルを選択します。デフォルトでは、作成したファイルの拡張子は *.alg になっています。

消去アルゴリズムの定義

[アルゴリズムの定義] ウィンドウには、これから作成する消去アルゴリズムのテンプレートが表示されます。

このウィンドウには次の内容が表示されています。一覧の最初の列は、ディスクに対して実行する処理の種類を示します(処理の種類は、記号をディスクに書き込む「書き込み」と、書き込みをベリファイする「ベリファイ」の 2 種類のみです)。2 列目は、ディスクに書き込むデータのパターンを示します。

書き込むパターンは常に 16 進数の値となります。たとえば、0x00、0xAA、0xCD などの値です。これらの値は 1 バイトの長さですが、512 バイトまで設定できます。このような値以外にも、512 バイトまでの任意の長さで 16 進数のランダム値を入力できます。作成する方式には、もう一つ「補数値」と呼ばれる書き込み用の値を含めることもできます。この値は、1 つ前の工程でディスクに書き込まれた値の補数です。

バイナリ値が 10001010(0x8A)の場合、この補数のバイナリ値は 01110101(0x75)となります。

[アルゴリズムの定義] ウィンドウには、消去アルゴリズムのテンプレートのみが表示されます。ユーザー定義の消去アルゴリズムに従って、機密データを消去するためにディスクに書き込む内容を正確に定義する必要があります。

これを行うには、マウスで第 1 工程を示す行をクリックし、**[編集]** をクリックします。

消去時の工程の調整

[消去時の工程の調整] ウィンドウでは、ディスクに書き込むパターン(16 進数値)を定義できます。

このウィンドウの **[パターンを書き込む]** スイッチの下のフィールドに任意の 16 進数値を入力できます。この値が、消去の工程で(この例では 1 回目の工程で)ハードディスクに書き込まれます。

スイッチを **[ランダムな値を書き込む。ランダム値の長さ]** に設定した場合は、ディスクにランダム値が書き込まれるので、その値の長さをバイト単位で指定します。

米国標準の方式では、最初の工程において各ディスク セクタの各バイトにランダム値を書き込むことが規定されているため、**[ランダムな値を書き込む。ランダム値の長さ]** を選択してフィールドに 1 を入力します。

続行するには、**[OK]** をクリックしてください。

再び [アルゴリズムの定義] ウィンドウが表示されます。前のレコード [書き込み]、[00] が、新しく、[書き込み]、[ランダム、1 バイト] に置き換えられたことがわかります。

次の工程を定義するには、**[追加]** ボタンをクリックします。

前回と同様のウィンドウが表示されますが、次の 2 つのスイッチ位置も選択可能になっています。

- **前工程のパターンの補数を書き込む:** 米国標準方式では、前回の工程で書き込まれた値に対する補数の 16 進数値を 2 回目の工程で各ディスク セクタに書き込むことになっています。このためには、**[前工程のパターンの補数を書き込む]** を選択して **[OK]** をクリックします。
再び [アルゴリズムの定義] ウィンドウに戻ります。このウィンドウでは、2 番目のレコードは、**[書き込み] - [前工程のパターンの補数]** になります。
- **ベリファイ**

米国標準方式の仕様に従い、データ上書きの 3 回目および 4 回目の工程を定義します。
同様にして、必要なセキュリティ要件に応じて任意のデータ消去アルゴリズムを作成できます。

ユーザー定義消去アルゴリズムの保存

[ユーザー定義アルゴリズムの保存] ウィンドウでは、作成した消去アルゴリズムを保存することができます。この機能は、作成した消去方法を再び使用する場合に便利です。

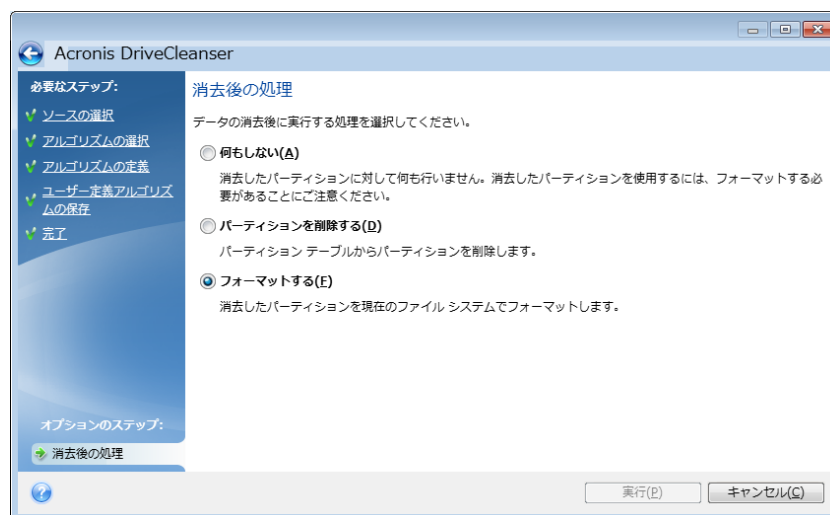
作成したユーザー定義の消去アルゴリズムを保存するには、ファイル名を指定して、[ファイルの選択] フィールドでパスを定義するか、ディスク上の既存のファイルを指定します。

ユーザー定義の各消去アルゴリズムは、ファイル名をつけて別々のファイルに保存されます。既存のファイルに新しい消去アルゴリズムを書き込むと、既存のファイルの内容は消去されます。

消去後の処理

[消去後の処理] ウィンドウでは、データ消去対象として選択されたパーティションに対して実行する処理を選択できます。Acronis DriveCleanser で選択できるオプションは次の 3 つです。

- **[何もしない]:** 以下で選択されているアルゴリズムを使用してデータの消去のみを行います。
- **[パーティションを削除する]:** データを消去して、パーティションを削除します。
- **[フォーマットする]:** データを消去して、パーティションをフォーマットします(デフォルト)。



ディスクの消去の概要

概要ウィンドウには、実行される処理の一覧が表示されます。

[実行] ボタンをクリックした後は、選択したパーティションは完全に消去され、元には戻せないことに注意してください。そのため、このボタンは **[選択されているパーティションを完全に消去する]** チェックボックスをオンにしなければクリックできないようになっています。

[実行] ボタンをクリックすると、表示されている処理が開始します。

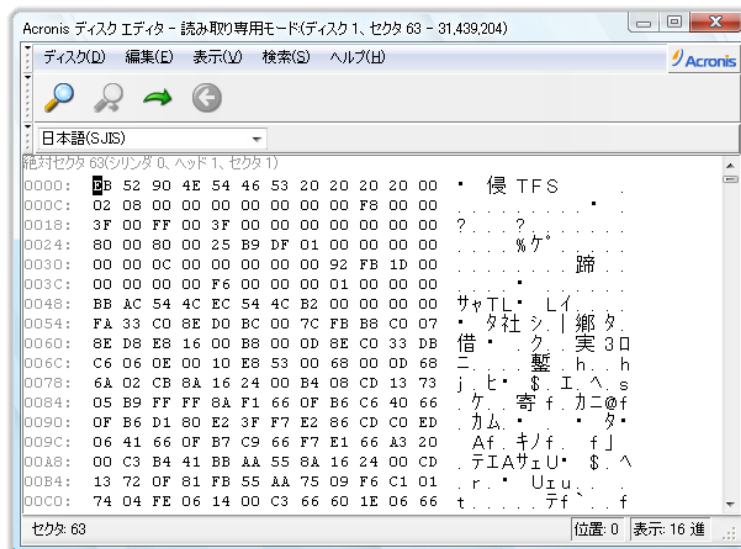
[オプション] ボタンをクリックすると、オプションのステップを実行できます。

[キャンセル] ボタンをクリックすると、処理は実行されず、ウィザードが終了します。

ディスク エディタ(読み取り専用モード)

Acronis DriveCleanser には、ハード ディスクまたはパーティションにデータ消去方法を適用した結果を表示できる便利な機能をもう 1 つ備えています。データが消去されたディスクまたはパーティションの状態を見るには、[ツールとユーティリティ] タブをクリックします。そして、[ディスクの現在の状態を表示] リンクをクリックして、どのパーティションのデータ消去の結果を表示するかを選択します。DriveCleanser に統合されている Acronis Disk Editor が、読み取り専用モードで開きます。

アルゴリズムによって、機密データを消去するレベルが異なります。このため、表示される消去結果も、データ消去方法によって異なります。実際に表示されるのは、0 またはランダムな記号で埋められたディスクのセクタになります。



ハードディスクの内容の検索

[検索] メニューを使用すると、ハードディスクの特定のデータを検索することや、絶対オフセットを基に特定のディスク セクタに移動することができます。

同じメニューの **[検索]** 項目を選択すると、編集中のディスク内のデータを検索することができます。**Ctrl + F** キーを押すという方法でも、同じ操作を実行できます。検索パラメータの設定は、**[検索]** ダイアログ ウィンドウで行います。

検索を開始する手順は、次のとおりです。

- 検索するデータは、文字([**文字列**] フィールド)として設定することも、数値([**16 進**] フィールド)として設定することもできます。**[文字列]** フィールドにテキストを入力すると、自動的に 16 進数値に変換されて **[16 進]** フィールドに表示されます。逆の場合も同様です。
- **[大文字と小文字を区別する]** パラメータをオンにすると、大文字と小文字が区別されます。大文字と小文字を区別しないで検索することを選択した場合は、アルファベットの**大文字と小文字**が区別されないだけでなく、アルファベット文字の上の記号も無視されます。
- **[次のセクタのオフセットを検索する]** パラメータをオンにすると、セクタ内の指定したオフセットのデータを検索できます。
- **[OK]** をクリックすると、検索が開始します。検索が完了すると、データが見つかった場合はそのデータの位置が**現在位置**となり、見つからない場合は**元の位置**が**現在位置**になります。現

在位置から次のデータの検索を開始するには、**[検索]** メニューの **[再検索]** 項目を選択するか、**F3** キーを押します。

セクタの移動

[検索] メニューの **[移動...]** を選択するか **Alt+P** キーを押すと、絶対オフセットで指定した目的のセクタに移動できます。このメニュー項目を選択すると、**[移動...]** ダイアログ ウィンドウが開きます。

セクタの絶対オフセット、またはシリンダ、ヘッド、およびセクタ番号を入力すると、移動が実行されます。一覧のパラメータには、次の式による制限があります。

(CYL x HDS + HD) x SPT + SEC - 1

CYL、HD、SEC は、CHS 座標(シリンダ、ヘッド、およびセクタ)で表されるシリンダ、ヘッド、およびセクタ番号です。HDS はディスクあたりのヘッド数で、SPT はトラックあたりのセクタ数です。

移動先のセクタから元のセクタへ戻るには、**[検索]** メニューの **[戻る]** の項目を選択するか、**Ctrl+Backspace** キーを押します。

8.8.2 ファイル シュレッダー

ファイル シュレッダーにより、選択したファイルとフォルダをすばやく完全に消去できます。

ファイルとフォルダを完全に消去する手順は、次のとおりです。

- **[ツールとユーティリティ]** タブをクリックし、**[ファイル シュレッダー]** をクリックします。
- ファイル シュレッダー ウィザードのステップを順に実行します。

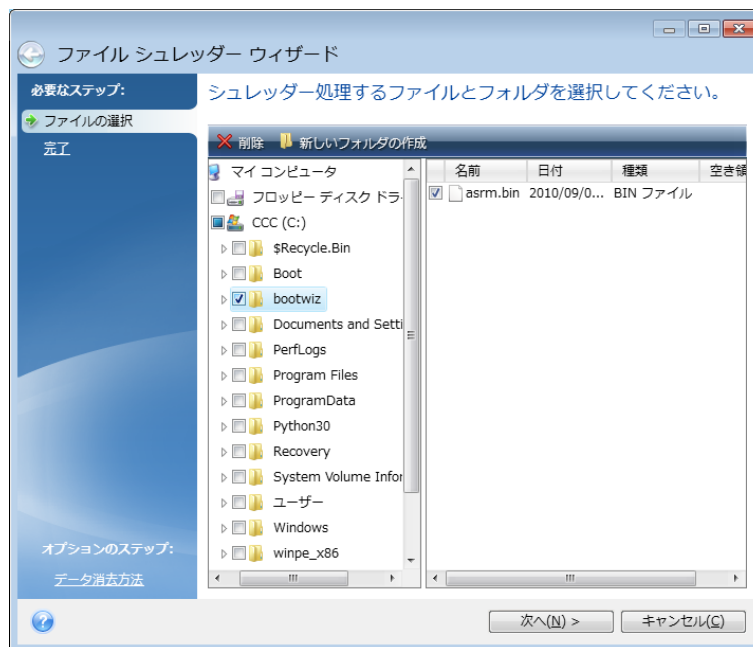
ファイル/フォルダの選択

シュレッダー処理するファイルやフォルダを選択します。

ファイルやフォルダを選択する手順は、次のとおりです。

- ドライブのツリーを展開して、シュレッダー処理する必要があるファイルやフォルダを選択します。ファイル、フォルダ、ディスクを任意の組み合わせで選択できます。必要なデータまで消去してしまわないように、シュレッダー処理対象の選択には十分に注意してください。

- シュレッター処理の対象を選択したら、[次へ] をクリックして先に進みます。



データ消去方法の選択

ファイル シュレッターでは、広く使用されているさまざまなデータ消去方法を使用できます。ここでは使用するデータ消去方法を選択する必要があります。

データ消去方法については、このガイドの「ハードディスクの消去方法（237ページ）」で詳しく説明されています。

使用する方法を選択してから **[実行]** をクリックすると、処理が開始されます（**[実行]** ボタンを選択できない場合は、サイドバーで **[完了]** をクリックして **[選択されているファイルとフォルダを完全に消去する]** チェックボックスをオンにし、**[実行]** ボタンを有効にします）。

シュレッターの概要

最後の概要ウィンドウには、消去対象として選択されたファイルやフォルダの一覧と、使用されるデータ消去方法が表示されます。

[実行] ボタンをクリックした後は、選択したファイルとフォルダは完全に消去され、元には戻せないことに注意してください。そのため、このボタンは **[選択されているファイルとフォルダを完全に消去する]** チェックボックスをオンにしなければクリックできないようになっています。

[実行] をクリックすると、選択されているファイルおよびフォルダが完全に消去されます。

[オプション] ボタンをクリックすると、オプションのステップを実行できます。

[キャンセル] ボタンをクリックすると、処理は実行されず、ウィザードが終了します。

シュレッター処理の進行状況

処理のステータス ウィンドウでは、現在の処理の状態についての情報が表示されます。

進行状況バーは、選択した処理の完了レベルを示しています。

場合によっては、処理が完了するまでに時間がかかることがあります。このような場合に[**処理の完了後にコンピュータをシャットダウンする**] チェックボックスをオンにすると、処理が完了したときに True Image 2013 によってコンピュータがシャットダウンされます。

8.8.3 システムのクリーンアップ

システム クリーンアップ ウィザードを使用して、Windows に保存されている PC の操作に関するすべての履歴を安全に削除することができます。

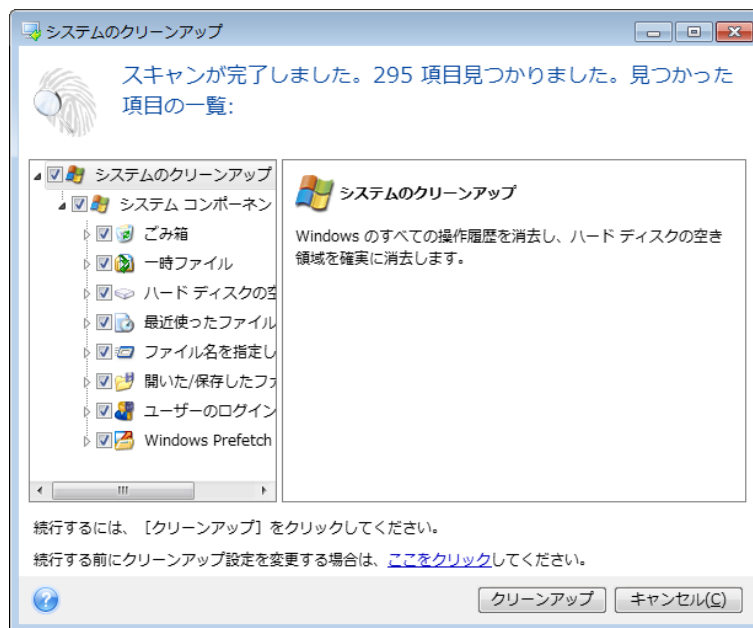
以下の処理を実行することができます。

- **Windows のごみ箱**のデータを安全に消去します。
- **一時ファイル**を、該当する Windows フォルダから削除します。
- **ハード ディスクの空き領域**に以前保存されていた情報の痕跡をクリーンアップします。
- 接続されているディスクやローカル エリア ネットワーク内のコンピュータに対する**ファイルとコンピュータ検索**の履歴を削除します。
- **最近使ったドキュメント**の一覧を消去します。
- 「**ファイル名を指定して実行**」の一覧を消去します。
- **開いた/保存したファイル**の履歴を消去します。
- **ネットワーク認証情報**を使用してユーザーが接続したネットワーク プレースの一覧を消去します。
- Windows によって保存されている、最近実行したプログラムに関する情報を **Windows Prefetch ディレクトリ** から消去します。

Windows Vista と Windows 7 では、ファイルやコンピュータの検索に関する情報は保存されません。また、開いたファイルや保存したファイルの情報は別の方法でレジストリに保存されますので、ウィザードでは異なる方法でその情報が表示されます。

Windows はセッション終了までパスワードを保存するため、ネットワーク ユーザーの認証情報の一覧を消去しても、ログアウトまたはコンピュータの再起動によって現在の Windows セッションを終了するまでは処理は有効になりません。

[ツールとユーティリティ] タブを選択して、[システム クリーンアップ] をクリックすると、ウィザードが起動されて Windows システムの使用履歴が検索されます。検索が終了すると、ウィザード ウィンドウの上部に結果が表示されます。



検索結果を表示して、削除する項目を手動で選択することができます。

システム クリーンアップのデフォルトの設定を変更するには、システム クリーンアップ ウィザードの最初に表示されるウィンドウで、対応するリンクをクリックします。

[クリーンアップ] をクリックすると、検出された項目が削除されます。

クリーンアップの設定

クリーンアップの設定ウィンドウで、すべてのシステム コンポーネントのクリーンアップの設定を変更できます。設定の中には、すべてのコンポーネントに適用されるものもあります。

コンポーネントに対するクリーンアップの設定を変更する手順は、次のとおりです。

- ツリーの [システム コンポーネント] 項目を展開し、変更が必要なコンポーネントのクリーンアップ設定を選択します。クリーンアップ ウィザードでコンポーネントのスキャンを有効または無効にできます。この設定を行うには、[有効] チェックボックスをオンまたはオフにします。
必要に応じて、コンポーネントを展開してさらにカスタマイズすることもできます。カスタマイズできる項目には、データ消去方法、消去するファイル、ローカル ネットワーク内のコンピュータの検索に使用されたレジストリ検索文字列をクリーンアップするか否かなどがあります。カスタマイズするには、コンポーネントの近くにある三角形をクリックし、一覧からオプションを選択して設定を指定します。
- 目的のコンポーネントのプロパティを設定し、[OK] をクリックして設定を保存します。これらの設定は、次回クリーンアップ ウィザードを起動したときにデフォルトとして使用されます。

変更したクリーンアップ設定はいつでもプログラムのデフォルト設定に戻すことができます。戻すには、[デフォルトに戻す] ボタンをクリックしてください。

システム コンポーネントの内容は次のとおりです。

- ごみ箱

- 一時ファイル
- ハードディスクの空き領域
- 最近使ったファイルの一覧
- ファイル名を指定して実行の一覧
- 開いた/保存したファイルの履歴
- ユーザーのログイン情報
- Windows プリフェッチ ディレクトリ

デフォルトのクリーンアップ オプション

クリーンアップのデフォルトのオプションは、**[データ消去方法]** オプションのページの **[クリックする
とこの設定を変更できます]** リンクをクリックして変更できます。

デフォルトのクリーンアップ オプションを変更する手順は、次のとおりです。

- 変更が必要なコンポーネントのクリーンアップ設定をツリーから選択します。
- オプションを変更したら、**[OK]** をクリックして設定を保存します。

変更したクリーンアップ設定はいつでもプログラムのデフォルト設定に戻すことができます。戻すには、**[デフォルトに戻す]** ボタンをクリックしてください。

全般

デフォルトでは、各クリーンアップ手順が終了するたびに **[概要]** ダイアログ ウィンドウが表示されます (**[概要の表示]** チェックボックスがオンになっている場合)。このウィンドウを表示する必要がない場合は、チェックボックスをオフにしてください。

クリーンアップ オプション

システム クリーンアップには、よく知られているさまざまなデータ消去方法が使用されます。ここでは、他のすべてのコンポーネントでデフォルトで使用される共通のデータ消去方法を選択できます。

データ消去方法については、このガイドの「ハードディスクの消去方法 (237ページ)」で詳しく説明されています。

特定のクリーンアップ オプション

次のクリーンアップ オプションをカスタマイズできます。

- データ消去方法
- デフォルト オプション
- ファイル
- ドライブ空き領域
- コンピュータ
- コマンド
- ネットワーク プレースのフィルタ

データ消去方法

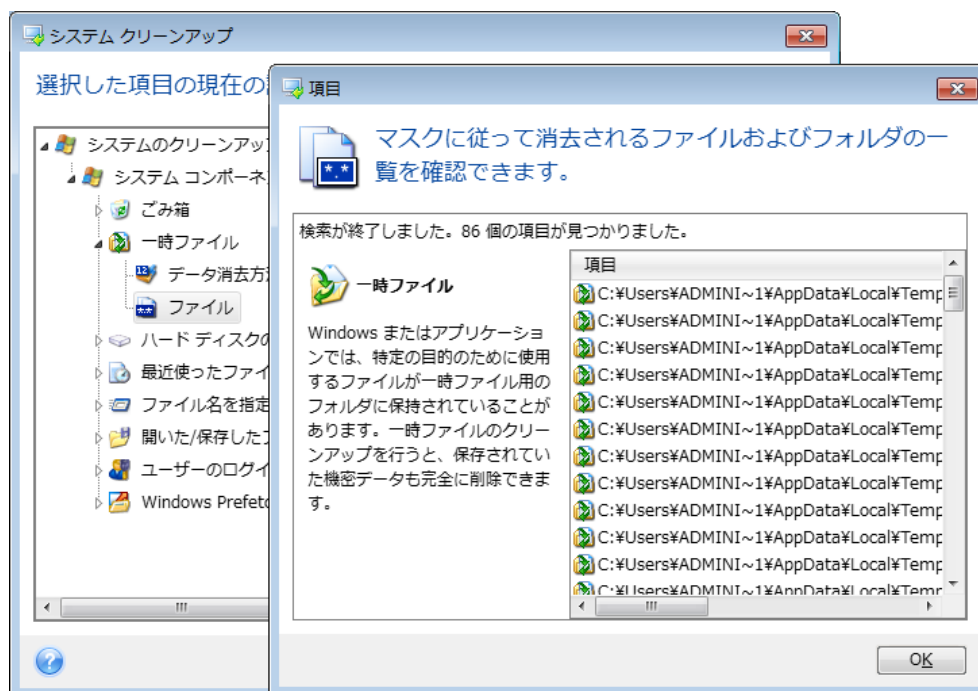
システム クリーンアップには、よく知られているさまざまなデータ消去方法が使用されます。ここでは使用するデータ消去方法を選択する必要があります。

- **[一般的な方法を使用する]** - このパラメータがオンの場合は、デフォルトの方法が使用されま
す(初期設定は「高速」方式です)。
別の消去方法をデフォルトとして設定するには、該当するリンクをクリックします。
- **[このコンポーネントにユーザー定義の方法を使用する]** - このパラメータを選択すると、あらか
じめ設定されているデータ消去方法をドロップダウン リストから選択できます。

データ消去方法については、このガイドの「ハードディスクの消去方法 (237ページ)」で詳しく説明
されています。

ファイル

[ファイル] の設定では、システム クリーンアップ ウィザードによってクリーンアップするファイルを
指定します。検索文字列を指定することもできます。



Windows オペレーティング システムでは、ファイル名の全体または一部を検索文字列で表現する
ことができます。検索文字列には、任意の英数字と、カンマなどの記号およびワイルドカードを使用
できます。値の例を次に示します。

- *.* - ファイル名や拡張子にかかわらず、すべてのファイルが削除されます。
- *.doc - 指定された拡張子ファイル(この例では Microsoft Word の文書ファイル)が削除され
ます。
- read*.* - ファイル名が「read」で始まるファイルが拡張子に関係なくすべて削除されます。
- read?.* - 「read」で始まる 5 文字のファイル名を持つファイルが(5 文字目は任意の文字)、
拡張子に関係なくすべて削除されます。

たとえば上記の最後の検索文字列では、read1.txt および ready.doc ファイルは削除されま
すが、readiness.txt は、ファイル名が 5 文字より長いため削除されません(拡張子はファイル
名の文字数に含まれません)。

検索文字列を複数入力するには、次の例のようにセミコロンで区切ります。

.bak;.tmp;*.~~~ (検索文字列の間にスペースは不要)

検索文字列の 1 つ以上に名前が一致するファイルが、すべて削除されます。

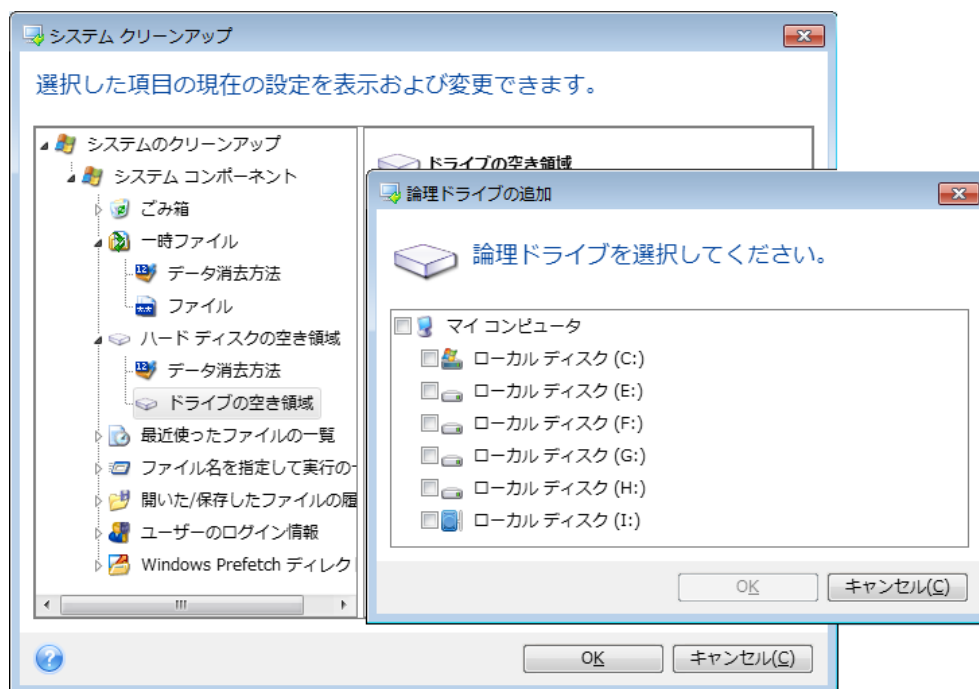
[ファイル] の設定値を入力した後で、検索文字列と一致するファイルの一覧を表示することができます。表示するには、[ファイルを表示する] をクリックします。見つかったファイルの名前がウィンドウに表示されます。これらのファイルがクリーンアップの対象となります。

ドライブ空き領域

ここでは、空き領域をクリーンアップするドライブを手動で指定できます。デフォルトでは、使用可能なすべてのドライブの空き領域がシステム クリーンアップでクリーンアップされます。

このパラメータの設定を変更する場合は、[削除] ボタンを使用すると、空き領域をクリーンアップしないドライブを一覧から削除することができます。

そのドライブを再び一覧に追加するには、[追加] ボタンをクリックします。



コンピュータ

[コンピュータ] 設定は、ローカル ネットワーク内のコンピュータの検索に使用したレジストリ検索文字列のクリーンアップに使用されます。この検索文字列に保持される情報は、ネットワーク内でユーザーが何を探していたかを表します。機密性を維持するには、このような項目も削除する必要があります。

[コンピュータ] 設定は、[ファイル] 設定と似ています。この文字列には、コンピュータ名の全体または一部をセミコロンで区切って入力します。指定できる数の制限はありません。コンピュータの検索文字列の削除は、Windows の規則に従い、[コンピュータ] 設定値との比較に基づいて行われます。

ローカル ネットワーク コンピュータ検索文字列をすべて削除したい場合は、この設定をデフォルト値のままにしてください。デフォルト設定を復元する手順は、次のとおりです。

- **[検索したコンピュータの一覧]** コンポーネントを選択します。
- **[有効]** チェックボックスがオンになっていることを確認します。
- **[コンピュータ]** 設定を選択し、そのテキスト ボックスの内容が消去されていることを確認します。

こうすると、すべてのコンピュータ検索文字列がレジストリから削除されます。

[コンピュータ] の設定値を入力した後に、システム クリーンアップ ウィザードによってレジストリ内で検出された検索文字列を一覧表示することができます。表示するには、**[コンピュータの表示]** をクリックします。ネットワーク上で検索されたコンピュータ名 (完全なコンピュータ名またはその一部) がウィンドウに表示されます。これらの項目が削除されます。

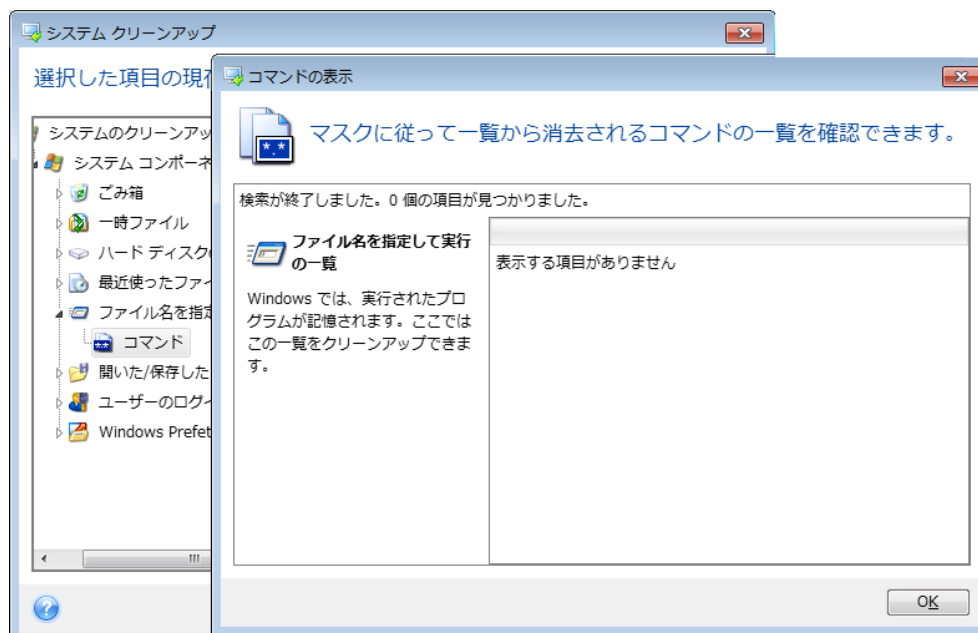
「コマンド」の設定

ここでは、**Windows の実行一覧**のクリーンアップ時に削除するコマンドを選択できます。

このテンプレートには、任意のコマンド名を含めるか、次のようにコマンドの一部をセミコロンで区切って含めることができます。

help; cmd; reg

この手順により、名前に対応したコマンド、または入力した名前またはその一部を含むコマンドが削除されます。



ネットワーク プレースのフィルタ

ここでは、過去に認証情報 (ユーザー名およびパスワード) を入力して接続したネットワーク プレース、サーバー、FTP サーバー、ネットワーク共有デバイスなどのホスト名または IP アドレスを入力できます (セミコロンで区切って入力)。ホスト名や IP アドレスを入力するときは、* および ? のワイルドカードを使用できます。

[ネットワーク プレースを表示する] をクリックすると、削除しようとしている認証情報を使用して過去にアクセスしたネットワーク プレースの一覧が表示されます。

プレビュー

スキャンが終了すると、その結果がウィザード ウィンドウの上の部分に表示されます。デフォルトでは、クリーンアップ用にすべてのシステム コンポーネントがスキャンされます。どのコンポーネントをスキャンし、どのコンポーネントをスキャン対象から除外するかをカスタマイズするには、クリーンアップのデフォルト設定を変更します。

検索結果を表示して、クリーンアップする項目の選択と残す項目の選択解除を手動で行うことができます。正しく選択できるように、どのコンポーネントにも簡単な説明が付いています。コンポーネントの名前をクリックすると、その説明がウィンドウの右側に表示されます。

コンポーネントを選択/選択解除する手順は、次のとおりです。

- システム クリーンアップ ツリーの **[システム コンポーネント]** 項目を展開し、クリーンアップするコンポーネントのチェックボックスをオンにします。コンポーネントをクリーンアップしない場合は、そのコンポーネントのチェックボックスをオフにします。
- 必要に応じて、コンポーネントを展開し、さらに下位の内容をオンまたはオフにすることもできます。

クリーンアップするコンポーネントを指定したら、**[クリーンアップ]** をクリックして先に進みます。

Windows Vista と Windows 7 では、ファイルやコンピュータの検索に関する情報は保存されません。また、開いた/保存したファイルの情報をレジストリに保存する方法も異なるため、ウィザードでのこの情報の表示方法も異なります。

クリーンアップの進行状況

処理のステータス ウィンドウでは、現在の処理の状態についての情報が表示されます。

進行状況バーは、選択した処理の完了レベルを示しています。

場合によっては、処理が完了するまでに時間がかかることがあります。このような場合に **[終了後コンピュータをシャットダウンする]** チェックボックスをオンにすると、処理が完了したときに True Image 2013 によってコンピュータがシャットダウンされます。

8.8.4 ハードディスクの消去方法

情報をハードディスクから削除するときに、安全ではない手段(たとえば Windows での単純な削除)を使用すると、その情報は簡単にリカバリできてしまいます。特殊な機器を使用すれば、繰り返し上書きされた情報でもリカバリできます。したがって、確実なデータ消去の重要性は、これまでになく強まっています。

磁気メディア(ハードディスク ドライブなど)の**情報の確実な消去**とは、専門家が既知のあらゆるツールとリカバリ方法を使用してもデータをリカバリできないようにすることです。

このことをもう少し具体的に説明しましょう。ハードディスクに格納されるデータは、1 と 0 の 2 進数のシーケンスとなっており、このことはディスクの部分ごとに磁化を変化させるという方法で表現されます。

一般的に言って、ハードディスクに書き込まれた 1 はハードディスク コントローラによって 1 として読み取られ、0 は 0 として読み取られます。ただし、0 に 1 を上書きすると、ある条件の下ではその結果は 0.95 となり、1 を 1 に上書きすると結果は 1.05 となります。このような違いは、

コントローラにとっては無関係です。しかし、特殊な機器を使用すれば、「下に隠れている」0 と 1 のシーケンスを簡単に読み取ることができます。

このような方法で「削除された」データを読み取るのに必要なものは、専用のソフトウェアと、それほど高価ではないハードウェアだけであり、その方法としては、ハードディスクのセクタの磁化やトラックの縁に残留している磁化を分析する、あるいは最新の磁気顕微鏡を使用するなどが使用されます。

磁気メディアに書き込んだときの目に見えない効果を要約すると、「ディスクの各トラックに格納されているものは、それまでに書き込まれたすべてのレコードのイメージであるが、そのレコード(磁気層)の効果は、時間がたつにつれて次第に認識しにくくなる」となります。

情報の抹消方法の動作原理

ハードディスクから情報を物理的に完全に抹消するには、記録媒体のすべての磁気領域 1 つ 1 つに対して、特別に選ばれた論理的な 1 と 0 の並び(サンプル データ)を書き込み、磁気の状態をできるだけ多くの回数切り替えます。

一般的なハードディスクの論理データ エンコーディング方法を利用すれば、セクタに書き込まれる記号(または最小単位のデータ ビット)の並びのサンプルを選択して、**継続的かつ効果的に機密データを抹消することができます。**

国家規格で提唱された方法では、ランダムな記号をディスク セクタに対して(1 回または 3 回)記録します。これは**単純で確実性に欠ける方法**ですが、それほど重大ではない状況では効果的です。最も有効な情報抹消方法は、あらゆる種類のハードディスクに記録されたデータの、微細な特徴の詳細な分析に基づくものです。このような理由により、情報の抹消を**保証するには、複数の工程で処理する複雑な方法が必要**となります。

情報の抹消を保証する技術に関する具体的な理論は、Peter Gutmann 氏による論文で紹介されています。次の論文を参照してください。

"Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory" (英文 : http://www.cs.auckland.ac.nz/~pgut001/pubs/secure_del.html)。

Acronis で使用できる情報消去方法

次の表では、Acronis で使用できる情報抹消方法について簡単に説明しています。それぞれ、ハード ディスク セクタの工程数と、各セクタにバイト単位で書き込まれる数値を表します。

情報抹消方法に関する説明

No.	アルゴリズム (書き込み方法)	工程数	記録
1.	米国国防省準拠 DoD 5220.22-M 方式	4	第 1 工程 - 各セクタの各バイトにランダムに選択した記号。第 2 工程 - 第 1 工程で書き込まれた値の補数。第 3 工程 - 再度、ランダムな記号。第 4 工程 - 書き込み結果の検証。
2.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-RLL 方式	4	第 1 工程 - 全セクタに 0x01。第 2 工程 - 0x27FFFFFF。第 3 工程 - ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程 - 検証。
3.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-MFM 方式	4	第 1 工程 - 全セクタに 0x01。第 2 工程 - 0x7FFFFFFF。第 3 工程 - ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程 - 検証。
4.	ドイツ VSITR 方式	7	第 1~第 6 工程 - 0x00 と 0xFF を交互に。第 7 工程 - 0xAA。つま

No.	アルゴリズム（書き込み方法）	工程数	記録
			り、順番に 0x00、0xFF、0x00、0xFF、0x00、0xFF、0xAA となる。
5.	ロシア GOST P50739-95 方式	1	セキュリティ レベルが 6~4 のシステムの場合、各セクタの各バイトに論理値ゼロ（数値 0x00）。 セキュリティ レベルが 3~1 のシステムの場合、各セクタの各バイトにランダムに選択された記号（数値）。
6.	グートマン（Peter Gutmann）方式	35	非常に高度な方式。この方式は、ハード ディスクの情報抹消についての Peter Gutmann 氏の理論に基づいている（Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory）を参照）。
7.	Bruce Schneier 方式	7	Bruce Schneier が著書（応用暗号論）で提唱している 7 回の工程で上書きする方法。1 工程目で 0xFF を、2 工程目で 0x00 を書き込み、その後、暗号的にセキュリティの高い擬似ランダム シーケンスで 5 工程の書き込みを行う。
8.	高速	1	全セクタに対して論理値ゼロ（数値 0x00）で抹消。

8.9 イメージのマウント

True Image 2013 には、イメージのマウント機能に加えて、イメージとファイル レベル バックアップの参照機能があります。

イメージとファイル レベル バックアップの参照では、内容の表示、選択したファイルのハード ディスクへのコピーを行うことができます。Windows エクスプローラでバックアップを参照するには、対応する tib ファイルをダブルクリックします。

参照しているバックアップからファイルをコピーすると、コピーされたファイルから「圧縮」および「暗号化」属性が失われます。これらの属性を維持したい場合は、バックアップをリカバリすることをお勧めします。

イメージを仮想ドライブとしてマウントすると、物理ドライブであるかのようにアクセスすることができます。これにより、次のことが可能になります。

- 固有のドライブ文字を持つ新しいディスクがドライブ一覧に表示される
- Windows エクスプローラやその他のファイル マネージャを使用して、物理ディスクまたはパーティションに保存されているかのように、イメージの内容を参照できる
- 実在するディスクと同じように仮想ディスクを使用（ファイルやフォルダを開く、保存、コピー、移動、作成、削除）することができる必要に応じて、読み取り専用モードでイメージをマウントすることもできます。

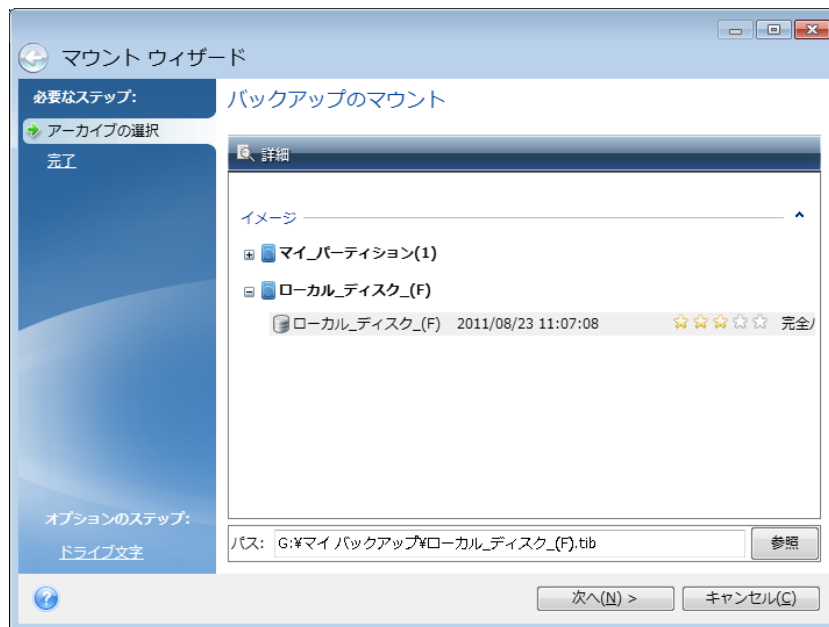
このセクションで説明した処理は、FAT および NTFS でファイル システムでのみサポートされます。

ファイル バックアップとディスク/パーティション イメージには、どちらもデフォルトで「.tib」拡張子が付いていますが、マウントできるのは**イメージのみ**であることにご注意ください。ファイル バックアップの内容を表示するには、参照処理を使用してください。

イメージのマウント方法

1. **[ツールとユーティリティ]** タブで **[イメージのマウント]** をクリックして、マウント ウィザードを開始します。

2. マウントするバックアップを選択します。

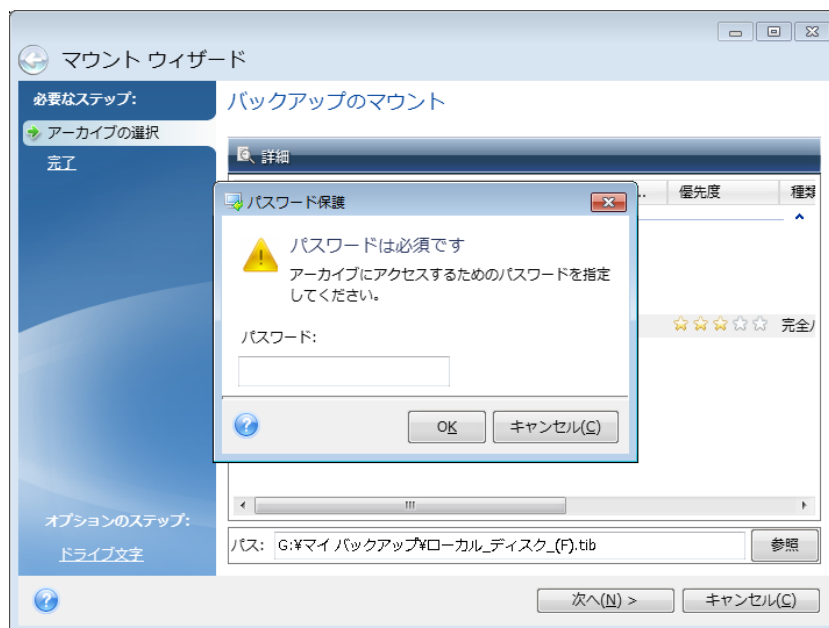


増分イメージが格納されているバックアップを選択した場合は、作成日時に基づいて、連続する増分イメージ(バックアップ バージョン)の 1 つを選択できます。これにより、特定時点のデータの状態を参照できます。

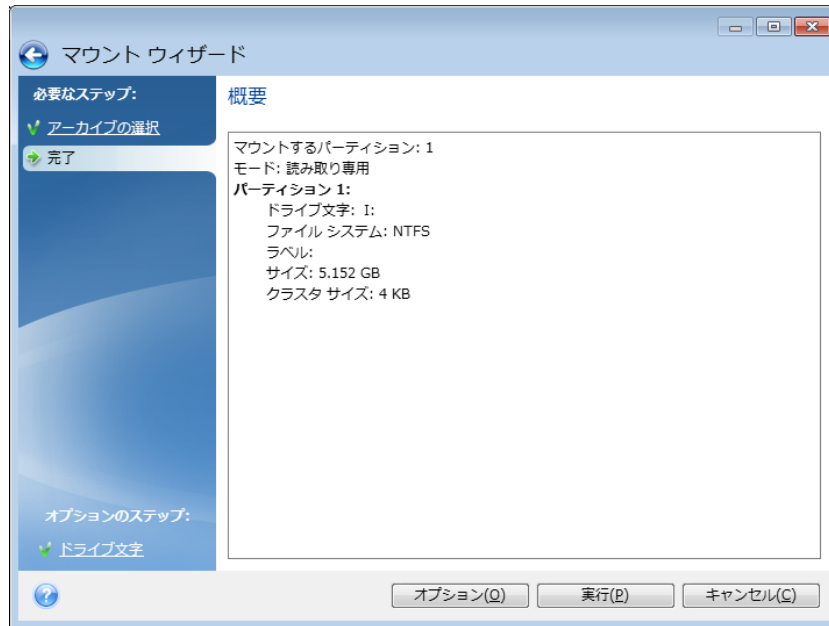
増分イメージをマウントするには、以前に作成したすべてのバックアップ バージョンと最初の完全バックアップが必要です。連続するバックアップのいずれかが欠けていると、マウントはできません。

差分イメージをマウントするには、最初の完全イメージも必要となります。

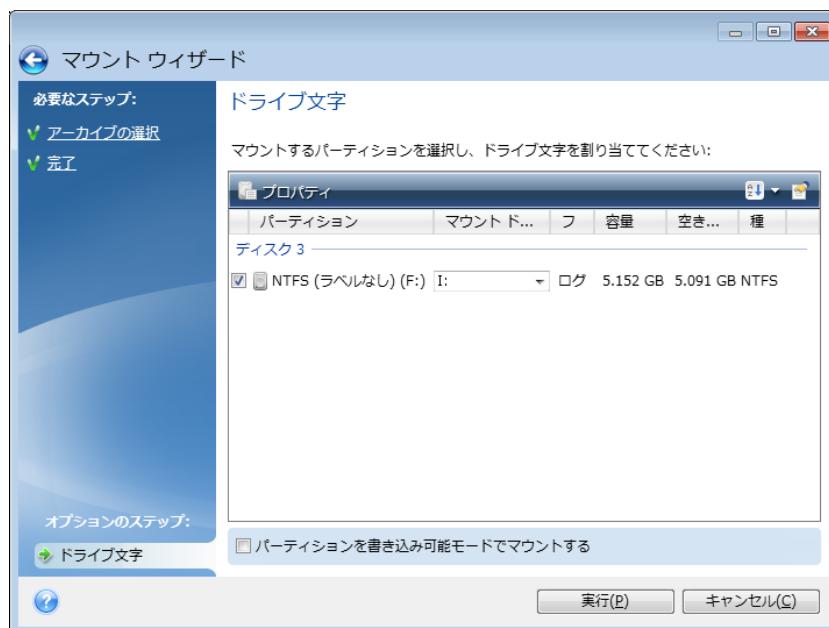
バックアップがパスワードで保護されている場合は、True Image 2013 によりパスワードの入力を求めるダイアログ ボックスが表示されます。正しいパスワードが入力されるまで、パーティション レイアウトは表示されず、[次へ] ボタンも有効になりません。



3. 仮想ディスクとしてマウントするパーティションを選択します。(ディスクが 1 つのパーティションで構成されている場合を除き、ディスク全体のイメージをマウントすることはできません)。イメージに複数のパーティションが含まれている場合、デフォルトでは、すべてのパーティションがマウント対象として選択され、ドライブ文字が自動で割り当てられています。マウントするパーティションに異なるドライブ文字を割り当てる場合は、**[オプション]** をクリックします。



仮想ディスクに割り当てるドライブ文字を、**[マウント ドライブ文字]** ドロップダウン リストから選択することもできます。パーティションをマウントしない場合は、ドロップダウン リストから **[マウントしない]** を選択するか、該当するパーティションのチェックボックスをオフにします。



4. **[パーティションを書き込み可能モードでマウントする]** チェックボックスをオンにした場合は、プログラムはマウントされたイメージが変更されるものとみなし、変更内容を取り込む増分バックアップ ファイルを作成します。予定される変更内容をファイルの **[コメント]** フィールドに記述して

おくことをお勧めします。コメントを作成できるよう、オプションの **[コメント]** ステップがウィザードに表示されます。

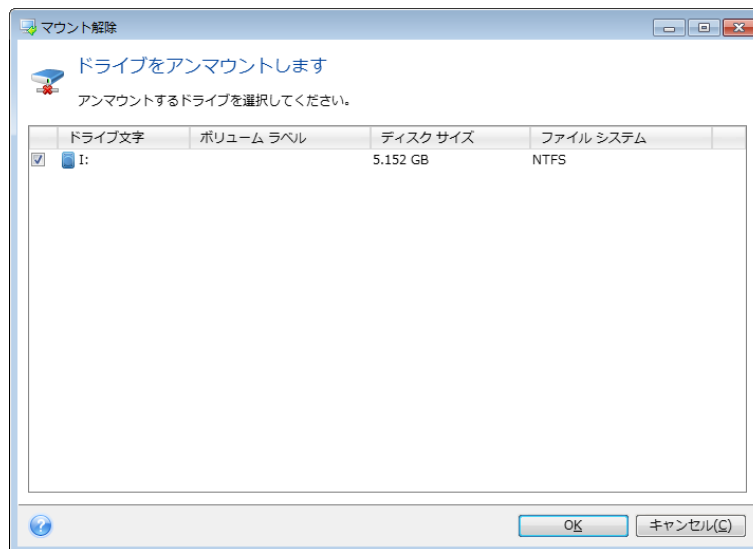
5. 設定が完了したら **[実行]** をクリックし、選択したパーティション イメージを仮想ディスクとして接続します。
6. イメージが接続されると、Windows エクスプローラが起動し、仮想ディスクの内容が表示されます。これで、ファイルまたはフォルダが実際のディスク上にあるかのように作業することができます。

8.10 イメージのアンマウント

仮想ディスクの維持にはかなりのシステム リソースが消費されるため、必要な操作がすべて終了したら、仮想ディスクをマウント解除することをお勧めします。ディスクのアンマウントを行わない場合、このディスクはコンピュータの電源をオフにすると消滅します。

仮想ディスクの接続を切断するには、**[ツールとユーティリティ]** タブで **[イメージのアンマウント]** をクリックし、アンマウントするディスクを選択してから **[OK]** をクリックします。

複数のパーティションがマウントされている場合は、デフォルトですべてのパーティションがアンマウントの対象に選択されます。マウントされているドライブの接続をすべて切断することも、マウントしておく必要がなくなったドライブだけ切断することもできます。



Windows エクスプローラでディスク アイコンを右クリックし、**[アンマウント]** を選択して、この処理を行うこともできます。

8.11 vhd ファイルの使用方法

セクションの内容

tib イメージと vhd 仮想ディスクの相互変換	243
Windows バックアップにより作成された vhd ファイルを使用したリカバリ	245
Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する	246
Acronis ブート シーケンス マネージャ	247

8.11.1 tib イメージと vhd 仮想ディスクの相互変換

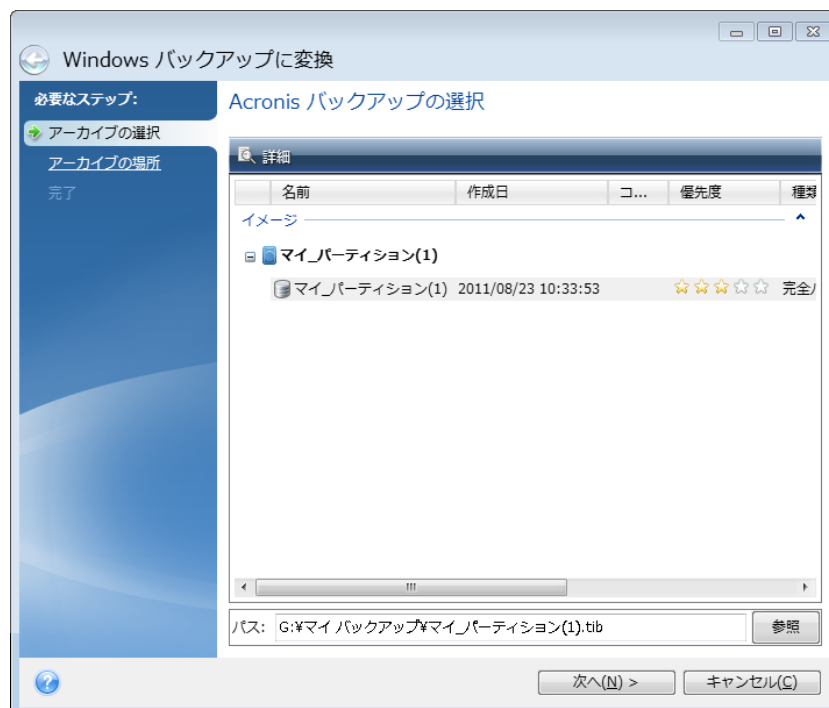
レスキュー メディアからの起動時に開始されるスタンドアロン バージョンの True Image 2013 では、変換処理はサポートされていません。

Acronis バックアップの変換

Windows 7 の Enterprise エディションまたは Ultimate エディションを使用している場合は、システム パーティションの TIB イメージを VHD 形式に変換しておくこと、変換後の VHD ファイルを使用してオペレーティング システムを起動できるようになります。また、True Image 2013 を使用しなくてもイメージをマウントできるようになります。

Acronis のディスク イメージ(TIB ファイル)を VHD 仮想ディスクに変換する手順は、次のとおりです。

1. **[ツールとユーティリティ]** タブの **[Acronis バックアップ変換]** をクリックします。



2. 変換するディスク イメージを選択します。

バックアップがパスワードで保護されている場合は、パスワードを入力する必要があります。作成された VHD ファイルはパスワードで保護されないことに注意してください。

増分バックアップを変換するには、それ以前のすべての増分バックアップと、元の完全バックアップが必要です。差分バックアップを変換するには、元の完全バックアップが必要です。変換の結果は必ず、完全バックアップになります。

3. 作成するファイルのパスを指定します。

変換後のファイルはデフォルトのロケーションに保存されますが、別のロケーションを選択するには **[参照]** をクリックしてください。ファイルを作成するロケーションは、True Image 2013 によってサポートされるローカル ストレージであればどれでもかまいません (Acronis セキュア ゾーンと CD/DVD を除く)。さらに、SMB 共有に格納することもできます。

4. 概要ウィンドウの **[実行]** をクリックします。

変換対象として選択した TIB イメージに含まれるパーティションが、たとえば 2 つの物理ハードディスクドライブからのものである場合は、物理ドライブに合わせて 2 つの VHD ファイルが作成されます。

TIB ファイルに含まれるイメージが、スパンまたはストライプのダイナミック ボリュームの場合は、TIB ファイルを変換することはできません。

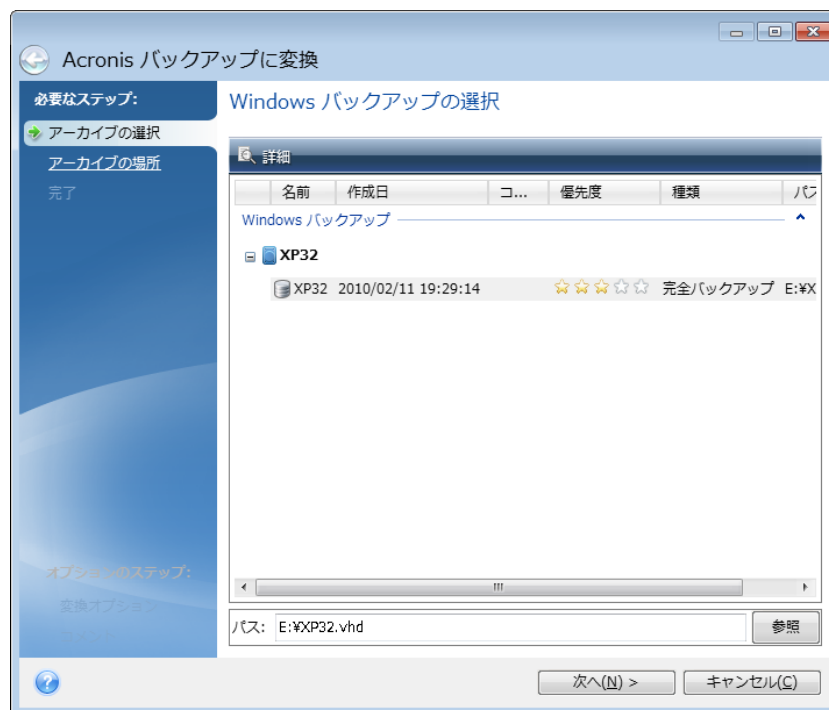
Windows バックアップの変換

Windows Vista または Windows 7 の Windows バックアップで作成された VHD ファイルを、Acronis バックアップに変換することができます。この処理は、たとえば、以前作成した Windows バックアップのファイルを残しておきたいけれども、保存のための領域を節約したい場合などに必要になります。変換後の TIB ファイルは圧縮されるため、対応する VHD ファイルよりもサイズが小さくなります。

Windows バックアップによって VHD ファイルが保存されるフォルダ(デフォルトのフォルダ名は「WindowsImageBackup」)から、VHD ファイルを移動しないでください。移動すると、変換済み TIB ファイルからシステム パーティションをリカバリした後で、オペレーティング システムが起動不能になる可能性があります。

仮想から物理に変換する手順は、次のとおりです。

1. **[ツールとユーティリティ]** タブの **[Windows バックアップ変換]** をクリックします。



2. 変換する VHD ファイルを選択します。
3. 作成する TIB ファイルのパスを指定します。

デフォルトでは、変換後のファイルは変換前のファイルと同じロケーションに作成されます。別のロケーションを選択するには **[参照]** をクリックします。ファイルを作成するロケーションは、True Image 2013 によってサポートされるストレージであればどれでもかまいません(Acronis セキュア ゾーンを除く)。

4. 次の手順では、作成する TIB バックアップのオプションを設定します。パスワードと暗号化でバックアップを保護するかどうかの指定、圧縮レベルの選択、およびバックアップの分割(たとえば、後で DVD に書き込む場合)が可能です。
5. 必要に応じて、バックアップにコメントを追加します。
6. 概要ウィンドウの **[実行]** をクリックします。

VHD ファイルに複数のダイナミック ボリュームが含まれており、それぞれが別のディスク ドライブに存在していた場合は(複数のディスク ドライブへのストライプまたはスパン)、VHD ファイルを変換することはできません。

8.11.2 Windows バックアップにより作成された vhd ファイルを使用したりカバリ

システムのハード ドライブをバックアップするために、Windows Vista および Windows 7 に組み込まれている Windows バックアップ ユーティリティを使用した場合、vhd ファイルが作成されます。

Windows Vista または Windows 7 のバックアップ ユーティリティを使用した後に、True Image 2013 を購入した場合、True Image 2013 を使用して、それらのバックアップ ユーティリティの vhd ファイルからシステムのハード ドライブをリカバリできます。

vhd バックアップ ファイルを使用してシステムをリカバリする必要がある場合は、次の手順を実行します。

1. BIOS で起動順序を設定して、レスキュー メディア デバイス(CD、DVD、または USB スティック)を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並べ替え (116ページ)」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、**[True Image]** を選択します。
3. True Image 2013 の起動後、[ようこそ] 画面で **[リカバリする]** の下にある **[マイ ディスク]** リンクをクリックします。
4. リカバリに使用する vhd バックアップ ファイルを作成日に基づいて選択します。必要な vhd ファイルが表示されていない場合は、**[参照]** をクリックして **[ファイルの種類]** フィールドで Windows バックアップ アーカイブ(*.vhd)を選択してリカバリするバックアップを検索します。

必要な vhd バックアップが画面に表示されている場合でも、バックアップの選択後に True Image 2013 が「True Image 2013 は "Backup_Name" アーカイブのボリューム 1 を検出できません」というメッセージを表示する場合があります。Backup_Name は、選択したバックアップの名前です。これは、スタンドアロン版の True Image 2013 におけるドライブ文字が Windows におけるドライブ文字と異なるためであり、メタデータ情報に保存されているこのバックアップへのパスは間違っただけを示します。この場合、**[参照]** をクリックして **[ファイルの種類]** フィールドで Windows バックアップ アーカイブ(*.vhd)を選択してリカバリするバックアップを検索します。

5. 次の手順で **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択し(選択されていない場合)、**[次へ]** をクリックします。
6. **[リカバリ元]** でシステム パーティションを選択します。通常、MBR をリカバリする必要はありません。
7. その後、選択したシステム パーティションのロケーション、種類(プライマリ、アクティブ)、およびサイズの設定を指定します。パーティションを元のロケーションにリカバリする場合は、設定を変更する必要はありません。
8. リカバリ処理の概要を確認して **[実行]** をクリックします。

Windows での作業を継続しながら vhd ファイルからパーティションとディスクをリカバリすることもできます。これは、データ パーティションとディスクのリカバリ時に適しています。

8.11.3 Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する

既に説明したとおり、Windows 7 の Enterprise エディションおよび Ultimate エディションでは、Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからシステムを起動することができます。その結果、バックアップしたシステムが起動可能かどうかを、実際にリカバリしなくてもテストすることができます。Windows の動作中に True Image 2013 を実行している場合にのみ起動できます。

Windows 7 Enterprise または Ultimate を使用していて、作成済みの Windows 7 システム パーティション バックアップからリカバリされたオペレーティング システムが起動可能かどうかをテストするには、次の手順に従います。

1. **[ツールとユーティリティ]** 画面の **[ブート シーケンス マネージャ]** をクリックして、Acronis ブート シーケンス マネージャを開きます。
2. Acronis ブート シーケンス マネージャのツールバーの **[追加]** をクリックし、テストする TIB ファイルを選択して **[OK]** をクリックします。
3. 実際のシステム起動は VHD から行われるので、選択された TIB ファイルの変換が必要です。そのためのダイアログが表示されます。
4. **[OK]** をクリックすると、変換後ファイルはデフォルトのロケーションに同じ名前で保存されますが、別のロケーションを指定することもできます。別のロケーションに保存する場合は、VHD ファイルの名前を変更することができます。

VHD ファイルが、NTFS 形式のローカル ハード ディスクにある場合にのみ起動できます。

選択したロケーションに、変換後ファイルを保存するために十分な空き領域がない場合は、その情報を通知するメッセージが表示されます。不要なファイルを削除して **[再試行]** をクリックするか、変換をキャンセルして変換後ファイルのロケーションを選択しなおしてください。

5. 変換処理が終了すると、この VHD ファイル名の行が Acronis ブート シーケンス マネージャに追加されます。

VHD を使用してシステムを起動するには、変換後の VHD ファイルが存在するパーティションに十分な空き領域があることが必要です。TIB ファイルは動的 VHD に変換されますが、その最大サイズは、TIB ファイルにバックアップされたパーティションのサイズに等しくなります。動的 vhd ファイルから起動すると、VHD は自動的に最大サイズにまで展開されます。vhd ファイルの物理ホスト パーティションに、ダイナミック VHD の最大サイズに対応した十分なディスク空き領域がない場合、起動処理は失敗します。さらに、ページング ファイル (Pagefile.sys) 用の追加領域も必要です。ページング ファイルは仮想パーティション以外のホスト パーティション上に作成されるからです。Microsoft では、vhd ファイルの最大サイズに加えて約 5 GB の空き領域が必要になると見積もるように推奨しています。つまり、必要な空き領域はシステム パーティションのサイズに 5 GB を足した大きさになります。以上のことから、vhd ファイルがシステム パーティション上にある場合には、vhd ファイルから起動することはできません。

6. コンピュータを再起動し、作成された VHD ファイルを Acronis ブート シーケンス マネージャの一覧から選択して **[OK]** をクリックします。Windows が通常どおり起動した場合は、将来そのバックアップからリカバリしたときに Windows 7 オペレーティング システムが起動可能になる確率はかなり高いといえます。
7. TIB イメージが起動可能であることを確認した後は、Acronis ブート シーケンス マネージャの一覧から削除してもかまいません。削除するには、その項目を選択してツールバーの **[削除]** をクリックします。削除してもよいかどうかを確認する画面が表示されます。また、起動に使用し

た VHD ファイルも削除してかまいません。削除する場合は、Windows エクスプローラで削除してください。

8.11.4 Acronis ブート シーケンス マネージャ

Acronis ブート シーケンス マネージャ ツールは、Windows 7 Enterprise エディションおよび Ultimate エディションのユーザーのみ利用可能です。

Acronis ブート シーケンス マネージャでは、Windows 7 システム パーティションのイメージをブート リストに追加して、このリストを管理することができます。

このリストには、VHD と TIB のどちらの形式のバックアップ イメージも追加できます。TIB イメージを追加するには、VHD 形式に変換する必要があります。TIB イメージからのブートの詳細については、「Windows 7 システム パーティションの TIB イメージからコンピュータを起動する (246 ページ)」を参照してください。

実際の起動は、Windows ブート ローダーを使用して実行されます。Acronis ブート シーケンス マネージャの機能は、Windows ブート ローダーが保持している、Windows 7 の起動時に選択可能なディスクのリストに仮想ディスク(VHD ファイル)を追加することだけです。

どの VHD から起動するかをユーザーが選択しなかった場合は、[ブート タイムアウト] フィールドで指定した時間の経過後に、デフォルトではブート リストの最初のエン트리からコンピュータが起動されます。デフォルトの起動ディスク(物理か仮想かを問わず)を変更するには、ツールバーのボタンを使用して、リストのエントリを上または下に移動します。

[名前の変更] ボタンをクリックすると、リストのエントリに任意の名前を指定することができます。

リスト内のエントリが不要になった場合に削除するには、ツールバーの **[削除]** をクリックします。

[すべて削除] ボタンを使用すると、仮想ディスクに関連するすべての項目を削除して元のブート構成を復元することができます。

8.12 バックアップ設定のインポートとエクスポート

True Image 2013 を使用して、バックアップ設定をインポートおよびエクスポートすることができます。この機能は、新しいコンピュータに True Image 2013 をインストールした後に、設定を転送する必要がある場合に便利です。また、設定を保存することで、次のバージョンの True Image 2013 へのアップグレードも簡単に行えるようになります。

設定を転送することにより、新しいコンピュータでのバックアップの設定が大幅に簡単になります。設定をエクスポートして、それを別のコンピュータにインポートするだけです。設定は、スクリプト ファイルの形式でエクスポートされます。

設定の内容は、バックアップの種類に応じて異なります。「クラシック」ディスクのバックアップとファイルのバックアップの場合、設定は次の項目で構成されます。

- バックアップの項目一覧
- バックアップ オプション
- バックアップの保存先
- スケジュール
- バックアップ スキーム

- 自動クリーンアップのルール
- バックアップ バージョンの命名規則

ノンストップ バックアップの設定は次のとおりです。

- ノンストップ プロテクションの項目一覧
- ノンストップ バックアップ データの保存場所 (保存場所が複数存在する場合は、保存場所の一覧)

あるコンピュータのオンライン バックアップ設定を別のコンピュータにインポートすることはできません。

既存のバックアップの設定をエクスポートするには、メニュー バーの **[ツールとユーティリティ]** をクリックし、**[バックアップ設定をエクスポートする]** をクリックして、設定が含まれたスクリプト ファイルの保存場所を指定します。

設定をインポートするには、インポート先のコンピュータで True Image 2013 を起動して、メニュー バーの **[ツールとユーティリティ]** をクリックし、**[バックアップ設定をインポートする]** をクリックして、設定が含まれたスクリプト ファイルのパスを指定します。

設定をインポートした後に、新しい環境に合わせて一部の設定を変更しなければならないことがあります。たとえば、バックアップの項目一覧やバックアップの保存先などを変更しなければならないなどです。

別のコンピュータにバックアップをコピーする場合は、それらのバックアップの設定もエクスポートすることをお勧めします。これにより、コピーしたバックアップの機能を維持することができます。

9 トラブルシューティング

セクションの内容

Acronis システム レポート	249
Acronis スマート エラー レポート.....	250
クラッシュ ダンプの収集方法	252
一般的な推奨事項.....	252
カスタム レスキュー CD の作成	253
ログの表示	254
Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム.....	255

9.1 Acronis システム レポート

Acronis サポート センターへのお問い合わせの際には、通常、問題を解決するためにご使用のシステムに関する情報が必要になります。この情報を取得する処理は、簡単に実行できない場合や時間がかかる場合があります。システム レポートの生成ツールを利用すれば、この手順を簡素化できます。ツールを使うと必要なすべての技術情報を含むシステム レポートが生成されます。この情報をファイルに保存し、必要に応じて、作成したファイルを問題の報告に添付して Acronis サポート センターに送信することができます。このようにツールを使えば、問題解決の手順を簡素化し、解決に要する時間を短縮することができます。

システム レポートを生成するには、次のいずれかの操作を行います。

- メイン プログラム ウィンドウで疑問符をクリックして **[システム レポートを生成する]** を選択するか、または
- **Ctrl+F7** キーを押します。このキーの組み合わせは、True Image 2013 が他の処理を実行中であっても、使用できます。

レポート生成後に、次の操作を行います。

- 生成されたシステム レポートをファイルに保存するには、**[保存]** をクリックし、表示されたウィンドウで、作成されるファイルを保存するロケーションを指定します。
- レポートをファイルに保存して、Acronis サポート センターに電子メールで送信するには、**[保存して送信]** をクリックします。
- レポートを保存せずにメイン プログラム ウィンドウを終了するには、**[キャンセル]** をクリックします。

コンピュータが起動しないときにシステム レポートを生成するための個別のコンポーネントとして、このツールをブータブル レスキュー メディアに含めることができます。そのメディアから起動すると、True Image 2013 を実行しなくてもシステム レポートを生成できます。この場合、**[Acronis システム レポート]** アイコンをクリックする前に、USB フラッシュ ドライブを接続する必要があります。生成されたレポートは USB フラッシュ ドライブに保存されます。

Acronis システム レポート ツールをブータブル レスキュー メディアに含める手順は、次のとおりです。

- **Acronis メディア ビルダ** ウィザードの **[レスキュー メディアに追加するコンポーネントの選択]** ページで、**[Acronis システム レポート]** チェックボックスをオンにします。
- 続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。

9.2 Acronis スマート エラー レポート

ユーザーがトラブルシューティングを行えるように、Acronis 製品の新しいリリースでは、Acronis スマート エラー レポート機能が採用されています。プログラム処理に関するエラーの問題が発生すると、True Image 2013 では、対応するエラー メッセージが表示されます。このエラー メッセージには、イベント コードと、エラーの簡単な説明(場合によっては、考えられる解決方法)が含まれています。たとえば、次のようなメッセージです。

「Check the disk and file system for errors and try to repeat the operation

Event Code: 0x000101F6」(ディスクとファイル システムのエラーを確認し、操作を繰り返してください。イベント コード: 0x000101F6)

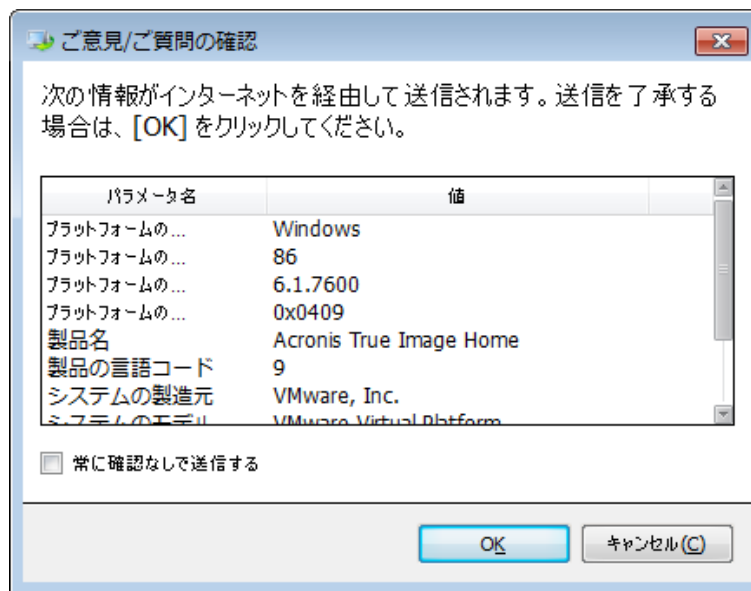
エラー メッセージには、エラーが発生したプログラム モジュールと、そのモジュールのエラー メッセージも含まれている場合があります。

エラーに関する詳細を表示するには、メッセージ ボックスで **【詳細】** リンクをクリックします。詳細の表示は次のスクリーンショットのようになります。



エラーを修正するための解決策が掲載されている Acronis ナレッジ ベースを表示するには、**【ナレッジ ベース】** ボタンをクリックします。

確認ウィンドウが開きます。このウィンドウには、インターネットを介して Acronis ナレッジ ベースに送信される情報が一覧表示されます。**[OK]** をクリックして、情報の送信を許可します。



以降は確認なしで情報を送信したい場合、**[常に確認なしで送信する]** チェックボックスをオンにします。

エラー メッセージが表示されたときにインターネットにアクセスできなかった場合(たとえば、レスキュー メディアから起動した場合などに起こる可能性があります)、イベント コードをメモしておいてください。インターネット接続が確立された際や、インターネット接続が可能な別のコンピュータを使用できる場合には、次の URL から、Acronis のウェブサイトにあるエラー レポート フォームにアクセスしてください。<http://kb.acronis.com/errorcode/>

使用している Acronis 製品のバージョンを選択し、手動でイベント コードを適切なフィールドに入力します。次に、[Search] ボタンをクリックして、発生した問題の解決策が示されている可能性のある記事を探します。

場合によっては、下位レベルのプログラム モジュールで発生したエラーが上位レベルのモジュールに影響した結果、生じているエラーもあります。これはいわゆる複合エラーです。この場合、上位レベルのすべてのモジュールで、独自のエラー(イベント)コードが生成されます。たとえば、次のようなエラー メッセージが生成されます。

「Try & Decide を開始できませんでした。

このエラーの詳細と適切な解決策が、オンラインのアクロニス ナレッジ ベースに掲載されている場合があります。

オンライン リソースに手動でアクセスするには、<http://kb.acronis.com/errorcode/> にイベント コードを入力してください。

イベント コード:0x00970007+0x00970016+0x00970002"

異なるモジュールのイベント コードは、「+」記号で結合されています。各モジュールのイベント コードを手動で適切なフィールドに入力してナレッジ ベースで検索する場合、「+」の前後にスペースを入れずにイベント コードの組み合わせを入力してください。

入力したイベント コードがナレッジ ベースで認識されない場合は、ナレッジ ベースには、その問題の解決策を含む記事が掲載されていません。そのようなときは、アクロニス サポート センターでトラブル チケットをオープンしてください。

9.3 クラッシュ ダンプの収集方法

True Image 2013 または Windows の異常終了はさまざまな理由で発生する可能性があるため、各異常終了の状況を個別に調べる必要があります。Acronis カスタマー サービスに次のような情報を提供すると役に立つことがあります。

True Image 2013 が異常終了した場合は、次の情報を提供してください。

1. 問題が発生する前に実行した手順の正確な順序の説明。
2. ワトソン博士のクラッシュ ダンプ。このようなダンプの収集方法については、Acronis サポート ナレッジ ベース(KB)の記事(<http://kb.acronis.com/content/2192>)を参照してください。

True Image 2013 が原因で Windows が異常終了した場合は、次の情報を提供してください。

1. 問題が発生する前に実行した手順の正確な順序の説明。
2. Windows のダンプ ファイル。このようなダンプの収集方法については、Acronis サポート KB の記事(<http://kb.acronis.com/content/17639>)を参照してください。

True Image 2013 が異常停止した場合は、次の情報を提供してください。

1. 問題が発生する前に実行した手順の正確な順序の説明。
2. プロセスのユーザーダンプ。Acronis サポート KB の記事(<http://kb.acronis.com/content/6265>)を参照してください。
3. Process Monitor のログ。Acronis サポート KB の記事(<http://kb.acronis.com/content/2295>)を参照してください。

この情報にアクセスできない場合は、ファイルをアップロードするための FTP リンクについて Acronis サポート センターに問い合わせてください。

これらの情報は解決策を見つけるための時間の短縮に役立ちます。

9.4 一般的な推奨事項

以降の内容は、True Image 2013 のインストールおよび使用中に発生した問題のトラブルシューティングに役立ちます。

問題の原因は単純なことである場合がよくあります。たとえば、外付けハード ディスクの接続の緩みなどです。この章で説明している他の解決策を試す前に、問題が次のいずれかの原因により発生していないかどうかを確認してください。

- 外付けドライブへの接続の緩み
- 低品質な接続ケーブル

外付け USB ハード ドライブを使用している場合は、次の点についても確認してください。

- ハブを経由してドライブに接続している場合は、PC の背面のコネクタに直接接続する
- PC に接続されている他の USB デバイスとの競合を避けるために、すべての USB デバイスの接続を外す(マウスとキーボードを除く)

Acronis サポート ナレッジ ベース (KB) で、問題の解決策を検索することができます。サポート KB にアクセスするには、<http://kb.acronis.com/> をクリックしてください。アクセスしたら、検索機能を使用します。問題に関連するキーワードを適切なフィールドに入力し、[Search] をクリックします。特定の問題に関して推奨される解決策が見つかる場合があります。Acronis サポート センターは随時新しい資料を KB に追加しています。問題の解決策が KB で見つからなかったり、推奨された解決策が役に立たなかったりした場合は、Acronis カスタマー サービス (<http://www.acronis.co.jp/support/>) までお気軽にお問い合わせください。

問題が True Image 2013 の使用中に発生したエラーである場合、エラー メッセージ ボックスの中に、[ナレッジ ベース] ボタンが表示されます。ボタンをクリックすると、エラーの原因となった問題の解決策を提案するサポート KB の記事が表示されます。エラー メッセージ ボックスには、Acronis のサポート KB へのリンクも表示されます。このリンクは、KB で適切な記事が見つからなかった場合に便利です。リンクをクリックすると、ウェブ フォームが表示されるので、エラー ボックスのイベント コードを入力し、KB 全体で解決策を検索できます。詳細については、「Acronis スマート エラー レポート (250ページ)」を参照してください。

システム レポート

Acronis サポート担当者は、お客様にシステム レポートの提供を求めることがあります。レポートを作成するには、[ヘルプ] メニューで [システム レポートを生成する] を選択してから、レポートを保存し、Acronis カスタマー サービスに送信します。詳細については、「Acronis システム レポート (249ページ)」を参照してください。

9.5 カスタム レスキュー CD の作成

多くの場合は、Acronis メディア ビルダによって作成された標準レスキュー CD を使用できます。詳細については、「ブータブル レスキュー メディアの作成 (186ページ)」を参照してください。

リカバリ環境で一部のハードディスク ドライブ、ネットワーク アダプタ、マウス、またはキーボードが検出されない場合、通常はドライバに問題があります。このため、使用しているハードウェア ドライバのいくつかが標準的なレスキュー CD に含まれていない場合は、カスタム レスキュー メディアを作成する必要があります。

Acronis 製品で使用される Linux ベースのリカバリ環境では、新しいドライバを追加できません。このため、必要なすべてのドライバを含むカスタム レスキュー CD を作成するには、Acronis のカスタマー サービスに依頼する必要があります。

依頼する前に、システムに関する情報を収集します。[ヘルプ] メニューで [システム レポートを生成する] を選択します。True Image 2013 によって必要な情報が自動的に収集され、収集された内容のリストがレポートに表示されます。レポートの作成プロセスでは、必要な情報の収集に使用される一部のコンポーネントがプログラムによってインストールされることがあります。レポートの作成が完了したら、[保存] をクリックし、希望するフォルダを選択するか、またはデフォルトのフォルダを受け入れます。レポートは ZIP ファイルにアーカイブされます。このレポートは、問題の解決を Acronis のカスタマー サービスに問い合わせるときにも役立つことがあります。

このファイルを Acronis のカスタマー サービスに送信します。カスタマー サービス部門は、コンピュータのハードウェアと互換性があるカスタム レスキュー メディアの ISO イメージを作成し、ISO ファイルをお客様に送信します。Nero など、ISO ファイルを処理できるプログラムを使用して、このファイルを CD や DVD に書き込みます。

適切なドライバを見つけてカスタム レスキュー メディアを作成するには、ある程度の時間がかかることをご了承ください。また、場合によっては適切なドライバが見つからないこともあります。

カスタム レスキュー CD を作成したら、コンピュータのすべてのハードウェアがリカバリ環境で検出されるかどうかをテストします。

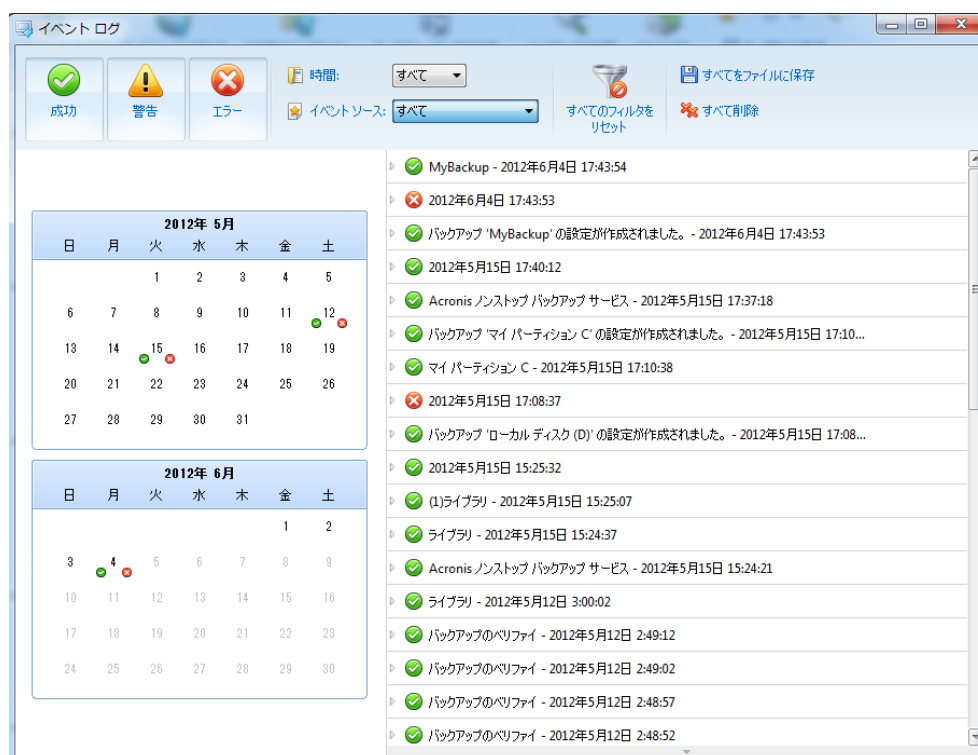
9.6 ログの表示

ほとんどの True Image 2013 処理で、ログに独自のエントリが書き込まれます。処理中に問題が発生した場合、ログ エントリにより、問題の原因究明につながる情報が得られます。

ログには、たとえばスケジュールされたバックアップの結果（失敗した場合はその原因も含む）についての情報が表示されます。

True Image 2013 で処理のログを参照する場合は、ツールバーの歯車アイコンをクリックして [設定] メニューを開き、[ログの表示] を選択します。

バックアップ ボックスの [処理] メニューで [ログの表示] を選択することで、表示のためにログを開くこともできます。この場合、選択したバックアップの最後の実行のログ項目のみが表示されます。



デフォルトでは、すべてのログが表示されるように選択されています。右側のペインには、折りたたまれた状態で主要なログ エントリがすべて表示されます。ログ エントリを展開して個々のログ項目を表示するには、ログ エントリをダブルクリックします。展開したログ エントリを折りたたむには、もう一度エントリをダブルクリックします。ウィンドウの右側にあるスクロール バーを使用して、ログ エントリをスクロールできます。

一部のエラー イベントでは、ログに [問題の解決方法] リンクが含まれている場合があります。このリンクをクリックすると、問題の解決に役立つ Acronis ナレッジ ベースの記事が表示されます。

目的の期間のログを表示するには、ドロップダウン リストからその期間を選択します。ユーザーは、**[今日]**、**[先週]**、**[先月]**、**[カスタム]** を選択できます。すべてのログを表示するには、**[すべて]** を選択します。

特定の期間のログを表示するには、**[カスタム]** を選択して、対象とする期間を指定します。目的の期間の開始日と終了日を直接そのフィールドに入力することもできます。またカレンダーに基づいて期間を選択できます。選択するには、**Shift** キーを押した状態で、開始日、終了日の順にクリックします。

特定のイベント ソースのログを表示するには、**[イベント ソース:]** の下にあるドロップダウン リストで目的のイベント ソースを選択します。選択できるイベント ソースは次のとおりです。

- **[すべて]**: ログに記録されたすべてのイベントを表示します。
- **[すべてのバックアップ]**: すべてのバックアップのログを表示します。
- **[すべての同期]**: すべての同期のログを表示します。
- **[バックアップのベリファイ]**: ベリファイ処理のログを表示します。
- **[<同期名>]**: 名前を選択した特定の同期のログを表示します。
- **[<バックアップ名>]**: 名前を選択した特定のバックアップのログを表示します。
- その他

カレンダーの一番上と一番下にある上下の矢印のボタンを使用すると、カレンダーに表示される月を変更できます。

カレンダー内の色はそれぞれの日の状態を示しており、処理がエラー(赤いマーク)、警告(黄色のマーク)、正常(緑のマーク)のいずれかで完了したかを通知しています。現在の日付は強調表示されています。マークされた日付をクリックすると、その日のログが表示されます。

ログ エントリを削除するには、そのログ エントリを選択し、右クリックして、ショートカット メニューで**[削除]** を選択します。すべてのログ エントリを削除するには、**[すべて削除]** を削除します。また、**[ファイルに保存]** を選択してログ エントリをファイルに保存することもできます。すべてのログをファイルに保存するには、**[すべてをファイルに保存]** を選択します。

左側の 3 つのボタンはイベントのフィルタ処理を制御します。赤い円内に白い「x」のマークはエラー イベント、黄色の三角に感嘆符のマークは警告、緑色のチェック マークは情報メッセージ イベントをそれぞれフィルタします。

すべてのフィルタをデフォルト値にリセットするには、**[すべてのフィルタをリセット]** をクリックします。

右上には、**[すべてをファイルに保存]** および **[すべて削除]** ボタンがあります。これらのボタンは、対応するショートカット メニュー項目と同じ処理を実行します。

9.7 Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム

Acronis カスタム エクスペリエンス プログラム(CEP)は、Acronis のお客様が、Acronis 製品の機能、設計、および開発に貢献できる新しい手段です。このプログラムにより、お客様は、ホスト コンピュータや仮想マシンのハードウェア構成、使用頻度が最も多い(および少ない)機能、発生する問題の性質に関する情報など、さまざまな情報を提供できます。この情報を基にして、お客様が頻繁に使用する Acronis 製品と機能を向上させることができます。

このプログラムへの参加を選択された場合、技術的な情報が 90 日ごとに自動的に収集されます。氏名、住所、電話番号、キーボード入力などの個人データは収集されません。CEP への参加は任

意ですが、お客様のニーズをいっそう満たすために、ソフトウェアの改善と拡張された機能を提供することを最終的な目的としています。

プログラムへの参加はいつでもやめることができます。

参加の条件については、**[詳細]** をクリックしてください。

いずれかを選択してください。

- プログラムに参加する場合は、**[このプログラムに参加する]** を選択してください。
- プログラムに参加しない場合は、**[参加しない]** を選択してください。

10 用語集

A

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

起動時に F11 を押すとスタンドアロン版の True Image 2013 が開始される保護ツールです。Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、レスキュー メディアは不要となります。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャは、特にモバイル ユーザーにとって便利です。障害が発生した場合、ユーザーはコンピュータを再起動し、[Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager...] というプロンプトが表示されたら F11 キーを押して、通常のブータブル メディアと同じ方法でデータのリカバリを実行します。

制限事項: ダイナミック ディスク上に作成することはできません。LILO や GRUB などのブート ロードラーを手動で設定する必要があります。サードパーティ製のロードラーを再アクティブ化する必要があります。

Acronis セキュア ゾーン

セキュリティで保護されている、ハードディスク上のバックアップ (258ページ) 保存用のパーティションです。利点:

- 同じディスクに保存したバックアップからディスクをリカバリすることができる。
- ソフトウェアの誤動作、ウイルス攻撃、オペレータによるエラーからデータ保護するためのコスト効率のよい便利な方法を提供する。
- データをバックアップまたはリカバリするための別のメディアやネットワーク接続が不要になる。

制限事項:

1) Acronis セキュア ゾーンはダイナミックディスクに作成できません。

2) ブータブル レスキュー メディアから、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャまたは BartPE を使用して True Image 2013 を開始する場合、リカバリ環境内で Acronis セキュア ゾーンをバックアップのロケーションとして使用することはできません。

イメージ

ディスク バックアップと同じです。

オンライン バックアップ

オンライン バックアップとは、Acronis Online Backup を使用して作成されるバックアップのことです。オンライン バックアップは Acronis Cloud と呼ばれる特別なストレージに保存され、インターネット経由でアクセスできます。オンライン バックアップの主な利点は、すべてのバックアップがリモートのロケーションに保存されることです。これにより、ユーザーのローカルなストレージに依存せず、すべてのバックアップ データの安全が保証されます。Acronis Cloud の使用を開始するには、サービスに登録する必要があります。

ディスク バックアップ(イメージ)

ディスクまたはパーティションのセクタ ベースのコピーをパッケージした形式のバックアップです。通常は、データを含むセクタのみがコピーされます。Acronis True Image 2013 では、すべてのディスク セクタをそのままコピーするオプションが用意されています。これにより、サポートされていないファイル システムのイメージ作成が可能になります。

データの同期

データの同期は、2 つ以上の同期したフォルダでデータが同一になるように保持する処理です。それらのフォルダは、同じコンピュータ上にある場合も、ローカル ネットワークやインターネットで接続された別のコンピュータ上にある場合もあります。同期している一方のフォルダでファイルやサブフォルダを作成、コピー、修正、または削除すると、もう一方の同期フォルダでも同じアクションが自動的に実

行されます。逆の方向でも同じルールが適用され、他の同期フォルダで何らかの変更があった場合、同期元のフォルダでも同じ変更が適用されます。

ノンストップ バックアップ

ノンストップ バックアップとは実際には、Acronis ノンストップ バックアップ機能を使用して作成されたディスク/パーティションまたはファイルのバックアップです。これは、1 つの完全バックアップ バージョン (259ページ) と、短い間隔で作成された一連の増分バックアップ バージョン (259ページ) の組み合わせです。ほぼ連続したデータの保護を実現し、必要に応じて任意の復元ポイントにおける以前のデータの状態にリカバリできます。

ノンストップ プロテクション

ノンストップ プロテクション - ノンストップ バックアップ機能が有効になっているときに実行される処理です。

バックアップ

1. バックアップ処理と同じです。
2. バックアップ設定を使用して作成、管理するバックアップ バージョンのセットです。バックアップには、完全バックアップと増分バックアップの両方の方法で作成された複数のバックアップ バージョンが含まれる場合があります。同じバックアップに属するバックアップ バージョンは、通常同じ場所に保存されます。

バックアップ バージョン

単一のバックアップ処理の結果。物理的には、特定の日にバックアップされたデータのコピーを含む単独または一連のファイルです。Acronis True Image 2013 によって作成されたバックアップ バージョン ファイルの拡張子は TIB です。バックアップ バージョンの統合による TIB ファイルもバックアップ バージョンと呼ばれます。

バックアップ バージョン チェーン

最初の完全バックアップ バージョンと、後続の 1 つまたは複数の増分または差分バックアップ バージョンから構成される、最低 2 つのバックアップ バージョンからなる一連のバックアップ バージョンです。バックアップ バージョン チェーンは、次の完全バックアップ バージョン(存在する場合)まで続きます。

バックアップ設定

新しいバックアップの作成時にユーザーが設定するルールのセットです。このルールによって、バックアップ処理を制御します。後でバックアップ設定を編集し、バックアップ処理を変更または最適化することができます。

バックアップ操作

特定の日時のデータを復元するために、コンピュータのハードディスク上に存在するデータのコピーを作成する処理。

ブータブル メディア

True Image 2013 のスタンドアロン バージョンを含む物理的なメディア (CD、DVD、USB フラッシュ ドライブ、またはコンピュータの BIOS によってブート デバイスとしてサポートされるその他のメディア)。

ブータブル メディアは次の操作に最もよく使用されます。

- 起動できないオペレーティング システムのリカバリ
- 破損したシステムで壊れずに残ったデータへのアクセスとバックアップ
- ベア メタル上のオペレーティング システムの配置
- ベア メタル上でのベーシック ボリューム、またはダイナミック ボリュームの作成
- サポートされていないファイル システムを持つディスクのセクタ単位のバックアップ

ベリファイ

特定のバックアップ バージョンからデータをリカバリできるかどうかを確認する処理です。

何をベリファイするかにより、次のようになります。

- 完全バックアップ バージョン - 完全バックアップ バージョンのみがベリファイされます。
- 差分バックアップ バージョン - 最初の完全バックアップ バージョンと選択された差分バックアップ バージョンがベリファイされます。
- 増分バックアップ バージョン - 最初の完全バックアップ バージョン、選択された増分バックアップ バージョン、および選択された増分バックアップ バージョンまでのバックアップ バージョンのチェーン全体(ある場合)がベリファイされます。このチェーンに差分バックアップ バージョンが1 つでも含まれている場合、(最初の完全バックアップ バージョンおよび選択した増分バックアップ バージョンに加えて)チェーン内の最新の差分バックアップ バージョンのみがベリファイされ、その差分バックアップ バージョンと選択した増分バックアップ バージョンの間に作成された増分バックアップ バージョンがあればそれらもすべてベリファイされます。

リカバリ

リカバリとは、壊れたデータをバックアップに保存されている以前の正常な状態に戻す処理のことです。

漢字

完全バックアップ

1. バックアップ対象として選択されたすべてのデータを保存するために使用されるバックアップ方法。
2. 完全バックアップ バージョンを作成するバックアップ処理。

完全バックアップ バージョン

バックアップ対象として選択されたすべてのデータを含む、それ自体で完結するバックアップ バージョン。完全バックアップ バージョンからデータをリカバリする場合は、他のバックアップ バージョンにアクセスする必要はありません。

差分バックアップ

1. バックアップ内で直近の完全バックアップ バージョンが作成されてから変更されたデータの保存に使用されるバックアップ方法。
2. 差分バックアップ バージョンを作成するバックアップ処理。

差分バックアップ バージョン

差分バックアップ バージョンには、前回の完全バックアップ バージョンに対するデータの変更点が保存されます。差分バックアップ バージョンからデータをリカバリするには、対応する完全バックアップ バージョンにアクセスする必要があります。

増分バックアップ

1. バックアップ内で直近のバックアップ バージョン(すべての種類)が作成されてから変更されたデータを保存するために使用されるバックアップ方法。
2. 増分バックアップ バージョンを作成するバックアップ処理。

増分バックアップ バージョン

前回のバックアップ バージョンに対するデータの変更点が保存されるバックアップ バージョン。増分バックアップ バージョンからデータをリカバリするには、同じバックアップから他のバックアップ バージョンにアクセスする必要があります。

統合

同じバックアップ (258ページ) に属する 2 つ以上の連続したバックアップ バージョン

(258ページ)を結合して単一のバックアップバージョンにします。

統合を行うと、不要なバックアップバージョンを、任意のバックアップチェーンから削除できます。その際、チェーンのバックアップの整合性は維持されます。統合するチェーンは、完全バックアップと1つまたは複数の増分バックアップから構成されています。統合では、選択されたバックアップが保持され、選択されなかったバックアップは削除されます。統合処理には時間がかかり、システムリソース(ディスク領域など)が大量に必要となる場合があります。

Acronis ノンストップ バックアップでは、異なる統合メカニズムが使用されています。この場合、バックアップデータの管理用に使用されているメタデータ情報が統合されます。これは、メタデータの情報量が、バックアップデータの量よりもはるかに少ないからです。その結果、統合に必要な時間およびシステムリソースが大幅に減少します。

同期

1. データの同期(257ページ)と同じです。
2. 同期の所有者のコンピュータで設定された同期設定。作成した同期は、該当する同期ボックスを使用して管理します。同期を作成しても、同期処理は開始されません。他のユーザーが、作成された同期に参加することができます。

同期ファイルのバージョン

ファイルの変更のたびに、同期フォルダに作成される特定の状態のファイル。ファイルのバージョンは Acronis Cloud に保存できます。